桂林梁巨川先生殉世遺言録

一讀書人の節操

景嘉　校録

池田篤紀　訳

アジア問題研究会

Digitized by the Internet Archive
in 2025

https://archive.org/details/unkhown0000vari_q7f2

梁貞端公遺像

冰心題

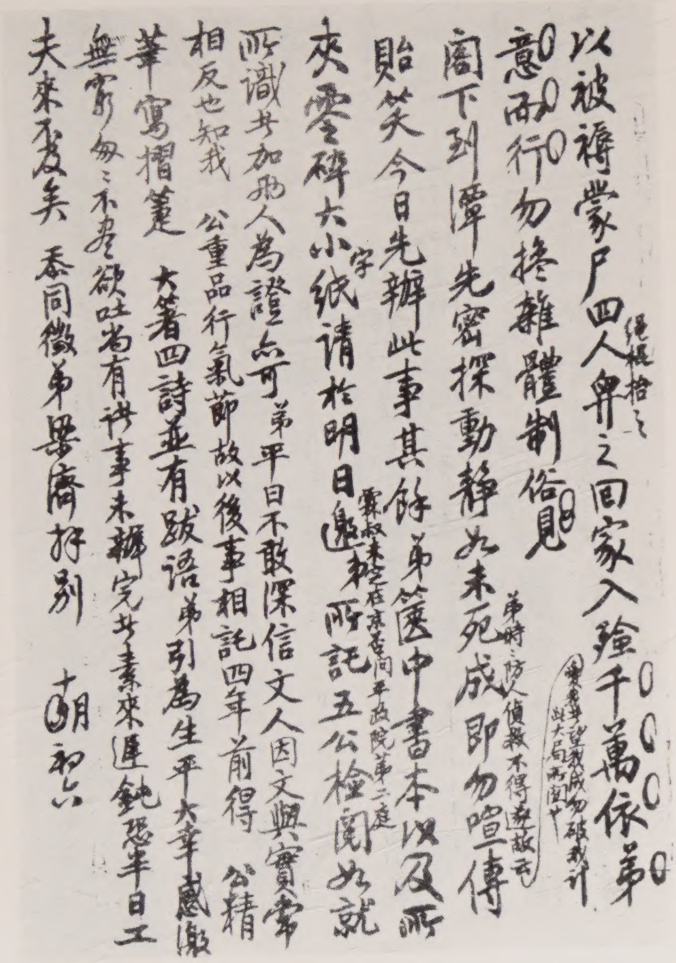
感劬山房日記節鈔

遺書之二

桂林梁濟巨川著　　男煥（鼐鼎）校錄

謹案。今先君日記之見存者。莫早於光緒八年壬午。其最晚者則迄於光緒二十七年辛丑而止。前後適得二十年。然其間故斷續不常。今復多散佚。不過有五七册在手耳。此五七册又或有重鈔之本。則所餘亦僅矣。先君生平每自言於學問未窺門徑。伏處牖下始終未與大人先生遊處。聞見亦無可言。凡日記札記各册表面。皆批有此中弇陋不可以示人。或隔數年覆閱批昔年所見今慙其非等語。今謹就壬午癸未間日記鈔出若干則。大抵皆修己勵學之語。第以見先君少壯時所以自勉者而已。更附以壬辰癸巳乙未丙申間論事者數則。以成此卷。各條皆不復揭月日。其餘關係行事者或採入年譜中。此概從省不錄。男煥鼐等謹識。

自壬午年漸知自愛。觸處省過。采訪見聞。訂日記一本名省疚錄。一有所得便筆記之。惟信手塗抹拉雜不堪。不過日久觀之。可以驗工夫之進退耳。甲申三月初一



以被褥蒙尸四人（僱槓抬之）舁之回家入殮千萬依弟（棺木弟望我成勿破我計此大局所關也）意而行勿拘雜體制俗見閣下到潭先密探動靜如未死成即勿喧傳（弟時時防人偵緝不得再遲故云）貽笑今日先辦此事其餘弟篋中書本以及所夾零碎大小字紙請於明日邀（霖叔未知在京否同平政院第三庭）和所託五公檢閱如就所識者加外人為證亦可弟平日不敢深信文人因文與實常相反也知我　公重品行氣節故以後事相託四年前得　公精華寫摺箋　大著四詩並有跋語弟引為生平大幸感激無窮毋々不盡欲吐尚有許事未辦完兼素來遲鈍恐半日工夫來不及矣　黍同微弟璜齊拜別　十二月初六

一読書人の節操―序文

――桂林梁巨川先生殉世遺言録序――

景　嘉　撰

池田篤紀　訳

民国の初期、二人の中国の伝統的読書人が世情を慨して自殺した。この二人はひとしく南方人で古都北京で起ったことである。一人は民国七年（一九一八年）十月七日、北京市内の浄業潮に投身自殺した桂林の梁巨川先生濟である。一人は民国十~~四~~六年（一九二~~五~~七年）六月二日、北京市外の頤和園の昆明湖に投身自殺した海寧の王静安先生国維である。

この二人が前後して身を殺して世に殉じたことは、中国の伝統的学術史上に於て、確かに劃時代的の大事件であった。しかし当時は政局は動揺し、思想界には新旧の争いがあり、政治的には南北の分裂があり、人心は乱を思い、民は生に安んぜず、是非混乱の極に在った。西洋の新しい文化に憧がれてはいるものの、これを吸収する術を知らず、一方中国の古来の伝統精神は殆ど喪はれていた。残存していたのは、腐敗した枝葉末節の旧文化の形骸と旧習の残滓にすぎなかった。同時に現実を顧みず、徒らに革命新風を鼓吹する新しい文化人と外国人留学生が少なからずいた。このような状況下で、二人の殉世の意味するところ、どんな価値をもつかについては、全く人々の注意を惹かず、世人を覚醒するところがなかったばかりか、逆に嘲笑され譏りを招いたのである。

真実の中国伝統の読書人は、文人墨客や近代的知識人・文化人、或は学者なるものと、厳しい一線を劃する存在である。少数ではあるが真の伝統的読書人は、束髪して書を授けられた時から、師父の薫陶と歴史の因縁を受けて、自律自

題字・宇野精一先生

●口絵写真説明

一、梁巨川先生晩年の写真

一、梁巨川先生遺書肉筆

一、活字版、梁巨川先生次男梁漱溟先生緝録本

ので、現在になってもその遺著は復刊されて世に行はれているから、私が今更言うこともない。

梁巨川先生は、文筆に拙なる者と自身でも称している。その遺文を観るに確かに渋滞したところがあるし、重複した点も多く、あまり流暢ではない。でもその樸実な文章、世道に対する関心、人の世に対する熱愛、懇切にして純情の精神は、まことに能く人心を感応させ、読んで涙が出る。それは専門の著述でも詩文集でもなく、断片的に五十年の生活を通じて見聞した実事実情を記録したものである。自戒もあり人物評論もあり世相論もある。また死に臨む直前に書かれた世人に告ぐる書と親友に与えた書翰がある。

民国初期の北洋軍閥の支配下に当時の文人が残した人物論や時世論は、大部分が個人的愛憎に出たもので、論断に伝聞がまじり、信ずべきものはあまりにも少ない。ただ梁巨川先生が生命を賭けて世人に警告した文章は、その片言隻句も確実なもので、後人が当時の人と世を知る好資料である。

民国十四年（一九二五年）先生の令息梁漱溟氏（本名は煥鼎）は、その断片的記録をまとめて次の六種に分け、これに年譜一巻を加えて刊行した。

遺書の一　遺筆彙存一巻（先生の世人に告ぐる遺書及び親友に与えた書翰の墨跡の写真版）
遺書の二　感劬山房日記抄一巻
遺書の三　侍疾日記一巻
遺書の四　辛壬類稿一巻
遺書の五　伏卵録一巻
遺書の六　別竹辞花記一巻
年譜一巻

発の重大なる責任を負荷する。そしてこの責任は終身継続するのである。太平無事の時に逢えば、窮すれば独りその身を善くするのが責任である。達すれば兼ねて天下を善くするのが責任である。天下の大いに乱れ、挙世滔々として事為すべき無ければ、政治的地位がない者は、荒山深谷に逃れて、その身を窮阨し、抗節自ら守るのが責任である。政治的地位がある者は、負託に応へ、その不可を知って為し、死して後已むのが責任である。如何ともすべからざる時世を憂え、坐視するに忍びず、身を殺して世に殉じ、後生の人に呼びかけるのも責任である。世変の由って来る所以を探索し、治世の理を究めて、書を著はし説を立て、己れを正して後世を啓発するのも亦責任である。

論語に云う「仁以て己れの任と為す。亦重からずや。死して後已む。亦遠からずや」と。これは中国の読書人のみならず、人としての千古不変の原則である。上述の読書人に類似した人々は二十四史の中に枚挙に堪えない。だが文章を書き、政治を論じ、風月を談じ、翰墨を弄び、身を事無きに置くさえ、自ら恕するは不可なのに、人を論じて是非の基準なく、世に対して些かの責任の心がない一般の文人墨客と、伝統的読書人とは同日にして語るべきでない。

二人の先生の身を以て世に殉じたのは、今を去る五、六十年前のことである。二人の先生の孤独な苦心は、当時極めて小さい波動を起したものの、暫らくして全く忘却されてしまい、世道人心に対しての影響や裨益するところは何もなかった。これからしても、前代のように風を聞いて起ち、前に仆れても後に継ぎ、伝統精神をどこまでも護り抜くという姿とは、截然とちがっている。これより以後、世道人心と学術気風は、いよいよ変りいよいよ乱れて今日に至っている。それ故に二人の先生の殉世は劃時代的大事件だというのである。

王静安先生は文芸に精通し、残した遺著は沢山ある。だが一般の人々は先生の余技である考証の学・元曲研究とか甲骨文の研究とかに、今日でも讃美を絶たず、その引用は衰えていないが、先生の会心の作、経世の大文章、たとえば殷周制度論等のように中国文化の根本に関はる大文章は、これを閲読する人は甚だ少ない。でも幸いにしてその文名が高い

痛哭す。日を越えて亦浄業潮に投じて死す。」

今年は戊午の歳で、巨川先生の殉世の六十周年である。私が世に出たのは一九一五年で、戊午の歳は僅かに三歳であって、当時の細かい事情はよく知っていない。ただ私の父は巨川先生と気性が同じく友人であった。私が生れた時、父は五十余歳、光緒の丁酉（一八九七年）の抜貢（挙人と同格）であったが、終身官に就かず、家に在って読書し、死ぬまで弁髪を蓄えていた。私が幼年で初めて記憶に残っているのは、いつも一人の老人が父を訪れて来ては、時局の悪化を談じ、読書人が廉恥を喪なったと歎き、時には相抱いて痛哭したことである。これは幼児の断片的の記憶であるが深刻な印象になっている。その老人が巨川先生であるか、それとも梁節庵先生であるか、証明しようがない。（梁鼎芬、字は節庵、清朝の翰林で宣統帝の師傅であり、民国八年に逝去されたが父とは兄弟の交はりを結んでいた）私が七歳から十七歳まで中国の古典を読んでいた時、巨川先生の遺書も時々閲読し、無形の中に少なからぬ影響を受けた。一九四〇年から四三年にかけて、私は天津のある銀行に勤務した。その時、巨川先生の長男の梁壽銘氏もその銀行につとめていて、短期間ではあったが事を共にした。その上、私はどうやら人の世が少しは判るようになってから、梁漱溟氏の著作を好んで読んだ。一面識もなかったが、神交久しきことは確かであった。今生で果して顔を合せることが可能かどうか判らぬが、いづれにせよ我が家と梁家とは二世代に亘っての因縁がある。

今年の秋、日本の志士和崎博夫氏は大変な苦労の末に、東洋文庫から稀覯本の巨川先生遺書を捜し出し、これを写真版にとって贈って下さった。私は一字一句読了し、故人に相見したごとく万感胸に迫ったのである。

回顧すれば、生れて以来やや事を解するようになってから今日までに、既に五十余年も経過した。この五十余年の中に私の見聞し経験した中国の時局と世界の大勢は、まことに奇怪至極、変幻無常というしかない。遠く異国に身を託し、重ねて巨川先生の遺書を読むに、とくにその中に

梁漱溟氏が先生の遺書刊行の時、資力に制約されて一千部しか印刷できなく、部数が限られたため、先生の救世の大願も殆んど世にうずもれたのである。

一九七四年、中国大陸で反孔運動が始まった時、話によると毛沢東は最初梁漱溟氏にそのリーダーになれと迫ったが、梁氏は毅然として私は孔子の信徒である、命をとられても致方ないが、反孔はできないと断った。そこで馮友蘭に由ってこの運動が開始されたという。（これは伝聞に拠るものだが、私は事実と確信している）このような凜乎たる読書人の精神こそ、先代の呼びかけの致すところといわざるを得ないのである。

巨川先生の事蹟に関しては、この六種の遺書の外には、清史稿の史義伝があるだけで、それは極めて短かい伝記であるが、次に全文を録する。

「梁濟、字は巨川、広西臨桂の人。父は承光、山西の官に卒る。貧にして帰る能はず、京師に寓す。戚継光の兵書及び名臣奏議を読むことを喜ぶ。光緒十一年、順天郷試に挙げらる。時の父執の呉潘祖蔭、濟寧孫、毓汶皆貴なり。濟は通ずるを求めず。毓汶の政を罷むるに迨び、始めて一たび之に謁す。官は二等、教諭を得たり。内閣中書に改められ、十余年遷らず。経済特科に挙げられしも、亦未だ赴かず。三十三年、京師巡警庁、招いて教養局を理む。濟は総局を以て罪人を処し、貧民を収むるに分局に於てす。更に小学を立て、幼児に課し、科を分って芸を習はしめ、専所を設けて之を售る。費省けて事集まる。内閣侍読に由り、民政部主事に署し、員外郎に陞る。部に在ること五年、未だ欠を補せず。遜位の詔下り、職を辞して家居す。明年内政部総長一再之を邀うるも、卒に出でず。歳戊午、年六十、諸子寿を為さんと謀る。之を不可として止め、居を城の北隅の彭氏の宅に避く。期に先だつ三日の昧爽、浄業潮に投じて死す。時に十月七日なり。遺書万余言、惓惓たる者五事、曰く民、曰く官、曰く兵、曰く財、曰く皇室、区画甚だ備はる。貞端の諡を予う。呉宝訓なる者有り。字は梓箴、蒙古人なり。嘗て理藩院員外郎と為る。素より濟と遊ぶ。濟の死を聞き、

譜」と次男漱溟氏の「思親記」を添えた。この二つの文章は巨川先生の人格風義に関するものである。このように補輯すれば、先生の一生の心事は遺漏なく表現できると信ずる。先生在天の霊にして、このことを知られたら、必ずや「孺子教ゆべし」と思はれるであろう。

以上が私の巨川先生の遺書を改めて編んだ趣旨であり、同時に私の先生の遺志を表彰しようとする責任でもある。日本の志士和崎博夫氏とこれを日本文で出版することを相談したことには、話し出せば長くなるが、それにはそれなりの動機がある。

私は十九歳で日本に留学し、二十六歳で京都大学を卒業し帰国した。この時は日本に八年間滞在した。二回目は丙申の年（一九五六年）に日本で浪人生活を始め、現在に至っている。前後二回で三十余年の滞日となる。人生という旅路、一人の生涯からして短いとはいえない。この長期の旅路で、意識的ではないが中日両民族の運命に対し、一種の杞憂を抱くようになり、自分は自分なりに一種の責任を負はねばならぬと思うようになった。

数十年前に世を憂えて自殺した一人の学者のことを持出した上で、両国の問題を考えるのは何とも論理に合はない感じがするだろうが、どうか平静な気持で私のいうことを聴いて頂きたい。

私の大前提は、世界で発生するあらゆる問題、国際間で起るあらゆる問題、及び一国一家に生ずる一切の問題は、実は人の問題から切り離せないということである。そして人の問題では、とくに東洋の伝統が主張する人格の問題がとりわけ重要である。巨川先生は云う「人にして人でなくなれば、国は何で国たり得ようか」と。私はこの言葉を拡大して考えてみたい。信義無き人格が国際間の問題を処理するに、相手が虞れ自分は詐はる権謀術策の下で暫時の協定が結ばれたとしても、畢竟するに同床異夢であり、後日の悪果を招来するだけである。長い歴史的な見方をすれば、ただ久しい紛擾を惹き起したにすぎない。

「今日の世局は何故にかくまで悪化したのか。朝三暮四、反覆常無く、既にして旧主を売り、復た良友を売り、又主師を売る。平時の約束を背き棄て、愛国の美名に仮託し、金銭を収受し、私人の使嗾を受け、刺客を買って以て長城を壊す。個人に因って大局を破り、転移定め無く、面目は靦然たるものがある。此に由り推移すれば、勢将に全国の人が、信義の何ものたるかを知らず、公理擁護の心は一毫も無くなろう。さすれば人は人でなくなる。国がどうして国であり得よう。」

と記されている。私は悲愁茫々たらざるを得ない。

私自身は私が国に於て、家に於て、学に於て、すべて何の成就する所無き者であることをよく承知している。だが往日に受けた師父の教訓、良友の教示は、刻々に私に迫ってきて、敢て責任を放棄させない。とくに先人の遺業遺志に対しては、放置して顧みず、その湮没することを坐視するに忍びない。

巨川先生の遺書の最も重要な部分は、殉世に臨む以前に記された国人に告ぐる書である。これはまことに一字一字血涙に出たものである。その外の五種の遺書もすべて熱涙の結晶ではあるが、重複したところや瑣末に過ぎたところがある。梁漱溟氏が彼の先人の遺書を編輯するにあたっては、当然その全きを求めたであろう。そして私が巨川先生の遺志及びその真知の灼見を表彰しようとすれば、簡にして明なることを求めざるを得ない。遺書の第一種遺筆彙存は、先生の国人に告ぐる書と友人家人に残した書翰全部である。それはみな親筆の墨跡を写真版にしたものだが、補修改筆のところが甚だ多くて、一目瞭然という訳にいかぬ。それで私は時間を惜しまず先づそれを清書し、その上で整理した。その中で本文に無関係の小注はみな削除した。その他の五種の遺書は、全部を録するのは繁雑だし、録しないのも先哲の遺志に相済まぬと思い、最も重要と思はれるものを選択し、人心時局に関するものを、修己・論人・論世の三部に分け、これを梁巨川先生語録と名づけ、紹介するための一文を加え、更に附録として長男の壽銘氏の「桂林梁巨川先生年

触する中国人が、このような悪印象を与えたことを怨むだけである。そして真正なる中国伝統の読書人の精神と信義が隠れて現はれず、人格を以て日本人に対抗し、日本人をして中国人を尊敬せざるを得なくさせる中国人がいないことを怨むだけである。

更に遠慮なくいえば、凡そ日本人に接触した中国人は、意識的無意識的乃至は習慣からして、日本人に対してみな一種の眼には見えない仇怨の心理をもっている。握手して歓談し、合作提携を高談しても、その内心の深い処では、言葉で表現できない一種の仇怨心理をもっているのである。この種の裂け目は、私から見れば、その責任は明かに日本人に在って中国人にない。

この百年来、日本人の中国に対する政策は、始めから終りまで全体の中国人が何を期待しているのか認識できずにきた。数千年来中国の立国の精神は何処に在るのか。所謂中国伝統の読書人は何を代表しているのか（中日戦争が起った当初、日本の軍人は中国内部の腐敗と堕落を見て、半年もすれば片づくと思った。だが間もなく頑強な抵抗に遇って、延々八年に及び日本の惨敗に終った。これは中国立国の精神の所在を知らなかったからである。危機一髪の間に当って、この精神が爆発したのである。そして伝統的読書人は永久的に殺し尽せるものではない。）戦時中の日本の対中国政策は、ただ表面の現象だけを追いかけ、強い者には服従し、悪を助けて善を虐げ、人を強いるだけであった。表面では提携合作を云々しても、実際では自己の経済本位を前提に一切を処理したのである。

第二次大戦の後、日本の全国民は中国進出に対する内心の懺悔を示し、多くの著作が日本人の罪悪を暴露した。これは善意の心情であり良心の反省ではあったけれども、今後の中日両民族の問題の核心に迫るものではない。

日本は明治維新の後、確かに高所に立って遠望できる人傑が少なからず輩出した。中国という老大国家が、西洋列強に虐げられ息もつけぬ状態に在るのを見て、中国と合作し西洋の侵略に抵抗し拒ごうとした。中国の方でも、清朝は極

中国と日本は一衣帯水の隣国であり、種族からしても、文化交流からしても、伝統・風俗・習慣及び地理からしても、たとい何万年経っても、相互依存と有無相通ずる関係から離脱できないのである。この共同運命の下に、双方の有識者は深謀遠慮して、人格信義を前提に、両民族のために永久の真実の友好を結び、アジアの安定を確立し、東洋文化の発展を助長すべきである。

事実、この両民族は二千余年に亘る文化交流を重ねて、何の衝突も反感も仇恨も生じなかった。中国人は日本を東方君子の国、蓬莱の三島と称し、中国人の憧憬の的であった。そして日本は、能く中国の伝統文化を採り入れ、とくに儒家の精髄をわがものとした。王陽明の知行合一の説は、維新の大業を促がしたのである。ところがこの百年来、はじめて戦場に相見えることになり、不幸な運命は第二次世界大戦を経過することによって、ようやく一段落を告げたのである。

過ぎ去ったことは流れる水のように、今更あげつらうこともない、ただこれからの事を注意すればよい、と言う人もある。しかし私はそうは思はない。もし両国がこの禍乱を醸成した真の原因と是非を、ハッキリと明かにしなければ、両民族の真の提携は話にならない、と考える。

私は長期の日本滞在での静観黙察に拠って、中日両民族の間には二つのとても深い裂け目があることを発見した。この二つの裂け目をすっかり取り除かぬかぎり、中日両民族には永遠に真の提携合作はあり得ない。この二つの裂け目は眼に見えぬ心理的のものである。

私の黙察に拠り遠慮なく言えば、凡そ中国人に接触した日本人は、意識的にか無意識的にか、乃至は習慣上か、みな一種の中国人軽視の心理をもつ。笑顔で迎えて友人となろうと、結ばれて親戚になろうと、内心の深い処には依然として一種の言葉にならぬ軽視の意識がある。同情するにせよ、援助するにせよ、この種の意識から離脱しないのである。

この裂け目を、私は別に日本人を咎めようと思うて言うのではない。私はただ中国という国のだらしなさと日本人に接

して起ち敬意を表し、無言にして返っていった。これが中国人が人格を以て日本人に対抗した一つの実例である。

　一九〇四年、日露戦争が起った。主戦場は満洲である。中国からすれば絶大の国恥である。奉天会戦の後、乃木希典大将は戦場を巡視して、多数の中国人の死骸の中から生き残った赤坊を発見した。乃木はこの赤坊を抱き起し、その頭を撫でながら呟いた。二つの外国がお前の国の中で戦った。これはお前たちの国の恥だ。お前が大きくなったら、この国恥を雪ぐため、お国のために努力してくれよと言うのである。傍にいた一人の中国人はこの呟きを聴き、感激して涙した。この中国人は後に旅順に移ったが、乃木神社の祭日には必ず参拝した。この話はその本人から私が聴いた事実である。これは一人の日本人が、その人格のもつ心情を以て、中国人を感応させた一つの実例である。

　中国の辛亥革命（一九一一年）は、孫文が指導者となり、日本留学の新しい知識人が、清朝に対して起した革命であり、全国各地に暴動が起り、清朝は政権を放棄せざるを得ず、共和の民国が成立した。私は若い時から革命の人物に憧がれていた。これら革命の党人はみな義烈の志士仁人であり、人格高邁の愛国者だと思っていた。一九三七年、蘆溝橋事変が起って、中日戦争が始まった。その時、私は日本に留学していた。ある日一日本人が九段の游就館で、過去の中日間で要人たちがかわした秘密文書を展示した。私は観に行った。孫中山が日本の友人に借款を哀求した書翰、東三省を日本と共同で経営する利益と引き換えに武器供与を求める密書、更にある党国の要人（名は秘す）が日本に滞在中に下女と関係して私生児が生れ、下女の親に強要されて始末がつかず、そのため日本の友人に調停を哀願した書翰、又金銭（大した額ではない）関係で仲間割れした事実を証明する書翰など、全く以てひどいのが眼前に展示されていた。勿論荒蕪の園にも必ず芳草はある。革命分子の中にも硬骨の士がいないと言うのではないが、少数の指導的人物にして既にこのような醜聞醜事があって、しかもそれが日本人の手に握られているのだ。これでは日本人が中国人を軽視するのも怪しむに足りない。

度の腐敗下に在ったが、それでも少なからぬ高明達見の士があって日本と合作を主張したのも、当時の事実であり、これに関する記録も沢山残っている。当時の中国と日本は平等の立場に在り、人格が人格に対し、国家が国家に対していたのであって、野心的政客の馴れ合いはなかった。

まこと不幸なことに、民国の成立以来中国の方では内乱頻発して、国が国でなくなり、日本の方では過去の義に伎る合作の精神が一変して、侵略者の相貌を呈するに至った。それから後は、中日の友誼は悪化する一方で、終に中日戦争を醸成し、仇怨と軽視の心理という裂け目を留めたのである。

私の見方からすると、すべては人の問題に帰着する。つまりは人格の問題である。中日間の是々非々と恩怨は書き尽せぬが、ここに私個人の見聞に拠る人格対人格と醜態対醜態の幾つかの事実を挙げ、検討することにする。

一八九八年、清朝政府は、康有為、梁啓超を首班として、日本に倣って維新運動を始めたが、百日に及ばずして失敗し、西太后は再び政権を握って六人の維新の志士を殺し、康梁は外国に逃れた。西太后は国内の維新派の人々を逮捕しようとした。黄遵憲（字は公度。広東嘉応の人。駐日参賛をつとめ日本人との交際が深かった）は維新派の重要人物であり、当時上海で勤務していた。西太后は電報で、即刻北京に役目についての報告のため来ることを命じた。皆は彼のため心配した。彼は日本にいた時伊藤博文と仲が好かった。丁度その時博文も上海に滞在中で、このニュースを聴くと、夜中に拘はらず黄氏を訪問し、君の環境は甚だ危険であるから日本に亡命するが好い。私個人でも君を保護できるが、要すれば日本政府の圧力を用いても、清朝政府に君に害を加えさせないように配慮しようと談じた。黄遵憲は毅然として答えた。私は清朝の臣子である。清朝が殺さうとし罰しようとするなら、私はそれを受ける義務がある。外国人の勢力を用いて、この難を苟しくも免れることは私黄遵憲の人格の能くなす所ではない。君が私の好き友人であるなら、私を放置して欲しい。どうしても保護するというなら、私は自殺して心事を明かにするしかないと。伊藤は悚然と

ない。

上述した事柄はすべて中日両民族の歴史に刻まれた痕跡であり、今日になっては流水の如く過ぎ去ってしまったが、ただ軽視の心理と仇怨の心理だけが残されている。われわれは先づ日本人に接触し得た中国人と、中国人に接触し得た日本人から観察してみよう。

中国人は久しい内乱を経験して、境遇に随応して生き、変化に対処する能力を養った。とくに国土を喪失した中国人は、内心に空虚さを感じ、その空虚さに因って利を謀り生存を計ろうとする心情が特別に強い。これは同情に値こそすれ、別に怪しむに足りない。だがその中の悪質の者は、手段を択ばず、人格を顧慮せず、私利追求のために何でもやり、中国の国格を忘れ去っている。そして日本人の個性として、交友を択ぶ重要さを一向に存知せず、逢迎を喜んで直言を忌み、たまたま低頭媚を呈するを肯んじない正しい中国人に遇うと、頑固であり役立たずと見て、これを敬遠する。殷勤にうまい話を持ちかける巧言令色の中国人を、一見して大いに悦ぶ。そして一緒に仕事して失敗すると、日本人は交友を択ぶことを慎しまなかったとは決して反省せず、その怒りをすべて全体の中国人の上におっかぶせ、中国人軽視の意識が湧然と生じてくる。注意してみると、これは日本人が欧米人に対し、個人的にはもたない感情である。これこそ歴史が残した旧い痕の成す祟りである。

日本は極度に資源が欠乏している国家である。今日経済大国にはなっているが、一人一人の日本人の内心には、一種言い難い空虚感が潜んでいる。全く奮闘努力によって今日の成績を収めたけれども、知らぬ間に強い競争、独占、絶対に人に譲らぬ、弱肉強食の心的習性を形成し、特にこのことは企業経営者に於て甚だしい。たとえば一人の中国人が対外貿易を打開する一つのルートをもっていて、日本の企業と合作した時、その企業がそのルートを把握すると、その中国人は必ずあっさりと棄てられる。又、ある中国人が一つの食品を発明して金儲けが可能になる、そして日本人と合作

民国以来、北洋政府の官僚、地方軍閥及び革新派を自称する党人たちは、内乱の時になると、日本と結んで利用し、或は武器購入のために国家の利益を売り渡し、或は媚びて提携を申入れ等々の事実と実情は、私が個人でこの二十年間集めた資料が雄弁に語っている。日本人は有名な資料保存の好きな国民であるから、私の知る何倍ものことを知っていると思はねばならぬ。日本人が中国人を軽視するのを怪しむ訳にはいかない。

日本は大正年代から、野心的政治家と軍閥が本当に明治の精神を忘れ去ってしまった。そして段々と西洋帝国主義よりもっとひどく中国を侵略するように変っていった。日本人の中にも達見の士がいて、東亜の真の平和、中日両国の真の提携を望んだが、とても現実の万分の一をも補うことはできなかった。そして兵火の中に相見えた後、ほとんどすべての中国人が日本軍閥の凶悪なる相貌に接したのである。これでは中国人が日本人を仇怨視するのは当然であろう。

満洲国の建国の前因後果、是々非々は姑らく論じない。ただ私の直接眼にした一、二の事を話すことにする。私が初めて満州にいたのは一九三二年で、建国間もない時であった。私が親しく見たのは、到る所で「満洲国は独立国家である」「五族協和の国家である」「絶対に日本の植民地ではない」等々の宣伝であった。一九三七年に私は再び渡満した。その時の街頭に掲示された標語は「満鮮一体化」であり一体化を特筆大書してあった。大学卒業後に渡満すると、今度は正直に日本を親邦（即ち母国）として満洲を子邦（植民地）としていた。更に暫くすると、満洲国皇帝は天照大神の子孫に変えられた。私は満洲国に参加せず、満洲で勤務したこともないから、内部事情はよく知らないが、上述の一事からしても、絶世を継ぎ、滅国を興すという東洋道義は、日本の育成下の満洲国には望み得なかった。このような始末では、中国人が日本人を仇怨視するのは、怪しむに足らない。

満洲建国十四年間に、日本の協力下に非常に強大な五十万の国軍が作られ、厖大な工業建設が行はれた。しかも一旦危機に遇うと、数日ならずして一切が雲散霧消してしまった。人心、人格、信義が如何に重要であるかを思はざるを得

ただ数十年の動乱の中に得た知恵だけを頼って、到る処で苟安を求めていては、正々堂々たり得ないし、人格の自立もできない。ただ目前の利害のみ顧慮し、身に反りみて自省せず、信義を以て自立しなければ、いつまで経っても、結局人から軽視されるのも致方ないことである。

以上のことは、私と和崎博夫氏が巨川先生の遺書の日訳出版を主張した動機である。私は平生日語文を書くことをよくしないのであるが、日本文にするために、無理して稿を起した。自分でも可笑しいと思っているが、読者の御諒解を得たい。池田篤紀先輩の訳筆を感謝する。

脱稿したのは戊午の年旧暦十二月十二日で、巨川先生の殉世から六十年と二ケ月六日である。

したとする、その日本人がこの食品を作る方法を会得すると、必ず中国人に少々の利益を与えて追い出し、独占してしまう。この種の事実に類似したことを、日本人は中国人にだけやるのではない。日本人は日本人に対してもそうである。だがこうして利用され棄てられた中国人は、必ず日本人を罵り、仇怨視して、その罵倒と仇怨の心情を日本人全体に対して抱くことになる。そして過去の対日仇怨心理が油然として再燃してくる。このような感情は、中国人が欧米人に対しては決してないことで、これ亦歴史が残した旧い痕の成せる祟りという他ない。

これらの瑣細な事は、中日両民族の間に、まだ無形の裂け目が存在していることを証明している。この裂け目を完全に取り除かないと、中日両民族は永久に真の誠意ある合作を実現する術がない。

この裂け目を取り除くことは、決して不可能ではない。ただ双方の指導者が、人心、人格、信義の重要さを知り、とくに精神の独立、人格の独立、出たとこ勝負と己れを偽はり相手に従うことの不可、強いて相手を己れに従はせることの不可を、心の深奥な処で反省することである。

ここに数十年前に身を殺して世に殉じた一人の読書人を挙げて、中国の歴史に謂う真に正しい伝統に生きた読書人の在り方を証明することにした。彼らは国家に対してどんな見方をしたか、世道に対してどんな責任を負うたか、自己の人格に対してどんなに自重したか、これらすべては現代の人々が参考にすべきである。

一方、私は日本の友人たちに告げたいと思う。君たちはこの数十年来、中国の立国の精神の在る所をハッキリと知ったことはなかった。君たちは中国の真に偉大な人格者に遇ったこともなかった。尤もこれは無理もないことである。この数十年、中国はいつも内乱の中に在り、真正の伝統的読書人は、隠れて姿を見せていないのだ。君たちは真実の話をする中国人と交はることも甚だ少ない。君たちはこの問題を考えることも甚だ少ないのである。

私は更に中国の友人たちに告げたいと思う。われわれ中国人がもし巨川先生の説かれる通りに「国性」を恢復せず、

一読書人の節操 目次

日文版序（景嘉）……1
巻一 桂林梁巨川先生の世人に敬告する書㈠……19
巻二 桂林梁巨川先生の世人に敬告する書㈡……33
巻三 桂林梁巨川先生殉節に臨み各友人に致せる書並に児女に遺せる書を附す㈢……43
趙智庵に貽る書……43
袁・馮・林・周・彭の五兄への遺書……62
袁玨生兄に奉る遺書……68
馮公度兄に奉る遺書……70
林朗溪兄に奉る遺書……70
周霖叔兄に奉る遺書……72
翼弟に速覧のこと……73
鄒紫東親族に奉家る書……75

桂林梁巨川先生の世人に敬告する書㈠

後学　景嘉校録

戊午年（大正七年・西紀一九一八年）第一

余は今、誠を竭し敬（つつし）んで世の人に告げる。余即ち梁濟の死は清朝に殉じて死ぬのである。此の事を詳細を尽して遍ねく世の人に告げたいと思うが、心身共に衰え、筆力最も鈍、言葉も拙なく、思うに任せない。その上数年来、未完の篇を甲寅の年（註：大正三年、西紀一九一四年に積水潭で遺言を構想したが難渋を極めて完成に至らず、久しい間これを続けて完成しようと思っていた）に続成して、心中の委曲を言はうとした。だが児女がこれを察すること（癸丑・甲寅（大正二・三年）に次女が気付いた模様）親友が知って阻止することを避けるために、気苦労が多くて、清浄の地に静坐深思する機（おり）が無かった。今年は還暦に当り、児輩はその祝宴を行うので、又復た親族友人の来り集うことを考えねばならなかった。国の大変が生じてから既に数年、余は猶ほ生き存らえ、平生の志と違うている。深く恥しいと思う。期を定めて義に就くために、体系ある文章を作っている暇はない。ただ幾つかの段に分けて簡単に言うことにしたが、間々明瞭を欠くので已むなく口語体を雑へて記すことになる。世の志を同じくする人が、この文章の意の在る所を考証し発展させてくれることを、伏して願う次第である。

曹纕衡・汪玨齋二君への遺書……77
林墨青弟に留める遺書……78
留めて児女に示す書……80

巻四

桂林梁巨川先生語録……87
修己篇……87
論人篇……95
論世篇……105

附録

梁煥鼐「桂林梁巨川先生年譜」跋尾……115
梁漱溟「思親記」……116
訳跋（池田篤紀）……121
あとがき（和崎博夫）……125
附　中国文……一三一頁〜二一五頁

の心に問うて確かに柳堂は清朝の為に死んだと確信した。世の人は、余が清に殉じたと認めるかどうかは、必ずしも考えることはない。ただ自分の心に在ることは時期の早晩は問題でない。それに余はこの数年に亘り、人の屏風や扇子に揮毫するにみな伯夷・田横の事を書いてきた。晩村・季玉等の事も屢々書いたし、時には説明も附けた。又零細な筆記にも赴義に関する処が甚だ多いし、又、人に向っての談話でも屢々それとなく示している。古語に言う、一知己を得れば以て恨まざる可しと。余は思うに友人の中に二三の知己はいるであろうと。真に能く我が心を知る者を、何で必ずしも多く世の人に望むことがあろう。（袁爽秋の詩に云う、死せば青蠅を索めて弔客と為さんと）

或は云う、既に清に殉ずると言う以上、何も又本位を言うことがあろうと。曰く、義なる者は天地の間竭絶す可からざるものである。自身の人格を保全し、社会の元気を培補する所以であり、当に引いて自身の当に行うべき事と為すべく、固より外なる勢に牽かれ迫られて為すのではない。清朝なる存在は一時の事である。清に殉ずるのは個人の事にすぎぬ。事に就いて事を論ずれば（訳者注：事とは外在の客観的事象）則ち清朝は主の名である。義（義とは内在の当為の規範）に就いて義を論ずれば、則ち良心は通理である。もし我が身が漢に在れば、則ち漢が亡びる日必ず漢に忠を尽す。我が身が唐に在れば、則ち唐が亡びる日必ず唐に忠を尽す。宋に在るも明に在るも亦みな同じである。故に我が身は清朝の臣である以上、清が亡びる日に在っては、則ち必ず当に清に忠なるべきである。それ故義を以て本位とし、清を以て本位とするのではない。

諸君は余を知っている。何で硜硜然とこの義を行うことに固執するのか。もし今日の風俗が尚ほ厚く、或は辛亥・壬子に元老名流たちの節に殉ずる者があって、世道を継続するならば、余は必ずしも死を急ぐまい。諸君試みに思へ。今日の世局は何の故に因ってかくも頽廃の極に至ったか。正に朝三暮四、反覆常無く、既に旧君を売り、復た良友を売り、又主帥を売り、平時の約束を背き棄て、愛国の美名に仮託して、金銭で買収され、私人の使嗾を受け、刺客を買っ

余は清朝の末期に生きた身の故に清に殉ずると云う。がその実は清朝を本位とするのではなく、幼年に学んだ所を本位とするのである。吾が国は数千年来、先聖の詩礼綱常があり、吾が家の先祖、父母の伝えた教訓は、幼年にして聞く所であり、世道に対して責任を負うことを主たる義としている。この主たる義は余の頭脳に深く刻印され、この主たる義が本位となっている故に殉ぜずにはいられないのである。

世人は余が節に殉ずる事が何故に数年も遅延したかを訝しく思うであろう。それには種々の牽制があり未完の事があって、素志のように運ばなかったからである。（附註：大児は陝西にいて家事が交代できなかったことも未完の一つである）常に念じていたのは、徒死すべきでなく、世局の弊害をよく見定め、言葉を留めて同人に敬告した後に死ぬことであった。それ故この数年来、時に迫られて急には実行が難しかったが、前賢の事を引いて鑑とすること、例へば呉柳堂先生の穆宗（数字不明）に殉じたのは、甲戌（明治七年、西紀一八七四年）穆宗死去を去ること六年の後である。日本の乃木将軍が軍旗の責任に殉じたのは、事件後数十年の後である。（此の事は余はよく知っていない。三年前に新聞紙上で見ただけであるが、甚だこの事を尊重するので記して置く。諸公がよく調べて考察されんことを望む）文信国公文天祥は宋が亡びた後に、元の治下に住むこと数年にして義に就いた。（又元遺山は心史を著はしてから死んだ。これ亦数年遅れているようだが、記憶はあまり確かでない）。先賢文信国公の如きは、小子の敢て妄りに比べることではない。外国人の事は余も亦範とはしない。余は但だ柳堂の深沈堅決に対しては、勉めてこれに效（なら）いたいと思うが、自ら如かずと愧じる。光緒の時、一般の浅薄なる徒輩が迂なる者と詆（そし）ったことは、まだ憶えている。下士は道を聞けば則ち笑うと。昔からそうである。余は当時心中ヒシヒシと感じ、これを世の人に語ったが、何の反応もなかった。ただ自分

の年に、余は殉清の心があり、そして我が旧君を念ずるに、最良の民国の成立を以て心とされていた。凡そ我が大小臣工は、みなこの心を体すべきが理の当然であった。故に余は民国のやり方如何を観察して、今後の身を処置しようとした。（辞職書の中に自註して云う。亦其の改革の如何を一観せんと欲すと、即ちこの意である）余は清朝と民国の間に対して、最も確かな判断をもっている。曰く、能く真正なる共和の心を以て民国を治めれば、則ち清朝のこの平和な揖譲の心を無駄にしないことになると。（共和の実功は本来驟かに達成せよと責めることは出来ないが、真に真正共和の心を抱いて、歩一歩進めて行けば、当局の者から百官の言動措置に至るまで、その実が見えないことはないのであって、吾人はそれを大目にみてやれぬことはないのだ）真正の共和を計る心で民国を治めないとなれば、清朝は権奸の手に亡びたことになる。（余は丙辰の年、袁世凱に書を遣はし、その真心より国を治めないことを責めようと思った。孟子の天下を以て人に与うるは易く、天の為に人を得るは難しを引き、中国をして天理を絶滅せしめ、万世の罪人と為り、清廷の付託に負く勿れ云々と。按ずるにこれは別の事だが、今附け加えて置く）

換言すれば禅譲に因って民が安きを得れば、則ち千古の美談で、自づと前代亡国と異なることになる。徒らに禅譲して民が安きを得なければ、則ち一朝の代謝にすぎず、亡国に非ずして何と謂うか。今、民国になって七年となる。南北は戦争に因って大局は分崩し、民生は困窮し、民徳は堕落し、全く遜譲の本心と相反した。清朝は権奸の売国に亡びたことは、已に疑えない。古今亡国の時、必ず臣工の亡国の難に赴く者がある。廿四史にその先例は乏しくない。廿五史の末についに一人も無いことがあろうか。この故に余は起って廿五史の最後の一臣を代表し、国に人無きの恥を雪ぎ、天理絶えずの機を留める。これが余の殉世の理由である。公認されようと独見であろうと、確実ならざる考方だろうか。

今の人々は新説に脅かされて、自己の権威を喪失した。光緒宣統の末、新説は君を敬まい主を恋う事は奴隷根性だと謂い、一般の俸禄を食む者は忽ちこれに靡き（別記中に未だ俸を食まざるの語があり、石達開（太平天国の将軍）はこ

て長城を壊すことに因るのではないか。個人に因って大局を破り、利害のままに移り転じて、面目靦然、このまま推移するならば、必然の勢として全国人は信義の何ものかを知らず、公理を擁護する一毫の心も無くなるであろう。そうなれば人は人でなくなり、国は国でなくなろう。国を穏やかに安定した国にするためには、先づ人を良好なる人にさせねばならぬ。これが余の自ら力を量らず、明かに大勢救い難きを知りながら、この区区たる一身を捐て、聊か国性の最後の一線を存らえさせようとする所以である。余の言はんと欲する理由はまだまだ沢山あるのだが、舌はこわばり心は急しく、死の時期は迫り孤影を顧みて彷徨するばかり、先づこの一段を告げて一応結束し、再度稿を起すことにする。

第二段

殉清には何の確実な理由あるかを問うて、正直にこれに答える。

曰く、余には確実な理由があるのだ。中華民主共和に改まったのは、清廷が禅譲して民国に授けたからである。これは世界各国のひとしく認める所である。これは悠久なる歴史の上で磨滅できぬものである。当時、清廷の兵力は戦うことが不可能ではなかった。（仮に清帝が共和を認めず力戦すれば、武昌は立ち所に平定できたことは、当事者の公認している事実である）ただ民生を塗炭に陥れるに忍びなかった故に、大位を犠牲にすることを惜しまず、統治権を民国に移転したのである。これこそ最良の政体であり、全国人民をしてひとしく安定を得しめられるというのが、元来の考慮であった。辛亥の冬、南方と数十回の協商を重ねたのを観るに、中国を混乱させ人民に苦痛を与えるに忍びないとの言葉が、屢次の詔書に記載されている。即ち辛亥十二月二十五日の最後の詔書にも、諄々として大小臣工共に、民生を以て重きと為し、心を斉しく努力し、民国の太平を佐け成すことを矚望されている。故に吾人が苟とに真心から人民の安定を求めることが清廷に報いる所以である。壬子（大正元年・西紀一九一二年）辛亥（明治四四年・西紀一九一一年）

第三段

曰く、一家一姓に忠を效（いた）す義は狭い。忠を世界に效す義は広い。余は清朝の為に死ぬのであるが、自らは世界に忠だと思っている。諸君は信じないかも知れぬから、以下余の言葉を試みに聴いて欲しい。今、吾が国人は賑やかに往来し、虚偽と譎詐に呆け、僥倖に頼る外には、何の心を用うる所は無い。職務に対し平静な心と道理によって果さうと欲する者は、殆んど求めても得られない。これは道徳的欠陥だけでなく、万事が駄目になることである。所謂万事とは官吏・軍隊・士・農・工・商のすべてを意味する。（先聖は国を治めるに先づ人をして良心をもつようにした。敬と慎からして事業は成就する。所謂民を軌に納めるである。今、法治を高唱して先づ人をして放蕩ならしめ、拘束を加えず、専ら法律を万能なりと恃み、且曰く、自づと軌道に入り、直ちに大いに治まるとする。余は軌道に何故に自づと入るか理解できない。この夢が醒めない限りどう仕様もあるまい）

万事がそれぞれ役に立って、而る後に国勢は揺がぬ堅固のものとなる。この道理は最も見易い。余は世界の人々が、それぞれその当に行うべき事を尊重することを願う。余は清朝の臣である。故に忠を清朝に盡し、清朝につながる情を示すのは、民国の人が民国の職事に於て、各自連帯の情を強めるのと同じである。これは国性を以て国勢を救う説である。（附注：我が隣家の女に挑み、人が我が女に挑むのに、種々の理由をつける場合が極めて多いが、一々引証する暇がない）余が先に清朝に忠を盡すのでなければ、世界に忠を盡すことはできない。田横は斉に忠であり両漢の節義はこれに因って興ったと謂う。この道理は今でも通ずる。余は常に孟子の苟（まこ）とに能く之を充せばを引いて、万事一貫の例とする。今、清に殉ずるを以て世に忠を為すとするのは、この意味である。余がこれらの言論を、人は必ず迂腐に堪へずと笑うだろう。（余の左右は余を軽蔑する者）然しながら余は、国家を害する者は、執政の諸公及び名流政客が高遠な

れを聞いて笑った）平生の自己の考え方を忘れてしまった。平静な気持で思えば、人はそれぞれ尊信し把持する学説をもっている。彼の新説は自治を説き君治の理を否定し、専制を顚覆し、奴性を打倒せよという。自づから是れ一説である。（此の説が完成に到達し弊無きや否やは別の問題であって、ここに論じている暇はない）我が旧説は忠孝、節義を以て全国の人心を範束する。一切の法度紀綱は、数千年を経た聖哲の創垂した所で、これが毫も貴ぶ可きものが無いとはどうして考えられよう。何で先に自ら軽んじ把持して来たものを棄絶して、一顧だに値せぬとするのか。新人物に対して自ら形の穢れたるを慙じ、嚅々として敢てもの言うすら怯える。甚しきは迎合して、先代の遺し伝えた教を罵しり、自家の学理を辱しめる。数百年に亘り国の頒った条章及び吾人に伝えられた教（子臣・弟友・民に仁にして物を愛す、身を立て己れに行うは本来臣たる者の一端に止まらぬ、その他は類推すべし）数十年に亘り朝夕親しんだものが、全く虚偽に属するのか。人々は死を怕れ禍を避け、阿諛し学を曲げ、苟しくも全からんと心掛ける。これで世事が能く沈淪せず、国家が能く積弱しないですむか。余は嘗て共和と専制は、相互に対等に立ち、平等に視て、賓主の形をとって尊敬し、理解し合うべきだと謂うたことがある。時世に因って各々その宜しきに就いて用うべきであり、独り己れを尊しとして相手を賤しめ仇敵の勢をなし、相互に嫉忌し、相手の苦衷を察せず、蹴倒して快を取るべきでない。

　吾人が幼年に学んだ所が時に適さぬと感じたら、孟子の孔子は聖の時なる者なりの言葉を玩味したらよい。そうすれば通ずることが出来る。決して軽蔑し放棄してはならぬ。戚継光（訳者注：明の名将軍、倭寇を善く禦いだ。）は兵卒を戒しめて、凡そ祖師・教授・諸法に対し軽侮の意を存する者は必ず敗けると言った。余は一般の骨無き人（バックボーンの無い人）が国俗の尊信把持するものに対する態度を観るに、自分で自分を蹴倒しているのである。これこそ中国必亡の真因である。これを救うには心術の根本から立直さねばならぬ。余は死に臨んで忙しく、反覆してこれを言うが、それでも万分の一も尽さぬ憾みがある。（友よ、余に代って詳しく明かにして欲しい）

商部を辞職したのは瘋病の故と語っていたからである。その同郷人を余は素より識っていたが、実は瘋病ではなかった。余は卑俗の官僚が、口から出任せに悪評を立てることをよく知っている。だから余は先に申立にしたのであるが人が余の言を信じたかどうかは知らない。更に光緒六、七年（明治一三、四年、西紀一八八〇、八一年）人々は呉柳堂先生を譏って或は迂といい或は売名とした。されば背後の誹謗は必ず免れないことを知っている。

百思して解らない者

今の人の多くは敢て責を負う段氏（訳者注段祺瑞国務総理）を、何で苦労してまでやろうとするか、何で早く引退して一身の清閑を計らないのかと訝しむ。国家に対し冷淡の人は、責を負うことを肯なう者の心中を知らないのである（余は段氏を崇拝する者ではなく、別に余の見解がある）心境遠く距たる者はどう仕様もない。故に巨川の死に対し、大いに憐憫を加えるが何でそんなことをと訝しみ歎くだけである。世間の風俗は己れと何の関はりもない事で、無駄に命を棄てる者に対しては、一体何の役にも立たないのにという位ですます。これらの論調は、二十五史の国性から想を致さないからであって、試みに二十五史の国性上より想へば、世道に対して已む得ざる者のあることを知ろう。

口を極めて讃美して我が心を知らざる者

この種の人には、余は最も感激する。敢て断言するが、中下級の商人、郷農、労働者、貧乏な人々等、大多数の者がそれである。余が常に好んで交はる人も亦この人達である。彼らの心や眼には余のこの挙は清朝の一面からのみ映る。此の光栄ある一挙は清室の為に生色を添えたと思はれ、甚しきは余に宗社恢復の心があったが力逮ばず、その故にこの一挙があったと気を廻し、又或は名節を全うしたのは余個人の名誉であると考える。これは余を遇するに極めて厚意ある者ではあるが、余が国性の淪亡を痛み悲しみ、この挙によって民国に反省を求め、世上の人が各自僥倖詐偽の心をなくなし、職事に忠ならんと努めることを、殉清を起点として実現させようと志した所まで思い及ぶまい。余は清朝に対

る政治を空言し、人民の根本に手を着ける事は何も無く、日々に堕落して将に禽獣の途に入らんとするに在ることを、確かに見たのである。

不統一の害のみではない。統一を僥倖して、依然として驕慢自ら誇り、事実の政治を求めず、国民を導くに狡猾な詐偽行為を以てする。表面は覇者の驩虞に似て、実際は天良滅び尽し、終に世間の阨運を浩劫に醸（かも）すにすぎない。（伏卵記にこれらの種々乱を致す原因の多くを痛言した。余を憐れむ者は是非閲読されたい）故に余は迂腐を避けず、世の人々に己れに反って之を求め、或は世変を万分の一でも軽減することを望むのである。余を夏炉冬扇であり頭脳遅鈍と嘲笑しても、余は自ら恃むが故に、天下後世に対して何の慙づる所は無い。恐らく一般人の余に対する論評は奇々怪々であろうと思う。

大いに罵る者

極端に新説を主張する陳君独秀及び江滬の間に在る革命迷信家たちの如く、平静な心で事を観察しない者は、みな大いに罵らざるを得まい。罵る言葉は頭脳が旧すぎる、眼界が低い、奴性が深すぎる、世界の大勢を知らない等々である。それぞれ是非はある。余としては甘んじてこれを受けよう。

大いに笑う者

癸卯（明治三六年、西紀一九〇三年）甲辰（明治三七年、西紀一九〇四年）の間、北通州の潘君は海を踏んで節に殉じた。明かに憂国の遺書があったが、俗人は瘋癲の病の故で、決して憂国の仕儀に非ずと評した。又余が刺虎の劇を観た時に遇った某商人は、費の宮娥は巧を弄して拙を成したと評していた。凡俗の人のこの種の心理は、余もよく知っている。故に壬子の年（大正元年・西紀一九一二年）辞職の日に、朝早く役所に行き、書を机上に留めて、司長よ決して疑はないで下さい。瘋癲に因り性を失して官を辞するのですと言明した。というのは同役の某君が同郷（沂江）の某が

把持してきた信条が、一旦人に覆へされ除かれると、逝く水の東流に随って倶に去り、竟（つい）に一人の追って挽救する無きは、豈に真に共和の精義を理解せるに由るものならんや。（彼には彼の神聖不可侵がある。我にも亦我の神聖不可侵がある。必ずしも挑戦することもないが、亦自ら思うべきである）抑も世道衰へたるに、身を以て道に殉ずることを知らず、ただ禍を避け、苟しくも性命を全くすることのみを求めるのか。これに類する言葉は勝げて数う可からずである。今、文詞を潤色している暇はない。指を屈して計るに期限は迫っている。尚ほ蓉渓・東海に致す書及び五友に託し兼ねて墨青に告ぐる等の事があるので、草々に第三段をこれで結束するしかない。

第四段

尚ほ余義があるので大雑把に言うて置く。或は世人は満清を痛く詆（そし）るのに、子はなぜ独り衆議を犯すのかと謂う者がいる。曰く、既に満族を詆るかぎり、所謂五族共和はあり得ない。彼の蒙・回・蔵は満を何と視ているか。猶ほ上天の心を体するに、これを同一視していよう。甚しきは西洋の白人すら、猶ほ親愛してこれを尊重しているのに、何で黄帝の子、粛慎氏の後裔で、吾と数百年に亘って同化した満人を異端扱いにするのか。且つ満を詆る者も亦一類でない。開国の時、理として排満すべきであったろう。しかし南方人は地域と気風に制約され、北方の真相を知らなかった。従ってその詆る所は多く想像であり伝聞であって、まこと事実ではない。且つ清の建国の初は明を去る遠からず、文学の士が仇恨の情により附会した説を記したのは、情理の当然である。犬羊の如しと罵るものの、事実の有無は定まらず（昭昭として拠る所ある者を除きその余は子虚の賦に近い）つまりは彼の身に何の損もない。清末の排満は、闘争の口実にすぎず、旧説に根拠したものである。又煽動の道具に使はれた政治の欠陥は、実は真相ではなかった。亡国の後にたって、又多くの怪文書が出たのも致方ない仕儀であった。が、それらは漁利の徒が浅薄の心理に迎合したにすぎない。到

し、死を以て報いるは当然であり、死に赴くことはいと易い。だが丁巳（大正六年、西紀一九一七年）五月十日、張紹帥に書を致し、復辟は不可であり、宜しく兵を屯して遙望し、民国を監督して、仁義の政を実行させ、禅譲の心に副うべき旨を力説した。余は吾が君が堯舜たらんことを望み、吾が君が眼前の尊栄を享受して後日に顚覆が来るを望まないからである。余が清室を愛する心は、大多数の人の清室を愛する心と異なるのは、玆にある。

真に能く我が心を知る者

凡そ重視すべきは、先づ良好なる人民があって而る後に国は立ち得ることである。融通のきかない法律に専ら頼って治めることをしない者は、みな余の心を知り得よう。余が自ら身を以て清に殉じて、世界に忠なりというのは、世上の官吏、警察、士農工商一切の人々がその営む職業に対し、各自僥倖の心をなくし、誠実な心を打ち出して後、万事有効となり、国は立つことができる。この僥倖心はどうすれば去り、誠実心はどうすれば来るか。中庸の小人は忌憚する無き也の一句をよくよく味はへば判る。人をして忌憚する所あらしめば、則ち良心は遠からず生ずる。清朝は去った。余が誠実の心で既往の国に対するのは、決して寵栄を望むからでない。世人が誠実の心で、将に来らんとする民国に対するのは、個人の私利を争はん為ではあるまい。余の清国を愛する気持と、人々の民国を愛する気持は、一つの心であって二つの心ではない。壬子の辞職に、書中曽文正の語を引いた。曰く風気は一、二人の心に起り、蒸して習尚と為り、千万人に極まりて、能く禦ぐ莫しと。又、或は並世の同心に頼る、或は倏々として千秋之れ悵望云々と。竊かに料るに普天の下の人、此の言を聞いて憐憫する者が必ずあれば、是れ皆我が心を知り後盾となる者なりと。切に清廷の嘉奨を求むる勿れ。

以上第三段は実に断片的に記したものである。毎朝数行を飲み書きにした。人が来たり、用事に妨げられたり、随分無理をして大略を書き終えた。平生言はうと思っていて、その時になって書くのを忘れたものもある。数千年来尊信し

ず父母の霊に告げて云うた。此の事（殉節を指す）を行うにただ遅延するのが恨みであると。今、遅くはなったが言を践むことになった。所謂盟誓の言、豈敢て之に背かんやである。袁世凱の言行不一致が全国の風気を汚染させたようなことはせぬ。

まだまだ記したいことが多いが、一時に言い出せないし、他にも忙しい事があるので、この辺で擱筆する。凡そ余の言う所は、人の気にさわることである。亦嫌疑をかけられたと誣うる者もあろう。何事にあれ、死ぬ余の一身に引受けよう。児輩や家族の者には何の関はりもない。児輩も亦余の為す所は何かを知らぬし、又、多くの点で余と意を同じくせぬ。第四段は本来未完であるが、無理して完成したことにする。

百忙の中、明日は祝家に赴いて寿星にならねばならぬ。（数日前、林君に天津に行き張家の祝事に同行することを約束させられた）親戚友人の多くは余を愛してくれる。そして余の苦衷は知らない。余が深く内心を秘して些かも露呈しないことを怪しまないで欲しい。余は平生より絶えて道学の名は無い。それは今の世は直道を容れぬことを深く知るからである。故に表面に出た形迹の上ではあまり明瞭でない。壬子五月、余は役所でこれら汚を洗って善に向うと心から言ったところが、某君は要するに銭ですよ、月給は幾等幾級に分れて云々と言うのである。余は茫然として、その場をつくろったものの、哀しいことだと思った。余は人が余の道学を以て以て人を欺いたと罵り笑うかと怕れる。故に事を整へるに暇取らざるを得なかった。心地深険にして実を露はにしなかったのではない。もし心に世道を憂うると人に告げたなら、それが自分に何の関はりがある、何でそんな世話をやくと、笑わぬ者はなかろう。その上誹謗する者もあろう。この故に余は顕かに真実を話さなかったのである。

戊午（大正七年・西紀一九一八年）九月二十一日　梁済誌す

薄下賤の人の為す所で、共和の心理に相反することを未だ思はざるものである。これは民国の風俗人心が未だ敦厚にならざるを観るべきである。当局者が平静な気持で取締ることを望む次第である。

余は清に対し、天子が徳を失はれたからといって弐心をもつことは出来ない。二、三百年来、立派な天子があられ、真心からの善政があったではないか。古の臣節に、君上が徳を失ったからといって叛く可しということは聞いたことがない。（之に叛いて湯武と為るは猶ほ恕す可きである。之に叛いて乱民と為るのでは、何で人が服さうぞ）況んや余は既に功名性命を犠牲にしている。今更人が余を満奴と誚ろうが何で気にしよう。余は余が当然行うべきこと即ち世道を培補することを求めているまでであり、その他は計る所でない。

或は又謂う。癸丑甲寅以来、既に事有って遷延未だ死せず、今や時機已に過ぎた。門を閉じて仕へざるも亦卑しからざるに、何で必ず軀を捐て命を絶つのか。曰く余は人が口に主を恋うと言い、而も身に事を作さず、又多くは世事を問はず、林泉に優游し、或は志を詩酒に溺らせ、遂に自ら忠義を標榜するを見て、あまりにも好い加減だと思うのである。（好い加減になるまいとしたら、速かに世道を裨益する事をやればよい）且つ余は壬子・癸丑の年に、粤西老館で（五月二日）団拝し、同郷の先達に随って関帝、文昌両殿で礼を行った。（新学は文昌を星であって神でないという。余は習慣に従うので敬を致す。神は有るのか無いのか。吾が心即神であり、吾は自ら吾が心に告げるのみ）その時、神明に必ず義に死して末俗を救はんと告げた。両殿の行礼が畢った後、先賢の位牌の前に赴いて行礼した。先賢の位牌には厳親永寧公の名があった。（丁卯＝明治三年・西紀一八六七年＝の年、山西より京師に帰る。吾が家は困窮し世間と往来しなかったので、先君の位牌が何時ここに加えられたか知らないが、この時の感激は深刻であった）壬子の後、一度行礼した。（人が余を腐儒と罵るのを知らぬのではない。しかし余が国性を存せんと望むかぎり胆力をもたねばならぬ）その時、必ず興亡の際には正義を明かにして敢て親を辱しめずと、敬しんで告げた。又、墓前の祭奠にはつねに必

桂林梁巨川先生の世人に敬告する書 (二)

甲寅の年第二（注・これは先生が甲寅の年に死を欲して所を得ず。その心中を書に著はしたものである）

当世の心有る人は、余が死のあまりに遅くして、理のあまりに迂なるを怪しまないで欲しい。平静な気持で余のこの間已むを得ざる事情の説明を聴いて欲しい。辛亥・壬子の間、余は固より死を欲した。しかしその時死ねば、純然たる清朝亡国の為となって、目的とする所あまりに小さい。且旧君は政権を民国に移譲し深く民国の善治を望まれた。余はまだ民国がどのような姿であるかを明かに観察して居らず、余の心が世人に告げんと欲する言も亦まだ説明していない。この身を犠牲にするからには、決して曖昧であってはならぬ。死を欲して遅々として待ったのには二つの原因があった。一つは則ち死を忍んで国会の開かれるのを待ち（按ずるにこれは猶ほ国会を重視する清末の語気である。国会の開会は千載にも逢い難き盛儀と思ったのに、豈に料らんや議員こそ道徳破壊の元凶であった）苦しい心事を全国代表に愬へ、全国の最も賢明な人々が、心を斉しくして民徳を挽回し民生を救い、世上の不平不公を除き、吾が国をして高尚優美の域に到らしめようと望んだ。辛亥の臘月より余がこの主義を定めたのは、共和国の最大の勢力は国会である、賢材の最も盛んなのも亦国会であると考えたからである。そこで昔日は苦心して言はんと欲することは、闕下に伏し上書して君に愬え、吾が君に処置を求めた。今時は請願によって国会に愬え、国会の支持を求める。余は清末に上書しようとしたが半ばにして止めた。（吾が友林次煌、周霖叔、林朗渓、白松泉の諸君はみな七千字に達する上書の草稿を見て

十月七日、死に臨んで再び世人に告ぐ。（景嘉按ずるに、此れは先生が水に赴く数時間前に書いた文である）

余は世間に楽しむ可き生があり、死を求めるのは実は至苦であることを知らないではない。そうでありながら余は壬子の年の辞表の中に孟子の一句、欲する所生より甚しき者有りを引用した。試みに孟子の下の二句を玩味すれば、余が已に生死義利の間を思量していたことが知れよう。余は幼年にして、史上の先賢の詔誥の教を受け、信義を一切の前提とした。壬子・癸丑・甲寅の年間、神を祀れば神に告げ、祖を祭れば祖に告げた。身は清朝鼎革の際に逢い、史上節義の為す所に效（なら）はんと思って、五、六年は瞬く間に過ぎた。余を監察し督責する人は絶えて無いから、余自ら前説を取消しても、誰も知る者はないのである。そうであっても余の良心は余を監察し余を督責し、時時に心に疚（うず）きを覚えるのである。又、中国の今日を見ると、世道は浅薄と詐偽が著しく、堂々たる諸公が竟（つい）に詐を挾み私欲を手段としている。今日信誓し明日は干戈を動かし、一毫も天理を敬畏する心は無い。余は名位微なりとはいえ、どうしてこの喪心昧良の一味に加はるに忍び得ようぞ。そこで千方百計し、必ず初心を実践せんと心掛けた。今にして後、良心は稍安んじ得よう。自ら問うに、未だ嘗て澆漓、詐偽を以て社会を害したことはない。余のこの種の言論は必ず今人の取らざる所である。ただ劉少少先生一人は或は余を以て然りと為すかも知れぬ。劉少少先生は余は素より相識でもなく対面したこともない。ただ昔、新聞紙上で根本に重きを注いだ言論を見たことがあるので、偶然憶い出した。

浄湖に命を舎（す）てる主人は、門を閉じ坐して天明を待ち、家を出で水に赴く。又この数行を記した。戊午十月初七寅の刻。

この三篇は戊午世人に敬告する書の内に入れること。

いし、創立に尽力しないと事後の立身にも差支えがあると云う。そこで彌の妻を六月に陝西に送り、彌児は甲寅の夏休みに帰宅することにした。家事の交代という事情が、余に死を遅らせた原因の二である。余がついに何に因って必ず死なねばならぬかについては一二の言葉では尽せぬ。余の学は元来極めて浅く、文筆には素より明かではない。更に近来は多忙で気持も乱れ、最も迂腐の言しか述べられぬ。世道に心有る者の研究を待つしかない。

辛亥壬子の間、親貴の皇族、八旗の官員から全国の大官・小官、庶民に至るまで、清が亡んだ故に死んだ者は一人もいない。これは実に史上最も稀有の事である。余は惶然と深く思い、心を静めて観察するに、辛亥革命は未だ百日に及ばず共和の理は人多く明かならず、清国は已に亡んで一人の殉ずる者もないのは、人が清に殉じない徴ではなくて、実に中国立国の道が将に人心に絶えんとする徴である。立国の道が人心に絶えれば、独り清国に対する連帯感がなくなったのみか、事事に対して、ひとしく連帯の誼みがなくなるのである。これは即ち国が将に国でなくなる大なる原因である。まこと人をして絶望の悲しみを抱かせる。清国なる者は、数百年にして一たび改まる国である。中国なる者は我が三古の遺伝、万年改まらざる国である。国は何で改まらざるか。それは立国の道があってこれを繋ぎとめているからだ。故に能く改まらずである。清国は已に亡んだ。恋惜することはない。民国は未だ亡びない。もしこの立国の道を尊重しないで、その国をして国たらざるを促しているとすれば、痛ましいことではないか。古より立国の道は国民を打って一丸となし、離散せしめざる一種の信条である。かくて後に国は天地の間に以て自立できる。この信条は何か。即ち身の連なる所の国に対し、休戚を同じくする誼みであって、中心に向う心であり離叛心ではない。時には怨恨の情で離叛心が発動され、これを代表する者が一人も無いということはないが、中心に向う心が強ければ離叛心を代表する者が一人や二人あっても、その他の諸人はこれを実践することなく、心の中では国の自立を思っている。この信条は人々の心の中に深く刻印されているから、一旦外国の強者に遇っても驚かず動かず、枯木の朽ちるような事態に至らない。また

いる）今又新しい悲痛の事は、どうしても国会に愬えざるを得ない。且つ国会は吾が国の数千年来未曽有の盛典である。五、六年来国会を請求する声は全国に溢れたが、今や既にその実現の期も定まった。三度は傍聴しなくてはならぬ。この盛挙を参観してから死ぬと決めた。故に壬子の年、余は頻々として両党に国会は何時開かれるかと問うたものである。癸丑三、四月の交には必ず開かれるとみなが云う。所が癸丑の国会が開かれると、全く予想に反し、一般議員は平素心中に想望した議員と全く違い、救民救国を心にかけず、私利私欲に奔って全く成っていないのである。凡そ吾が国の最も尊重する道徳を、彼の輩は全く無視している。始めは猶ほ数ケ月もすれば漸次安静に赴くと希望したが、結局は私慾に心を迷はせ、党争と縦慾の外には、何も知らぬ。民生国計について懇切に陳べきことも亦断然絶望で、議員は大いに人望を失った。少数の優者は多数の劣者に敗れた。余も亦議院に参観に赴かなかった。これが余の国会を待って死を遅らせた原因の一つである。

長男の煥鼐は日本に留学して商科の業を畢へ、京師でブラブラしていた。余は既に官を辞し一銭の収入もないので、長男は家計のため奔走せざるを得なかった。壬子九月、同学の招聘を受け関中大学の教員となり、涙を呑んで三千里の外に出発した。余は暑中休暇に日本と同様に家に帰らせようとしたが、陝西の道は日本より困難であった。癸丑二月に五、六月頃帰宅する旨手紙があり、彼の帰宅を待って家事を交代する所存であった。又国会傍聴もその頃には畢るし、心に願うことはこれで完了するから、上書の日に死ぬことが出来ると預定した。（鼎は暮に帰る意があったが、余は年の暮は寒いのと期間が短く、家事の始末は不可能だから、どうしても夏休みでなくてはならぬ。天安門外の水流が凍結しない時であり、又同時に長女を五月に北京に来させるのも亦同じ意味であった。子供たちと家で顔を合せたかったのである。）所が陝西省の同人は鼐児を引きとめた。彼の仕事は先に張譚の諸君がいたが、余に向って鼐の家族を陝西に送り独身生活の苦労をさせないようにすべきだと言う。鼐児の手紙には、学校の創立に立会うという機会はなかなかな

は中国立国の根本に大いに関係する。余の憤慨は一端に止まらない。これを殉清と謂うも可、殉中国と謂うも亦可である。余の学識は浅いから浅い言葉しか能くしない。一体道徳が堕落し世教が衰えるのは、亡国の末期に常にあることだ。開国の時代には断乎としてかかることは許されぬ。且つ我が国の歴史では、開国の時の人は敢て公然と不義を為さぬ。所が今や開国の時でありながら、公然と反道徳の事を提唱して憚からぬ。

茲に先ず官場心理の卑劣を略言する。数千年来の倫常は、一旦これを改革するには必ず極めて重い代償が支払はれねばならぬ。義を犯すことを惜しまずして断行し、これに乗じて吾が国は開闢以来の新共和を招来した。民の為に福をなす機会は実にこの時である。余の所謂代償とは、即ち人民の安きを以て、清廷の民を愛するが為に大位を犠牲にした心に易えることとである。数千年来改革の好機を措いて顧みず、この度の大なる行動の得た所は果して何であるかを知らない。そこで民は命に堪えず、枯槁して涸轍に死ぬ如き種々なる苦況を告げられても、瞠目せずとも眼前に見えても、これを漠視し、甚しきは下民共は本来最も軽賤の物、窮して餓えるがその常態、官は何ぞ必ずしも之を知らんという体たらくである。全局よりする節約節制の説を書生の迂談として一顧だにしない。凡そ平日議員は民生を漠視しているとその罪を指摘しながら、当の官吏本人は一々それを実行している。吾が国が本来もっていた危亡の禍に、又外国の莫大の債権を附け加え、更に怠荒、昏謬悖妄等の行為を重ねるは、その亡国を加速する以外の何ものでもない。これ亦官僚の主として為した所である。昔フランスは貴族の禍に苦しみ、老弱婦女は身を粉にして彼らの誅求に奉仕した。一旦忍ぶ可からざる極点に達し、革命勃発するや、貴族は身を葬むる処すらなくなった。今や人民は口を揃えて官瘼を詬り官邪を罵っている。恐らく官吏が禍を受くる日も遠くあるまい。況んや吾が国は列強の注意する所となっている。一旦乱が起れば、官僚貴族の覆敗のみに止まらないだろう。この両年来、亡国の禍を招いている官僚は挙げて数うるに足らぬ。茲には余をして生きるに忍びざる民を重んぜざる一端を挙げたに過ぎない。これが世人に類推観を求めるものである、

ば数千年来、巍然として自立し、存続して亡びないのである。

満清に就て言えば、この信条はとくに親貴八旗の諸人が篤く信じ、官吏や臣民たちがこれを分け持っていたが、ただ漠然たるものであった。吾が国で素より節義を尚ぶのは即ち世家大族である。その傾覆敗亡に際しては、つねに俠士義人が出現し、身を挺して維持する。朋友の交りにも死を以て友に許す者がいる。況んや二百七十年も存続した王朝には統属の名義が存するではないか。故に余は清が亡びて殉節を肯んずる者がないのは、人々が尽く共和を解したからではなくて、実に人々が尽く澆薄になったからだとする。世道人心が今は古の如く確乎とせず、民心を打って一丸とする信条が蕩然として失はれ、気骨が皆無となったからだと断定する。清国を見殺した者も無骨無気の者、そして民国を見殺しにする者も亦無骨無気の者であろう。吾が中国立国の根本に関係すること極めて大なる故に、一死を以て泣いて世人に告げ、世人が先民の教義を以て迂談と為す勿れと愬へるのである。余の一死に対しては心を平静にして御覧ありたい。但だ余の死は、世人に類推を求めるものと、分別観を求めるものと二義がある。

余は幼よりして魯鈍で、文字に於て時には能く暢達するが、時には心機渋滞し、胸に万言あるも、忽ちその表現に苦しむ。無理強いして思を凝らしてもどうにもならず、心中に一物あつて吐露したくても、どうしても口に出て来ない。この旧病が復た起っては、話がすまないのに身は死ぬことを恐れている。そこで思索を暫らくやめて数日休息し、恢復を待つことにした。この時偶然に電灯会社の総会があって出席せねばならず、又従弟の陸芸史に株式のことで長文の手紙を書く必要を生じたり、又隣家のことで朗渓に相談するための長文の手紙を出さねばならぬことになり、心中いよいよ紛乱して旬日もウロウロしてしまった。時間は切迫するが、遺言の構想はまとまらず、肝腎のところが把握できないので、已むなく文法を顧みず、重複するのもそのままにして、平日心中に常に顧念する所を大雑把に記すことにした。

所謂類推観とは、上述した気骨無き者が清国を見殺しにし、亦民国をも見殺しにするだろうということである。これ

の手紙を書き、謝意を表すると共に事を論じた。又劉炳堂の招宴を受け、一日清談した。まるで暇のある人のように見えたであろうが、誰も余の心は知らないのだ）

書いたのは十四篇。以下は午の年に補完した。

甲寅の年、余は両義を標示した。一つは世人に類推観を求めたもの、一つは世人に分別観を求めたものである。当時は心思が渋滞していて、この二語の意義があまり明晰でなかった。又雑務紛乱のため、上の一半を書いただけで、下の一半は数年も放置して書いてなかった。今、篋底から取出し（積水潭の櫃に鍵をかけて置いた）続けて記そうと思う。数日ブラブラしていたが、構想も筆勢も前と同じように参らぬ。既に戊午九月、誠を竭して世人に敬告する四段がある。甲寅の後半篇もこの意の外にないから、四段を看て下されば判明することで、必ずしも更に記すことはないのである。ただ世人に分別観を求めるの一句は、略ぼ説明を加えて、始め有りて終り無しの無様を免れたい。

所謂分別観とは、確かに清に殉じて死ぬのであるが、賊を罵り軀を捐て沙場に骨を暴して（故国の邱墟を恋い仇を殲すを志と為し、千金の産を破って秦を椎するに非ず）一姓に忠を致し、専ら宗社を恢復するを以て事と為すものでは更々ない。余の清に対する心情は民国人の民国に対するそれと対を為す。専ら世道を以て主義とする。余の願は、世人が各自にその職場に忠を效し、心をして事上に在らしめるに在る。然る後に万事は有効となり国は断絶しない。故に漢・唐・宋・明を歴引し、我が身の清に在ることは歴史上否定す可からざる事を示したのである。将来の学理に於て如何なる模様に変り、如何なる説明が行はれるかは、余の関知せざる所である。（総じて空言誇張する勿れ、能く行って篤実なるを妙と為す）余はただ勉めて二十五史の結算をするだけである。余は既に世道の為に清に忠を致す。故に清に忠なるが即道に忠なる所以と云うのである。

余が清国に殉ずるのは単に清国に殉ずるに止まらずして、中国を内に含めての殉死である。

甲寅五月十四、五日、余の姪張佩珍が嫁いだ。母を亡くしていたので、余はその支度で数日は多忙を極めた。直後大病を患い、自宅で臥床数日に及び、心身共に疲労し、内心の焦燥はひどかった。引続いて鼐児の手紙が来て、多分陽暦の二十日頃に陝西を出発して北京に向うとあった。余は前回遺書を速かに完成しなかったことを悔いていたが、今や時期はいよいよ切迫した。理を充分に説き得ない苦悩は重くなるばかり、造物主は余がこの事を成すを欲しないのかとさえ思った。又再思して、この事が完成できず、半途に終っても、言は践まねばならぬと決心した。但だ世人が能く余の一半の心事を知ってくれるのも感激に値するが、未だ説き尽されぬ一半は、粗雑な口語体でも構はぬから世に留めたい。それも出来ないとなれば、これ亦命運の限りと思うしかない。この時の計算では、凱銘が家に到着してから二十日後とした。途中の日数を加えても月余にすぎぬ。この間まだ余は家事を整理し、死装束を点検し、弔客の来観に備えて客間の掛軸を安排し、余の先徳も知ってもらわねばならぬ。（掛軸の字や画に徴す可き先徳がある。故に弔者にこれを観て欲しかった）何処から手を着けて好いか判らない。最も苦しかったのは、自分独りで謀り、自分一人で動き、一人の助手も無いことである。（この時はまだ姜頴生、袁玨生に身後の事を頼む気持があった。余にはまだ他の心配事があった。世人は余を〃欲浄、理純〃の人としてはならぬ。実は私欲を無にすることが出来なかった。但だ大義は当に赴くべきを知るのみである）

余は細々とした雑用をかかえて炎天の塵土を奔走し、屢々鍵をなくして困った。積水潭には下僕が居らず、何も彼も自らやらねばならないので、苦しい限りであった。子供達が成長したら境遇が少しは好くなり、余のように苦労しないことを望まざるを得ない。

閏五月一日記す。以下は無駄話となるから先にこれだけ記して置く。（この前に袁玨生を観劇に誘い、王細綺に長文

実は吾が国はこれ以上紛擾を続けることに堪えられないことを前提として、官吏は暫らく人民の為に我慢し、少しでも人民の苦痛を分担し、人民の怒りを減らして、人民に革命の口実を与えてはならぬ。内乱が起らなければ、外国に隙を与えずにすむ。先民の基緒を墜さず、中原の大陸を沈淪させず、数年の辛棒を耐え忍び、将来国勢が真に強盛となるのを見られたら、それはみな今日官吏が些か艱苦を忍受した奇勲である。民を以て主と為すとは、官吏が体制を放棄し、達官の尊貴を貶し、窮民と飢寒を同じくして、国家の労役、賦税、刑罰を一概に敢て民に施さざることを謂うのではない。但だ朝野の上下の人々をして民窮し財尽くる大勢を審らかにし、今日の第一の要害は財政に在ることを知らしめ、各自がその憂勤惕厲の心を発し、俸給を低減するか、低減せぬまでも目前に暫らく少なく取って、国力の恢復した後に増額を考えるようにすることである。凡そ官を恃んで衣食を為す者は、各機関の冗員と濫費は、みな人民の衣食住の費用を吸収しての事だと知るべきであろう。これらが積み重なって官吏の俸給と費用になるのだから、官民の痛癢は互いに関はりがあることを念じ、衣服・車馬・妻妾・嬉遊の諸事を以て社会共同生活の資料を妨害し、大乱胚胎の源を作ってはならぬ。もし官僚たちがこのことを考え、力を勉めて為すなら（これは人人の心力が為し得ることだ）共和の量を急に満たし得なくとも、共和の目的とは相違しないし、開国時代には理として当然のことで、別に不思議のことではない。然るに官僚たちはただに旧い汚習に狃れているばかりでなく、以前よりもっとひどくなっている。数千年来未曾有の改革の大なる機会に遭遇しながら、これを尊重しようとせず、依然として利禄を営む心を存続し、勢に乗じて旧習を更新し汚穢を洗い清めんとする義心をもたない。倫常は破壊に任せ、これを償なうことを求めず、事理は不公平のままに任せて、再革命を計らない。数年来、到る処に流民失業の者は憔悴呻吟しているのに、これを眼前にして見ぬ振りをしている。国家の債務はいよいよ重くして、官吏の浪費はいよいよ大きい。ただただ官位の昇級のみに務め、大衆の事は後廻し、独り官の快楽のみは緩くす可からず、国家と人民は官の犠牲に供するを妨げず、その費やす所は建設の

これは須らくその通を観るべく、その滞を観るべきでない。余は人が余を君主の尊貴に制約されていると為すことを恐れる。もし君主を目して倫常の至重となすなら、その代価として民の安きも断じて軽んじてはならぬ。余も亦民を安んずる事は、尭舜も猶ほ病めるを知っている。事実としてそれは容易ではない。だが既に口に共和を称する以上、民を安んずる一面は強いて勉めてもやらねばなるまい。共和は無尽量であり心力の能く到る処は尽量である。苟しくも再び流血の惨禍を齎らす革命の来ることを阻む者としては、当然身を挺して民の為に苦しむことを惜しまざる可きである。欧陽公の謂う所の、其の生を求めて得ざれば、則ち死する者は我と与に恨み無しであり、孟子の謂う所の仁を行うに術有りである。姑（しば）らく目の既に見る所に就て之を為すは（牛を見て羊を見ず。この句は誤解してはならぬ。国家人民の大処より観るべく、もし大官が親私の者を世話するのは、識り合いの窮乏者を救う私徳ではあっても、今の世は民を前提として公徳の普及を重んじ、且前の私徳を重んずることとは区別すべきである。一家哭くと一路哭くとは、宜しく省察弁別すべく、藉口してはならぬ）みな心力の能くする所である。中国の民生の凋落は既に天下の共に聞く所であり、この時惟だ民の困窮を蘇生させ、民を以て主と為すに副うことを求めるのが、乱を止める要領である。本来共和の実体が無い国が共和を名乗ったからには、汗を戻すことが出来ないように、社会の共同生活を妨害するに忍びぬ心をしっかりと抱いて、やれるだけやり、共和の理と抵触しないことを求めるしかない。（先に張仲仁が彭翼仲の家で、余に何故官を辞したかと問うたので、余は公共観念を以てと答えたが、その意味を詳しく話さなかった。外国から厳酷の条件付の借金をし尽して、事無き無用の官を養っている。人民は債務よりする苦痛を分ち受け、その冤罪を晴らしようがない。而もこの国家を破産させた者共は、優雅な生活を送り、快楽を貪って無事に暮している。実に不公平の至りである。これが余の公共観念を云々して官を辞した所以である。仲仁は突然公共観念云々を聞いて或は社会共同の生活を妨害する事理に想い及ばなかったかも知れぬ）

桂林梁巨川先生殉節に臨み各友人に致せる書並に児女に遺せる書を附す ㈢

後学　景　嘉校録

趙智庵に貽る書

智庵先生鑒。

梁済は世事泯（ほろ）び乱れるのは、人人が権利を争い責任を尽さざるに由ると見る。人心を根本より猛省改革するに非ざれば、大量の外債を借り、最精の治法を採るも、筆舌を労費し、時間を曠（むな）しくし、一切は倶に空虚と成り、而も禍を齎すこと窮まり無く、心術を喪失し、全国を糜乱するに終る。銭財は揮い尽して功無く、人格は壊し尽して救う無く、必ずや亡国の禍を齎す。幸いにして亡びなくとも、存（なが）らえた軀は売られ、その精神は亡ぼされ、以て先聖昔賢がこの神州を保持した歴史に対して、責任を負えなくなるのは必然の勢である。

済は知識薄く力を量るに微である。始めより権利を争はず、世風を静観してきた（十余年の官場に在った事蹟を見て頂きたい）。今になって世人は余に対し、見ざる聞かざる如く何も感動していないことを知った。去年の辞職に当り上書して、力めて民生の困窮、官俸の虚しき浪費を陳べ、新国の開基に乗じ、公理を明かにし、人々の視聴を改めようと欲したが、我が公の賛同を得ず、民を先にし官を後にせんとの区々たる卑見が明かにされ得なかったのは、予想外のことであった。（公が余の辞職を挽留したのは、余が官場に於て不満で恨みを抱いたと考えられたからのようである。官

正しき務に用いるに非ずして、この痲痺せる現状を維持する為に過ぎない。小民の汗と脂を搾って、自分たちの粉飾に供し、亡国を促進する外債を募って不足を補ない、共和の原理と抵触するを顧みず、政治をして偽善に変え、全国人民の観念はいよいよ卑しくなるばかりである。

忠を清室に限定した故にこれを分別観と云う。甲寅の年の前半篇で、余は民の脂を搾って私慾を縦ままにすると、官僚を痛罵した。ところがこの四年来、政変は日に多く、党争は日に烈しく、禍害は日に重なり、応接に暇がない。甲寅の年に比べ、更に目に視るに忍びず、口に言うを忍びざるものがある。今日は民の脂を搾って、無用の多数の兵を養い、その害たるや甲寅の年に百倍する。兵の罪悪は勝げて数う可からず、凡そ商工界はみな兵を人類に非ざるもの異類と視て、敢て近寄らない。兵を統率する将軍は兵に教訓を与えず、その禍たる言うに忍びない。国人に迫って娼と為し盗と為す。又そうしなければ民は生存できないのである。そして一般官僚は猶ほも楽観し、自分の身を存する地があると思っている。まだまだ言いたいことがあるが、これで筆を擱く。

余は名士を信用する者ではないが、易石甫はまだしも能く余を知る。樊雲門は余を知らぬ。心を許さなかった故もあろうが、根本からして観方がちがうのである。

戊午年九月二十三日、日曜に積水潭に赴く予定である。

に能く清末の頽廃汚濁の国をして、光明俊偉の中華民国に一変させた。実に某総理の昼夜を措かず寝食を忘れて経営された賜であると評されるか。それとも、この国は本は仁徳礼義で最も著名であったが、民国に命が革まると、奢侈淫逸に慾を縦ままにする悪風が開かれ、この国の貞孝節廉にして実を崇び華を黜ける等の種々の国粋を、復た存留させないようにした。これは実に総統総理が偏邪を提唱して、悪風を防止するを知らなかった為であると評されるか。

かくて公の功罪はまことに明かにされる。済は竊かに百世以下の人をして、公が流血の中を奔走し、危機を挽回した苦心を思念せしめたいと願う。更に公を景仰するに、居心正大に術を択び、能く人民に進徳の基を提唱し、国家成立の本を培養し、僅かに才の見る可きのみならず、見るべき徳ありしことを以てするを望みたい。済は、公は当に道徳を以て国基を強固にすべきだと思う。それには二つの肝要な事がある。機会は失い易いから死に臨み厭はれることを承知で略言したい。

官僚の改革は機会を失い易い。清廷の末、人々は官の病弊と、これが廓清の術無きをつねに歎いた。忽ち革命が成功し、官吏全体が取消され、人々は戦慄した。この時の官吏は心中で共和国の官には自づと別の標準様式があろう。苟しくも食えさえすれば、どんな標準様式でも文句無く従はうと考えた。もし此の時一定の方針を示し、官であることと人間であることは一つの事であり、志節を敦く崇び、誠心から民の為にする者でなければ、功名の路に赴くを得ずとしたならば、これより官場は大いに変り、風気は挽回され、世界は一転して、まことに千古不朽の業となったであろう。所が各部の組織再建に際し、品誼節義を以て衡ることを優先せず、依然として追従阿諛によって、ただ私人をそれぞれの位置に据えることのみ計った。それで官僚たちは望外の喜びを感じ、千年の旧弊はそのまま安全に存置され、大局の危険に漠として関心せず、個人を主体とする私利の念が忽ち萠した。初め定めた月俸六十元は、衣食を支えるに足るものであるのに、臆面もなく加俸を議した。革命が求めた目的は達せられたか、人民負担の状況は如何、国家貸借の実情は

界の人々は更に奇妙な人物と論評していたのはまことは哀しい極みである。今日の世では、個人の為に計ることのみが許され、公共の為に計ることは許されていない。まこと哀しい限りである）今、済はこの七尺の軀の外には、何も犠牲に供するものはないのである。特に一切の愛情は放棄した。（詳しくは別竹辞花記を見られたい）生命も放棄した。（本来癸丑、甲寅の某日、天安門橋下に赴く等の字をも記す心意であったが、事は阻止され、そして趙総長も逝ったことだし、時も経って久しいので、言明した通り、戊午九月某日、積水潭中に赴き死すと記す。この書は本来大衆に対して言うもので、趙君が已に死んでまだこれを宣布できないのは、余の殉死が遅れたことを恨むのみである。天安門に巡警がいるのを屢々見て、救はれる惧れがあるから、場所を改めたが、実は心は猶ほ天安門下に在る。附注）

謹んで最後の緊要の言を申上げるから、心を虚しくして鑒察されんことを伏して乞う次第である。（済の心に言はんと欲する所は何で万語に止まろう。事迫り才短、時促がし神昏せるを以て、又児女の隙を窺うことを防ぐが故に、措辞草々たるのみ。語に修飾を欠き意よく通達しなければ、善く意の在る所を御酌み取り頂きたい）済が最初公に切望したのは、道徳を立国の大計とし、徒らに才能を事に応ずる具とする勿れということであった。（才能は社会に対処する手段にすぎぬ。道徳は人の心の中の天理・民彝・国家が成立する所以の根本に繫がる）壬子正月、兵変混乱の時、公が収拾に苦労され、民国に盡す所の者がまことに厚かったのは、応事の才であり、已に人々の共に見た所である。事定まった後、風俗を培養挽回することを全く闕如に付し、徳を尚ぶ心が見えなかった。モンテスキューは、民主国は道徳を元気と為すと言うている。公がこの最良の機会を失したのを、竊かに遺憾とした。

中国は炎黄の後裔である。五六千年を経て、元来善美を尽した国性をもっていることは、全世界に昭々としている。今、共和民国になったのは、一個の絶大の転機である。千百年後に民国開闢の初めを想像したと仮定せよ。如何に人格を敦くし崇め、如何に民風を整えたか。みな総統・総理が正大なる主張を抱き、鞠躬尽瘁して計画したからで、この故

を発動せしめる。（官吏は当に英風倹徳を自覚し、寤寐だに慙づるところ無ければ、国家の択術の精神に対してどの位プラスになるか知れない）これが漂揺する新造の民国の確信無き中の確信である。将来外侮に抵抗防禦し、財源を開き、国威を揚げるには、一事として民に頼らずしては成就しない。故にすべては民を前提とせねばならないのである。

惜しい哉、公の左右は皆真の見識が無いので、この意を公に告げないし、公も亦自らこの意をもっていないから、総統に告げることをしない。竟に千古の偉業を捨てて、俗衆の苟安にしたがうことになった。まことに歎息せざるを得ぬ。済は去年、増俸に対し断々乎として弁じた。財政減縮の問題は創業の艱難に伴なうものである以上、心と志の問題である。国家危急の秋に際して増俸すれば、これによって国勢は強化されると謂うのか。恐らくそうではあるまい。前から官吏は警報を聞けば逃げた。（済は親しくこの眼で見ている。甲午の七八月、京師の官吏は十中八九逃走した。或は先に家族を南京に送り帰した。庚子・辛亥には更にひどかった。去年庫倫が危険だとの報知があると、忽ち京師を逃げ出した者が三、四十人いた。これらの官は、太平なれば来り危険を聞けば逃走する。鄙しさ極まる連中で、これに増俸して養っても、国に何の益があろう）これによって志節はますます頽廃し、奢侈はますます甚しくなる。財源はいよいよ尽き、民の怨みはいよいよ深い。これらはみな確たる事実である。（財用尽きるは惜むに足らず。徒らに財を費して、而も事に於て稗益する無きは、人心に害がある。真に痛む可きは此のこと）且つ済は思うに、官僚の改革すべきは、何も増俸の一事ではない。凡そ民国に入ってからの官吏は、須らく先ず個人と公共を明かに分けて弁ぜねばならぬ。然る後に万事は始まる。専ら公心のみということは、固より普通の人に求めることは無理だが、専ら私心のみというのは、共和に改建した本旨に大いに背く。もし依然としてこれが変らぬとあれば、再び浩劫の来ることは必然である。今、民国が初めて開かれ、官吏は依然として個人主義を持し、公共観念は更にない。これは最高機関が道徳を提唱する責に任じないことに由来する。万事官規を以て束ねるのは、官僚に対して刻薄であるのではなく、正に官僚を愛

如何、官吏の働き振りは如何、官吏の俸給以外に更に急更に要なる事は如何と、平静に考えれば必ず阿然と自失したであろう。明公は卒伍に身を起した経験があれば、人民の艱難はよく判っているだろう。（唐の太宗は一羊を以て諸将士に食を分ち、楊行密は将士に賞賜するに、その帛は数尺に過ぎなかった。これは吝なるに非ず、困窮の際に然らざるを得なかったのである）この経営草昧の時は、身を傾けて物に及ぶの気概あるべく、古の生聚の教訓はみな危苦困難の中より行はれたのであって、富麗な綺羅の上に行はれたのではない。済は辞職の上書の中に、昇給を一年遅くすれば民治は一日早く行はれると記した。官俸は本来減給すべきではないが、経営草昧の時に当っては、一年忍苦する位は、艱難汝を貞にするで当然の事である。（臨時政府の過渡時代に一年辛棒する位大したことではない。開国の気節が昭かでなければ、後日の官規は思半ばにすぎよう。もし遜譲の詔書が下らずに、南軍が北都を直撃すれば、官僚の私産は存在し得ず、俸給は何処から出て来るか。これに準じて言えば、官たる者は罪を待って自ら居るべきであろう）

民事は本来緩くす可からず。しかも大乱初めて平定され、万事創業の際なれば、勤めて隠れた民の苦痛を求め、これを撫綏し和睦のため微細に及んで計画すべきである。仮に十部の官を月俸六十元と暫定すれば、官は凍餒を免かれ毎月八、九万元は捻出できよう。この八、九万元で極く手近の教育と小規模の工業を興し、日傾くも慌てざる気持で創業の苦労を厭はず、困苦流離の庶民を収め、厚生正徳の本源を研究すべきであった。（これは村嫗の言に似て、時流に迎合する輩の笑う所であろうが、直接民と提携しての仕事であると思えば、馬鹿げた沙汰とは言えまい）人民はこれらの行動に対し感奮興起するだろう。この手近の教育でも遂には民を教えるに足り、零細な小規模工業でも遂には民を養うに足ることになる。思うにこのような行動によって、国家は教育を尊重し、官吏は自私を放棄し、潔白な心で庶民の幸福を図れば、それこそ共和国の民を以て主体と為す本義に合致しよう。この浅近微小の教育を一つの種子となし土中に納めてその萠芽を望み、国民に官たる者の苦衷をひとしく示し、艱難を共に克服する心を鼓舞し、力を協せて進取する志

の何物かを知らなかった官民に博愛の心をもたせ、自治の要図たるを知らなかった官民に、修身の術を教える（上車・街灯の修理整頓を自治と為す者がいる。身を謹しみ用を節し、勉めて善を為すが自治と考える者がいる。この両者は一方に偏してはならぬ。共和が新しく宣布されて、人民が自由を誤解することを恐れる。人民に対し、遵法して違う無く、自治を先にして後に自由があることを告げるのが、とくに緊要である）貪となり盗となるのは、奢侈に由来するから、規正するに寛に過ぎてはならぬ。旧芸旧工は競争に堪えないから、新しい措置を提唱して実行せねばならぬ。かかる事例は勝げて言うべからずである。要はみな宜しくこの時機に乗じて、大いに伸ばす可きは伸ばし、警しむ可きは警しめ、国民の心理を煥起することである。新しい政治の軌道を務めて通俗の言葉で明かにし、共和の準則を周知させるために懇々と諭し、国民をして速かに安心させると共に、危機を自覚させ正図を思はせる。所謂昭然として瞭を発するごとしとは、開国に当って不可欠の事である。

済は常に中下級の社会の人と往来しているが、彼らは新しい国家の告諭を聞いて適従する所を知りたいと切望している。開国以来、始め秩序の維持云々を聞いただけで、その後は匪賊の取締も聞かず、又、兵変以後は元気が大いに傷つき、弥縫して補益せざるを得ないのに、暫時開放したので、それより人心は放縦に傾き、悪に従うこと崩るる如く、竟に一瀉千里の勢を呈した。これに加えて指導者たる大官名士が鋭意新説を提唱し、賭博女衒共の種々の荒んだ嬉遊が一時を風靡し、人民は是非を判別する常識を無くし、共和の国は但だ人生行楽のみ、検束の準繩は須いずと信ずるに至った。かくて国を挙げて狂するごとく、小人は復た忌憚する無く、中人は岐路に彷徨し、確固たる信念をもつ民は剰す所幾ばくも無い。且つはこの彷徨懐疑に由り、新しい道徳の信仰研求は、頓に阻害された。現今の人民の現状によれば、旧道徳は厭棄されたが、新道徳は未だ明かにされず、法紀は蕩然と無視され、その趨勢は言うに忍びざる者がある。その禍の本を推すに、公が人民に対して放任主義を取り、干渉主義を取らなかったことに由来する。公は現状維持を主張

する所以であり、二十世紀社会の発明した公理を立て、惨酷な禍に遭うことを免れようと期するからである。公が全般の計画を立てるならば、背骨をシャンと起し、官吏の不興を買う勇気即ち開国の気魄をもたねばならぬ。それは残酷の行為ではない。民国創建以来、始めより未だ志節操持を以て同僚に示すことをやったことはない。（甚しきは組織が未だ発表されない前に、某員外は自分から留任と家族の見舞の為の帰宅を願い出て、その上旅費の支給を要求した。公は優しく慰留した。惻隠の心は厚いと云はれるが、その卑屈な気風を何とする）これが済の謂う所の、明公は道徳を以て国家を鞏固にすべきであったのに、その機会を失した一である。

も一つは、人民を戒しめ自覚させる機会を失したことである。新しい国が創建された当初は、事勢に制約されて一朝一夕で処置できない財政・外交などの大問題がある。これは為政当局者を勘弁してやらねばならぬ。事の権が手中に在り、為す可くして為さないこと、例えば内地の人民は旧習に泥んで卑屈となり振起しようとしない。これを放置するのは政府の択術の怠りと責められねばならぬ。一国をして勃興せしめるには、必ず先ず一国の人の在り方を反省し、対内的には撲誠勤倹の徳こそが強を致し富を致す根本であり、対外的には貞固整斎の徳こそが無形無声の最大の武器である。これらは日常家居の行事の上に顕かに自づと露呈されることは深く考えるまでもない。故に人がどのような人になっているかで、国も亦それに相応する国になる。もし衆人が心術品行を講ぜずして、良好な国家が成立することは絶無である。中国は久しく教化を喪失し、士農工商は虚偽譎詐百出し、民徳は澆薄、民生は窮迫、私曲奸欺でなくては生存できない状勢になっている。これは剥極まって当に復すべく（訳注・易経では剥の卦の次に復即ち一陽来復の卦が来る）窮極まって返るを思う時である。幸運にも革命が成功したのは、中国史上曠古の奇蹟であり、この更始の際に当り、人心戦慄しているのは、最も改新の功を収め易い時機である。類せば旧汚を洗滌し、新知識を増し、職業に精勤して生計を培養し、迷夢を醒まして時艱を潔くし、頑愚乖戻の風を懲らし、游惰浮浪の習を禁戒する等の如きである。従来公徳

心も枯れ、筆を執っても思うに任せぬ。それに死期が迫り、せねばならぬ事はまだ多い。琴斎に致す書も果して完成するかどうか実はまだ定まらぬ。問うて下さい。この公に致す書は支離滅裂だが已に二月も書き続けて、やっとここまで来た。今日は陰暦四月八日、雨が降っている。陽暦の五月十三日である）先日見た総統の命令に、前清の末、賭博の禁は尚ほ厳し、我が民国豈に宜しく解弛すべけんや云々とあった。思うに禁賭の一事に限らない。前清の政治はすべて虚偽であったが、一切の不義の行為に対しては、一言禁止すれば直ちに斂まり蔵された。斂蔵というのも虚偽を免れないが、それでも不義の行為を為せば、衆口を懼れ、国の紀律を犯すことと知っていた。だから急速に斂蔵した。これは心中に尚ほ是非があり、欠けていたのは改悔の実力であった。もし徒らに放任するなら、公然と忌む所無くなろう。昔不肖と見たものが今は或は当然とされ、黒白は形を易えられないが、善悪は位を易えられ、凡そ一切の正当ならざる営業・範囲を逸する挙動、節制無き嬉游がみな民の為すに任せられ、冥行して途を索め、循守する軌道は無いのである。貧者姦者盗賊は日々に暗中に胚胎し、明々に不測の禍が醸されている。而もこれを文明日に進むというのは、まことに天下最も痛心の事ではないか。

抑も済が治理の難を知ってこの事を喋々するのは、衰俗を振起する功を驟（にわ）かに致せと公を責めるのではない。公が人民を整斉せざるを以て政策とするのを怪しむのである。思うに理を措くに完備する能はず、時と地に逼られていることは、公の為に諒解しよう。だが進行に方針を示さず、時と地に逼られるとの口実で公を恕することは出来ない。（行政の各官は深く役所に籠居して、宴遊の交際は務めるが街路の風日の中に民と交渉することは稀である。開国の振興の気象に似ないのみか、清の光緒三十二年のまじめな仕事振りに及ばない。これは外的条件が困難で行ない得ないのではなく、一に公の惕励して衆を統率する力の不足に由る）今、役所が人民に対し樸誠勤倹を以て指導しないのは、実に公が民徳風俗を前提とせざるが為である。属官の行政は固より心を尽さぬが、公の授けられた目的に専心しなかったこと

した。固より大乱の後、市場は凋落したので、禁を弛める他に恢復は難しかったと云えよう。これはまことに万已むを得ざる苦衷である。しかしこれは須らく分別して言うべきである。国本が動揺し一呼吸の間に危亡存するに当っては、暫時対処して紛乱を招かぬ用心は宜しい。だが安撫すること百日に及び、人心が已に定まり、人人が戒懼し且は新しい政治を目を拭って観ようとした時、宜しく本を正し源を清めるべきであった。先づは禁革すべき者、勉励すべき者を取上げ、凡そ人類の生活と社会に於て、日用に当然具えているべき知識を明白に掲げ示し、法として守らせるべきであった。これを教育の事で別の一部分であるとするのは、巧吏の責を逃れる言であって、明公は宜しくそうすべきでなかった。済の謂う人民を自覚させ警しめるのは、固より量的に見ると巡査の庶民に対する仕事が大部分である。だが上流社会の乱脈は巡査の能く制止する所ではない。庶民の愚昧ならば警察署や交番で始末できる。巡査の責任は秩序の維持、治安の保衛である。所謂秩序や治安とは、心術行為に由て生じ、人身の外に求められるものではない。且つ内務部の任務の範囲は宏大で、実に従前の五城の巡視・歩兵統領・各種機関の一切に取って代り、その職権は包括せざる所は無い。今や凡ゆる事がみな法律が未だ定まらず、適宜変通して処置している。民の非を為すを禁ずることのみ、権限に拘泥するのは何故か。国民の能力が未だ養成されない時、干渉の名を避けるにしても、保育の実を行うべきである。竊盗捕獲のみが治安維持の仕事ではあるまい。人民の放僻邪侈を真面目に取締らずして、何で警察行政を国家内治の最も重要の大政とされよう。故に思うに教育部は内務部と双方並進すればよい。内務部に教育に対する責任は無いというのは不可ない。況んや教育部が教育の実施普及を欲するなら、警察の厳しい力を借らねば不可能である。警察にとって庶民は網にかけようとすれば何時でも網にかけられる存在である。人民と政府が耳目で接触する最初の階層である故に、国家の教育をして人民と関係つけるには、警察が鍵になる。済は親しくこの眼で見ている。（警察巡査の腐敗弛緩は言うを待たぬ。この具体的な改革案は別に王琴君に致した一書に詳しいから、公が索めて一覧あり度い。だが済は才拙なく

済は新しい学問政治は一も知る所がない。アメリカは国を開いた時、清教徒を重んじた、日本は変法の時、孔孟陽明程朱の学を尊重した等の事を聞き及んでいる。済が公に切望する道徳を以て立国の基と為せと云う所は、即ちこの類である。思うに必ず先に能く勃興する人物があって、然る後に能く勃興する国がある。所謂民と与に更始するには、艱難辛苦の鍛錬を経なければ、数百年の安きを獲得できないのである。物質文明の上塗りの上に、覇者の驩虞の業を望んでも、到底あり得ぬばかりでなく、且つ禍を招くのみである。古の英雄豪覇は戦陣の間に家を起すに、覇者の権謀、種々の無頼を雑（まじ）えても、身に国権を執るに及べば、改めて儒を尊敬して身を修め、道徳を尚ぶに至るのは、決して詐はりではないと聞き及ぶ。蓋し人生社会の経験を充分に積むと、人の人為る所以、国の国為る所以は、天理民彝・五常八徳の諸大事を断じて離れ得ざることを誠に知るからである。故に一旦身を高所に置き、一国風化の原を手にすると、頓にその雑覇権謀を改め、天良を激発して、根本より着想せざるを得なくなるのである。今、公は身を高所に置き、手には風俗の原を握っている。然るに社会に対処するに、官と商に迎合するだけを事とし、抜本塞源の計に於ては身を挺して為し得ない。公が千載一遇の好機に遇いながら、何で坐してかくも誤を犯すのか。公の輔佐も亦遠大の計を献ぜずにいる。これが済の謂う、公は当に道徳を以て国基を鞏固すべくして、機会を失した者の一つである。

臨時の時機は既に誤まったけれども、正式の時機は方に来りつつある。誠に能く自ら猛省し、つまらぬ勢力争いをやめ、誠心を披瀝して公共に奉ずる旨を、臨時の期間内には実行する遑はなかったが、正式にこれから始めると宣布して、選別す可き官吏は選別し、開導す可き人民は開導し、以前のもろもろは昨日死んだものと心得、以後のもろもろは今日より生まれるものと心得ることが、民国の亡びざる希望の最後の一線である。済はこの言を以て公に告げるが、公にのみ告げるのではない。軀を捐てて世を諷する志は、公共に対し発するのであって、凡そ公と地位を同じくする者は、みな同様の鑒察を自らに加えられんことを望む次第である。

は、責を辞することはできぬ。尤も怪しむ可きは、一方で節制謹度に重きを置かず、一方で娯楽嬉遊を勧めたことである。盛り場の時間制限を弛くし、芝居小屋の日数を制限しない等（芝居小屋は一利一害である。善用すれば好き教育の場となり、悪用すればその害もはげしい。この事は王琴斎への書中に注意したが、心忙しく時が足らない余のこと故詳細に記し得なかった）公の意を推量するに、西洋文明は吾も亦採るべく効（なら）うべきであるとするようである。だが西人が贅沢するのは余財であり、吾人が浪費するのは、母財である。西洋は工場が林立し、人には財を生む路がある故、嬉游も金融を流通できる。仮に吾が国が芝居小屋等を多く設け、同時に亦工場等を多く設け、人に財を生ずる途を与へるなら、身を養うこともできよう。もし娯楽の設備だけあって、正業を営むことがなければ、母財は涸渇し、気持も自づから閑という訳に参るまい。事の成行で盗を為さざれば娼と為るしかなくなる。吾が国民の勤倹向上の心は本来極めて薄弱である。故に去年擾乱を治めた際、権宜開放し窮民を納めて内より制御することは、済も亦当を得た処置とした。しかしこの弛緩を長ずるのは、治国の正道に乖（そむ）く。且つ吾が国は貧弱衰微している。将来は実業経営に頼って、漸次に富を成さねばならぬ。天下は何事によらず、賢貞誠篤にして志を専一に励む人が為すに非ざれば、能く効果を収むることはできない。西人は工芸商業等の事、みな学問に由来すると謂う。今、吾が開国の初、先に人をして奢侈昏荒の域に慾を縦ままにさせたら、一旦大いに工芸商業を興さうとしても、一体何処に堅貞誠篤にして志を専一に励む人を求め、相与（とも）にまじめに事を図ろうぞ。人民は国家を構成する要素である。創業の初めに、徳行道義を以て正大の模範を樹立せず、奢麗紛華を以て荘厳と為すのは、根本の錯誤である。遡って元年以来、惟（ひと）り総統の倹を教え廉を教える令より九月の間に出された八徳の宣言は、詳明にして懇切であったが、ただ抽象的文句に止まって、実践力行の具体的方法に及んでいない。この外に民を教導し世を覚めさせる事は、寂として聞かない。行政の各官は、但だ外観上から督促する者はあっても、行為の上で匡正する者はいない。これは長官が民徳を重視しない故である。

ら、万事的外れである。周囲の郷村では盗賊が横行している。法令は年一年と寛くなり、往年は殺人強盗犯は必ず極刑だったが、昨今の強盗殺人犯は刑務所に数ケ月もいると、運動すれば出られる。従って奸暴の者は[illegible]も新法を[illegible]大いに喜び、良懦の民は保障を失って、遂には彼らも非を為すようになった。彼らは[illegible]とし、言う、こんな世、[illegible]心なんか不要だ。面子なんかに構っていられないと。こうして明盗暗娼、何でもやってのける。このようなことは、数年前は稀にしかなく、十年前には絶無だった。京西の賊は大半は小賊が強盗に変ったのであり、京東の賊は貧より盗をなした者であるが、積年の巨賊回回などの類もいる。尤も苦痛なのは、事件が起っても官に報告できないことである。報告すれば必ず銭を使はせられる。郷民は本当に現金に不足しているのだ。無理して銭を使っても報告しないと同様、何の効果もないことが屡々である。だから報告しない。報告しても徒労である。官は政令が常に変るから、事を好い加減にして置く癖がつき、又多くの捕役を養う力もないので、民間に報告させても犯人を捕える能力がない。だから目を瞑って手を出さないのである。武清村は三百余戸あるが、盗みに入られた者は二百余戸に達している。報告者は絶えて少ない。大王村に杜姓なる者がいた。賊があったと聞き追いかけて賊に撃たれ、腹部に弾が中って翌日死んだが、竟に警察に報告がなかった。死んでも報告しないことは屡々聞くことである。京南は法令のあまりにも寛なるに因って、賭博が盛んである。知事はこれを知らず、武官は知っている。警察も知っている。衡水県では阿片窟が多く、随処に煙毒を満足できる。人人は新法の罪が軽いと知って、阿片の禍を忌む志がない。刻下淫風穢徳はますます徒長中で、日に盛んになるばかりである。大乱能く至らずにいようか。以上は数事を挙げたに過ないが、すべて人が痛心して訝（いぶ）かり怪しんでいる民国の現象である。これを対面して告げても、各部の官は決して実地踏査をしないで、憲法を高談し、吾が民は安居楽業しているとして、但だ米仏の条文を移植して法とするばかりである。この結果、国中が陰と成るのは指顧の間の事である。哀しい哉。吾が家の墓は房山の境村中の破屋に在る。壬子の冬、四回も荒らされた。往年にはなかったことだ

尚は公に真剣に決意を宣言して、当世の同僚に苦衷を同じくせしめられんことを求める。もし諸公が一意新しきに暴走し、済の言う所が欧米の法文に合はぬと深く叱責を加えるなら、済も亦自ら浅識を知っているから弁解の辞は無い。然しながら生命を惜しまず、世人の感銘を求めるには、その中に必ず最も苦しむ心がある。或は大害に於て見る所が些かある筈である。（この数句を構想するに七、八日を費やしたが始終うまく表現できなかった。或る時は芝居小屋で考え、或る時は枕上で思った。ベッドから下りると又忘れてしまう。諸事が我が心を擾すのである。このことを世人はよく察して欲しい）是非とも諸公は暫らく嬉遊を止め（これは全国の達官と名士に申上げるのである）平静な気持で研究して頂きたい。済の鄙論は浅薄で迂遠かも知らないが、一得の愚があるかどうか、真剣に考えて下さいと伏して御願いする。済の交はる人は、都市の人から田舎の人に至るまで、凡そ四十歳以上の者は口を揃えてみな言うのに、この儘で行けば必ず大きな禍がやってくる。太平の幸福を去ってこの年月何でこうなったのか。官吏は汚職に明け暮れ、議員は浅薄無識、人民は詐偽とコソ泥、淫楽日に盛んで、愁惨な状況は日に深く、全く形容の言葉も無い。一言にして蔽へば大乱は必至のみと。そこで済は転じてこれを官吏議員の諸公に詢うと、彼らはみな慶祝謳歌し、文明の神聖を誇るのである。済が交はる者はみな庸愚無識の人で、政界官界に幅をきかしている者は、深く事情に通じているのだ。まこと怪訝に堪えない。（茲に再度浅薄の言を申上げる。一般の人曰く、京師は弾丸の地、数十万の窮民あり。営む可き業無く、洋車を曳き、苦力の事に従い、半ば飽くに術無き人民は活きながらの地獄にいると同様だと。官吏議員は笑ってこれを視て、視ざるも同様である。馬車の中で嬉笑し、西洋料理屋で豪遊するのは当然の事としている。人民の生活程度の困難さに全く関心なく、ただ多く俸給を得て己れを肥すことのみを求めている。又、警察は諸事に対し忽ち厳しく忽ち緩やかで、まるで阿呆のようだ。時には人民を脅して銭を取る。巡査を指導する立場の役人は街の住民の利害などまじめに察してやることもない。だから警察は公事をなおざりにし、脅し欺むきやり度い放題である。官に真心がないか

対しては何の提唱発揮もされなかった。これは公が余の革命の時機を痛惜し世局の為に痛心していることを知らないからである。済は無学無識の身を以て去る歳に吸吸として上書した。一般の訾議笑罵の人から観れば、これらは田舎者の馬鹿げた沙汰で何で止めないのかと思うだろう。しかも済は世風を万が一にも挽回しようと欲したのである。人は浅陋と譏ろうが敢てこれを言うのは、この世道沈淪するに当って、僅かに一官を犠牲にするだけでは、社会に対するに足らず、自ら才力不足で事を弁ずるに足らぬことを仔細に知る故に、惟だ軀を捐てて志を明かにし、当局者に聴いて貰い、且つは当世の心を同じくする者を喚起したいと念願するからである。この苦衷を憐察し、相与に世事を挽回したいものである。余の心は野人の心をもつ赤子の如く、余の言は布帛に包む菽粟の如きものに過ぎぬ。但だ学力天資に制約され、又匆忙病苦に困しんで（足が腫れて苦しく時に転倒する。百事紛擾して屢々筆を擱かねばならぬ。然し去年已に諸を鬼神に質し、之を祖宗の霊に告げ、人の世のいかなる堪へ難き苦しみを受けても、終に必ずこの一事だけはやり遂げる所存である）義を陳ぶるも高きに至らず、言を出すも暢達を欠くのは、実に致方のないことである。且つ済の事蹟・前後の始末も亦死に臨んで、重複申述べざるを得ない。辛亥の冬、曾て二書を差上げ、一は専管の事務無き故に排賠し得ざる旨を述べ、その書中に教養二局のことに及び、犯人三四百名、貧民百数十名に対する済の弁法を述べた。一は時事の積弊とこれが廓清について略言した。この時国事は多忙を極めたので、或は細かに披閲を蒙らなかったかも知れぬ。壬子陰暦正月兵変の翌日、街頭の状況を急ぎ報告し、亦佞を遠ざけ賢に親しむ意を略言した。二月、東安市場に芝居小屋を作り女優の出演を許可することを聞き、上書して、この兵変の騒動が収まった時に乗じて、直ちに事態に処する意義を判り易く説明すれば必ず深く人心に入るものがある。又人民をして知識をもたせることを先にし、嬉遊の事は後にするのが、治安の上で裨益すること大であると述べた。余の意図する所は、大号令を発して、民を撲誠勤倹に導いき、人人をして新しい国家の政令の光明正大なることを暁らしめることであった。陽暦六月、内務部は組織を新たにし、

である。来たのは四、五人で、門を入ると食物を要求し、理由をきくと不作の上に物価が高く、働く仕事もなく、こんな世の中では良心も面子もあるものかと言うのであった。これは余が確認した事実である。尨大な民国は多くの官吏をかかえ、窮民が租税と外債を負担して彼らを養っている。地方官は書類の作成と処理で民に手が廻らず、中央の官吏は雲の上にいて宴会を楽しみ、民の利害に就て実地調査も研究もしない。民を以て主体と為すとの説は一体何処に行ったのか。新しい国家を建立したものの、依然として官吏は装飾品である。今にして思はざれば何時思うのか。）何で人民の心中焦眉の急と目することが、官吏の心中では安閒極まるという相反したことになるのか。民間の真の実状は、公や総理総長が民を去ること遙かで訪知する暇がないのみならず、行政の各官も高きに位置して隔絶し知っていない。一たび下級社会に入って検討したら必ず一驚するだろう。口に平民政治を言いながら、平民の切実な姿を把握していないから、地方の直接の施設、まじめな計画は手を下しようがないのである。

　済は云う、政府の外交・財政の大問題は急に解決が難しいことは納得できる。だが権力を手にしながら、為す可きを為さないのは責められねばならぬ。今日では難問難事を行はないだけでなく、片言で決せられる事でさえ、行政官はまじめに行はない。これは誰の咎であるか。各部の長官は部下に対してまことに親切である。（親切は人情として当然のことだが、直諒相規し、道義を以て相勉めることも亦人を愛する意味をもつ。生計の上ばかりではない。生計上のこととすれば、社会共同生活の資料は、誰が面倒を見るのか。況んや今日の官僚の浪費は、生計の為ではあるまい。）儒将の驕兵を撫するが如く、貧民の血と汗になる金銭を惜しまずして、その私利に供し、その由来する労力を問はない。一たび官と為れば、その待遇は百姓と天地の差があり、民国は民を以て主体と為すの義は、相率いて忘れてしまう。革命以後の気象は革命以前と何も異なるなきのみか、更に暗黒を増した。これが済の安らかならざる所以である。去年再三職を辞したが、公は余の意を権利分配の不平に因るとされ、時流の競争と同視された。そして済が何度も陳べた道理に

が苟しくも清閑な官になりたければ、お世辞を使って迎合し安楽の地位を固めるべきである。そうすれば貧乏と借金から両面から免れ得よう。だがこのような個人主義は革命開国の時、世道を挽回する上にあるべからざることで、吾々の心事と実に違うから、敢て従はなかった。教養局で教育を委任されても、事に任じて数ケ月に過ぎなかったから、待っている死期を今更動かすことはできない。聞けば清の慶邸では上書に対し放置して看なかったという。心血を注いで苦心惨憺年を経て、やっと書き上げた上書も、作者の苦心を何ら察せず、書中に言う正義を全く理解しようとしなかったからである。願はくは公よ、かかる亡国の旧習を踏み、傲慢軽忽の心で、言を進むる志士に背く勿れ。宜しく懇篤に芻蕘に請うて虚心に採択し、時艱を補はんことを願う。もし同意されなかったら、批す可きものには批示したらよい。一年六月、原文を再校して語意未だ大いに明かならずと思い、この一段を加えた）

九月、増俸のことを聞いた。家計の困窮からすれば結構な話である。だが身は鼎革の時代に遭逢し、一国が亡びて一国が開かれるというこの時に、公理を彰明せずして、何の時を待つのか。古今を論ぜず、如何なる国でもその建国に当り共甘同苦を以て人心を励まさざる者があろうか。如何なる国でも立国に当り、民命を重惜するを根本としない者があろうか。況んや中国は民窮し財尽き、社会共同生活の資料としては、この人数があるだけである。既にして共和に改建したと言いながら、眼前に見るのは億万の窮民のみ。教養未だ立たず、実業未だ興らざるに、先に珍貴得難き金銭を以て無用の官員の娯楽に供する。実に民を以て主体と為すの義と、顕かに違背する。濟の最初の辞表に云う。この機会に乗じ徹底して澄清せよと。又云う、今日窮民を安定する計は、当に官禄に較べるを先と為すべしと。又云う、個人は一分を増せば、社会は一分を減らされると。又云う、中国の政体が更改されてより、復た攀檻埋輪（後漢書の故事、身を挺しての忠諫をいう）の故事無し。恃む所は、罪悪を糾縄するは惟だ此の方寸の間に在る。自己を欺かず苟しくもせず、真に民生を念と為し、国恥を心と為し、先に一己の安きを求むる勿きを以てせよと。又云う、月に高給を領し、身また

余も招かれたので、五千余字の上書を差上げ、社会教育の実行を請うた。犯人教育、警察官教育・住民教育の三項に分け、末段に曰く、総長が苟しくも事の為に人を択ぶ主旨をしっかりと抱き、三度の食事に困難な貧窮の人民を憐れむなら、済に人に道を勧むる講演を命じて欲しい。済も亦俸給によって衣食するからには、聊か自らその力に食んで、木鐸を執り路に徇（とな）うる労に服し、官禄の枉受を少しでも免れたい。一家哭き一路哭くの比較を深く念じて云々（微意を開陳した上書はもう一度読んで欲しい）。蓋し済は世界の平和は世道人心より挽救されねばならぬと信じている。政府は大処高所より手を下さず、ただ無駄の饒舌に自ら酔っている。犯人であれ、警察官であれ、住民であれ、これを教導して少数の良心ある人を種子として、下級社会に散布し、一木を銜んで東海を塡めようとするのが我が思いである。堯舜の言に、克く小物に勤むとある。孔子は少くして賤しく鄙事に多能であった。反復思索した結果、浅近平実の処より手を下すしかないのである。然るに大官政客はみな漠然と、空理を以て実功を見ようと欲している。これは百思するもその解を得ざるもの。済は七月初に上書した。教養局総弁の李徳銓君は病気欠勤していた。十月中に済は教養局総弁から犯人教導の事を委せられなくなった。（済にこの事を委せてくれてもその任に居ることはできなかった。間もなく死ぬことは心の中に決定していたからである。遅々として直ちに死ねなかったのは、いろいろの事に牽制されたのと、国会の開かれるのを待ったからである）余の上書は或は査閲されなかったのか、閲見されたが教育の説が同意を得なかったのか、いずれにせよ余の述べた所は採択されなかった。されば公の慰留も亦官場の形式でしかなかったのである。（余の七月の上書は、諄諄と犯人・警官・住民の教育の必要を言うている。公に採択の意があれば、教養局の李総弁が欠勤していても、十月中に済の第二回目の辞表提出の際、済に委任して教養局に席を与え、如何に事を弁ずるかを観るべきであったろう。公は余を慰留する旨を示しながら、済の述べる所は忘れていた。要するに公は済を部内に留めて、十日に九日は仕事のない官と為すだけのことである。部官は俸給があって閑な職である。済の身を計れば結構な話である。済

折衷すべきである）真実を考察して、専ら迎合虚飾の言を聴き、悪を奨めて自覚せざる状態に陥らないように望む。さすれば独り濟の幸のみならず亦世事の幸である。

百里を行くに九十里を以てするは、途半ばにして止まることである。氷霜六十年、温飽何ぞ換うるに足らんや。（郭春楡・袁珏生は皆鄙人の職を辞して家居するのは、或は詩作等の事で自ら遣ることかと疑って、濟の心境と学は清閑の幸福を享けるに適せぬことを知っていない。憂心灼けるが如く、どうして風雅に耽る暇があろう。常に樊易諸公に、身を挺して世を救い、憂傷を空言する勿れと諷したく思っていた。今の世は、徒らに文を以ては何もできない。文人の多くの考は事実と相違しているのである。）

もう一つ小事だが、呉士湘兄から余に代って徐太保に転告して欲しい。濟は工商部章京から巡警部に転任したのであるが、私宅で一度も面晤したことがないのは、旧時の官場には守るべき規律があったからである。鞠老は新知識を有するのみでなく、曽っては旧い学業を修めた人でもあるから、余の志を能く解してくれるであろう。濟が鞠老に面謁しなかったのは、別に不思議はない。濟は先に死ぬから、鞠老が健在の日に意の在る所を証明することはできない。若し鞠老が甲辰、丙午の年に見聞した梁濟を想起して下さるなら、濟の言う所は歴然として昨日の如く思はれるだろう。且つは今後濟の如き迂拙の者がいたならば、願はくは少しく意を加えられたい。これ亦士風の幸である。

註一　趙秉鈞、字は智庵、袁世凱の腹心である。民国元年、袁世凱が臨時大総統になった時、趙は内政部総長に任じ後に内閣総理に任じた。北洋政府の要人で、宋教仁暗殺の主謀者である。民国五年病死した。

巨川先生は清末に、初め工商部章京に任じ、後に徐世昌が巡警部教養局総弁に転任させた。民国元年、巨川先生は趙秉鈞から徴されて内政部弁事に移り、間もなく辞職した。在職中、屢々上書して意見を述べたが、趙はすべて採納しなかった。（稿本は壬辛雑稿にある）趙智庵に致す書は甲寅即ち民国三年五月に成り、殉死後に差出す心意であった。そ

秩に居るは、人情の楽しむ所、何ぞ独り然らざらん。即ち俗に随い聊か糊口に資するも、亦誰か復た来りて詰責せんや。然れども相安んじて思はざれば、誰か隗と為って始めん。孟子云う、欲する所生より甚しき者有りと。今、憂うる所一身の貧困より甚しき者有り。大局を以て前提と為さざるを得ず。而して自己の身家を以て第二と為すと。又云う、湘郷の曽子は常に言う、風気は一二人の心に起りて、散じて風声と為り、蒸して習尚と為れば、千万人も能く禦ぐ莫きに極まる云々と。又第二、三、四回の辞表も、ひとしくこの意を離れていない。凡そ幾度かの上書で、この苦衷を察せられんことを希望せざることは無かった。原書はみな存在しているからよく御覧頂きたい。公の属下に居ることになってから、久しく人に如かず、長官に未だ嘗て賞識信用されず、同僚は殆んど見ざる如く聞かざる如くであった。然しながら辞表が慰留された以上、致方もない。そこで上書の後には、再び前後の始末を述べ、要点をまとめて開陳し、公に研究されんことを欲した。命を捨て軀を捐てるのは、実に世道民生の為を思えばのことである。平日の常識信用の外に、汲々として聞える無き者が、猶ほ身命を犠牲にして公理を主張する人であることを知ったら、或は憐憫よりして別な考方なり観方をするだろう。さすれば公は高位高官で一国風化の主である。何卒道徳を以て立国の基と為す鄙見を採用されたい。一念の主張に全国が共鳴し、世道民生に於て、毫末の裨益が齎らされれば、濟は九泉の下に在って、勉々と吾が国の先聖昔賢に告げ得よう。この感激は実に官禄の優待を受ける幸に十倍しよう。この書面を認め始めてから既に百日を越えたが、完成できないのが苦しい。昼夜苦思したが乱雑紛然としている。始終をよく御覧になって一切を洞察されんことを、伏して御願いする。梁濟謹んで奉る。癸丑年五月三日。端午の三日前。

死ぬ理由は一事に止まらぬ。公に対しての言は、則ち世道と民生である。人は誰も世道民生の憂う可きを知る。そして死を惜まず以て人に悟りを求めるに至て、或は真に急迫の勢にあることを見よう。公は曽ては道を学んだことのある人である。(秦劭衡先生の如き人もまだいる。その汲古の功は深いが、今時の民事に於ては未だ徹していない。宜しく

能の不足は勿論のこと）ので、世人が余の言を採るを望むより、死によって真の心を現はすに如かずと思うようになった。故に速かに昔日の志を実践し、世人が醒悟し各自が職とする所に忠を尽し国を救うことを求める。弟が連年書き記したもの六、七冊は単なる雑記で一書を成していないが、五兄に託して仔細に検閲し、余に代って主張して頂きたい。弟には著作の才はない。この六、七冊は断翰零墨で、その中に卑見が三、四割あり、他人の摘録、或は書中の言及び新聞記事の切抜が六、七割を占めている。（行き当り場当りの抜書で、義理の精当を欠くものがあるから、分別して採用して欲しい）弟が鄭重に御願いしたいのは、この中の蕪雑な句は、諸兄が一見すれば判ることだから、注意して校正改訂し、大きな誤ちをなくして天下に笑はれぬようにすることである。（この校正、潤飾、分類、正誤を要する諸書は前以て書いたものだが、分散して再び集めねばならなかったことは一度ならずである。今、忙しい中に見付からぬものは再び書くしかないのだが、眼は昏み時は逼り、全く苦しい）項目に分類し、印刷して世人の閲覧に供する可否を鄭重に斟酌し細心に計画されんことを御願いする。

弟は知識の浅薄を自覚して敢て自信をもたないから、これらを印刷して世に問うことは五仁兄の斟酌に任せる。行う可くんば行い、止む可くんば止める。弟をして世を惑はし民を誣いる罪を犯させぬよう是非御願いしたい。弟に著作の名を好む気持は更に無いし、実以てその才も無い。平日より君子儒小人儒の区別は甚だきびしく持してきた。（詩が巧みで賦を能くし詞采極めて佳にして、憂国愛民の言を為し、而も実は声色に溺れ、酒を飲んで娯しむごときは、試みに問えば僅かに文字に託するのみにして、其の事を履まざるは、世風を敗壊する者か、抑も能く世事を補益する者か）。今、謗譏を顧みず、浅陋の書を以て人に示すのは、事理を以て人に勧める意の故であって、文章を以て世に問はんとするのではない。世人がもし余の苦心を惆察し、余の書を披閲し、余の意の在る所を尋ねてくれるならば、村婦老婆の作と観じてもらって可いのであって、文人の佳作と観てもらいたくないのである。能く世間の正義をして些か顕彰

の後先生は死を求めて得ず、民国七年九月、先生が積水潭に赴いて殉じた時は、趙は既に亡くなっていて、この書を致すことはできなかった。しかし書の内容はみな世道民生に関するものであるから、世人に敬告する書の教に附して伝える。

註二　徐太保は即ち徐世昌である。字は鞠人、清朝の翰林、官は太保に至る。民国になってから一度大総統に任じた。

袁・馮・林・周・彭五兄への遺書

珏生・公度・朗溪・霖叔・翼仲五仁兄公鑒。弟は世道人心の甚しき悪化が天理の存亡に関係し、若し衆人が急ぎ回心して善に向はないと、中国は駄目になると覚悟し、今一死を以て我が苦衷を明かにして、以て世人の自覚を促がし、皆が挽回を図らんことを求める。先に心事を我が良友に向って言い、良友が代って一切を宣明されんことを求める。弟は今日本来は死なねばならぬ必要はないのである。然し乍ら国家が組織を改めるのは極めて大きな事であり、士君子として責任がある。余は立国の道は正義を以て根源と為すべく、詭謀を戒しめねばならぬと確信している。今、辛亥・壬子より紛然と慌てふためき共和に改建してから、天下の気風の尚ぶ所は全く詐偽行為であり、変れば変るほど悪くなって行く。最要の二事である民徳と民生は目茶苦茶になってしまった。全く良心の無い人を除いて（士君子の三字は本来士大夫に作るべきであるが、士君子には人品学問の意が含まれている。春秋の伝に、人人士君子の行有れば国必ず大いに治まるとある）能く楽観を抱くことを、弟は実に坐視するに忍びない。故に国家の諸事に対して時々手当り次第に雑記した。人は余が劇場に出入するのを見て、悠遊無事で本当に楽しんでいたと思ったであろうが、余は小学生が勉強に忙しいように、国家の変化する状態を逐条的に記録し、これが完成するのを待って、瞑目この世を去ろうとしていたのである。ところが予想に反して世事紛々愈出でて愈奇怪を極め、応接に暇あらず、とても書き完ることはできない（才

第四に財を曰う、

財政が極まったことは、尽く人が知っている。一は財源が枯れたことに由り、一は良心の断滅に由る。強力な政府が細心に配慮し、私を去って公を存し、紊乱を整理するしかない。小手先で成る所に非ず、須らく先に皆が大局より思うべきである。

第五に清室を曰う。（注、清室とは清の皇族を謂う）

近世の潮流を観るに、久しく尊栄を擁すれば必ず嫉怨を招く。一身のことは固より欲張ることはないが、世代の永続を望めば宜しく種族の見を無くして、或は儒術を重んじ或は実業を重んずべきである。先に京城で実業を試み、漸く人民と接近し、克く天爵を尊んで人権を鞏めた。上は祖宗の霊を慰めるは此に在って彼に在らず。八旗の窮状はとくに教導して生活できるようにしてやることである。徐世昌は昔は保傅の大臣であった。宜しく旧皇族に就ての顧忌を除き、太妃に詳述して内府に存する金子を出してもらい、学校、実業の両事を振興し、その建築と経費を援助し、旗人の智能を増益し、その優秀な者に愚鈍な者を指揮させ、二十年を期して自立させるのは、天地の間に一善事を増すことである。手を束ねて無策に見送るより猶ほ勝る。

以上の五項に弟は主たる意義を策定しようとして、これに関連する新聞記事を随分多く切抜き、それぞれ封筒の中にしまって置いた。東海（徐世昌は東海の人）に上書しようとして筆を執る暇が無かった。この五つの事は大問題で、余の力に余ると考え、五仁兄の名で徐総統に一書を上げ、この五事に意を注いで対策を講じてもらえれば、弟は感激の至りである。もし五兄がやって下さるなら、封筒の中を見て欲しい。（切抜を封筒に入れる時、間違っていれたものもあるからよく点検して下さい）切抜に弟の書入れや圏点の言葉があるが、採るべきものがあれば取材の一助にして下さい。弟は当世の事をよく知らないから言を諱むことが出来ない。古人云う、政を為すは多言に在らず、力行何如を顧み

できたら、余の感激はこれに過ぐるはない。

弟は先儒の言う心を取るは専ら一事に在り、他事にその神を紛らすことはできない。譬へば親雞が卵を孵化する時、その心中にはただ卵しかない。堅く伏して動かず、之を引いて食ましめても亦顧みず。伏卵が雞に成るまで止めぬ。且は外侮の防衛に極めて勇気がある。竊かにこの義を取って、名づけて伏卵と曰う。これも代って斟酌して下さい。これより以下は、心忙しく時も逼り、字も乱雑とならざるを得ず、句法も全く粗雑となっている。

この外に尚ほ緊要な一事を代ってやって頂きたい。弟は早くより国会に請願して、大局を陳述しようと欲した。そして、一つには議員の賢ならざるに因り、一つには国会が動揺不定の故に、この意を果さなかった。徐総統に向って言はんとしたのは、五つの項目になっている。（最も簡単の言にした。御推量に俟つ）。

第一に民を曰う。

この民事は二項に分ける。民徳は近年倡導される悪風に因って堕落し、地を掃って消滅した。民生は負担重くして衣食が困難となり、四郷の人の生活は、殆んど人畜平等となっている。而も京城の人は談笑歓娯して、精美と衛生の好きを求めるのは、実に歎かはしい。

第二に官を曰う。

上級に取り入る卑しさ、儲ける嬉しさだけで、三分の時間三分の心力も、救国の事に労したことはない。士大夫儒流の矜式を自称する者も、これを矯めようともしない。勢、職守や箴規はみな空念仏になってしまった。

第三に兵を曰う。

この事の悲惨は更に言うに堪えぬ。近年は殆んど全国民を招いて兵と為し、全国の兵をして匪と為した。浩劫を醸成中で大禍は必至である。速かに諸帥と誠心誠意協議して、善く収束を計るべきである。

弟は甚だ感心している）墨青は専ら彼個人の苦心を恃んでの仕事だから、功果を見るのが実に難しい。弟は官の力が志士と協力してこそ効果を挙げ得ると思う。

弟は平日胸中に積った中下層社会の事を羅列して、張仲仁・范静生、傅沅叔歴任の総長に書を致そうと思ったが、未だ果していない。戯報（芝居関係の新聞雑誌）に批評や註を加えたものが数え切れない。（これを小事と見逃してはならぬ。芝居は能く人才を毀し風俗を悪くする）今俄かにまとめられない。（児輩に問えば判る）弟の考えでは、官が協力しないと効果が挙がらないから、この事を総統・総理・総監に告げ、教育部警察庁の両面から力を合せてやれば、必ず効を奏する。先に密かに実地踏査して、人才を毀傷し風俗を害する穴場を確め、辞法を定め、先に戒しめ後で懲すことをまじめに実行する。社会を規劃する有志の士をして、官の力の賛同を得しめれば、徒労を免れることが望めよう。これは瑣細の仕事とはいえ、弟は墨青を極力推挙し同人を糾合して社会教育を推進したい。この意を呉士緗君に告げ、彼から徐公に陳べることを、五兄に御願いしたい。士緗は以前部に在った時、弟と常に会っていた。

墨青と厳範孫君は同一の品格で、徐公は知らぬ筈はない。だが、その仕事がうまく行くためには、上層部たちが声を掛けてやる必要がある。弟の言いたいことは山ほどあるが、ここには最も急を要するものだけを択んだ。一息存する限り概ねの事を説いた心意だが、以上の事を言い畢って後に死ぬのは、実に余の大なる幸せである。（数日前又昔のように筆も想も渋って、全く焦立ったが、夜中に起出し、灯を掲げてこれを記した）朝に道を聞けば夕に死すとも可なりで、これより長くお別れする。願はくは諸君が正義を前提とし、詭謀を大戒として努力されんことを。

雑記を書いた当時、その体裁は考えもしなかった。今紅格紙に細字で認めた十冊を見ると伏卵と書いたのが三冊ある。（この中で語気も事柄も近似したものは一冊にまとめてもよい。酙酌して下さい）。又白紙の包の九冊は七十余篇ある。又も一つの封筒内に十余枚あるが、これは前のと合せて一冊にまとめたがよい（これらの事は五兄が相談し

るのみと。必ずしも言う所みな我自らの言に限るまい。徐公は元民部長官であって、弟を取立てて下さったが、弟は咸豊同治年間の旧風を墨守して、私宅で一度も面会していない。丙午・丁未の間、同僚達は送迎の宴を催したが、弟は一度も列席しなかった。（日記に教養局で昇進しなかった事を記しているが、今は省く）当時は招宴の風が甚しく、世変の将に起らんとすることを知った。平日徐公に対しては批難する気持はなかったが、ただある一事で諫めよう思った。（教養局で余財三百金を節約し、これで六間の小部屋を建てた。総庁はこれを上部に報告しなかったので、長官は知らなかった）。徐公は仁厚の心の持主で人はみな尊敬していた。（周囲左右の官の待遇を厚くすることは知っていても、郷閭の窮迫した民を見ることを知らず。貧窮は即ち盗匪の原、民は何で日に貧しくなるか。この民を搾って官を養う故について又数語を加えたい）仁厚の心がただ官僚親旧に用いることが多く、困窮した百姓に用いることが少ない。これでは張江陵の壁立千仞に如かずである。弟の日記では、奉天で部下に俸給を濫りに与え、多くの冗官を置いた、度を過した寛厚振りを譏っている。弟の考方観方は或は寒酸を免れないかも知れぬ。だが民窮し官蠹ばまれた時に際しては、惕厲の心で力めて禍患を防ぐべきであり、承平の態を装って、豪侈自ら娯しむべきではない。鞠老には救時の望みが寄せられていた故に、これを以て責めたのであり、これこそ真に賢者を責める意であった。この外にもう一つ御願がある。弟に代って述べて欲しい。弟には社会が信用して欲しい一人がいる。それは天津の林墨青である。墨青は真に社会の改良に熱心で苦労を辞せず、社会教育をやっている。その上、主旨も正大で一方に偏しない。もしこの人に依って仕事を進めれば、風俗は必ず大いに改善されよう。ただ墨青に一つ小さな欠点がある。事をなすに往々渋滞する。小さいことで、たとえば一字一句のことで推敲を重ねすぎて、精神を労費し細事に拘泥する。弟はいつも手紙で戒めている。翼仲は時には失敗するが大胆に事を進める。この二人がお互いに協力すれば、中下層社会の救済事業はよくまとまるだろう。今日の社会の堕落はこれが匡扶に急を要する。（程名涓君なる人に面識はないが、教育の急務を論じたものに、

弟は辛亥の役に軀を捐てる者が無かったことを、歴史の欠憾と訝しみ、数年来心に黙審してきたが、今その正確な理由を求め得た。曰く共和愛民の政を実行せず（口に平民主義を言うて、官僚は錦衣玉食し、威福を自ら誇り、人民は苦奴隷と視る。民徳は堕落し民生は困窮し、南北は分裂、実に事態を成さず）清廷禅譲の心に辜負している。遂に戊午の年陰暦十月六日の夜（或は七日の朝）積水潭（路溝で下車、徒歩して行く）に赴き、南岸の大柳根一帯で死ぬことにした。速かに彭仲翼を訪づれ、弟の遺せる世人及び親友に告ぐる書翰計十余件を察して警察に通報し（署長陳建侯君は昔面識がある。先に巡長に告げるべきであろう）一方電話で児輩に報らせて後始末させるよう御願いする。後始末には只戸板を用い、布団で死体を覆い、縄と棍棒を用いて四人で舁ぎ、自宅に持ち帰るようにする。絶対に弟の考え通りにやって、俗世の俗見に惑はされてはならぬ。貴下は潭に行き、先に密かに様子を探って欲しい。もし未だ死が成らざる時は（弟は人に救助されて死を遂げ得ないことを防ぐため心を砕いている。故に余を愛する者は余の事の成るを望んで、余の計を破るなと云うのである。これは大局の関する所である。）世に喧伝されて笑を貽したくないのである。今日は先ずこの事をやって頂きたい。その他の事は弟の篋中の書冊及び夾むだ大小の記録を、明日五公を迎えて検閲し（霖叔は京師にいるのかどうか、平政院第二庭に問合せること）もし識る所の者があれば、その人を加えて証人とするも亦可である。弟は平生敢て文人を深く信じなかった。文と実は常に相反するからである。貴下が品行気節を重んずるを知る故に、後事を相託する。四年前、公が扇子に書いた精筆、大著の四詩、並に跋語を得て、弟は平生の大幸としていた。感激無尽、匆匆に言はんと欲する所を尽さず。尚ほ諸事未完の事は、生来の遅鈍により半日の工夫の及ばざるを恐るるのみ。

同徴を忝けなくせる弟梁済拝別　十月六日

て下さい。人を雇って浄書し、原本は児女に渡し保存させたい。これは葬儀がすんでからの相談にして、先に要領だけ申上げて置く）。以上はみな伏卵と名ずけたい。別の一冊は別竹辞花記（王子に已に殉節の心があったのである）もう一冊は奏摺と雑信であるが、合せて一冊にまとめたい。（王緗綺に致す細字の草稿がこれに入っていないのは残念である）以上の外に乱雑な草稿が二冊ある。余は学識の蕪劣なことをよく自覚して、人に見せたことはない。諸兄が代って受取って欲しい。多分存す可きものは多くないだろう。（もし存す可きものがあっても、公刊しないで欲しい。先人の詩稿などみな印刷に付していない。ただ少しばかり印刷に付して社会に頒布し、勧導の心を尽したいと思う。死に臨む各書翰は新聞紙に掲載して欲しい。）

家事に就ては、児輩は自ら斟酌して然る可く行うがよい。もし疑問が生じたら、五仁兄に教を乞うがよい。児輩は素より弟の意を承知し、虚浮を悪み倹樸を尚び、名声を求めていない。子弟は交友が少ないけれども、親愛し尊敬する数十人が四方に散在している。今急に全部を挙げるのは難しいが、秦紹観（近年秦公の書を求めて久しく得ず、有道の棄てる所となったかと非常に心配しているが、弟は心の中で実に尊敬している）胡芰孫・林墨青・厳範孫・韓補庵・林次煌・張卿五・王鏡銘、李秀瑜、沈子封・王酌升・林琴南・唐春亭の諸先生などである。もし訊ねられたら、五兄より余の遺書を御覧に入れて微意の在る所を証する資料にして下さい。紙短く情長く、多くの事が未了だが備さに述べている遑はない。

戊午九月二十七日　愚弟梁済拝啓

袁玨生兄に奉る遺書

玨生吾兄

等の説に非ざるなり）癸丑の年、すでに一函を預備し、我が兄に託し、弟の死後、代って一切を宣布せんことを求めた。いろいろ覊絆が多く速かに志を践み得なかったが、今、積水潭に身を投じて死ぬことになった。まことに遅すぎたと思う。別に公函が五人の仁兄に託してある。共同で証明し、篋中の書函を検閲し大衆に告げることにしてある。覃仲が電話で御報せするから、前後の二つの手紙で観て、泉下の故人を慰めて下されば、感激の至りである。鄭生兄、ことだが、この二年来非常に進歩を見せ、英爽でもあり穏成でもある。弟は事に処し身を修むる道を励ますに、よく聴き入れている。近来は貴州の姚重光先生に従って文学を学び、居然として成人を望めるようになった。

彼の財産だが弟が幾度か申上げたように、某年（乙卯か丙辰か記憶が定かでない）十一月八日から、聚和隆から受け出した本銀二百を継続して計算してあり、彼の入金にはみな商店の印章・伝票或は利息によりみな証明できる。更に慶豊からの入金もあり、某年十一月八日から以後の入金、数年来どれだけ使ったか、その出入は自づと瞭然している。自分が略ぼ計るにまだ数十元は残って手許に在る。先輩に命じて葬儀が終ったら、計算を明かにして還すことにする。弟は数年来心中の憂の為に、記憶が明かでない。だが欺むくことだけは無い。清算が終ったら、兄の処で代って二年か程は管理し、拙宅での経理はさせないで欲しい。年来の利息は新華銀行の当座に入れてあり、毎月三、四十元取っている。近年生活程度が上ったので、月額四十元は要する。（正月・端午・中秋の節季には数十元ふやす）聚和志川三箇合計して毎月の利息は十元参角で、米と布の費用に当る。もし聚和志川の事を慶維に渡して自分で管理させ、新華の利息を貴方で受取り、毎月三十元づつ渡すのも亦一法であろう。彼も年は已に弱冠、二年経てば大学卒業となり、妻を娶って自分で処理することが出来よう。弟済は玆に告別し、世道のことを拜託する。戊午十月。

心は忙しく時間に逼られ、半夜起きて遺嘱を書くのは、児輩に隙見されるのを避ける為である。故に他の書も遺漏が多かろう。この書は児輩に渡して閲読させるようお願いする。まだ五ケ処も書かねばならぬ手紙がある。忙しいことか

馮公度兄に奉る遺書

公度大兄鑒。弟の書翰冊子四本、久しく尊処に在りしも、弟が取り戻すことを急がざりしは、正に弟が志を践むを俟つて、先人の苦節を新たに表彰し、社会に対し弟の来歴を説明せんと欲せるのみ。今、積水潭中に身を投じ（我を愛する者は惟だ我の死を成すを望み、我が計を破る勿れ。暫らく秘密を守り、電話の来るを待って現場に臨むこと。もし電話が来なければ、弟が偵知を避け未だ成功せざるもの、世人に喧伝されて笑を貽したくない。これは世道人心の為に計ること故、朋友は阻止する道理は無いことを、一言附加する）別に公けにする書があって、五人の仁兄に託したから、君も一緒に証明して（翼仲から電話があるから現場に臨んで下さい）書翰を検討し一切を宣布して欲しい。弟個人に対する賞讃はやめ、惟だ微意を体すること、即ち人心風俗を振起する機を与えることを期したいのである。それが出来れば弟は慰められる。何より感激の至りである。心中万言あるも筆は艱渋する。この小柬を記すのみ。説き得ざることは兄が自ら補うことを待つのみ。匆匆に御別れする。平安を祈る。弟梁済頓首。

李心吾兄の処に弟の団扇が一つある。もし画いてくれれば更に好いが、でなければ代って取戻して下さい。

毎日未明に記し、午後には外出したのは、児輩の察知することを恐れたからである。天雨降って未だ晴れない。三時に起きて記す。

林朗渓に奉る遺書

朗渓仁兄閣下。

弟の心は清廷遜譲の心に辜負し、共和重民の実を行はざるを慨き（この重民とは、民徳民生を指して言う。民権民意

ること。京話日報館に大略を報らせること。更に児輩は入棺をすませたら、各書翰を大概一見して、諸公の検閲後に自宅に持ち返り、よく皆で読んだ後、諸公にこれを宣布する配慮をして頂くのだが、あまり急いではならぬ。櫃中の二つの篋にある書冊や雑記は弟の心血を注いだものではあるが、零細のもの故、よく調べた上で悠くり処置を相談されたい。

戸板で自宅に舁いで来て棺に入れるのだが、弟の平素の気持は風俗を正すにあるのだから、諸君は是非とも弟の意に従うこと。人を雇うにも賃銀は適正にして、世間の見栄を飾るやり方を真似してはならぬ。机上の銅貨四十枚は尊紀に与えること。銭入、手巾、眼鏡、墨入等の雑物はやはり自宅に置くこと。別に急がぬ。壁元、紫束に寄せた手紙の中の文句は、私の最も精魂こめたもの故、是非とも新聞に掲載して欲しい。これを嘲笑する人がいても、死者がこれを甘受する。（この文は封筒の上にある。下の方は彭翼仲宛の手紙である）

翼弟殿鑒。私の識見があまりにも至らず、目的があまりにも小さいことを笑はないで欲しい。時が過ぎ境が変ると、清朝に殉じて軀を捐てたことは徒らに笑を世に貽（のこ）すものと、忽ち云うであろう。私は殉死の考をこの数年抱いて来たが、事毎に邪魔が入って、遅延今日に至った。六十の還暦に平然と祝宴を開いた時、世の薄なる者と何の異なることありやと自問したものである。且は性素より迂滞、未だ歴史観念を脱せず、清に殉ずることも只自ら知るを求めるだけで世人の信と不信は問はぬ。清に殉ずる名義は謂れ無きもののようである。（足下は必ずしも同意しないと思うので云うのである）しかし足下よ、平静に私の世人に敬告する種々の理由を観れば、私が専ら清室だけに忠であるか、世に忠であるかが判るであろう。（世道に対し有益ならんと欲する者が、清に不忠であり得ようか）

茲に足下に託する事がある。足下は新聞社に対し通報する際の最初の言葉は、梁某の遺言に、この身の死は清朝の為の死であると。この文句にすぐ引続いて、決して共和に反対するのではなく、極めて共和に賛成する。清廷の遜譲の心に辜負し、共和愛民の政を実行せざるに因り、憤慨して死ぬのであると。冒頭にこの数句を用い、以下は順序によって

周霖叔兄に奉る遺書

霖叔我兄鑒。弟は辛亥の役に軀を捐てる者が無かったことを歴史の缺憾と訝しみ、数年来黙して思索を重ね、今その正確な理由を知り得た。それは、共和と愛民の政を実行せず（口に平民主義を言うて錦衣玉食し、威福自ら誇り、民生は日に窮し民徳は日に堕ち、人民に対しては漠として軽視し、南北は日に分裂、実に成っていない）清廷禅譲の心に辜負していることである。遂に戊午陰暦十月七日朝、積水潭に赴いて死ぬことにした。就ては彭翼仲の処で、弟が遺した世人及び親友に告ぐる書を閲見して下さい。同時に兄に託したい事は、五公に致した書を、よくよく御覧の上、他の書の言う所をも参看されて、匆匆にして詳陳する暇はないが、何卒よろしく児輩に務めて弟の樸実の意を体し浮薄に陥らぬことを要と為す旨諭して頂きたい。聞けば御家族は天津で御病気の由、癒りましたろうか。気にかかります。玆に匆匆お別れを告げる。我兄は平素より道義に敦く、世道の挽回を求めていた。同郷の諸公には皆よろしく。多く及ぶ暇がない。弟済叩首、戊午十月六日。

翼弟に速覧のこと

私を潭の南岸、柳根一帯の水中に尋ねたら、遺言状の大きな包を展いて、それぞれの書翰は細かに観る暇は無かろうから、略ぼ大概が知れたら直ちに電話で袁（東局九四五号）馮に告げて云うのである。巨川は公函を留めて死に、諸事を拝託した。巨川は又言うに、昨日付の手紙で申上げたことは御受取になったかどうか。殉節を知られたかどうか。何卒速かにお出でを請うと。更に林朗渓・周霖叔にも電話で、公函を託していること、未だ一人宛の手紙は出していないが、世の為に死んだことの証明を請う旨告げること。更に二人の息子に電報して家に来させ、同時に娘に謹んで驚くことなく、家で静かに待つよう告げること。女の親戚は必ずしも来る要はない。速かに私の服装を整え、入棺の支度をす

鄒紫東親族に奉る家書

紫東大兄・弟今日の死は（傳青主の謂う、埋めし千年の血猶ほ碧し、白骨は塵と成る可く、游魂終に散ぜざる也）理由無き死と謂う者あり、死して値せざる者と謂うあり、甚しきは馬鹿と云はれ、大愚と誚られるのは、みな免れまいことと思う。でも人は一歩を見得すれば一歩を為さねばならぬと竊かに思っている。私は国性存せず、国将に国たらざらんとするを実地に見て、国性をして大多数の衆に復興せしめるには、どうしても一両人の者が、これが為に軀を捐てる他無いと考えた。弟は数年前（癸丑の年すでに遺言の手紙を書いたが未だ発信していない）すでに殉清の心を抱いた。固より旧君の誠を推した禅譲も、民国が克く太平なれかしと望んだ故であるから、又民国のやり方如何を観察せねばならぬ。今は南北分裂し、民生は困窮し、民徳は堕落し、風俗は極敗した。苟しくも澆漓詐偽と陰険奸悪を為さざれば、自存する術だに無く、勢い天理民彝は全く滅亡に帰し、世を挙げて又敢て国性を以て国を救う説を唱える人も無い有様である。（弟は別に世人に敬告する長文を草したので、茲に贅する暇は無い）これが弟の自ら力を量らず、奮って一身を擲ち、挙世為さざる事を為す所以である。譬えば猶ほ沉陰痼寒の中に一陽来復を望むがごときものである。但だ義として当に赴くべき所を為すのであって、死して値するか値せざるかは問はない。能くこの死に因って、世人が漸次であれ回心すれば、固より大幸であるが、衆人をして感格せしめ得なくとも、数千載の聖教が絶亡の日には、これに殉ずる人がなくてはならぬ。弟は心忙しく時は逼る故に、暫らく数言を要約する。その他は新聞の報道記事で弟の苦衷を知って下されば、泉下で感激致さう。

娘は夙に慈愛を承け、久しく我が子のようにして下さっているので、固より心配は致さぬ。ただ一朝永訣となれば念には忘れ難いだろう。何か事に遇う時は、これを導いて人生楽しむ可きこと、将来家庭をもち子を教えるに、文化精神

発表する。更に速かに電話を借り（徳巡長の処にあるようだ）袁珏生（北池路東）馮公度・周霖叔（この方は電話がない。毎日午には平政院第二庭にいる）林朗渓に速かに来て頂いて、足下が検閲した弟の篋中の諸書翰計十何通を一緒に証明して、その目録を発表する。弟は身後の諸事を五人の先生方に託したが、君が親戚で最も近い関係にある。次に電話で拙宅に報らせる。東局の二五八二番である。女小供は必ずしも現場に来ずともよい。亦驚かしたくない。息子二人に来させて、巡長に身分を明かにし、四人を雇って戸板に布団で覆った弟の死体を、纓子胡同に舁いで行き、棺に納める。電話した人が外出していたら直ぐ郵便を出す。その他は公函とその他の書中に記してあるから、心してよく見るようお願いする。もう暇がない。

戊午十月一日夜亥の時に浄湖楼に於て記す。

俗人は人の苦衷に対しいつも信じようとしない。名を売るためとか、或は病で変になったからという。足下は私に代って解釈して欲しい。迂腐固執の点はあろうが、病で変になって本性が失はれたことはない。足下の如きも世道の衰えを憤ほり、信を朋友に失うを欲しない故に蹈海を思い、南宮の李君に連れ戻された。或る人が私に翼仲は今でもコチコチかねという。それで私は翼仲は朗友と事を共にし信義に虧ける所あるを恐れての故に、死を以て自ら明かにしようとしたのであって、これは良心の上の事であり、神経の病ではない。コチコチになったことはないと答えたら、その人は始めて判ったらしかった。私が託した十数通の書翰は、足下と袁・周・馮・林諸公と閲覧後、先づ目録を発表し、原文は児輩に渡して拙宅に持ち返って見るようにして欲しい。その上で出すように。次に私は陳明侯に観劇も世道を前提にするようにと手紙で言ってやりたかった。以前に書いた緑紙の跋語のある対聯は金桂蓮に送ったが、あの俳優は受取っただろうか。中和園の馬姓に渡した詞句には意味がある。このことを明侯に告げて欲しい。忙しくてもう書けない。五日である。

留めて曹纕蘅・汪玨齋二君への遺書

纕蘅・玨斎先生垂鑒。壬子秋九月、弟は職を辞し署を出た。両公が任命を受けて署に入られると、両公は同僚と相先後して御訪ね下され、暢談の機を得、御親切に孔社に入れと申され、又学報の一書を寄せられた。弟は心に両公の垂愛を敬したが、御礼にも参らず、始終片言も回答しなかった。蓋し弟は世道の衰えに痛心し、専ら実践躬行を重んじ、虚文の払拭に務めた。先生が俗情を遠ざけた眼で御覧になれば、必ずや責められないだろう。その後、徐芳農夫子より書状が来て入社を望まれ、弟の清望を以て入社せざる可からずの言があった。弟不肖なりとはいえ、孔門を外れようとは思はぬ。正しく孔道を実行する人がいないので、事々に人と辞駁したのである。書状に接した時、筆を執って即時に返書を認めた。含蓄ある言葉で、実を務め名に務める勿れ、以前の中国では翰林の文詞が事を誤まった弊はあまりに大きい云々と書いた。この返事は花農師が喜ばなかったと思はれるが、顧みられなかった。弟は始終を通じて孔社に入らず、この両三年は師と通信もしなかった。とくに開会の日、総統に答謝する祝辞はあまりに上調子で寒心した。今、弟は死に臨み、弟の尊孔の本心を両公に説明し、両公の宣布を求める。弟は孔社を保衛し世道を扶持するを欲しないのではない。但だ名利の階梯に使いたくないのである。苟しくも真心から道を衛ろうと欲するなら、当に為すべきことを列挙しよう。条目を規定し（汪精衛の進徳社は決して好くはない。しかし久しからずして泡影と化した。宜しく漸を以て恒を以てすべく、矯激人をして行い難くさせてはならぬ。それでは自分も行うことが出来なくなる）力行を以て互いに勉励し、御座なりの饒舌や開会ですませ、流行に随うて賑やかしになってはならぬ。所謂列挙とは、気誼を尚び、名節を重んじ、危きを見ては命を致し、得を見ては義を思い、礼教を崇び財利を賤しみ、硬骨を持し、面佞を悪み、然諾を信じ、欺詐を恥じ、法紀を尊び、哀曲を厭い、威に怯えず利に誘はれず等の如き条目で、すべて士君子の行を貴ぶ

に生きることを自覚させて下さい。兄は故人の孤を体念し必ずこの愛情に徇（たが）うことと思う。弟は昔、彼を京師に住まはせることにしたが、別にこれに固執しない。蓼もその心意で、伯父の撫養の恩は深いから、蘇州に住んで伯父の残年のお世話をしたい。後の恒久の計となれば、京城の風土に幼年から慣れているし、子供の入学にも都合が好いと云うていた。蓼にこの言があるので、私はこれに言及したのであるが、実は南に数年住み、北に数年住むのも、今では別に難しくない。私は親だから自然に関心は切実である。九月以来、児輩は弟の還暦の祝に熱を上げていて、弟の深い心中の思を知らない。数年前既に天に黙して告げ、祖霊に盟誓した言に、どうして違背できよう。況んや今日の世道人心は凉薄極まった。二十五史の末、人無かる可からず。矯情と言はれても亦避くる能はず、世を論ずる者の研求を待つしかない。御垂察を請う。万に一を尽さず、弟済玆に別れを告げる。戊午十月二日灯下。

紫兄再鑒。弟は既に書を留めて別れを告げた。将に積水潭に赴かんとする。私に寿詩を下さいますな。弟は猶ほ従容捧読し得る。本当に縁があった。一句として肺腑の中より流出しないものは無い。所謂、一知己を得れば以て恨まざる可しである。弟は真に笑を九泉に含む。弟の事を俄かに聞けば、あまりに激しすぎると思うかも知れぬ。しかし数千年の歴史、四億の人心から考えると、此の人無かる可からず。遅延今日に及んで、更に遅れることは許されぬ。もし一たび六十歳の誕生日を過ぎれば再び言を践む日は無く、中国にこの事をなす人が無くなる。或は他人にこの事をなさしめて、弟がこの事をなすことが不可能となる。弟が床上に呻吟するを待たずして速かなる死を欲するのは、世道の淪落を真に恨むからである。娘が私の為に伯父の詩を求めるのは、眷恋庭幃の情に兼ねて道義の気象を見るに足り、私としてまこと親愛と憐念に堪えない。もうこれ以上書く暇が無いので、この手紙を娘に見せて下さい。私を見るにひとしい。敬証頓首。

新銘よ、私を怪しまないでくれ。これ以上は書けぬ。忙しいのだ。お前は善く保養して父の心を慰めよ。

平和を勧めることに比べて、果して小効ありや否やを知らぬ。兄は去年足下に手紙を出して、足下が社会教育に忙しく、昼夜不休では、終に疲労して死ぬ。兄は世道人心を憂え、必ず憂傷以て死に終ると言ったことがある。この言葉は昨日言ったような気がする。兄の殉義の心は決定してから既に六年になる。ただ諸事未完に因って遅延今日に至った。今、六十歳の誕生日が近い。もしここで死なないと、全く人でなしになる。（今日の死の名義は、清廷禅譲の心に負いて共和愛民の政を実行しないと曰うに在る。十数通の書翰に遺言した。）兄の死の始末は彭翼仲の処で詳しく問うとよい。兄の雑記七八本、親友に遺す十数通の書翰は足下もよく見て、道義の証しに資して欲しい。足下はいつも兄の論説や新聞記事を求めていたが、雑記の中に新聞記事も少なくない。（凡そ兄の言う所、句法の至らぬものは、代って一二字を改め、よく判るようにして欲しい）但だ、写しが完了せぬと、原本を持出すことはできない。先に芝居を論じた部門を見て、用う可きものは用いるがよい。（翼仲に問うとよい。この雑記は某氏の許に在る。兄の託したのは一人ではない。現在拙宅にあればすぐ捜して見られる）兄の見る所、旧劇は棄てるべきでない。旧劇の作法規則は絶対に廃してはならぬ。国家主義を鼓吹し、人民に常識を教えることを旧劇に求めることができる。中下級の階層の北方の質樸な人々が愛し好む所であって、感動させられる。上海の軽薄な連中は新式の芝居を好むが、彼らの関心はただ顔形にしかなく、劇中の事実や道理になくて、作者の心を費やした心血は判ろうとしない。韻譜に新旧相兼ね偏廃せぬよう告げて欲しい。

次に足下は俳優に対しあまり気にしないがよい。もし新しい劇本が出たら、鮮霊芝・宋鳳・汪金栄・旋風・紫霞などを召集するがよい。うまくいかないようだったら、翼仲を引張り出して助けて貰うがよい。更に警察方面も傍聴させれば（訳注、中国の芝居はオペラに近いので観劇といわずに聴戯という）公開となり私見でなくなろう。台上でこの芝居の主旨は義理であることを告げ、諸君の苦心努力を励ますがよい。更に楊韻譜の意見をよく聴くがよい。これ等は往

者である。平和に敦睦に勉め、躬ずから民を斉しくし俗を厚くするために、郷里に賢士あり、国家に好官ある理である。但だ鄙人は和平実に務むという四字に重きを置く。売名を意図して傲岸自ら高くし、世人に挑戦して嫌はれてはならぬ。とくに宜しく循々と誘導すべく、苛酷に責めて人をして堪え難くし、望んで畏れを生ぜしめてはならぬ。宜しく穏やかに勧め、是非を弁察し、その猛省を期し、次第に楽しんで従うようにすれば、信じ仰ぐ人が日に増加して、風気も自づと起ろう。孔子の道は、気節一部に専ら在るのではないが、儒行の一書（礼記の儒行篇）は実に孔門より出ている。今日の世を救うにはこれより手を着けざるを得ない。もし世教陵夷を大いに痛んで、空空に会を開き社を立て、炎炎烈火の観を呈しても、人々の実務躬行に於て、世事に於て何の益があろう。彼の一般の新人物に会を開く人は既に多いし、社を立てる人も亦多い。何の必要あって我が輩腐旧の者が、彼の輩の後に随って声を大きくすることがあろう。この鄙意を代って宣布し、怪しむ者責める者の疑を釈いて頂きたい。弟は不肖と雖も、尊孔に反対は致さなかった。又尊孔を復辟に近いと疑う者もいる。孔道は万端を包羅すると知るべきである。今、専ら孔道を用いて世道・人心・風俗・行誼を整え理むるに、君に事うる一条を欠いているのを、何で疑うことがあろう。凡そ事はみな時代の要求を視て起る。君主を必要とする時代に於ては、則ち君主を重しとする。公理を必要とする時代に於ては、則ち公理を重しとする。孔子は聖の時、どうして一個の成見に執はれよう。死に臨み多忙、百に一を尽さず。故人に敬謝し、善く体察あらんことを乞う。弟梁済頓首。甲寅五月二十三日病後。

林墨青弟への遺書

墨青仁弟鑒。吾が国は戻気瀰漫し、衆人は昏迷して醒めず、平和を口を苦くして勧導するも、已に功を見るに難い。兄は世人に敬告する長文を留め、水に投じて死に、世人の醒悟を求めるが、死を以て人に勧めることが、口を苦くして

尽きようとしている。これでは国がどうして国であり得よう。（私の平素の議論を思ってくれ）又私はどうしてなお国民に顔を合せよう。これが私の死を以て世人を悟らせねばならない所以である。私の死は単に旧を恋うるだけではなく、同時に新を喚起しようとするのである。新しい国の人が正義を尚び詭謀を賤しむようになれば、旧い国性はここに保存されよう。国性が存すれば国は存らえることができよう。これが判れば、私が歴史を断絶せしめまいと思索に苦労し断乎として弁争した真意が知れよう。

私は文を記すのが遅鈍であり、言葉も下手であり、その上心も乱れている。私の家庭はまこと熙々雍々の家庭である。鼐は日本に留学し、長安で家計を助けること五年である。鼎は哲理の研究で著名であり、己れを律するにとくにきびしい。二人とも道に悖ることはない。鼐の家内は才幹に秀でたことはないが、頗ぶる忠厚安祥の人柄である。二人の孫娘は器量は人並でまじめに学に励んで、よく二人の兄嫁の教に従順である。外孫の娘の固宝はまことに賢い。毎日夕方私が外から帰ってくると皆で門に迎えて、私の手にした物を受取ってくれる。本当に嬉しい状景だ。毎日皆に囲まれて、これこそ天然の楽趣である。鼐の綿婢は性質が謹しみ深く、幼年の日から謹銘の教誨を受け、これを導びくに義を以てし、将来の大器が期待される。長女の新銘は遠く蘇州にいて備さに述べられぬが、紫翁は常にその公平と勤慎をほめている。婿の蓼は若死にしたことをお前の為に哀しむ。孤児を教導する法は手紙で報らせた通りである。

私の次女は本当に仁孝明哲の女である。凡そ私の欲するものは寸毫も忘れず、凡そ孫たちの前途は至れり尽せりの心遣いである。春秋の佳き日には必ず法を講じて私を娯しませてくれた。私が夜の芝居見物から帰ってくると、夜中でも独りで読書しながら待っていて、お茶をいれてくれ、私が眠りに就いた後で出て行く。まるで幼児をあやなすようにはしてくれた。とくに私の至らぬ所を能く気をつけて全く私としていうところはない。己れを屈して貧に安んじ、十年前の旧い着物の小さくなったのは、裏につけて冬の寒さを防ぐ具にした。生活の苦しさをみなこのようにして過してき

らの人権を尊重し、終身正人に見ゆるを得ず終身真理を聴くを得ざる憾みから免れるというものである。彼らは必ずしもすぐには理解しないかも知れないが、一月に一度でも説けば、段々と判るようになり、或はそれからそれと語り告げて、一条の曙光が見られよう。

兄は総統及び多くの人に、足下が社会教育に有能熱心のことを推挙した。但だ願うに、足下は小事に拘泥する欠陥を去り、一字一句のことで推敲を重ね時間を無駄にせねば、それだけ多くの仕事ができよう。これは忙しい苦労をした者でないと判らぬことでもある。匆匆に別れを告げる。千古茫茫如たり。小兄梁済頓首。旧暦十月六日。

二伸、厳範翁が帰国したら、代って意を致し、小生の雑記及び遺言を観て欲しい。

留めて児女に示す書

鼐・鼎・銘新、謹女。私は今お前達を棄てて去る。（次女は聞いても驚くな。私が普段言うていることを思い出して落着くがよい。）私は世道の大局を重視する。もう十年生きていても芝居を見たり食事をしたり、自分だけの優遊で、世の事に何の益もない。もし世の中が悪化の極めまでにならなければ、私も太平の民として優遊してもよかろう。必ずしも一身を擲げすて救うこともあるまい。世の中が悪いとしても、辛亥と丙辰に老儒長老が大節を彰（あきら）かにし、吾が国の歴史の旧彩を断絶させなかったら、私も必ずしも己れの責任とせずにすんだであろう。或は真に正しく共和を理解していたら、必ずしも志節に拘（こだ）わらなかったろう。国中の風俗が尚ほ悪化の極点にまで至らないと、時に正義を提唱し民生を重んじ漸次に好い方に向はせる人が出て、世道を救い維持し絶滅にまで立ち至らないものである、そうなら私も隠居して、死を必する用もないのである。換言すれば、世を救う人があれば、何も私が世を救うまでもないのだ。所が奈何せん民国になってから、専ら詭謀が尚ばれて正義に由らず、この風が上から下まで全国に行き亘り、天理民彝は喪はれ

私が清朝に殉じようと欲して、いろいろ阻まれたのは、ただ人に知られたくなかったからである。それで友人の来往談笑を拒絶できなかった。去年已に決定し今年はもう菱売りの声を聴くことも西瓜をたべることもできない。（陸七叔は致美楼で私に六十の祝をするかときくから、私は六十になることを願えば六十、願はないのも私次第と言った。張沢翁も聞いている。）三、四月は正に彷徨していたのに、璧垣が忽ちやって来て、部屋を掃除し対面を悦んだ。いろいろの羈絆で又も半年生きのびた。（或は遅きも早きも定数があるのか）七、八月は屢々実行を思ったが、一寸ぐずぐずしていたらいろんな事が生じた。芝居の台本を改めたり、楊韻と演出の相談したり、うるさいことだった。）私は楊に寅娘の死に臨むでの話は即私の死に臨んで世に告げる話だと云うたのは、一つの証拠になる）九月になって、慌てて書き出して、始めて理に精なることは薄識の能くなす所でないと知って、この乱雑な遺筆がある。私の心中の事は百に一つしか記されていない。お前たちは私がお前たちに背いた意を怪しまないで欲しい。私は国性保存を前提とし、歴史継続を前提として、その謀を早くに定め、もう数年も経つ。もし言を践まなければ、実に天と祖先に相すまぬ。還暦の祝を承知しなかったのは私個人の事である。お前たち、私が昔に綿紙で包んだ汗袿に乙酉秋冬間と書いてあるのは、亡くなった母劉恭人の手製で、数十年も着用している。並に宋雪帆先生の「孟郊衣線已無多」の詩句が引いてある。この着物を身につけて棺に入れてくれ。蝦青の破れた馬袿、黄馬袿は櫃内に在るが、これも一緒に棺に入れること。もう十年になるが近頃見たことがないので何処に置いてあるか知らない。（私の馬袿貂帽の写真が松華斎の処にある。取戻してくれ。）私の書画は高価のものはないがみな道義の交情による。（鼐・鼎は十の七、謹は二、新は一を取れ。翁常敦の扇、李仲約、孫文恪の扇、袁珏生の扇、横幅は鼐と鼎にやる。謹は団扇と四屏を択べ。新には団扇四屏をやる。余の屏は両児にやる。対聯は各自数聯を得て保存し記念とせよ）新たに買った石谷の写真版は謹銘にあげる。一月に二度はよく観て心を養うようにすること。

た。誠実そのもので決して利巧敏捷を表に現はさないのである。私はお前たちが文人の習尚を学ぶことを望まない。（その他の些細なことは悠くり記している暇はない。忙しいのに衡甫が来たし、又別の客も来たのでこれでやめる。又一日無駄にしてしまった。哀しいことだ。）

私にはこのような雍々熙々たる家庭がある。何で決然として棄て去るのか。今お前たち兄弟姉妹四人は私の還暦祝いに毎日気を使って、部屋を張り換へたり着物を作ったりして私を悦ばせようとしている。私が数年前に決定したことをどうして知っていよう。国性存せざれば我が生何の用ぞ。国性の存否は私一人の責任ではないが、既に国性存せず、国将に国ならざらんとするのを見届けた以上、先ず私一人がこれに殉じ、而る後に国人を喚起して国性（世人は必ず冷鍋冒気と諷する。死は其の時に非ずと。だが私は諸々の事が完了しないので遅延してきた。私はただ自ら知るを求めて、人に諒解を求めない。）が立国に不可欠なることを知らせたいのである。（国性とは概ね仁義・廉恥・誠敬・忠信等々である。殉節の一事をボンヤリ見てはならぬ。私はたまたま殉節すべき時に逢った。而も一人も殉ずる者がいないので、私が代表しようと思う。又世道昏々たるを、みな深く憂え歎息しているが、起って矯める者はない。それで私は明かに世人に、当に矯めるべく難を畏れて愚図愚図するなと告げるのみである。友人の宋芝洞は云う、もし人々がみなただ一死を求めれば、世間の事は誰が為すのかと。これも一理はある。私は私個人が召忽となり天下の人が管仲となることを望む。然り而して国性は終に失う可からずである。）世事が尚ほ極度に悪化していなければ、私はまだ死なずにいられる。今は偉人政客から詭謀を提唱し正義を賤しめ棄てている。彼自身が国性を愛さぬのみか、国人をして国性を絶滅させようとする。将来人々は全くその中心点を失うだろう。どうして国家が国家たり得ようか。私は識見が広くないが（これは新しい学に対してのこと）国性を発揮する任務が甚だ重いことを篤く信じている。故に極めて喜ばしい家庭をもっているが、敢て留恋せず、快楽を犠牲にして志を明かにせざるを得ない。世人の省察を動かす所以である。

しも君主に対して忠を効すのではなくて、天理民彝に対して忠を効すのである。天理民彝を断滅する者には、毅然として起ち、これを救うには懇篤に穏やかに、激烈であってはならぬ。（矯激を心して防がねばならぬ）誠を積んで同志が慕うようになれば、必ず能く多数者が感じて結合しよう。或は上は政府を公平にさせ、下は人民を敦厚に導いて、治標の一策ともなり得よう。これが私の自ら力を量らず前駆たらんと願う所以である。清室に忠なることを発端として、世界に忠なることが結果となるのである。

私は元来才学がないので、深くは世事を知らない。野人赤子の言を為すに過ぎないから、立言に不完全の処があろう。お前たちは務めて周霖伯にお願いして、細かに査閲し、もし語の欠陥があると思ったら、私に代って改めて欲しい。私は若い時に経世の学を準備しなかったので、以上の言も他人のものを拾い集めた。お前たちは庸言報を閲覧するとよい。第一号第一篇「国性篇」及び十九号の通論二「未来の中国篇」（呉鼎昌君の著）で、私の数年来の主張の由来が判る。

心忙しく時は迫り、これ以上は話せぬ。私は還暦の故に死ぬのではない。これは数年来久しく決定した謀である。何彼と邪魔が入って遅れたが、これ以上遅らすことはできない。丁度死期に臨んだから、親友にこの遺書を見てもらって諒解を請う次第である。私は慶甡大立に手紙を書こうと思ったが（写真の引伸しは鏡と一緒に四元五、借になっている）果せなかった。平日彼に告げた言は百度を下らない。私のいつも言うていたことを忘れるなと彼に告げよ。手紙を書く、のと異ならぬ。今年田姓を呼んで二度漆を塗らせた。（嘉按ずるにこれは棺材の漆についての遺嘱である）明年三月、永成隆の人が灰漆を一遍、布漆を一遍、又細灰を一遍、又漆を四遍して完了となる。通夜、初七日のお経、百日の一経は俗に従うまで、必ずしも多く読経することはない。（嘉注‥死後の読経についての遺嘱である）葬式の行列は大げさにやってはならぬ。万事私の言う通りにして費用を節約せよ。銭を惜しむのではなく、風俗の為である。役人共の派手

私は再度繰返して言う。何を国性と謂うか。曰く、正義の如き、真誠の如き、良心の如き、公道の如きはみな国性である。換言すれば、即ち天理、民彝は聖道の従って出ずる所のもの、これが吾が国固有の性であり、みな立国の根本である。私は何の為に死ぬか。曰く、私は確かに国性の存せず、国が将に国たらざらんとするを見た。国性は何で存しなくなったか。清末の粃政の醞醸・風俗の日ましの悪化より、民国に至って当局と政客が詭謀を提唱し、正義を賤しめ棄て、遂に陰険邪曲でなければ、自存すらできなくなって、国の基礎が危なくなった。国性を復た大多数の衆に明かにしようとすれば、一両人がこれの先駆となるしかない。この先駆者の手を下す処は、士大夫に在っては道義を提唱し、風化を主持し、国人を喚起して、正道に戻さねばならぬ。世界大同を空言し、政治を高論し、徒らに目的を誇り、却って紛乱を招く者とは、その功用を同日に語る可からず。この乖戻驕漫、昏迷醒めざる際、口を苦くして和平を勧めても、何の功果も見られない。悲惨戦慄の行動を以て、世人がその苦衷を諒察し、これに因って憬然と自覚し、相与に糾合して挽回に忍びざる情を生ずることを願はざるを得ないのである。そうなれば非常の大幸である。もしも毫も感格することなければ、私としては社会に負くことはないが、社会こそ私に負くことになる。海底に寃沈しても、私は何ら心に恨むことはない。私は海底に寃沈することを怕れない。私はこのように海底に寃沈する者が数十人も出て、赤心を吐露し天下に相見えることを願う。そうなれば真理は終に必ず顕彰され、聖道は淪亡しないだろう。将来聖道が復興するとすれば、中国人が自らこれを復興するのである。聖道が外国に行はれ、外国人が我が国の聖道を、我が中国人に行うことを強制するのを待つことはあるまい。昔、春秋の時、太史書きて曰く、趙盾其の君を弑すと。以て朝に示す。趙氏之を殺す。太史の弟又書く。而して死する者二人。乃ち之を舎くと。吾が国に愛国者があるかぎり、国性の淪亡に忍びず一省の中に三、五人を得れば、一国の中に百余人を得る可く、相与に連合して学を講じ（先に各省で自ら講じ、それが積んでいよいよ多くなろう。南通や大名のような名声を標するやり方を真似てはならぬ）心術の上から挽回する。必ず

桂林梁巨川先生語録

後学　景　嘉　輯

巨川先生の遺書は凡そ六種ある。一は遺筆彙存（先生が殉世の志を定めた後、数年間に書き留められた親筆の遺札は写真版になっている）二は感劬山房日記録、三は侍疾日記、四は壬辛類稿、五は伏卯録、六は別竹辞花記で、みな公子の梁漱溟が編輯した。先生は自ら平生文筆を善くせず、筆墨滞渋と謙遜されている。今その遺文を読むと、些か煩瑣を覚えるが、純樸の気、敦厚の思は、まことに深い感じを人に与える。今、先生の遺筆彙存は全録したが、その他の五種も精到の見解が多い。ただ文章が繁雑なので簡要な語録にまとめて、己れを修む、人を論ず、世を論ずの三つに整理した。先生の身を殺して世を救はうとする志は、躍如として表現されている。そして近世中国の堕落の始まりと、士大夫の骨力無き腐儒の気風の由来する所が、その一班を窺知できる。戊午冬十月記す。実に先生の殉死ありて六十年の後である。

修己篇

壬午の年より漸く自愛することを知り、触る処その過ちを省み、見聞を采って日に記し、省疚録と名ずけた。何か得る所があれば筆記したのであるが、ただ手にまかせての塗抹で乱雑極まりない。それでも久しくなると、工夫の進退が験知できる。

な風、文人共の故人称賛を断じて見習ってはならぬ。戊午年十月四日巨川遺筆。
未完も亦完、必ず遺漏があろうが、意を会すれば可い。

はならぬ。

深く世俗の浮偽・卑靡を悪み、天良喪尽し直道存する無しとし、俗の心腸に低き見識の者に遇う毎に衝突を免れず、未だ遇はざるに、衷心よりその鄙戻を思って憤恨し、時に不平の心を生ずる。人の天資は斉しからず、又見聞に執着し、原点に返り難い事情を思はない。一世の人を強いて尽くその為さんと欲する事を奪い、その能くし難き所を責めることが出来ようか。己れを持するは厳しくなくてはならぬが、尽く人を責めてはならぬ。

康氏の居心行事は文句のつけようはない。その孝友仁孝はとくに薄俗を励ますに足る。だが国事の談論では余の意と符合するに至らぬ。蓋し康氏の平素の心構えに一死の心がないからである。余は将来果して死を肯ならか否かは知らないが、事は当に専らその是非を顧みるべく、己れの生死を計るべきでないと信ずる。人は死を惜しまざるに至って、而る後に天下の事は難しと為すに足らぬ。死の説とは、一擲を軽くして徒らに身を殺し、而も仁を成す能はざることでない。戦袍に腥血を浴びて愈よ励み、矢石は左右に落ちて驚かざるが、吾が志である。康氏の惜しむ可きは、とくに其の心の信念の篤からざるに在る。もし常見を破除せしめたら、天民王佐を迂談と為さず、今人も古人の事を做し得ると深く信じ、且つ、自分も古人を模倣せんと欲して、これを他人に待つことはあるまい。そうなれば余は之が為に執鞭を願うだろう。

儒門法語は精実切近で人生の至要、看なくてはならぬ書物である。治舜臣は国子監に在って、各人に一本を手抄することを命じ、皆から迂者と目されている。人はその迂腐を厭がるが、抄して精妙の処に至れば、病根に切に中って、心折れ首肯し、良心が発現せざる者はいないのである。苟しくもこの一念の拡充につとめれば、その進徳成人は大いに望みがある。人々が皆そのようにならなくとも、その中に一人や二人自ら好む者が出て、学識を益し好き人才となり得よう。さすれば他日亦千百人の用を為すに足り、その善美は窮まりないことになる。これらの事は実学を開発し、人心を

忠孝気節を重しと為さず、文章詞賦を学問と視るのが、俗人の大なる不通の論である。しかし器識好ましき上に、又文芸の功に長ずるならば、深厚なる学術と満ち足りた精神を見る可く、貴ぶに足るものであろう。私は平生文墨に心を用いようとせず、実学を尊ぶことを口実に、文章のことはいさぎよしとせず、その実嬉游に時間を転用したのは大いに宜しくない。誠に人為に於ての努力をつとめるなら、修身立徳の餘に於て、事に従って文章に及べば、わが精神の強弱と嗜欲の除去如何を験すことができる。

今、宜しく浮燥の気を屏除しようとして、一挙にこれに至るの念を存してはならぬ。難を先に獲るを後にすとの四字を心に体得し、専ら勉強力行を貴しとする。これより一、二の最も身近の事を先ず行ない、これを厳しく守りこれを持するに恒有り、些かも放縦間断のことなきよう務める。一は則ち毎日早朝一たび醒めれば即刻速かに起き、寝床の中で愚図つかぬことである。天未だ明けず、而もすでに醒めて眠れぬ場合にも、必ず坐して明けるを待ち、臥して待ってはならぬ。心清く体健かにして志を純ならしめるが為である。一は則ち真に大切な用事でなければ、町に出て、或は城門を出て無用の閒遊をせず、外誘と隔絶すること。この二つの事を守って久しき後に、更に勉学すれば、その効は見るべきものがあろう。

手足敏捷で眉目飛揚し、言語敏妙、すべて積極でやる気充分、修飾整麗で応酬が巧みである。このようなことはみな俳優倡妓の為す所、市井の俗流の尚ぶ所、この手合は互いに賞でて自分もその醜体に気がつかず、得意になっている。そんな得意な身振りをする小才子の手合は、一旦真に大事に臨めば茫然自失して、平日人が賞で悦ぶ所のものは、全く何の役にも立たぬ。笑う可きものではないか。廉恥を忘れたこの種の真相を見透し、極力排除すべきである。語に云う、巧言令色、鮮なし仁と。当に自戒すべし。試みに看よ、木訥無能の士人で棄てられている者が、事有る時に到ると、却って人に勝ること百倍である。蓋しその厳正自ら持して胸に蔵した底力は、俗人の得て知る所でない。軽視して

の真の善悪は見出せぬと恐れ、親しくその人に是ならざる処があるを見れば、亦その事の関係する大小を見て、且はその人は永く過ちを改められないとは思はない。もし人が余に罪を得る処があれば、固より余の一身に於て恨はあるものの、事に臨んで人を論ずるには、公所大所よりこれを断ずる。要は公道を存し、私を以て掩はず、その事が大いに誤っていれば、痛烈に斥けても、別の一事が理に合っていれば、それはそれなりに理解する。故に余と極めて好ましい間の人でも、間違いはあり得る。余と極めて仲の悪い人でも、善いことはあり得る。その人が悪くても、死亡困窮の時に遇えば、やはり救助してやるべきである。その人の出身が好くなく、賤しむべき者であっても、黒白を問はねばならぬ場合には、宜しく深沈精細に対処すべきである。実にその罪に当れば、折伏して公道を示す。万一出身好からざる中にも天良材幹を具える者があれば、当に重く用うるべきである。これを用いるには須らくその材に相応はしくすべきは、兵家の要略であり、法文に拘泥せぬ自信のある者の能く解する所、推して言えば宰相の憐才も是の如きに過ぎぬ。（以上は感劬山房日記に見る）

天地我を生み、父母我を教う。数百年に及ぶ風化は我を浸（ひた）し、数十年に及んで師友は我を鍛えてくれた。これらを尽く東流に付し、我が数十年世に為さんと欲する者は、乃ち終に一も施す所が無い。実に我が母の寒夜の授課の苦心に大いに負いている。天が既に我を一興一亡の時代に置いたのは、我をして興亡時代の事を為さしめんと欲したからである。正に宜しくこの事を為すべくして為さないのは、良心の上天職の上に於て甚だ相済まぬものと自覚する。蓋し手に権柄無く、吾の為さんと欲する所を為し得ざるが故に、一死を以て世を諷する。而して又訳の判らぬ死となるを恐れる故に、百忙万欠の中に暇を割いてあれこれと書き綴り、この別竹辞花の記及び世人に敬告する書を作った。いかにせん学識甚だ低く精要の道理を説き得ない。

余は勉めて母の教を承け、事を為すに迂拘を避けず、世道人心を喚起し、澆薄を去って誠篤に就かんと思い、性命を

振作するに、因果の理を崇信し、善を修め福を求むるに較ぶれば、天地の差がある。（注：景嘉按ずるに、治舜臣先生は余の族祖である。字は治麟、葉赫顔札氏、光緒初年、官は国子監司業、清史稿は孝友伝に入れている）

人に接し事に処する間、尚ほ殷勤懇篤の意を欠いて、時に一種かたくなな剛情の気がある。どうも変化を肯んぜず、自らを是とする病を免れぬ。

人の身を治めるのは賊と戦うようなものだ。本有の善が漸次滅び去るのは、敵に侵害されるに異ならぬ。当に収復を求めるべきであるが、取返した後、好い気になって慎守を忘れると、又もや侵略されて潰滅する。更に争戦に尽力して、始めて尺寸の地を取返す。こうして漸く旧日の基業を収復したことになる。力戦し苦守して辛うじて維持でき、一寸でも油断するとやられてしまう。古人が克の一字を下し復の一字を下したのは、不易の真理であり、実に千古学術の定軌である。

気儘であれもこれも手を出し、思其の位を出るのが、余の過ちである。しかし古と今は同じでない。時事まさに艱難、迂儒とて安閑とすましていられようか。

未だ道徳忠義を以て相勉めるを聞かず。屢次の忠告も要するに、用心して謹慎につとめ、事を起して自ら危ない目に遇うな、生命を永らえようという保身の術にすぎぬ。これは郷里の乞児どもの言である。余はこれを聴くを屑よしとせぬ。

怡然渙然として大いに喜んで曰く、人を用うるの法は、当に我が心を推し彼の腹中に置くべし。久しくして自づと能く吾が意の誠に暁然たれば、未だ協力せざるあらず。聯ねて一気を為す者なりと。

余の所謂大度なる者は、極めて真摯極めて重厚の心を以て人を待つを言う。凡そ人が我が前に来れば、先に悪心を以て疑はず、或は彼の言動が我と小なる齟齬あっても、遽かにこの人を悪人なりとせず、更に徐ろに観て、或は他人がコソコソと某には欠点があると告げ口しても、宜しく深く細かに察し、その言を心中に擱いて、先入見で自ら蔽うては人

種々の苦衷を語った。同時に某家・某家例へば母の舅等の家はみな躾が甘かったので終身その子たちを誤まり、家門の衰えを来した事実を引いて、この故に苦労と怨みに任じ、その後の成就を望んだ由を語った。余は幼時これを聴き少しも忘れることが出来ない。年老いて思うと今でも涙が出る。近来独居して黙念する時、本当に恍惚として幼少の時を見るような気がする。そして母の告白した苦衷を歴々として的確に見るようだ。天下の事の真なる者は、自づと能く久しくして渝らないことが判る。そして偽託なる者は、必ず人の心に深く入らぬ。余はこの短い時期に母の詩を検討して印刷に付することはどうしても出来なかったので、ただこの言を為して後を嗣ぐ者に告げ知らせるだけである。（別竹辞花記より）

吾が母の墨跡の保存す可きものは尚ほ数本ある。大学を手写した一本は、親ら装訂され、同治甲子（同治三年・西紀一八六四年）より甲戌（同治十三年、西紀一八七四年）まで余はこれで常に温誦した。子供は大切にすることを知らないので、可成りひどく汚損されているが、装訂はしっかりしている。表紙はなくなったが、字は依然完全である。六歳の時、良郷の外祖母の家で、小注のついた通本大学を完全に暗誦できて、三姑母と吾が母が喜んだのは、ハッキリしないが光緒末年だったように記憶する。先母陳恭人がこの話を時折されていた。又高麗紙に認字課程の一本を写してくれ、又、貢川紙に「唐詩」「庚賦」の二本、又、「試帖詩」一本、又、「開蒙制藝」一本、又、黄紙に「金剛経」一本を写してくれた。これらを能く保存すれば吾が母の手沢は概ね得たことになる。この諸本を美しく表装することを欲しないではなかったが、余の数十年の苦しい生活では、辛うじて門戸を張るだけが手一杯で、とても文人の韻事に縁はなかった。余を不才というのに文句はない。十年前孫孟延は母の書を石印に付するよう勧めてくれたことがある。余は通り一遍のお世辞と思った。承平の故態として、往々その先人の遺稿などを刻して世に顕はすが、その実文采盛んなほど真樸の意は薄く、徒らに虚偽の風を増すだけである。腹のくちい者には空腹の者の気持は判らない。孟延は貴族の子

以て社会に貢献するを惜しまない。故に余の近年の行事及び今此の最終の局は、みな同治六七年間の、吾が母の寒宵督課の時に結ばれた果実の成熟し発現したものである。独り思うに、中国の自強は必ずや先に文士なる者をすべて放逐して而る後に行はれるであろう。（以上別竹辞花記に見る）

先母劉恭人の遺詩は数十首に過ぎず、余もよく記憶していない。館名は碧梧翠竹であるが、何故かいくら捜しても見付からぬ。已卯の年（光緒五年）余に命じて旧作を団扇に書かせ、祖庚姉（陸氏、先生の長姉）の嫁入に贈ったことがある。白竹紙本であったが、余は殆んど家にいなかったので、何処に在るか判らない。もし見付かったら近縁の者によくきいて、ハッキリしない字があれば空けて置くがよい。咸豊年間、或る人が先祖のことで君の挙家は詩が工みだと話していたが、それは四姑母の詩稿簫台遺韻を指して言うたことだろう。余の母及び三姑母もみな詩を能くした。大姑母、二姑母（父の姉妹を姑母という）は吟詠に耽ることはなかったが詩作は能くした。それで挙家は詩に工みと云うのである。母は詩に自信をもっていなかった。余は先母の遺筆に於て、全力を徳義上に重きを置き、詩詞には重きを置かぬ。先母は親しく「五種遺規」「格言」等の書を手抄したのみか、古文の中で道徳や至性に関する者、「敬姜論労逸」「陳情表」「瀧岡阡表」等を、細かに講じて余に授けてくれた。余は記憶も理解も善くしなかったので、厳しく督励され、頑愚の中にも一点泯びざる良知を激発された。これこそ吾が母の真の苦心であり、天地国家の元気の関はる処である。故に余は吾が母を表彰するに徳義を以て重点とし、詩詞を軽く視るのである。（幼年時に母が詞曲類を手にするのを見たし、時には雨絲風片等の句や趙五娘等の句を吟ずるのを耳にした。少しは詩曲の心得もあったと思はれる）

余の幼時に、吾が母が厳酷に過ぎるとの譏りが相当にあって、母も幾度か躊躇し世評を気にしたらしいが、世評に惑はず事々に厳峻な態度で余を律した。思うに余の天資が中下の等級で、堕落し易いと視てそうされたのであろう。一たび緩くしたら必ず成る所無かったろう。母はこれを深く察した。余が稍長ずるに及んで、母は涙ながらに、余に従前の

論人篇

私は事細かに心を落着け永い間観察して、李蒓客先生慈銘は、確かに間違った人物であることを知るに至った。近来世上の読書人は根本を務めず、詞章考據の一面に偏している。淵博能文なる者は大名を享け、士林の景仰する所となる。士風が尽く浮偽の途に入るのは、皆この種の人物の奨励に由るものだ。蒓客のやる事のすべてを、私は知り得ない。知っても亦すべてを尽すことは出来ない。彼は部長となると書を朝邑相国閻文介公・敬銘に投じ、大いに謾罵を肆ままにし、朝邑は小人の陋劣、何ぞ政を為すに足らんと謂うた。彼はこれで自ら傲吏を矜った。一般の文人名士も亦相与に津々と称道して曰く気節凡ならずと。その実これは全く読書人の門面の習気で、どうして気節というべきであろう。朝邑は局量褊小で、才識の浅い者、議す可きものが無いではない。然しながら其の一短に因って其の老成宿望を否定すべきでない。清樸八忠なる者は、司官を以てして別に意有って長官に忤らい、矯激刻薄反って美名を博し、独り士風を尽く浮偽に変えたのみならず、正にその流弊影響が将に国家治乱に及ぶを恐れるのである。又蒓客は天下に彼の師と為すに足る者無しと思っているらしい。故に彼に在っては所謂師長は無く、一切は平等である。従って公然と論争し罵言を吐くこと、庚辰の会試に房師林侍御に謁した時でもそうであった。天下衆知のことである。庚午の郷議の主考は李約農（文田）であった。若翁の学問が素より有名であったので、互いに関係が善かったが、時に議論が合はないと、面と向って大いに斥け、仲裁人が出ることも屢々であった。又潘文勤（祖蔭）は上賓を以て待ち、極めて友誼関係にあったのに、宴会の席上で漫罵された。彼の性癖の故だろう。上調子の挙動は深く論ずるに足らないとしても、私の憂へるのは、人柄がこのようである上に、嘗て忠孝・品節・学問・経済を談じたことがないのである。この害たるや言うも

だから承平の故態があるのは当然である。吾が母は詩を能くし字を能くすると自ら信じていた人ではない。ただ徳義を以て自ら勉めた人である。表彰す可き実徳がある以上、何も末技を云々することもあるまい。今、世風の悪化は極点に到り、先民の古訓は破壊されて存し得ない。正しく徳義を以て世風を挽回することが急務である。人々は操修に務めず、正しく救世と相反している。譬へば世の側に需要があって人の側には供給がない。故に余は勉めて母の教を承け、事を作すに迂拘を避けず、世道人心を喚起し、澆薄を去って誠篤に就き、性命を以て社会に貢献せんと思う。故に余の近年の行事及び今茲に行はんとする最終の局は、みな同治六、七、八、九年間の吾が母が寒夜に督課された時、給はりし所の種子が、此の時に至って始めて成熟し発現したものである。（別竹辞花記）

　これからしても家庭教育はやらねばならぬ。古に云う、父兄の教は粛ならずして成り、子弟の率は労せずして謹しむと。最も精確である。専ら学校の泛々たる指導の力にのみ恃むなら、断じて功を為し難い。父母の子女に対する態度は、固より苛烈であってはならぬが、とくに放漫であってはならぬ。今世の風は二十年前に比べて、天地の差がある。人々は利に奔り名を争い、驕慢と諂諛が百出し、良心の何ものかを知らない。蓋し幼童の時から礼義を聞かないからである。子弟は父兄に対し、家族主義打破の説を持する者が多く、家庭は子女に対し敢て督責しない。そして云うのに、社会の相互の監督に任せれば、人格は自然に能く良好となると。こんな道理がない。勢い将に吾が国の教育は沈淪し亡んで存しないことになろう。余は前途が何処で底止するか知らない。まこと天に向って大哭するしかない。吾は世を挙げて我を以て然りと為さざるを知る。即ち親しい張蓉西の輩も亦必ずしも我を以て然りとしないだろう。（別竹辞花記）

た上書に対して、その苦心を察せず、書中に言う所が正義なりや否やに一顧を与えず、これぞ亡国の旧習である。

張季直（張謇・字季直・南通の人、清末の状元、紡績等の新産業を興す）湯蟄仙（湯寿潜、字は蟄仙、清朝の大官、革命に協力し、民国元年交通部長に任ず）に告ぐ。公等は素より儒を学んで一世の宗とする所、倫常節操の義に於ては、必ず習聞せしならん。この度は革命を援助せらる。もし国家の危亡を挽回し、人民の苦痛を軽減せんが為の所業なれば、功既に成る。左手は君位を顛覆したれば、右手に即時刀を把って自殺し、同時に革命人士に本心より共和を力行し時機に負く勿れと、語を寄すべし。此の如ければ則ち上は地下に於て君父と祖宗に対すべく、下も亦心を明かにして義理を千秋に遺す可く、乃ち真に世局を旋転し、澆薄の弊風を貽（のこ）さざるべく、実に社会・人心・国家の前途に効を致すこと極めて大なりしならん。蓋し公等の地位は、草莽より起りし一般の新人物留学生に比すべきに非ず。もし此の如きを能くせざれば、則ち精神を振起し、主義を堅持し、民国の為に事を作し、一切の力を犠牲に供するを惜しまざるべし。蓋し進退拠る無きの愆（あやまち）はともあれ、亦尚ほ不朽と為る可し。もし前事を頓に忘れ、国事と義理に関心なく世と推移し、忽ち名士と為り忽ち大官と為り、逸楽宴安し、流俗に同ずるは、吾竊かに公等の為に痛惜す。（伏卯録）

（注：景嘉按ずるに、張謇は本と反覆常無き小人、ただ才有るにより、頗ぶる時人に重んじられた。郷里に居た時、友人の妻と通じ、良民の田地を佔有する等の所業があった。今日になっても、彼を偉人であり大政治家であり大実業家であると称する者がいる。人と世を論じて、民国に是非の公準の無いことは、この一事にもその一班を見るのである）

在昔の士習儒風は、時に乗じ勢を得た者と往来することを憎み、恥ず可きものとした。今は競ってこの者に拝趨する風を成し、清節の何たるかを知らぬ。賢者も亦この風をよしとして自らを許している。

百の文人も一の樸士に如かざるを知らねばならぬ。樸士は身を挺して世を救う。文人は袖手空言して名を求める。（伏卯録）

愚かである。蓋し一切が浮偽迷謬に陥り、復た忠孝・品節・学問・経済の真が亡びる惧れがある。忠孝品節は元来実理実事であり、尋常日用の間に在る。この平平奇無き誠心は、名色を好み評判を求め文章を作る手合の為には役立つまい。人に矜り名を慕い、この為に言動し、是ならずと思っても、それを行動に現はさない。学問・経済は更に文人名士の知る所でない。治国・治民・治兵・河務・漕務・交隣（外交）互市（貿易）籌辺等、要は切に実事を求むるに在る。真の能力は窓下の読書で出来るのではない。何冊かの本を誦し得ても、世事は全く通ぜず、ただ能くする所は坐して論ずるのみの者は、天下何の役に立つか。聞けば、蒓客の家政は治まらず、権は僕媼の手に在ると。この天生無用に似た人物にして、経済を談ずる、その誤謬はいかばかりであろうか。余は蒓客に何の怨みもないし、相識でもないのに、反覆弁ずる所以は、彼一人にのみ不満ではないのである。兪蔭甫（名は樾、曲園と号す）の如きも、経学を以て抗顔一代の名師となった。初めは窮年文墨を弄し、全く故紙の中に向って暮しを立てていた者である。何の実行も何の能力もない、蒓客と同じ手合の一人である。而も南方では大いにもてはやされている。まこと世風の為に歎かれる。兪も李も思へば先輩に当る。大した器量も識見もないが、その文芸は相当のもので、後生の末学が悪口できるものではない。而も余が彼らの存在の人心世道との関係を一たび思うと、心中太息痛恨せざるを得ないのである。故に詳記して、戦々競々自ら戒しめ、且は後人に示す次第である。（感劬山房日記）

（注・景嘉按ずるに、李慈銘、字は蒓客、会稽の人、同治光緒の間に有名の学者である。この人は気を負うて敢言した。兪樾、字は曲園、浙江清徳の人。清末の経学の大師である。この二人は当時みな威名嘖々であったが、実は郷愿の徒であった。先生のこの論を観れば、清末の伝統的読書人がみな虚名と矯飾のみで、実と行を並び重んじなかったことが知れる。）

清慶邸（慶親王、清末の大権を握る）では人の上書は放置して看なかったと聞く。心血を注いで多年調査研究に成っ

ろうか。貧しくも倹素に暮す人々の中に人才が絶無というのか。又私の経歴がどうかを問うたこともない。扇面に字を書くことは一些事だろうが、それも永久に放置して何の痛痒を感じない。悪い空気を造っている官僚たちには、頼まれなくても、揮毫するではないのか。救亡に痛哭し、真の人才を求め、実事を行う云々は単なる空言にすぎないではないか、

この頃小叫天（俳優の名）の為に刺繍の漁翁の図に、四海一人、偶然玩世、歌哭勧人と題したのを見た。文人の実際を軽んじ、古今黒白是非を全く顚倒することの甚しいのに、今更驚く。叫天は賤優であり、社会の害虫である。その一生の悪事穢行は書ききれない。この輩は何も判らぬ虫けらだから、徳義を望んだり責めるがことはない。それにしても孝欽（西太后）に迎合し、戊戌八月、この輩は諂諛振りに何と言ったか。康有為、梁啓超の叛逆の大罪は、刻み切りにして肉びしおにしてもまだ足らぬ。もし奴叫天が逢ったら、その死体を三度足蹴りにして、唾をかけてやり、老仏爺（西太后）に御恩返し致し、胸中の恨みを晴らしますと。これは戊戌八月人々の流行語になったのである。そしてこの俳優は太監と会って、この言葉は西太后とその側近に愉快なものとされた。康梁に対してだけではなく、徳宗（光緒帝）に対しても亦同じことを言っている。私は真実を確めて記している。

蓋し彼の徒輩の慣例は昔からこうなのであるから、今更責むるに足らぬことは、私も知っている。だがその奸悪虚偽・驕傲狼毒、窮民を凌虐し、虎の威を借りて威張り散らすに至っては、みなこの輩の第二の天性で、実例は山程あり、怪しむに足らぬ。ただ怪しむべきは、これが一度文人の品評にかかると、聖賢節義の仲間に入ってしまうことだ。任公は叫天に詩を題してやる暇はあるが、私の為に字を書く暇は無いのである。何で気類の観念がこうまで無くなったのか。或は叫天は有名な人間で、私は世に聞えぬ無名の人間だから、何も筆を動かすに足らぬというのか。それにしても、私は任公が二十年の中国を救はんとの心を没するに忍びないので、その言う所を能く行はんことを望むのである。（休卯録）

梁節庵は崇陵に在って、声を厲しく親貴の不良を罵しり、来って陵に謁しない。民国の達官が握手を欲しても、趨ってこれを避ける。風節凛然、情を邱壑に縦ままにし、詩酒自ら娯しみ、徒らに名士を以て自ら矜る者と比す可くもない。（伏卯録）

私は真心から梁任公（即ち梁啓超）を傾慕し、景仰数十年に及んだ。中国を救う第一等の人物と考えてきた。癸丑の年、死を以てこの人を国民の前に推薦せんと欲した。ただ私が迂愚で拘泥する性質のため、交際下手で知り合う機会をもたなかった。僅かに手紙を書いて何かの縁に与かろうとし、扇聯の揮毫をお願いした。これだけ敬慕していることだし、気類相感というから、私の気持が通じて必ず承諾して下さると、自分で思っていたのである。私は五度訪問して一度も遇えなかったが、このことは手紙でも決して触れなかった。所が扇聯は今に至っても書いてもらえないし、一言の返事もなく、人を介しての挨拶もない。前に癭公に頼んで当方の意を伝えたが、何の音沙汰もなかった。要するに梁公は、草茅の中には決して佳士はいない、樸魯にして文を能くせず、何の名も位も無い者は、決して治国の事は語るに足らずと考えているようである。彼の与に語る者は、みな酒を飲んで詩を賦し、文章を能くし、翰墨に工みで、身は顕貴の地位に居て、互いに交際を繁くし、身銭を切って遊興でき、哀しいことは文学に託し、気節は詩歌に寄せ、救民救国を口頭禅とし、日日を聊かでも娯しむことを務めとする、このような連中である。壬子の年、彼は演説で云うた、京師の悪い空気はあまりにひどすぎる。私は京師に来て半月だが、この悪い空気が私の脳に触れたことを自覚する。これに染って久しくなったら、自覚しないようになるのが恐しい。速かに避けて官場の悪習から免れるべきだ云々。この言まことに高潔である。では何故に総長になると、俗に随い化に同じて、旧官僚と何の異ならぬ次第になったのか。彼が人才に対してどうか、他人のことは私は知らぬ。私自身は相手にされず、一度の面会も許されなかった。一度の面談もなくして、どうして私が一文にも値せぬことが判ろうか。彼が毎日唱和している文人は、いつ真に民事を心にかけたであ

いが、私は概ね責めない。しかし湘綺（王の別号）を責めるのは、彼が鴻儒の重名を負うて、徒らに私利を営み、世事に於て何の覩る所も無いからである。吾が国の師法先達の理からして、士林の師表と為す訳にはゆかない。しかも私は始めはこの人物に心より期望を抱き、身を浄め誠敬の意を以て上書したのである。その行を実験して頓に望を失ない求めていた扇対の揮毫もそれ以上は求めなかった。誠に心が痛むのである。（伏卯録）

甲午の役には、まだ外国の借款を特別の事としたのは、吾が民を傷つけることを遠慮したからである。辛亥以後、袁逆の罪悪は最も重い。壬子・癸丑・甲寅・乙卯に丙辰（即ち民国元年より五年に至る）に外国からの借金は、清朝のそれに数十倍している。（自己の地位を固めるための借款が十の七八を占める。人心の悪化は当然だ）彼は専ら盗賊を製造し、姦凶を奨励し、人心を悪化し、民命を毒害するためにこれを用いて、完善の国家をして破裂に変らせ、敦厚の風俗を汚穢に変じた。これを袁逆と国民党が互いにやったのである。主力は袁であるが、これを激化促進したのは国民党で、彼らの罪はひとしく許し得ない。（伏卯録）

余は文人の無行を最も軽蔑する。偶ま樊山（樊増祥、字は樊山、清の翰林、民国の初、袁世凱に仕え、詩人として有名）の詩句を見て、録して批判の資料にして置く。句に云う「黄金散尽還北走」（官嚢久しく富むは人の共に知る所、どうして遽かに尽きよう。鼠は河に飲んで満腹する。七尺の身何で餓死に至ろう。況んや男児たる者、餓死も亦尋常の事。徒らに詞を飾って自ら解する。試みに問う、品節と餓死と孰れが重きか。彼が富貴を貪ぼったのは明白の事実である。文人の言の全く偽はりなことが、玆に正しく示されている）「坐使籠鳥慚冥鴻」「大夫七十当紅仕」（今此の時紅仕を言うは不倫）「我猶乞食顔為紅」（文人つねに紅顔を云う、実は恥知らずである）「出山徒為孺子牛」（弁解の辞無きに到って出山等の字を籍り、自慚の語となす）「入世非復老子龍」「杜門坐耗太倉粟」「豈是平生稽古功」（稽古の二字は空言、抑も世道を解するや）「屈賈幽憂竟何益」「城南聯句聊相従」（君父国家の大難を言はずして、聊の仕

張季直の事は、余は別に記してある。今又新聞記事を一つ録して置く。江南の大なる名宿、従政の餘、心を戯曲に留め、近作の一詩を、小楷にて大扇に写し、伴うに錦聯を以て、瘿公の紹介を求めて、梅蘭芳に贈る。自ら言う二十年来未だ嘗て少年此の如き殷勤を為さずと。梅は深く感激し、特に思凡（劇名）を演じ以て之に酬ゆ。季直望外の喜云々と。この記事により、この老人の心中に国事の艱難・民生の困窮・風俗の頽廃・世道の衰退等が刺激して生ずる不安の念が更に存しないことが判る。しかも国乱れ民貧しく、教化地を掃って存せず、人心沈淪する状況が又日に衆人の口に云々されると、これに声を同じくして嗟嘆して止まないのだ。此を之心死せりと謂う。（伏卯録）

王壬秋（王闓運・湖南の大学者、極めて時望を負う）が来京した初めの時、私は国人の模範たらんことを望み、上書して懇々とこれを言った。真逆壬秋の心目中の所見と、私のそれがひどく異なるとは知らなかった。（最近、謝楊潜庵が鹿脯に寄せた詩中に「昔我北游曳長裾」「五侯鯖美常乞余」「王門珍賜毎先餽」又「去年重入彰儀門」「正求甘肉不説士」又「淹留終歳那得致」「食指不動帰何謀」又「即今海内大徴兵」「吾儕飽食臥不驚」等の句がある。知る可しこの老は世を重んじていない。丙辰二月偶注）彼が高く攀づ可からざるの事と自負するのは、僅かに文章が時流に欽仰されることである。世道人心を振起し、民生国計を挽救する志は断じて無い。故に彼のやる事は、官僚と同様で、自ら身は衰世に居るを憤激したことはない。甲寅五月に国史館が開かれた時の賓僚との坐談で自分は毎月給料をもらって仕事はしない。実に瀟洒脱俗であるとの意味を語っている。又総統との交情を恃んで、その子を青島の学校事務扱いの役人に指名してもらった。仕事が楽で月給が好いからである。暫らくして青島の事（日独戦争を指す）が起ったので、今度は国史館の会計総司に転任させ、自身は飄然湖南に帰郷した。辞任せずして帰郷し、職務は放置したままであった。帰郷してから二年、史館の仕事は何もしないで、しかも毎月一千元の給与は月毎に受取っている。それを少しも恥じていない。この国用欠乏し、官紀地を掃った時、孟子を援用して泰とすることは出来まい。役人共にはこんな卑劣な者は多

ある。徳宗が知ったら、戊戌の年の誤ちは公の言を信じたことと悔まれよう。（伏卯録）

復辟の諸人は事敗れた後に生命を保証することを条件にした故に、私は諸公に代って死に赴くを願うのである。（伏卯録）

癭公が樊山を「老鶴何曾一著俳」と称したのは、殊に公正を欠く。もし鳴高抗節を以て任ずるなら、自ら首陽に隠るべきである。蓋し出処進退は師儒の品格に関はり、一世の士大夫を励ます大事であり、軽々に扱うべきことでない。況んや顕著な事実がある。詩人の虚しい阿諛の語で、遂に新朝に臣たらざるが如き感じを与えている。余は素より文人の巧偽を憎む。丙辰の年正月（民国五年）樊山の守歳詩を詳しく批評したことがある。今想い出せぬが、新聞の切抜は保存してあるから検出できよう。樊山が雙俸（清廷と民国政府の両方の俸給）を叨食し云々と自ら言うているのが動かせぬ証拠である。試みに思え、参政の名に居り、雙俸の禄は受ける。出仕の形なれば避けて居らない。共和は清廷の禅譲に由って来たのである。旧君の遺詔には、爾大小の臣工は、力めて生民の安きを図り、今まで通り職を供せよの語があった。もし樊氏が本心から民の為を思えば、その匡輔も失節の嫌は無いだろう。だが袁氏の詐欺と私心を察知した以上、拒否して自ら明かにすべきであろう。樊の宦嚢を以てすれば餓死には至るまい。乙卯除夕の詩には、友として居て未だ臣と為らずの意があった。余はすべてを記憶していない。また旧君が息民の故を以て、神器大位を挙げて犠牲にするを惜しまなかったことを思うというような詩もあった。それなのに民国の財政困窮を坐視し、身を以て模範とならず、逍遥無事、俸給をもらって安居し、酒を飲んで詩を賦し、日に楽しみを求めている。又その上に自らを孤忠の遺老に託して、天下後世の人を欺いている。文人の巧、誰がこの者に過ぐる者があろうか。（伏卯録）

近頃寇太監の事を称揚する者がいる。太監寇連材は数年書を読んだ田舎者としては、字を多く識っている程度の人間である。妻子があったが、農事の苦労が厭で父母とうまくゆかず、家出して京師に来て遊んでいる中に、閹人になると

を言うて相従う。実に其の軽んずる所を重んずるの輩である）又「世以頽唐薄老手」「良由浮靡亡根源」「斯文墜地望提掇」「我曹豈得職其難」「君不見姚許入元振墜緒」「愁遺諸老寧非天」（斯文を提掇するに何事を重んずべきか。姚許入元を以て軽々に自らを擬し、これを以て墜緒を振うとは。文墨あるも廉恥無き人を多く造るだけではないか、斯文愈よ振って道徳愈よ墜つるのみ）「漢初諸儒飢欲死」「求書久乃煩陳農」「蒲輪安車走天下」「所不能致惟二龔」（二龔の出でざるは真に敬す可し。惟だ今日の岌々たる国情は、一旦東隣（日露を指すか？）が藉口すれば、全国は沸騰しよう。何処に走らす可き安車があるか。この辺がつまり文人の迂腐なる所以である）「君不北去我南徙」「待秋擬渉鴛湖水」（既に南徙を云うも又行くを肯んぜず。孟子の所謂以て来年を待つである。蓋し本意は行に在らず、徒らに此の言を存して自負するのが、乃ち文人の慣態である。古来文人は天下の好事を説き尽して、曽て一事も実行せざる者が多い。万事に実無しと謂う可く、独り樊一人を責めても意味が無かろう）「床頭屋漏検新詩」「亭角斜陽尋野史」（忽ち野史亭を尋ねようとしても、既に新朝の臣ではないか。それが又遺老となりすます。ただ世間の美名を選んでこれに居たいだけのこと。自己の事実が自己の言に合致しているか否かを顧みないのだから、話にもならぬ。）（伏卯録）

康有為が微服して徐州に入ったという。（何で微服せねばならないのか）、又微服して北京に入ったともいい、その踪跡たるやコソ泥に似ている。君主立憲を以て中国を救はんとするのか。抑も徳宗の知遇に報ゆるとの口実で、功名富貴を得ようとするのか。功名富貴の想は、市井無頼の抱くところ、敢て君を疑はないことにする。既に袁の帝を称するを排して、独り退位の清廷を擁護した。一介の孺子をして、その上を制するを主宰せしめ、百官を率いて朝賀したのは、一挙に富強の列に至るに足るとしたものか。主恩に報いるにも亦人を愛するにも徳を以てするを法とすべきである。清廷の譲政は千古に無き所である。これをして復辟させるのは、国人の怨みを求め、専ら成り難きを欲するものである。衆怒は犯し難い。これは隠に清廷を全国の目標にすることである。祚席を奪って水火に投ずるを惜しまざる所業で

于晦若（式枚）は清修博学、一世の宗である。久しく文忠（李鴻章）の幕下に在り、辛亥の後は遺老を以て自ら居て、民国に仕えなかった（旧官の顕官となり、国外に亡命した富紳とは同日に語れない）が、平江の公所に急死した。臨終の一日前、猶ほ筆を奮って「大清誥授光禄大夫・吏部右侍郎」等の字を大書しているという。新聞は又、労玉初（労乃宣、桐城の人）は自ら清望を恃み、頗ぶる圭角を露はした。于は沈黙寡言、物外に超然としていたと報じている。余は于公に敬服すること二十年に及ぶ。光緒の末年に、その持論を聞くにあまりに事勿れに過ぎるので、新開路胡同で対面して事勿れで専ら保身に務めてはならぬと告げたことがある。于は、今日の事は剛直でも亦能く為す無い。むしろ遜順にして忌禍を免れるに如かずと云うのである。余は清直の才をもちながら斬然憤激して世を救はぬ彼を心に惜んだ。清の遺老は相継いで弾冠し、他に靡く志無き者は、寥々として数えるしかない。于の如く客舎に死ぬのは、片面の志行だとしても、亦得難い。乙卯七月半。（伏卯録）

論世篇

古より立国の道は必ず国民に依存し、国民をして結合せしめる一種の信条がなくてはならぬ。かくて後、天地の間に国は始めて成立する。この信条は何か。一身の所属する国に対しては、宜しく休戚を同じくして、これに求心的であり、離反する心が無かるべきである。時に怨恨の気持から離れても、断じて平素の求心的の濃やかな気持を代表する一人がいなくてはならぬ。この一両人がこれを代表すれば、その他の人々は実践躬行しなくとも、心中必ずこれに應えて同調して、この信条は常に人々の気持に印象づけられる。だから一旦外国の強い力が臨んでも驚かず、揺さぶりをかけられても動かず、朽木の摧け倒れるがごとくにはならない。中国が数千年に亘り巍然として独立し、存続して亡びざる所以である。（遺筆の国人に告ぐる書より）

勧められ、文太監を師とした。その後奏事処の役に就いた。この役は収入がよく、毎年二、三千金は入る。その後、東朝が彼の資質が浅いとの理由で司房太監に転任させた。司房は雑務で最も苦労が多い。寇は不平で逃走し、師の文姓を訪ずれようとし、山海関で捕えられてしまった。文姓は潤亭と号し、文廷式が交結した太監で、奏事処に在り、権力を振い、大官と腐れ縁をもって大儲けした者である。

甲午の年、珍妃が賄賂を取って官を売った事件が発覚し、関係者は重く罰せられ、文も黒龍江の軍に流罪となった。寇が関を出ようとしたのは、文に頼ろうとしたからである。彼は連れ戻され司房の役をいいつかったが、面白くなく遂に違例の上奏をやって、死を求めた。上奏文の中に数ケ条は当を得た諫言があった。園に遊ばずに宮室に戻ること、演劇中止のこと、土木停止のこと等はそれである。その他の国政を論じたものは児戯にすぎぬ荒唐無稽のもので、大半は小説の中から引張り出した文句である。仕舞の方に賢徳の者を選ぶ、大位を禅譲する等の語があって、又物議を醸し、一般の文人士大夫は紛々として論議し、上は諫を納れないとか、忠直の者を誅戮するとか騒いで、寇の美が喧伝された。一時都下では、寇太監従容臨菜市、文学士駆逐返萍郷の聯が行はれた。余は凡そ事は実を求める。以上は琉璃廠の松竹斎にいる嫡堂弟及び表兄靳姓なる者に確めたものである。私意を以て歪めたものでない。（伏卯録）

新聞は会賢堂の修禊を、風雅を提唱し、国学を表揚する云々と報じている。固より芸林の盛事である。そして某々は謝して到らないのは、時事の故に晏游せざる意で、東晉の朝官清談の病を矯正するものでもあろう。関（不詳）羅（惇融）樊（増祥）易（順鼎）の諸公は政界の人であり又名士でもある。詩鐘社を設立して月に四回開会する。。毎木曜日に別荘で開く。乙卯四月には第一、二、三回目の会の由。吾が国が太平でないと誰が云うのか。その詩を観ると、固より憂憤の情に満ちている。小盛を見れば頌揚し、驚耗を聞けば悲歎する。蓋し文人は能く言う外には事とする所は無いのである。（伏卯録）

今稍や知識のある人で四十以上の者は、商人でも農家の者でも、異口同音にみな云う。今日の人心の放肆は、大乱にならねばすむまいと。これは人々の思い過しか、抑も偏信無識の致すところか。（この中には愚者も無知もいようが、何で人々皆言うのか）（伏卵録）

大抵の俗人はいつも当事者と隔絶した場所にいて、伝説を弄ぶ。或は下位に居て政府を憶惻し、或は京師に在って外省の事を云々し、或は南人で北方を論じ、或は中国にいて外国を談じ、或は今日に由り従前を説き、時事を周知すると自負して真実を顧みない。好むで論議して実状を求めない。絶無の事を群がって真と為す。極めて好い人を群指して悪者にし、伝へらる場面が広ければ、小に因って大を加え、微虚が積って実と成る。士女の毀誉は発しては歌謡となり、稗史の遊談は誤って方冊に入る。このような事は数え尽せぬ。総べて宜しく自身を高きに置いて、力めて上游を争い、衆論の在る所を澄んだ気持で黙察し、至公至平の心で、自主的に衡量すべきである。衆論と意見を異にしても、遑かに弁駁する要はない。大変が起ったら、よく先づ鎮静につとめ、よくよく注意して事態を審察することに務めるべきである。凡そ大事一たび起れば、紛々たる議論が必ず生ずる。京朝では部官が走り廻って告げ、外省では属官たちが勝手に指摩憶惻し、軍営ではコソコソ偶語し、伝聞して驚く。そこで苟しくも自ら把握する所がなくては、動揺し惑うだけであろう。（成劬山房日記）

国家の盛衰は即ち国民の生計の盛衰が決する。今、兵禍は続き、百業は荒廃、水旱時ならず、瘡痍満目の有様である。しかも皆が猶ほ飯が食えるのは、田間郷村にいる多数の素直な無知の農民野老と樸実勤労の職人や小商人が、刻苦し力作し苦労して節約し貯蓄する日々のお庇である。だから一面で国力と世道は傷耗されていながら、一面で国人の生活が成り立っているのである。そして上に在る者はこの有難い勤労者を搾取して、官僚・政客・軍人・議員たちの浪費の資に供している。又、市政とか勧業とかの名目で、城壁を壊し、道路を開き、市場を作り、游民の行楽を助け、恭

思うに近年、時事艱険の故に朝廷は鋭意治を求め、法を変じて強きを図り、一時謀国の臣の憂時の者は上奏して条陳し、或は完美の法規に意を注ぎ、或は遠大の政策に心を究む。凡そ西洋列国に行なって有効の者は、我も必ずこれを模倣せよとした。且西国は一二事を行いて己に富強に致せるに足りし者、我は則ち数十国の数十事を兼ね採って並行せんという。治を求むるの法に就て論ずるに、既に周ねからずと謂う可からず。即ちこれを泰西諸国に考えるに、当年強を致し富を致せる当初に於ては、未だ必ずしも我が国の今日採取する富に如かず。然り而して我は愈よ治を求めて愈よ治まらず。且は乱源を増長し、弊竇を叢生し、岌岌日を終う可からず。竊かに嘗て反復思維するに、乃ち挙国騒慌する者は未だ嘗て真に要害に中らざるなり。吾国今日の要害は人の敝なり。法の敝に非ざるなり。夫れ法敝れて国治まらざる者は制度条文に於て斟酌損益し、時に因り宜しきを制する妙を曲尽す可し。人敝れて国治まらざる者は、品行心術の上より真剣に砥礪し、天下をして回心善に向はしむに非ざれば、断じて衰を扶け弊を救うの言う可く無きなり。（辛壬類稿、未だ上さざる書中の語）

凡そ自身を検束する能はざる者は、安んぞ能く他人を規制せん。人を責むるに厳しく、己れを律するに寛なるは、立言山積すと雖も、社会は初めより一分の益を受けず。（実に無窮の混乱を受く）人を験する道は、その人を責むる言論に就て、その当否を評す可からず。応に自ら律する行為に於てその虚実を察す可し。（伏卯録）

以前の人民の性情が樸誠淑善、礼法謹厳であったことをこの目で確めている人でないと、目前の現象の惨として傷心すべきことが判らないのである。今日の甚しくは解するを求めざる人には、得失を判別する常識はない。そこで利害を注意して弁別せず、或は紛華奢靡の現象を、国家康楽の証と為すに足ると思い、治道はすでに前より進歩したと考える。幾千年来の立国の要素は断たれ、その流れて破壊の極みに在ることを、経験ある者は実によく知り、歌う可きか哭く可きか如何ともする無きが実状である。これは好むで異論を立て反対意見を唱える言ではない。（伏卯録）

高機関に居り、国民から最も重い寄託を受けた者が、靦然と自ら誇って何の恥も感じない。このような議員が天下大乱の時に、どんな醜態をさらすのか、想像もつかぬ。（伏卵録）

近日の見聞で始めて知って大いに不思議と思ったのは、夤縁請謁のことである。事実あるのであって、噂だけではない。しかもこれをやる文人学士は、口に非としながら喜んでやっているという。人を責める者が未だ必ずしも自ら能く実行していないのだ。士風の衰えか。（成劬山房日記）

梁卓如（即ち梁啓超）は学校の演説で、京師は首善たる区と為す可きも。亦首悪の区と為ることも当然である。諸君は血気未だ定まらざる年齢で、この万悪の社会の中にいて、群魔と縁を結び、将来何処まで堕落するか知れたものでない。どうして時弊を匡救できようか云々とあったそうだ。この言は痛切でないことはない。しかし首の二句は事を論じて公正でない。思うに今日の風習の悪化は全国皆然りである。京師の社会は現在では固より甚だ悪い。だが二十年以前は、清正樸誠たるを失はなかった。更に三十年前以上に遡ると、朝政は上は思慮深遠を以て主持し、下たる士林は励節名を磨くことを互いに勉めた。民に非なりと禁ずれば、民は上の命令とつつしみこれに違うことを恐れた。悪人共の叢窟はあっても、深く匿れて敢て表面に出なかった。だから百数十年来、京師は各省にくらべて道揆は謹厳であり、官吏から庶民に至るまでこれを当然のこととしていた。これに違うことは奇怪なりとして驚く次第であった。これが首善の善を善とした所以である。（新人物は十年前の状況すら実見していないので、古い昔のことを知らず、勝手に今の人事は昔より勝っていると断定している）近く維新以来、放任を好いことにして、上海の淫靡放蕩は、人として恥しいことであるのに、今は公然とこれに効っている。昔は不肖の者と目された官吏の汚職収賄も、今は相率いて真似をする。大衆の視聴もこのために変ってしまった。士人は修養を心がけず、商人は利のみ追って争う。堕落の弊は日一日と甚しい。大抵上海の悪風、地方官の悪習は南よりして北に及び、京師に流れ込む。南方が先導して、北京が汚染されて、こ

楼・劇場・旅館・飲食店は軒を並べ、高楼は聳え立ち、電灯は眩しく、自動車馬車は走り、熙々攘々として太平の賑はいを見せている。この賑はいは小民の血と汗の結晶を極力消耗することで成り立っているのだ。表面栄えているようだが、内実は衰え、国民の生計は苦しくなるばかり、社会は根底が崩れつつあって、根本的に建て直さぬかぎり、大乱は必至である。（伏卯録）

　議員が京師に来ると、政府が宿舎を用意し、人を派遣して面倒をみてやる以外に、各党の招待や連絡は至れり尽せりである。各駅や波止場に党旗を掲げ、歓迎員を派遣し、本党の議員の多き勢力の大なることを誇る。内閣を組織できれば希望は必ず達成されると、媚態百般、無理にも我が党に入れと、上海の野妓が客の袖を引くのと変らない。一人の議員に三人四人の歓迎員がつき添って、日夕サービスにつとめ、宴会と芸妓で気嫌を取り結ぶ。その醜態は見るに堪えないものがある。新しく議員になった者が、初めて草廬を出たという一種意気軒昂の態度は、筆に現はせぬ趣がある。彼は甲党の招待を受けながら、乙党が小利を餌に近づくとそっちに傾むく。或は今日すでに甲党の招待所に入りながら、明日になると親戚の家に行くとの口実で出て行くが、実は買収の話を聞いて自分を売りに行くのである。だから各党の招待員は狂奔せざるを得ない。本党の議員は京師に来たものの、一人も本党に招致できなかったという奇現象を呈する。そうなると買収費を用意して買収にかかることになる。しかも新しい議員の慾はこれに因って大きく膨らみ、法外の費用を出させてやっと本党に戻ってくる。この醜態は何処まで行ったら底止するのか判らない。思うに吾が国の旧道徳では、利を貪ぼり恥を忘れることを大きな戒めとしていた。凡そ士たる者は一般民衆より一段高い道義を要求され、みな小事に於ても自尊自愛を心がけた。偶ま才能を売物にし、時勢に迎合して世の中に出ようとする者でさえ、必ず自ら包みかくして敢てその意を露呈しなかった。もし同人たちにその意を看取されると、品行敦からずと評され、人々の辱しめを受けたものである。たとい明瞭でなくとも、利を物色する者は、白昼の強盗と同一視された。然るに一国の最

その欝屈を伸ばしてやるべきだと謂うだろう。（附記：以前の地痞（無頼の徒）は郷間にかくれて愚者や弱者をいじめていた。一たび城市に入って正士に会えば愧づる色があり、その不善を表に出さず善をよそほった。今の法律は人々の自由に干渉できないと知った彼らは、放縦を極め、暴力の徒も儒生とひとしい地位にあり、弁護士から法律回避の術を習って、倒行逆施の事例が日に増し多くなっている）これらの徒輩はその身分を持上げられ、その持上げられたのは人道尊重の故であることを知らない。良心を以て自愛すべきであるのに、反って今後は馬鹿にするなという勢で人を欺き非道をはたらく。（芝居小屋の中の様子で一般が判る）恭敬忠順の信条が一旦除かれると、流氓無頼の悪党共は、顧りみるべき一身一家の名誉や評判はないのだから、平然と恥知らずの所業に及ぶ。私は以前楊某に会って阿然としたことがある。今、新聞記事によると某校の使丁が長袍馬褂（羽織袴）で衆人にまじり政界代表に列して、公民請願団に随って衆議院を包囲している。蓋し愚者が急に得意の地位に上ると、訳が判らなくなってしまうが、これはその一例である。（伏卵録）

私の最も得意は、行商人や車曳きに多勢の知合をもっていることである。途上襤褸をまとった苦力に大声で、梁老爺御気嫌ようと呼びかけられて、私は吃驚したことがある。乙未の年（光緒二十一年）十月、順徳の李若農（文田）先生の葬式があり、私は汪伯棠と縄匠胡同を出て、李若農の遺像を画いてもらう為に徒歩で沈蓉圃を訪ねようとした。すると騾車の御車がいきなり、梁老爺、お二人様はこの車にお乗りなさいませと呼ぶ。私はその車夫の名を識らないのである。汪はよく君の名を識っているなと驚いていた。

宣南菜市街の商店には相識の者が多く、見識は高くないが熱情家が数人いて、時に詰問されて困った。国の事情が悪化するのに何故辞職されるのか。局中に在って補救すべきではないか。局に当る者に正しい者がいよいよ少なくなるではないか。一人や二人好い人間がいなくてはますます事情は悪くなるではないか等々で、返答もならず困惑したことも

れは塵世に五十年生きた者が、親しく眼にした事実である。卓如は事情を究めず、首善たり得たものは、首悪たり得るのも当然なりと論じた。今日の社会の万悪は否定できぬが、この万悪の社会を構成したのは誰かを考えていない。卓如の一生は好んで言語を弄して天下に高名を得た。その詞の美を取って、軽薄なる言を為し人を動かすが、事の実際には固より合致しないのだ。孟子云う、徳に周ねき者は邪世も乱す能はずと。一部の四子の書は理備はらざる無し。苟しくも四子書中の理を採りこれを推せば、その用尽くる無し。持守練磨の功を積まずして、ただ社会の悪化せざるを望むのは、夢想ではあるまいか。余は久しく京師の風気が日にまし堕ちるのを憂えてきた。故に任公の言葉に因って極論したのである。時人が学究の気味なりと必ず笑うことは、余は早く知っている。（伏卯録）

青年弁士（按ずるに五四運動時代の学生の言論に就て言う）は遺風餘俗に対し、概ねその誤りを矯正しようとする意が強い。極端になると階級を無くすという名目で、あらゆる蛋民妓女にも一律に公民権を与えようとする。衆生平等でそこには良賤の区別はない。この新説に対し、私は法紀を乱し無道なりと責める心意はない。人民を謂はれなき冤罪から救い出し、光明正大な幸福を享受させようとする心は仁の至りではある。しかし虐待は除く可きであるが、淆乱は為す可きでない。世間に汚賤なる階級の存在を無くなそうと欲するなら、先に世人をして善良の方に進ませねばならぬ。吾が国の人が果して奴隷制を破り除く品格があるならば（これがやれることかどうかは別問題として、大願は先ずやってみることだ）階級否定も可能であって、乱を招くことはない。もし先に品格を向上させないで階級を無くしてしまうと、狡猾で良心の乏しい人も一切平等となれば、凡そ法を畏れざる流氓や、悪事をなすに巧みな穢吏、更に汚穢なる娼妓、悪業至らざるなき無頼はすべて寛大に扱はれて、尊敬すべき良民や士大夫と同視することになる。これは乱を招くことでなくて何であろう。今の新奇な説を好む者は、或はこの流氓、胥役、娼優、無頼等は、本来極めて高尚且善良であるのに、多年に亘って冤屈の境遇に置かれ、人から賤しく視られて、そうなったのであるから、今は宜しく持上げて

記憶していよう。今人は但だ勢利に趨って遯世独立の者には関心がない。将来の評論も知る可しである。（按ずるに評論も亦必ずしも要しない。生前に識られず、死後忽ち親しまれても何の取る所もあるまい。惟り世道を稗益することを望むのみ）私がどうしても忘れられないのは、晦老が歩いて私を大井胡同に訪問され、私の日記を繙閲された。数年後、張府の募聘（聘は香奠のこと）を一切私に委ね、頗ぶる信望を増すことになった。又数年後、私は龍爪槐に赴いて四回も暢談したが、道義誠懇を極めた。今、私より先に死んで、私の為に証明する人がいなくなった。私は自分の死期の遅れを恨む。乙卯八月。（伏卯録）

私の思うには、世を救うには須らく先ず人才を育成すべく、人才育成には須らく先ず悪人才の害毒を掃除すべきである。小事を瑣末な言うに足らぬこととしてはならぬ。民国以来、立派な学生たちがその鄙しい言葉、軽佻な行動を規正すると、怒って従はない。彼らの霊台の塵垢は掃除できないのだ。私はまだ賭場や遊廓に入ったことがないのでその模様は知らないが、劇場だけで観るかぎり、人才を毀損するに全く充分である。これは民国になってから、小節に注意しなくなった結果である。私のこの言葉を軽々に聞き流さないで欲しい。教育権を行使する者に、老成人を多く招いて弁法を研究させたい。（伏卯録）

辛亥の年（民国の一年前）各省の人が集まって清朝を論じ、各がじし得意になっていた。余が京師に在って数十年間目撃した事実と、実に合致しないが、黙って聴き竊かに歎いた。席の終るまで敢て一語も挾まなかった。蓋し若輩の言は、これを反駁すればすべて反駁しなければならないし、賛同しようとしても断じて賛同できない。何から説けばよいのか判らないのである。（伏卯録）

何をか心死すと謂う。一世の是非混乱し、善悪は支離滅裂、真理は顕はれず、公道は伸びず、大衆はみな混冥好い加減の中に処し、その場その場で胡麻化し、自ら異を立てようとしない。一世の是非善悪を論定して明らかにするのも亦

ある。

　私という人間は時勢に背き、行動は愚図で言論は下手、人から嘲笑されても公然と反論できない。世を救うには根本に立ち返って、自身が道徳を実践して世人に勧めねばならぬ云々と人に告げても、聞く者は鼻であしらうだけである。私は世を憂えて死んでも、私の憂世の心を信ずる者は決してあるまい。いろいろ推測した挙句に、この人は名を好むこと甚しく、ついに命すら惜しまぬ始末だ。全く、大馬鹿者というしかないというであろう。蓋し終始を通じて今の人は道徳を以て世を救うことを信じないのである。頭の中に道徳の存在はないのである。風気此の如し。其れ如何せん哉。

（伏卵録）

　嘗て友と遇って故人の某の話となった時、友は、賢者だとは聞いたが著述はないようだと言った。私は心中同意できなかった。蓋し文人は著述を専ら証しとする固定観念がある。私は著述は人の価値を定むるに足らず、当に行誼を以て重しとすべきだと思う。（著述には極めて優れていながら、品行は極めて劣る者がいる。著述を以て人を定めるは、本を知る論に非ずと知る可し）或は著述に就て分別して観るならよかろう。現に某々文人は満紙浮詞のみ、その詩詞を観れば聖賢に非ざるなきも、その行事を按ずれば卑汚鄙しむ可しである。奈何せん一たび著述があると、推重を受けること十倍で、小人をして肆ままに衆人を欺瞞せしめ、世風を文偽崇尚に陥らせている。せめて著述がなければと深く惜しまれる。

　願はくは老成公正の人に長寿を得させ、他日の世変大禍を実地に見聞して、今日の誤謬を証明してもらいたいものだ。（伏卵録）

　于晦若（于式枚、字は晦若、廣西賀県の人、陳東塾の弟子、袁世凱の故人にして、その聘を受けず）は海内の知名であるのに、新聞の報道は至って略であって、遺漏が多いので、補正して置く。私のように世に聞えぬ者は、往事を誰が

附録

梁煥鼐「桂林梁巨川先生年譜」跋尾

先公の年譜の編輯既に竟（おわ）る。公の平居の容止は未だ譜に入らざれば、譜後に敬して記を為して曰く、公の面貌は円に近し、少時癯痩なりしも、晩年は腴潤に転じ、顔色は益す好く、鬚眉甚だ偉なり。身材は中人の如く、肌肉は満ち足り、肩膀は少しく寛やかに、臂は舒やかに長く、指は修めて鋭く、皆常人に過ぐ。平日の起居飲食は摂生すること周謹、荘敬日に強く、盛暑にも袒裼せず、私室に在ても惰散欹斜の容無し。発汗するも衣を卸さず、汗止んで而る後に之を卸す。坐するに風に当らず、臥せば必ず被を覆う。煥鼐等、児の時より此の語を聴く。三十年常に然るのみ。湯（スープ）を飲むに或は冷或は熱きは、軽々しく口に入れず。食品の或は膩（油濃き）或は燥、酙酌して進む。児孫の疾病不快は必ず預じめ之を知る。蓋し既に其の謹しまざる所を察見して、疾病の先に治療の法を講ずる也。煙草を吸はず。家人児女相率いて煙草を吸う者無し。酒と宴集を近づけず。飲酒打拳せず。滋味に耽らず。毎食菜蔬前に列するに、独り其の悪しき者を取り、曰く大将為る者は自ら先に苦を喫し、其の甘美は餘して人と与に之を享くと。公は好んで兵書を読み、語を出せば輒ち因りて引喩之に及ぶ也。粗糲を献ずるも亦珍羞の如し。営養の足不足を顧みて再三意を致す。禀賦素より弱し。而るに一生六十年大病無かりしは、悉く此の謹慎之を護りしに由る。蓋し煥鼐等知る有りて以来、未だ嘗て公の一たびも褥榻の間に困頓せるを見ざる也。老に至る迄精神体力は衰を為さず、耳目は聡明を失はず。毎晨必

難しい。或はその人の行跡がまだ顕はれず、人の観察する所とならず、或は観察が粗末で不充分ではないのか。（伏卯録）

昏々たる時に際遇し、我の事とする所無し。五年来、日に哭訴の心を以て国会に期待せるに、大いに望む所を失せり。澄心静気して理を許すの事万に一も無し。（伏卯録）

乾嘉以後、士大夫は始め円滑を尚んで、国人これに化し、華美相尚んで、凌夷ついに辛亥に至った。その時を想うに、権豪貴冑は終身一も耳に逆らい耳鼓を破るの言に接せず。宜なり今日あるは。（伏卯録）

人は皆須らく一己の命運を開拓する決心あるべく、而る後に人格始めて立つ。（伏卯録）

抵抗力強き者は、凡百の困難あるも皆抵抗力の敗る所と為る。（伏卯録）

愚又謂えらく新旧も分つ可からず、当に合と不合を分つべしと。今世の勢によれば、科学を講求して新を求めざるを得ず。但だ新に乱走して、旧道徳の良好なる心術をキレイサッパリと除去して快と為す勿れ。（伏卯録）

私の学識は宏通とまでゆかないから、言論すべきではないかも知れぬ。しかし私は昏乱の世に生き、痛心の極自ら已むを得ず、粗浅の言を尽さずにいられない。国家の根本は人民に在る。人民に公誠正直の気風があれば、即ち国家の根本は穏やかに固い。今日の議員・政客・官吏・軍人・新聞記者より市井の商人に至るまで、すべて皆詐偽と奸欺に満ちているのを観ると、どれも国脈を斬絶し根本を破壊するに非ざるはない。故に私は数年来記する所は、つねに行為者の心術上より意を注ぎ、冬烘の学究の譏りを免れない。経験と才気ある人から観れば、必ずや迂陋浅薄として嘲笑するだろう。しかし私の言う所は病根を抉るものであるかどうか審察を加えられんことを伏してお願いする。民国が乱より治に入ることを希望する故に、私の迂陋浅薄を恕して、遠大の眼光、新奇の理想を勉めて抑え、鄙言をよくよく考えて頂きたい。さすれば私も無駄に心を費やしたことにならぬ、感激はまことに窮まりない。（伏卯録）

が額と臂、股と足にでき、甚大に腫れ上った。七つも大きいのがあって、坐ることも立つことも出来ず、横臥も難しく、日夜啼く始末である。公は白米の粥を煮て養って下さったが、半年も続いた。この様子も思えば今も常に眼中にある。公は私を深く愛して下さった。溟は十四五歳から十八九歳まで、時事問題に関心をもち、功名に志を抱いて、新会の梁氏の新民の説、徳育鑑を読み、日記を記して自ら勉励した。廣智書局出版の三名臣書牘、三星使書牘を読み、胡文忠、郭筠仙を慕い、つねにその語を称道した。公は喜んで、どうしてこうも自分の少年の時に似ているだろうと言われ、書をつくりほめて下され、肖吾の字を賜った。（これは己酉の春の事、時に漱溟は十七歳、順天中学を卒業して寄宿舎にいた）愛情の至りである。しかし四人の中で親に対し、最も不埒な者は漱溟である。思えば胸が痛む。公は幼にして親を失ない、吾が祖母劉太恭人の教を受けた。礼法厳しく、つねに終日侍立しても、敢て一語を発せず、少しでも礼容を失えば、痛罵を浴び痛棒を受けて仮借する所がなかった。これに由って躬を持し品を立つる基を植え付けられたのである。しかし天機の才慧も亦これに由って抑制されたところがあった。その後、公はこの点を省みて自ら惜しまれ、自分の子に対しては、一意寛大にされた。新教育家の言に聴くこともあったと思うが、叩くことをしなかった。溟は昔を追想しても、一度もなぐられたことはない。しかしこのため児輩は戒慎の礼を知らず、晩年になっての一日、食後の歓談の折、児輩が上座に転がって公は下にいる、公は歎息して自分が礼法きびしく督責しなかったため、お前たちは遂にこんな不様になってしまったのかと言われたことがある。児輩の平生の無状以て知る可きである。公は児輩と共に語るのが好きであった。勝手放題の言葉を一つも禁じなかった。兄は既に早く外で学び、長ずるに及んで日本に留学した。二人の妹は幼ない女の子だから、言を逞しくするのは漱溟だけである。公は元来国家の事に関心をもち、溟も亦時事を談ずることが好きである。そこで語る所は十中の九、大局・政治・新旧・風教のことになる。光緒宣統の間に始まって、父子は共に新会梁氏の書を好んで読んだ。溟は毎日新民叢報若しくは国風報を手にして、勝手な議論をした

ず家人に先んじて起き、晏寝有るも晏起無し。日夕札記を為す。字或は蠅頭より小にして、行列整然たり。門を出で游散するに或時は代歩を仮らず。衆中に於て語るに、音吐朗澈、中気充実して、遠坐に聞ゆ。平生博弈の事は一も之を習はず、或は知らずして之を為すも、或は之を知りては為さざる也。都中の新開の游楽の場、猥鄙雑閙は終に一度も其の地を履まざる也。足跡尤も未だ嘗て一度も女閭に進まず。蓋し少年より以来、自ら勉めし者は遠くして、賦性端正剛大、其の叔世の敗俗は固より安んずる能はざる所以なり。独り観劇を喜ぶ。然れども実は其の音律を解せず。嘗て自ら劇本を製すと雖も、率ね他人の譜する所の者に因る。而して詞を為るも未だ嘗て自ら吟ぜず。心に当り意を留むる所の者は、唯其の科白（せりふ）と作派（しぐさ）、情節意趣の間に在り。而して隠に抱懐を以て相寄託せり。嗚呼、公の一生は大徳小閑、炳々硜々たり。誰か末俗を風するに足らざるを以て、後昆に示さん哉。男煥鼐謹記

梁漱溟「思親記」

十四年春、漱溟は曹州より京師に還り、清華園の客となり、始めて外部との往来を謝絶し、先公の遺稿を出し、校正編輯した。事終って又年譜一巻を作り、同時に印刷に付し、敬意を以てこれを世に公刊する。公が生を捐てる志を遂げてから七年になる。漱溟の不肖の負う罪は言うに堪えない。遺稿を手にして校正する毎に、俯思して心が痛む。茲に思親記の一文を作る。漱溟の吾が親に負う罪は独り今日に在るのではない。吾が親は純愛の人であった。親に孝、子に慈、天下の人を同胞とし、その誠懇を尽した。児子としての景仰はくだくだしく言うまでもない。吾が親は又周到細密の人であった。何事にも熟慮を重ね、細事も自ら為した。吾が兄弟姉妹四人はみな公の手に長じた。溟は生れ付き瘠せて弱く、多病であった。公はこれを育てるに独り苦労された。六歳の時石段に躓いて、額骨に穴があき、一時気絶した。その養生に公は多くの玩具を枕頭に並べて、気嫌をとってくれた。その様子は今でも常に眼中にある。十歳で腫瘍

した。児は母の意に違い釈氏の教の如くありたいと請うて難色を示した。公は旁らに坐して独り無言でいた。是日書を以て示して曰く、汝の母の昨日の教は、衰語私情を以て、吾が児の遠志を隳す。柔織委靡、大いに吾が意に非ず。汝既に室有るを願はず、且らく教議に従え。娶らざるは殆んど宜しきに非ず。遅早は必ずしも拘はらざる所なりと。蓋し公は子女の一身の前途に就ては、但だ自らその衷（うち）なる者に度（はか）れとの態度で、子女がその考えを申述べれば聴き入れた。或は不可なる場合でも、公の意向はそれとなく示され、相手がよくよく反省思慮を重ねて自づと変るのを待たれ、決して強いることを欲しなかった。大概そうであった。釈氏の教は、公の喜ばぬものであった。湞は年二十、日にその言を甬したが、公は未だ嘗て一言も止めさせようとしなかった。その時湞は中学を卒業したばかり、学業は半ばで成就せず、更に上級学校に進学の計もなかったが、公は一言の督責もされなかった。然り而して公の教を為す所以の者は至っていた。その教に率はなかったのは、則ち児子の誤謬が公の志を継承できなかっただけのことである。吾が国の礼教の極弊は、既に子女の抑圧が度を過ぎ、人格の自立を無くしてしまった。家庭は外観は典雅に見えても、内部では忍ぶ苦痛が隠されていて、互いの間は阻隔し生気が通っていない。更に近来は欧風が旧俗を乱し、親子の関係は甚だ面倒になった。公の教たるや情をして礼に溢れしめ意をして自づと通ぜしめ、これを教うるに道があり、その間の分際斟酌は、蓋し一世の法と為すに足るものである。世人が湫湞の負教不才を以て、公の模範とすべき法式を没却しなければ、児子の罪も少しは許されようか。

戊午十月、公は一死を惜しまず以て世人を悟らせようとした。その遺言の諸稿はみな心血の存する所、編輯の責を湞は自ら引受けた。顧りみれば死後七年にして、世に公刊の運びとなった。人事の羈絆に累はされて遅延したと言訳できるものでない。蓋し公の心を以て心と為す能はず、公の精誠を暁るに至らず、暁ったと云うても公の精誠の詣る所を未だ澈達できなければ、やはり未だ暁らずである。故につねに心に念じながら怠がなかった。そして湞は謬って時名を

が、顧みると当時はみな能く公の主旨に合っていたようである。民国に入ってから漸次そりが合はなくなった。公は党人を厭はれ、溟は党人の味方をする。公は議員を痛斥され、議会制度に疑をもたれた。そして溟は国会を弁護し、話せば必ず忤らうことになる。これに類したことは枚挙に暇がない。時局は多事であり倏（しゅく）忽として日に変るから、朝晩の論争となり、いつも公は歓ばずして罷めることになった。しかし納得しないと復もや前の話が繰返される。お互いに自分の道理を堅持して、朝から午まで続き時には食事もとらぬことも珍しくなく、夜に入る。既に床に入っても、寝台の前で議論を続け、その間言葉が荒くなって、大声が戸外にまで洩れたこともある。人の子としての礼無き暴慢振りは、想い出す毎に胸が痛む。子としての罪は今や贖う可くもない。それのみならず溟は民国元年以来謬まって釈氏を慕い、人生の大道に於ては必ず天竺の教に原理を求め、世間の治道を論じては西洋の学理を崇めた。祖国の風教の根本、先民の徳礼の化に於て、何ら留意することを知らなかったのが、とくに公の心を大きく傷つけた。公の晩年の文章及び辞世の遺言を読むと、そこには、抑欝された孤独の心境、一世に孤立して訴え語る可くもない寂しさに満ちている。漱溟は日夕公に侍し、嘗ては公に歓ばれたに拘はらず、後には謬まって後に率（したが）はず、公の心を得ることが出来なかった。痛ましいことであり、子としての罪は天地に満ちて脱れようはない。その後始めて復た故国の文化の微妙を悟り、これに志したものの、又もや狂妄軽率の言を弁し、一も当を得ないのであるが、公に背いてから既に三年を経ている。顧りみて贖う可くもない。溟は又釈氏を慕う故に、その戒律に従って魚肉を摂らず結婚もせず、出世間を意図した。時に吾が兄は既に一家を成していたが、十年しても子が無かった。公は老年となり、又決然殉節の隠志を懐いたが、終に後続の嗣子を見ることが出来ず、一語もこのことに触れなかったものの、心中忍び難きものがあったろうことは、充分に考えられる。子としての罪は重きを増すばかりである。公の死後三年にして妻を娶り、新婦を伴れて公の遺像を拝して哭いた。溟が年十七八で一生不犯の願を立てた時、永患いの母親は再起不能を知って、児の手をとり泣いて叮嚀にその不可を喩

訳　跋

池田篤紀

人一人の命は地球より重いと日本政府は言って、ハイジャックの犯人に莫大な国費を与えた。戦後三十年、日本人は道徳のすべてを戦争につながるものとして教育勅語と共に廃棄したので、今日何か道徳らしきものを探すと通俗小説的恋愛と生命尊重位しか見付からない。生物の本能として誰から教えられなくても人は命を愛し惜しむ。それを今日のような形で生命尊重を教えると、自分の命惜しさにどんな卑屈も許されるとするような人間がふえてくる。一体生命尊重が意義をもつのは自分の命に関するよりむしろ他人の命に関してである。他人の命を救うために自分の命を棄てるのは、生命尊重第一主義からすると矛盾であるが、そこに何か高尚なものを感ずるのが常の真当の人間である。つまり自分の生命以上の善美なものがこの世にあるから、その為に生命を捧げる行為に人々は感動するのである。いくら命は地球より重いといっても、自分の命助かりたさに卑しいことを敢てする人の姿を舞台の上で演ずれば、観客はその姿を浅問敷く思うのが世の常である。「短くも美しく燃える」のは何も恋愛に限ったことでない。キリストの十字架に上ったのもソクラテスが毒杯を仰いだのも、又、楠正行や赤穂義士を、或は神風特攻隊の若い人々を、いつまでも懐しく切なく想うのも、みな自己一身の生物的生命より何かもっと高い大きいものに命を捧げ、その故に失はれた命が光輝あるものになっていることを示している。自分の命以上に価値あるものの存在を認め信じ、要すればそのために命を捧げる覚悟をもっているかどうか、日本人は深刻に反省せねばならぬ。認めず信じない人は、動物学上のヒト科に属していて、

博したため俗務が多くなり、与に接する者は彼に在って此に在らず。故に編輯印行のことは念頭にありながら、この七年間匆忙の中に過ぎ、まことその為す所何事なるかを知らず、竟にこの一大事を置いて顧りみなかった。在天の公は瞑目されずにおられよう。児子の不肖と罪は何と申開きすべきか判らない。遺稿を整理しながら、俯して思うては心に痛み、百死と雖も贖うに足らぬと痛恨に堪えない。だが往事は追う可からず、敢て今に勉めるしかない。思うに年十四五にして思想があることを知ってより、自らその宗とする旨を数変した。二十年間を顧りみて、実に未だ嘗て一度も自ら菲薄なりとせず、一向に浅思を矜持して行なってきた。蓋し往くとして罪を負い心中疚しからざるはなかった。去年の冬、朋友の力に頼ってその昔の非を悟り、始めて一々悔む心を生じた。公の在天の霊が祐けて下さったのであろう。外との往来を謝し公の書を読み、日夕思いを運らせば、この二十年に得た所は趨庭侍膝に外れたものであることを知った。今より始めて、吾が親の教を奉じよう。天下は溺れ、公の志は苦しい。飢者溺者を惻怛するのは精誠の致す所、終に児子を啓発するに至った。児子は劣なりと雖も、自今以後、敢て吾が新の志を忘れまい。不孝漱溟、勉仁斎に記す。

進する云々。

これだけ真剣味溢れる言葉をわれわれは内閣諸公や議員から聞いたことがない。ロッキードもダグラスも誰も競争相手の政党の中から関係者を挙げたい一存で騒ぐばかりで、自国を守る武器を自国で製作できない所に事件の真因があると考えつかない。ペレス国防相が向う二十五年間は「自己に対する憐憫をすてる」と断言した真意を日本人はどう考えるか。経済成長に酔って、今年より来年はもっと贅沢するのが当然だと考えている。小資源の経済大国がいかに基盤が脆弱で、又、いかに国際上狙はれ易いかよく三省すべきである。この脆弱で狙はれ易い国を維持するためには、生活程度をきりつめ自己に対する憐憫を棄て、借金経済を建直し、国防力を強化すべく、先ず道義の上で、梁先生の所謂世道人心を先に挽回する他に途はない。

読書人とは聖賢の書を読む人をいう。聖賢の書には聖賢の教が記されている。従って聖賢の書を読むだ以上は、その教を実践せねばならぬ。即ち読書人とは、聖賢の教を実践する責任を負う人のことである。事の詳細は景嘉先生の序にあるが、本書の一読書人云々の題名の意味する所はこのように解す可きである。一読書人であった巨川先生の深憂はそのまま今日のわれわれ日本人の深憂であると、訳者は思った次第である。

因みに記す。訳者は昭和十三年当時済南日本総領事館勤務の同学岡宗義君の紹介で、梁漱溟先生の高弟朱經古君と相識り深交を結んだ。同君は子息をつれて清水市の拙宅に一月も滞在された。又、友人の岸要五郎君の慫慂により梁氏の主著中国民族自救運動之最後覚悟一名郷村建設理論を訳して笠木良明氏の主宰する大亜細亜建設社から出版した。この度面識無きも神交深きものがある梁漱溟先生の、父上の遺書を訳すことになったのも、何かの因縁を思はずにはいられない。朱經古君も岸要五郎君も、熱誠無私の人格に因り民族の枠を超えて万人に敬愛されたが、革命の風暴裡にいずれも命を捐てられた。この機会に冥福を祈らざるを得ない。（昭和五四・八・五）

も、歴史的存在としての日本人ではない。

儒教に於ける殉節の意義、志士仁人は身を殺して仁を成すの意義を梁巨川先生は実践を以て教えてくれた。

さて梁巨川先生の世人に対する敬告を読むと、余りにも今日の日本を想はせて冷汗三斗である。先生の所謂文人は今日の文化人とか知識人であろう。人の命は地球より重いとか、日本は守るに値する国であるかどうかとか、戦争になったら早く逃げるべきだとか、全く碌なことしか筆にしない。そして経済大国となったとして、皆が皆各がじしもっと給与をふやせもっと儲けさせろと、議員・医師・公務員・労働組合・農協その他凡ゆる団体が互いに圧力を行使する。この圧力の間を右往左往しているのが政治家と称する代議士とエリートと称する高級官僚である。一体、日本がどんな状態に在るのか、真剣に考えたことが一時間でもあるのか。

今年の三月末現在で国債は三十八兆円、日本人は老いたるも嬰児も一人三十八万円の借金を背負っている。いずれ数年経つと増税がきらいで議員と役人を減らさない以上五十万百万とふえるだろう。一昨年の上場会社一五六社の総資産五兆一、六七二億円に対し総負債は五兆四、〇九二億円、差引実にマイナス二、四一七億円である。このマイナスを辻つま合せているのが銀行からの借金である。石油も食糧もみな輸入に頼り、米だけは自給かと思えば、仮に日本人が全員月十五キロの配給を受けたら何と六百万トンの不足を生ずるのが現状である。小資源国（否、無資源国だ）が経済大国となった。それも借金経営によってである。いかに脆弱な経済大国か少しは考えるがいい。

イスラエルのペレス国防相は云う。防衛とは本質的には開発である。軍事的増強が果しなく続けば（アラブを指していう）経済上の消耗が起るのは必然である。われわれはネゲブ沙漠北部の二十五万エーカーの沙漠を原子力で淡水化した海水で開発して、先ず食糧の自給をはかる。この為にはこれから二十五年間は余暇を楽しむ週末も、美酒も香水も、イタリヤ製の靴もすて、更に自己に対する憐憫をすてたイスラエルとなって、完全雇傭・食糧自給・水資源の確保に邁

あとがき

和崎博夫

清皇朝が亡び共和の民国が生れて続出するもろもろの混乱を、著者梁巨川先生は単なる一過性の混乱と認めなかった。このことはきわめて注目に価する。専制と共和は賓主の尊信をせず仇敵の念だけ育てる、伝統の習わしを捨てて快とし、権力を主張して旧皇朝に対し慎しむべきを言えば守旧とさげすむ。止まることを知らぬ民主・自由・共和のこの風は、必らず中国の根本を侵し災いが長きにわたることを、生存かけて梁巨川先生は看取した。

われわれ一般にいう知識人・文化人とちがって中国の伝統的「読書人」は、仁を学んで身に致し、時には身を殺して仁を成すことを天地の間に与えられたおのが命とする。梁巨川先生がここに書き綴ったものは、中国の開存はまことに伝統的な精神の実現にある―との確たる自白で、西洋の思想が中国本来の思想に決して代替しえぬとする一死を以てした立言である。先生殉世して六十年余、いまこの遺言に対するとき、その心に生じてその人を害し其の政に発してその事を害する、時代をこえて変らぬ人と世のあまりの相似に、懼れをおぼえざるをえない。

日本は一系の天皇を尊崇する伝統がある。天皇は、明朗・正直・簡朴な民族性のシンボルであり、四方を拝して天神地祇に衆庶の平安を祈るのが本分、有司諸僚は謹んで権力を委されるのが日本歴史の骨格であった。

中国は日本と異る。堯・舜・禹三代の禅譲を理想とするが、腐敗堕落した皇帝は天意を失って放伐にあい、別に新朝おこる易姓革命を何千年もくり返してきた。天地人三才を貫くものを王、王者は聖君・皇帝として権威の源である。権

民地主義の東漸と、それに全く対処しえぬ中国清朝の末期的症状、アジア各国が蒙った惨状である。発憤した明治日本の指導者は、追いつき追い起せで欧化を急ぎ富国強兵に熱中した。今日なお拝外心理の少なからぬことや経済至上主義と非難されるところは近百年のこの一果でもある。明治維新後、性急に試みた外交が不熟だったことは否定しえない。他民族の立場を顧みる素養に欠けていてアジア解放の正義感に燃えたさきの大戦も、敗戦で気付いたとき近隣諸国を凌辱した罪禍は巨きく、歴史的な時間をへてなお容易に消しえぬものを残した。もっとも明治開国以来の日本が欧米の東洋侵略に生存かけて抵抗した一事実だけは主張してはばからぬものがある。

この西欧植民主義東漸の一翼にロシアがあり、今も日本はじめ各国はソビエトロシアの侵出に苦しめられている。長い国境を接する中国の経験には及ばぬが、近百年日本が命運かけてロシア勢力の南下と闘った事実は、日・中両学人の合作による研究に俟ちたいところである。

この機会に、現代中国に対し、日本人が潜在的にもっていると思える二つの感懐を記しておきたい。

その一、日本が史上初めて無條件降伏という悲劇を迎えたとき、国際間に中国を代表していた蔣介石委員長は、われわれが思いもかけぬ以徳報怨を宣言した。またソ連を主とする天皇制廃止政策に対し、その存否は、日本人自身の選択にまかすべしとした。それを、蔣介石先生が政治的に日本を利用する意図から出たものなどと物知り顔に言う日本人が一部にあるが、敗戦時にみたソビエトロシアの応接の非道さに比べ、罪を憎んで人を憎まぬ中国民族精神の慈愛に日本人は心から反省を深めた。戦後、東翠清水董三先生が中国人諸氏のために寝食を忘れて労をいとわなかったこと、双樹庵中山優先生が大陸の人々に或いは一生会えぬかもしれぬが万一にもと最後まで論語を手にし克己復礼の道を践んで終ったことなど、歯の浮くような日中友好のスローガンを口にこそしなかったが、中国の珠玉のような精神を学んで更に進一歩、反省を加えた戦後回心のこれは一典型ではないか。

威にもとづく権力は「傅説は版築の間に挙げられ、膠鬲は魚塩の中に挙げ」られた賢者、これを司った。革命成ると新朝は亡朝史を冷静に書いて統治の鏡とし、中国二十四史乃至二十五史がこれである。理想は禅譲でも革命がそこにあり、権力を委ねらるものはもちろん、権威そのものの王が深く慎しまねばならなかった。ローマやギリシヤは巨大な影響を今も世界に与えながら、今や民族と文化はその実体を喪失し過去の栄光だけを示すのに反し、中国がよく依然としてその大を成して変らぬのは、禅譲放伐論に独り観られる世界に冠たる自在玄妙の道の賜ものと申すほかはあるまい。

帝制の清末から共和制成立の民国初め、伝統的王道論や立憲君主制、虚君共和など幾つかの試みはみな消えて、大同・天下為公・仁義礼知信など伝統精神を生かそうと苦心したのは皮肉なことに、帝制を廃止し共和制を実現した孫文先生ら一統で、自主ならぬ民主共和の赴くところ今日ではマルクス・レーニズムを指導原理とするまでに現代中国は突出してしまった。孫文総理らの無私な人柄や共産革命に成功した毛沢東主席らへの顧慮のせいか、中国帝王の真の意味での価値について、当代中国の学人は全くというほど触れてないと思えて久しいのは、筆者が不学の故にであるのか。

ところで、日本人の多くは、中国との交誼は一皇朝や某々政権をこえるばかりか子々孫々に及ぶことを願っている。魏志（西紀前四〇三－前二二五）倭人伝は古き日本を記録に止め、百済から王仁博士が千字文と論語を日本に献じたこと、千数百年を遡る古事記の序文にみるように、中国文化が日本の民族性を養ったことは、佛教が中国をへて伝わったのと併せて感謝に価するところである。徳川三百年鎖国のおりにも、三百諸侯いずれも藩黌を設け武士はみな中国の学問をした。名分を正し、義理を明らかにする思想は、維新に臨み死地を踏んでなお人を奮るい立たせ版籍を奉還させ明治の立憲新制へ道を開いた。日本が近代化に成功したのは封建徳川三百年に培かわれた儒学的水準の高さに負うとするライシャワー論の一面に同意するところがある。

鎖国から門を開いた維新後の日本が目にしたのは、東洋的文化とひどく異様で強力な科学技術を伴ったヨーロッパ植

東洋伝統精神、つまり儒・仏・道への回心という近代化に当って避けて通れぬ原点の認識は、卒直にいって中国側の曲折は著しいが未だしの感をぬぐえない。中国と日本、そして世界が当面する根元的な危機は間一髪というほど痛切で、人みな即効の妙薬を望んで止まないが、本書のように悠久の仁をなした稀にある先人の心に学んで微塵といえども人の誠の深まりを成すほかに、根源的にどんな拠り処が天地の間にあるだろうか。

この本を出版するアジア問題研究会の創立は昭和廿七年。いま、訳者池田先生は月例セミナーで論語を講じて下さっている。本書の校録人景嘉先生はわれわれに毎週一回易経を九年間講じておられ、童時から修めた伝統的な儒学を日本に遺したいと流亡の境涯ながら先施の徳を一方的に我々がうけ、明末朱舜水先生の操守のほどを思わせられて久しい。聖賢の学を践んだ不敗の人の一例に示唆されたのが本書の原典、東洋文庫蔵「桂林梁巨川先生遺書」の中国文四冊であった。書名「一読書人の節操」は景嘉先生案。題字は儒学を学んで三代にわたる宇野精一東大名誉教授の揮毫。また、経済性の不確かなこの出版のはじめに力添えされたのは、加藤三之輔・柳橋由雄・・安部明広の三同学と中村多見三紹介して下さった小布施志郎氏であった。

最後になったが、「あとがき」を是非書くよう心こめて出版を励まされたのは、実は瓠堂安岡正篤先生である。「私は分を知って、遺文巨川先生、景嘉・池田両学友の労作に余分な序を遠慮するが、長く中国への志を継いだ君はあとがきを是非書くように」とのお言葉に胸つまる思いがした。先生には、渡辺敏夫主事長発行「篤農」の編集係として謦咳に接してから四十年に近い。私事になるが、自ら事を敗って一家離散、三年余のアメリカへの旅のおり留守宅に音問を絶たれなかったのも安岡先生ご夫妻であった。未だに一家をなしえぬことはたゞ頭を垂れるほかないが、先生ご健勝のほどを四海の人と共に祈らずにおれない。そして、古くから温良恭倹譲を心掛けた正流日本の学問を、大陸の諸氏がどれほど味識するだろうかと、常に思う次第である。妄言多謝。（昭和五十五年三月二日）

その二、民族保衛戦の勝利もつかの間、中華民国は中国共産党の人民解放戦に一敗して台湾に退き、マルクス・レーニズムを奉じる中国共産党が中華人民共和国を一九四九年成立させた。毛沢東主席をして反面教師と言わしめた日本の進出が共産革命を助勢したとはいえ、中国政治の突変を目のあたりにしたことは、日本人にとって一種の驚きであった。外国勢力の一掃や生活が簡素なことに日本人は感心もしたが、マルクス・レーニン主義を手本の毛沢東思想が文化大革命に発展し、民国初めの孔子排撃よりひどい批孔運動がくり広げられると、心ある日本人は我がことのように衷たるものを傷めた。銭穆先生著「孔子伝」の訳出をもって池田篤紀先生が静かな志を述べざるをえなかったのもまた反省された中国への回心の一様式と言いたい。さきに日中平和條約成って北京の政策は変りつゝあるが、反省された戦後日本の志や発言に対して北京の諸君子は、反共・反動のレッテルを安易に貼り勝ちな日本共産党の同類でないことを敬請するものである。

往年、天皇を尊崇して止まない日本の志士が、身を捨てて帝制廃止の辛亥革命を扶けたことは、或は歴史の大なる皮肉ではなかったのか。いま日本はマルクス・レーニズムの政権に、資源をめあてにして技術や資金の面で協力し始めた。変転常ない現実世界に即して行動するとき、ヘーゲルのいうような理性の狡智というか錯誤をいささかでも国際間で少くする秘鍵は深層においてあるはずで、同ずれば相親しむに到り異すれば相敬するに到る―学記―といったお互いの深い通溝がなければ、無明の永劫回帰しか残るまい。それを我々は伝統的厚誼とよんできた。日中友好の呼び声にもかゝわらず、両国の伝統的厚誼にもとづく協力が世界を変革しうるとした血みどろな先人の行蔵からみれば、両国国交が緒についたという安堵よりも内実は他愛ないのではないかを危ぶむ。拝金的な経済至上主義の日本の根底を否応なく直さざるをえない時代であるとき、大きな成果をあげた現代中国はマルキシズムの昇華という中国存立の変革の淵に立たされているのではないか。それは五十年百年という単位の時間のなかで果たせるかといった気の長い課題であろう。

桂林梁巨川先生殉世遺言錄

戊午歲後学景嘉敬題

桂林梁巨川先生殉世遺言錄序例

後學景嘉撰

民國初期。有兩位中國傳統讀書人。殉世自殺。兩人的殉世。都是出在古老的北京。而且兩位先生。都是南方人。一位是在民國七年（一九一八）十月七日。自投北京市內淨業湖。殉世的桂林梁巨川先生濟。一位是在民國十~~四~~六年（一九二~~五~~七）六月二日。自投北京市外頤和園內的昆明湖。殉世的海寧王靜安先生國維。這二人的先後殺身殉世。在中國的傳統的學術史上來講。確是一件劃時代的大事。可是。那時正是中國政局飄搖不定的時候。思想方面。有新舊之爭論。政治上。有南北之分裂。而且人心思亂。民不聊生。是非混淆。對於西方的新文化。雖知嚮慕。却無法吸取。中國舊有的傳統精神。一時喪失殆盡。但腐蝕了的枝枝節節的舊文化的形骸。舊風習的渣滓。依然有不少的殘存。同時更有那不少的留學生。新文化份子。新學者。不顧實際的鼓吹革命新風。在這情勢之下。二人的殺身殉世。其命意所在。有何價值。就不爲人注意。不惟未能喚醒世人。甚且遭人譏評。被人遺笑。寃沉海底。

眞正的中國傳統讀書人。應該與文人墨客。以及近代的知識份子。文化人。新學者。要劃一道嚴格的界限。因爲傳統少數的眞正讀書人。自其束髮受書時。既已受到父師的薰陶。歷史的因習。就負起了一個自律的重大責任。這個責任是終身的。當時逢太平無事。窮則獨善其身。達則兼善天下。是責任。到了天下大亂。举世滔滔。事無可爲的時候。沒有政治地位的人。逃往荒山深谷。窮阨其身。抗節自守。是責任。有政治地位的人。就要不負所託。知其不可而爲之。死而後已。是責任。還有那曩日時艱。不忍坐視。以身殉世。號召後人。以及那。窮探世變之源。苦究治世之理。著書立說。正已以啓後世。也是責任。

論語說。「仁以爲己任。不以重乎。死而後已。不以遠乎。」不啻是中國讀書人。千古的憲章。類似上

遺書之一　遺筆彙存一卷（用先生敬告世人書及致親友書的墨跡影印）

遺書之二　感劬山房日記抄一卷

遺書之三　侍疾日記一卷

遺書之四　辛壬類稿一下卷

遺書之五　伏卵錄一卷

遺書之六　別竹辭花記一卷

年譜一卷

據梁漱溟氏刊行先生遺書時。聲稱限於資力。當時只印了一千部。所以流傳於世間的。很少很少。而先生的救世的宏願。也就淹淹的無聞了。

一九七四年。中國大陸。開始反孔運動時。據說毛澤東。最初曾迫梁漱溟氏帶頭反孔。梁毅然說。我是孔子信徒。命可致。反孔不可能。後來纔由馮友蘭開始。（雖出傳聞我確深信）像這樣凜凜讀書人的精神。不能不說。是受了先代的號召所致。

有關巨川先生的事蹟。除了這六種遺書之外。只有清史稿忠義傳十。以極少的文字。留下了傳記。現在全錄如下。

清史稿

梁濟。字巨川。廣西臨桂人。父承光。卒官山西。貧不能歸。寓京師。喜讀戚繼光論兵書。暨名臣奏議。光緒十一年。舉順天鄉試。時父執吳潘祖蔭。濟寧孫毓汶。皆貴。濟不求通。迨毓汶罷政。始一謁之。大挑二等。得教諭。改內閣中書。十餘年不遷。舉經濟特科。亦未赴。三十三年。京師巡警廳。招理教養局。濟以總局處罪人。而收貧民於分局。更立小學。課幼兒。俾分科習藝。設專所售之。費省而事集。由內閣侍讀。署民政部主事。陞員外郎。在部五年。未補缺。遜位詔下。辭職家居。明年。內政部總長。一再邀之。卒不出。歲戊午。年六十。諸子謀爲壽。止之不可。避居城北

述的讀書人。在一部二十四史中。是紙不勝書。不勝枚挙的。但與那寫寫文章。論論政治。談談風月。弄弄翰墨。置身。無事不可以自恕。論人。無是非之標的。對世。無絲毫責任之心的一般的文人墨客。非可同日而語。

兩位先生的殺身殉世。距今已經是五六十年前的事了。但兩位先生的苦心孤詣。在當時雖引起了小小的波動。但不久就被遺忘的乾乾淨淨。對於人心世道的影響。裨益毫無。由此可見。與前代的聞風而起。前仆後繼。來維持傳統精神。已經是截然不同了。自此以後。世道人心。學術風氣。愈變愈亂。直至今天。更自無話可說。所以說。兩先生的殉世。是一個劃時代大事件。

王靜安先生。精於文藝。留下來的遺著很多。但一般人對他的末技。考證之學。如元曲研究。甲骨研究等作。時至今日。仍贊不絕口。引援不衰。至於精心之作。經世大文。如殷周制度論等。有關中國根本文化的大文章。就甚少有人閱讀了。幸而他文名夙著。著述又多。到了現在。他的遺書。還有人復刊。行世不絕。文獻足徵。就無須我來爲之喤引了。

梁巨川先生。自稱拙於文筆。及觀其遺作。確實文字多少有點滯澁。而且重複的地方很多。不甚流暢。但他那種樸實無華的筆調。關心世道。熱愛人群。肫肫懇懇的精神。眞能照貫人心。讀之落淚。他的遺書。並非專門的著述。也非詩文集。只是枝枝節節。紀錄他五十年間。目睹身經。實事實情。有的自警。有的論人。有的論世。還有在他臨死之前。所寫的告世人書以及致諸親友書等。在民國初期。北洋政府統制之下。既無是非之可言。而那時由文人筆下。留下來的論人、論世、的紀錄。大多是愛憎出於一己。論斷淆於傳聞。甚少可信。唯有這梁先生不惜一死。警告世人。他的片言支字。都是確確實實的鐵證。留給後人。知人論世的好資料。

民國十四年。（一九二五）他的令子梁漱溟氏。（原名煥鼎）纔把他這零零碎碎的紀錄。彙爲遺書。分爲六種。附編年譜一卷。印。

成爲人。國焉能成爲國。……

使我觸緒悲來。萬成茫茫。

我自己知道我。於國。於家。於學。都是毫無成就的人。但往日所受的父師之訓。良友之敎。刻刻在迫使我。不敢放棄責任。尤其是對於先民的遺業遺志。不能置而不顧。坐視其湮沒消沈。巨川先生的遺書。最重要的部分。是他臨殉以前告國人書。眞是字字出於血淚。至於此外的五種遺書。雖都是熱淚的結晶。但有些地方。過於重複。有些地方。過於瑣屑。梁漱溟氏編輯他先人遺書。自應力求其全。而我欲表彰先生的遺志。及其眞知灼見。則不得不求簡而且明。遺書的第一種遺筆彙存。就是先生的告國人書。及貽留致諸友家人函的全部。但皆用其親筆墨跡所影印的。並且補修添改的地方很多。不能夠一目瞭然。我不惜費時。先把他淸書一遍。然後再加以排比。其中有無關本文的小注。都加以削除。至於其餘的五種遺書。全錄則太繁。不錄則覚對不起先哲的遺志。於是選擇了最重要。而且有關人心時局。分爲修己、論人、論世、的部分。名之爲梁巨川先生語錄。並加小引一文爲之介紹。同時還附錄了他長公子煥鼐的『桂林梁巨川先生年譜』跋尾。及次公子果漱溟氏的『思親記』。這兩篇文章。都於巨川先生的人格風義。大有關聯。如此編排。相信有關先生一生心事。可以表現無遺。先生在天有知。亦必以爲孺子可教。

以上是我重編巨川先生遺書的趣旨。同時也是我。要表彰先生遺志的責任。至於與日本志士和崎博夫氏。商量着用日文出版。也有一個動機。說起來話太長。

我自十九歲來日留學。二十六歲畢業京都大學而後歸國。在日本居留了八年。這是第一次。第二次是丙申年。（一九五六年）我又來日本渡着流浪生活。直至現在。又僑居了二十二年。前後二次共達三十餘年。在人生的旅途來講。在一人的生涯上。不能算太短了。在這長期的旅途上。不知不覚的對於中日兩民族的運命。發生了杞人憂天之感。而且自己覚着是自己應該負的一種責任。

清史稿

隅彭氏宅。先期三日。昧爽。投淨業湖死。時十月初七日也。遺書萬餘言。惓惓者五事。曰民。曰官。曰兵。曰財。曰皇室。區畫甚備。予謚貞端。有吳寶訓者。字梓箴。蒙古人。嘗爲理藩院員外郎。素與濟游。聞濟死。痛哭。越日。亦投淨業湖死。

今年戊午。正是巨川先生殉世的六十週年。我出世太晚。（生於一九一五）前一戊午年。我纔三歲。當然不能知道當時的細情。不過先父與巨川先生是氣類的朋友。自無疑問。（我生時。先父已經五十餘歲。爲光緒丁酉（一八九七）拔貢。（與挙人同）一生未出仕。閉門讀書。至死仍保持髮辮）我在幼年初記事時。恍恍惚惚。常見一老人來訪先父。兩人談到時局之壞。讀書人喪失廉恥。往往相抱痛哭。這雖是童年片段的憶記。但却印入腦中很深。不過那一老人。是否卽爲巨川先生。或是梁節庵先生。就無從證實了。（梁鼎芬字節庵、清翰林、爲宣統帝師傅逝於民國八年與先父爲兄弟交）我從七歲至十七歲。讀中國線裝書時。對於巨川先生的遺書。也曾時常閱讀。在無形中也受了不少的影響。一九四〇年到一九四三年。我在天津某銀行任職。那時巨川先生的長公子梁壽銘氏。煥鼐。也在天津某銀行服務。有過一個短期的共事和接觸。並且我自稍知人事以來。就喜讀梁漱溟氏的著作。雖然未謀一面。確是神交已久。但不知今生尚能見及否。以上是寒家。與梁府兩世的片段的因緣。

今年的秋天。日本志士和崎博夫氏。費了很大的氣力。纔從日本東洋文庫。尋到了這絕無僅存的桂林梁巨川先生遺書。並用照像本。錄其全部相贈。我一字一句的讀了之後。如見故人。萬感叢生。

回顧自我有生以來稍知事務之後。到現在。已經五十餘年了。在這五十年中。我目之所睹。身之所經。中國的時局。及世界的大勢。眞是千奇百怪。變幻無常。在我遠託異國之日。重讀到巨川先生遺書。尤其是他的預言中。如。

今日世局。因何故而敗壞至於此極。正由朝三暮四。反覆無常。既賣舊君。復賣良友。又賣主師。背葉平時之要約。假託愛國之美名。受金錢收買。受私人嗾使。買刺客以壞長城。因個人而破大局。轉移無定。面目靦然。由此推行。勢將全國人。不知信義爲何物。無一毫擁護公理之心。則人既不

輕視中國人的心理。卽或笑臉相迎。成爲朋友。結爲婚姻。而其內心深處。依然有一種說不出來的輕視的意識。甚至抱同情。想援助。也離不開這種意識。此一裂痕。我絲毫設有歸咎日本人的想法。我只怨中國國家的不掙氣。以及接觸日本人的中國人。留下了壞印象。而眞正的中國傳統的讀書人。其眞精神。眞信義。隱而不見。無人以人格。來抗對日本人。使日本人。不能不尊敬中國人。

更不客氣的來講。凡是接觸過日本人的中國人。有意識。無意識。或習慣上。對於日本人。都存着一種看不見的仇怨心理。卽或握手言歡。高談合作。而其內心深處。總有一種說不出來的仇怨意識。此種裂痕。我的看法。却認爲其責任在日本。而不在中國人。

百年以來。日本人對中國的政策。始終認不清。全體的中國人所期待的是什麼。數千年來。中國立之精神在那裏。所謂中國傳統讀書人。代表着什麼。（中日戰爭初起時。日本軍人。看到中國內部的腐敗墮落。認爲只用半年的時間。就可使中國屈服。但不久就遇到頑强抵抗。拖延八年。終至慘敗。這是不明中國立國的精神所在。當到了危機一髮之間。那種精神就會暴發出來。而且傳統讀書人。是永久殺不盡的）。而日本在戰時。對中國的政策。只知隨波逐流。遇强卽服。助惡欺善。强人就已。表面上雖號解放東亞。實際上。以自己的國益爲前提。

第二次大戰之後。日本的全體國民。對日本的進出中國。表示了內心的懺悔。還有許多著作。暴露了日本人的罪惡。這雖是善意的心情。良心的反省。但都不是此後。中日兩族核心的問題。

日本明治維新後。確實出了不少的高瞻遠矚的人。看到中國。這個老大國家。被西方的列强。欺淩到喘不過氣來。很有意與中國推誠合作。來抗拒西方的侵略。中國方面。雖在清朝極度腐敗之下。但還存有不少的高明遠見之士。也主張與日本携手共謀。那時的事實。留下來的記錄很多。筆不勝書。簡單來講。那時的中國與日本。還是處於平等地位。還是人格對人格。國家對國家。沒有野心政客勾結之嫌。

不幸的很。自從民國以來。在中國方面。是內亂頻仍。國不成國。在日本方面。一變其過去的仗義合作

說起來。未免文不對題。挙出一位數十年前憂世自殺的學人。而來衡量兩國的問題。殊有不合邏輯之感。但請讀者稍微平心靜氣。聽我說出原委。

我的大前提。。以爲世界上。所發生的所有問題。國際間。所發生的所有問題。以及一國一家。所發生的所有問題。實際都脫離不了人的問題。而人的問題。尤以東方傳統所主張的人格問題。尤爲重要。巨川先生說。「人既不成爲人。國焉能成爲國」。我願意推廣他這句話。認爲沒有信義的人格。來處理國際間的問題。在爾虞我詐的權謀之下。卽或結成一時的協定。終久是同床異夢。招來後日的惡果。用歷史長期眼光來者。只是惹起一小小紛擾而已。

中國與日本。所謂一衣帶水之鄰國。無論在種族方面來講。在文化交流上來講。在傳統、風俗、習慣、方面來講。以及地理環境來講。卽從此再經過幾萬年。也決不會脫離此種相依相靠。有無相通的關係。在此共同的命運之下。實在應該在雙方有識之人。深謀遠慮。以人格信義爲前提。爲了兩個民族。永久的。眞誠的。友好下去。奠定亞洲的安定。助長東方文化的發展。

實際上。這兩個民族。在兩千多年的文化交流中。並沒有發生過衝突。或反感與仇恨。中國人稱日本爲東方君子之國。蓬萊三島。是中國人嚮往的所在。而日本。也能採取中國傳統文化。尤能取儒家之精髓。用王陽明知行合一之說。促成維新的大業。只是到了近百年。纔發生了兵戎相見。不幸的運命。經過了第二次世界大戰之後。纔算告了一個段落。

有些人主張。過去的事。像流水一樣。不必再談了。只要注意將來就好了。但我却以爲不然。若不把兩國釀成此禍的眞原因。眞是非。弄淸楚。兩民族的眞誠携手。就無從談起

據我長期在日居留。靜觀默察之中。發現時至今日。中日兩民族之間。還在着兩道很深的裂痕。此二裂痕。若不整個的剷除。中日兩民族。就永遠的不能眞誠的携手合作。這一裂痕。是看不見的。是心理的。據我的默察不客氣的來講凡是接觸過中國人的日本人。在有意識無意識。或習慣上。都存着一種無形的

中國的辛亥革命。（一九一一年）其開始。是由孫中山爲首。和在日本留學的一般新知識份子。因爲反對清朝。起來革命。在中國各地引起暴動。迫使清朝讓出政權。成立了共和的民國。我自小。就嚮往革命的人物。以爲這些革命的黨人。都是些轟轟烈烈的志士仁人。人格高超的愛國者。一九三七年。發生蘆溝橋事變是中日戰爭的開始。那時我正在日本讀書。有一次。日本人在淺草橋的附近游就館中。展示了過去的中日之間。要人的密秘文件。我親眼看到。孫中山向日本朋友乞憐借欵的函件。以及想用東三省。與日本共同經營的利益。來換取軍火。以爲革命資本的密文。更有那某黨國要人。（姑隱其名）在日本時。和日本下女。發生了性關係。產生了私生子。被下女的父母。逼迫的不能下臺。懇求日本朋友。代爲調解的函件。更有那。爲了少少金錢。而啓爭端的函件。眞是琳瑯滿目。臭不可聞。固然荒蕪之園。必有芳草。革命份子之中。也不能說全無骨骾之士。但少數的領袖人物。旣有這樣的醜聞醜事。操在日本人手中。你能怪日本人輕視中國人嗎。

民國以來。北洋政府的官僚。各地方的軍閥。以及號稱新派的黨人。每當中國內亂的時候。無不與日本勾結利用。或私談購買軍火。出賣國家的利益。或諂媚求通。以假聲勢。這些實事實情。據我個人二十年。蒐集資料的所得。已經是不勝枚擧。而且日本是有名的善於保存資料的國家。自比較我知道的不知更多了多少倍。你能怪日本人輕視中國人嗎。

日本自大正以來。。政治野心家。以及軍閥。眞眞的忘掉了明治時代的精神。漸漸的變成了較西方帝國主義尤甚的侵向中國。其中。固然也有些遠見之士。希望東亞的眞和平。中日兩國的眞携手。但是無補萬一。而兵戎相見之後。幾乎全部的中國人。都看到了日本軍閥的猙獰面孔。你能怪中國人仇怨日本人嗎。

滿洲的建國。其前因後果。是是非非。姑不必論。只就我目之所見的一二事。來談。我初次到滿洲。是在一九三二年。那時建國未久。我親眼看到。街頭巷尾。到處宣傳說。「滿洲國是獨立的國家」。「是五族

之精神。而成爲猙獰侵略者的面孔。自此以後。中日兩國之間的友誼。就愈變愈壞。終至釀成中日戰爭。並且留下了仇怨與輕視的裂痕。

用我的眼光來看。都應歸結在人的問題上。也就是人格問題。仇怨與輕視。都應據此論斷。中日之間的是是非非。與那恩恩怨怨。是紙不勝書的。這裏僅舉我個人的見聞。人格對人格。醜態對醜態的幾點事實。作一檢討。

一八九八年清朝政府也以康有爲梁啓超爲首的效法日本。作了維新運動。但未及百日。卽告失敗。西太后重握政權。寃殺了六個維新志士。康梁逃往外國。西太后還想收捕國內維新派的殘黨。黃遵憲。（字公度廣東嘉應人作過駐日參贊與日本人交往很深）當時也是主張維新的重要人物。那時他正在上海候差。有人告密說康有爲藏在其家上海當局派兵包圍了他的家。一般人都替他擔憂。他在日本出使時。與日本伊藤博文。是好朋友。伊藤恰巧也在上海。聽到這消息。連夜訪問黃氏說。你處境太危險了。不如亡命日本。我可以私人保護你。如若不然。我可以用日本政府的壓力。迫使清政府不會加害於你。黃遵憲很毅然的說。我是清朝的臣下。清朝要殺要罰。我都有接受的義務。至於用外國人的勢力。臨難苟免。不是我黃遵憲的人格。所能接受的事。你如果是我好朋友的話。就請你不要管。如果非管不可。我只有自殺。以明心跡。伊藤聽到這話。悚然起敬。無言而返。這是中國人。以人格抗對日本人的一個實例。

一九〇四年。日俄發生戰爭。而主要的戰場。却在中國的滿洲。這在中國來說。是絕大的國恥。奉天會戰之後。乃木希典大將。巡視戰場。看見打死了許多的中國人之中發現了一個殘存無主的嬰兒。乃木立刻抱起那嬰兒。拍着頭說。兩個外國。在你們國土內打仗。這是你們的國恥。我希望你長大了。要雪國恥。爲你們國家努力。在傍的一個中國人。聽了這句話。感激的流淚。這一中國人。後來移居旅順。到了每逢乃木神社的祭日。都要親臨展拜。這事實。我就是聽這人口述的。這是一個日本人。以人格的心情。感召中國人的一個實例。

與日本的企業合作時。當那企業弄明了這路之渡。那一中國人必被棄之如遺。再如一個中國人。發明了一種食品可以賺錢。與日本人合作時。那日本人弄明白了這食品的作法之後。必給中國人少少的利益。而推之出門。而自己獨佔。類似這種事實。我可以告訴中國人。這不是日本專對中國人如此。即日本人對日本人也是如此。而被遺棄利用後的中國人。必會大罵日本人。而把仇怨。加到全體的日本人身上。舊日的仇日心理。就會油然而生。請注意。這在中國人對歐美。個人與個人之間。所沒有的感情。這是歷史留下來的舊痕的作祟。

這些微末的小事。足以證明中日兩民族之間。尚存在着無形的裂痕。這一裂痕。如不完全取消。中日兩民族。就無法永久的。眞誠的。合作。

其實。如欲取消此裂痕。也並非不可能。只在雙方的領導者。知道人心、人格、信義、的重要。尤在內心的反省。精神獨立。人格獨立。不可隨波逐流。屈已從人不可。强人就已不可。如此而已。

擧出一位在數十年前。殺身殉世的讀書人。來證明中國的歷史中。所謂眞正傳統讀書人。他們對於國家。有如何的看法。他們對於世道。要負什麼責任。他們對於自己的人格。是如何的自重。都是現代人所應該參考的問題。

一方面。願意告訴日本朋友們。你們幾十年來。始終沒認淸中國的立國精神所在。你們始終。也沒有遇見過。中國眞正的偉大的人格者。（這也難怪。這幾十年。中國都在內亂。眞正傳統的讀書人。已經隱而不見了）。你們也很少結交過。說眞實話的中國朋友。你們也很少注意過這問題。一誤再誤。遂至今天。

我再願意告訴中國朋友們。我們中國人。若不照梁巨川先生所說的。恢復「國性」。只靠了幾十年亂動中。所得的智慧。到處苟免求容。不能够堂堂正正的自立起人格來。只顧目前。而不反躬自省。不以信義自立。我相信無論到了什麼時候。終難免被人輕視。

協和的國家」。「絕不是日本的殖民地」等等。到了一九三七年。我由日本再去滿洲。那時的街頭標語。已經是大書特書。滿鮮一體化了。後來我畢業後。再到滿洲。那時的標語。竟毫無避忌的。指日本爲親邦。（卽母國）滿洲爲子邦。（卽殖民地）不久之後連滿洲皇帝。都變成天照大神的子孫了。我沒參加過滿洲國。也沒在滿洲服過務。對內情知道的有限　卽此一事來論斷。繼絕世。興滅國。是東方道義的美談。想不到在日本提挈下滿洲國。有如此的下場。你能怪中国人仇怨日本人嗎。

滿洲建國十四年。經日本協助之下。有非常强大的五十萬國兵。有龐大的工業建設。而一遇危機。不及數日。卽雲消霧散。死走逃亡。你能不信人心、人格、信義、的重要嗎。

上述各事。都是中日兩民族。歷史的舊痕跡。時至今日。已如流水般的過去了。但留下來的輕視的心理。與仇怨的心理。究竟如何的存在着。我們先從能够接觸日本人的中國人。與能够接觸中國人的日本人。來作一觀察。

中國人。久經內亂。養成了隨遇謀生。應變對處的能力。尤其是失掉了國土的中國人。內心自有其空虛之感。因而謀利求生存的心情。特別的强。這是値得同情。也不足爲怪的。但也有些敗類。不擇手段。不顧人格。無所不爲的只求自利。忘却了中國的國格。而日本人的個性。一向不知擇交、求友、的重要性。而且喜逢迎而惡直言。遇見正派的中國人。不肯低頭獻媚。就視爲頑固無用。敬而遠之。遇見顯殷勤。說好話的中國人。就一見而大悅。當合作失敗之後。日本人決不反省擇交的不愼。把一肚皮憤怒。都歸結到全體的中國人身上。輕視中國人的意識。就油然而生。請注意。這是日本人對歐美人。個人與個人之間。所沒有的感情。這是歷史留下來的。舊痕的作祟。

日本是個極度缺乏資源的國家。今日雖成爲經濟大國。而每個人的內心。都存着一種說不出來的。空虛之感。全憑着努力奮鬪。纔有了今日的成績。但在不知不覺中。養成了堅强的。絕對的。競爭、獨佔、不肯讓人。以大吃小、的習慣。特別表現於企業爲尤甚。譬如一個中國人。打通對外貿易的一條路線。

桂林梁巨川先生殉世遺言錄目次

序例……133
卷一　敬告世人書㈠……147
卷二　敬告世人書㈡……155
卷三　留告諸親友書㈢……161
貽趙智庵書……161
留囑袁馮林周彭五兄書……171
留奉袁玨生兄書……175
留奉馮公度兄書……176
留奉林朗溪兄書……176
留奉周霖叔兄書……177
留奉彭翼仲親家書……178
留奉鄒紫東親家書……179
貽曹鑲蘅汪玨齋二君書……180
留奉林墨青弟書……181
留示兒女書……182
卷四　巨川先生語錄……186
修己篇……186
論人篇……191

以上的話。就是我和和崎博夫氏。主張把巨川先生的遺書。日譯刊行的動機所在。我平生不善寫白話文。爲便於譯成日文起見。勉强的寫了。但覺着非常可笑。幸讀者見諒。

謝謝池田篤紀前輩的翻譯。

脫稿於戊午年舊歷十二月十二日。卽巨川先生殉後的六十年又一月零六日。

桂林梁巨川先生敬告世人書（一）

後學景嘉校錄

戊午年第壹（注此先生臨殉前所留之書）

吾今竭誠致敬。以告世人曰。梁濟之死。係殉清朝而死也。此事有千言萬語。思欲遍告世人。而心血已枯。筆性最鈍。言語艱澁。數年來。欲續未完之篇。（自註申寅年在積水潭、構思遺筆、艱澁未完、久思續之、）以言衷曲。而避兒女窺覘。（癸丑甲寅次女時落防察）避親友阻止。終年紛擾。苦無清淨地。靜坐深思。今年花甲將周。兒輩張羅爲壽。慮親朋來集。國變已數載。吾猶尙存。與素志不符、深覺可恥。剋期就義。不暇爲有統系之文。只好分作零段。簡短言之。間有滯澁處。竟以白話作代。伏望世有同志之人。代爲引伸考證而已。

第一段曰。吾因身值清朝之末。故云殉清。其實非以清朝爲本位。而以幼年所學爲本位。吾國數千年。先聖之詩禮綱常。吾家先祖、先父、先母、之遺傳。與教訓。幼年所聞。以對於世道有責任爲主義。此主義。深印於吾腦中。卽以此主義。爲本位。故不容不殉。

世人當訝殉節之事。何以遲至數年。曰吾有種種牽掣。未完之事。驟難如願。（附註、大兒在陝、家事未能交代、亦是未完之一小端、）常自念。豈可徒死。當看明世局弊害。遺留言語。敬告同人。然後死。故數年來。雖迫不容緩。驟難履行。又嘗歷引前賢諸事以借鑑。如吳柳堂先生之殉○○穆宗。距甲戌已及六年。日本乃木殉軍旗責任乃在數十年。（此事吾不甚瞭解、三年前、見報上、頗尊重此事、故記之請諸公翻閱考察、）文信國公。於宋亡之後。在元住數年。而後就義。先賢如文信國公。斷非小子所敢妄比。外國人之行事。吾亦不敢效法。吾但對柳堂之深沈堅決。思勉效之。自愧不如。光緒時。（卽吳柳堂殉時）一般淺人。有詆爲迂者。吾猶憶之。下士聞道則笑。歷來皆然。吾當時心已怦怦　並世曾叨。能無感發。只問自己心中。的的確確爲清朝而死。至於世人。認我爲殉清。或不認我爲殉清。

論世篇……197

附録

梁煥鼐「桂林梁巨先生年譜」跋尾……204
梁漱溟「思親記」……205
譯者跋尾（池田篤紀）……208
跋尾（和崎博夫）……211

十次。皆以不忍九夏沸騰。人民痛苦之語。歷次詔書具在。卽辛亥十二月廿五日最末之詔。亦諄諄屬望於大小臣工。以民生爲重。齊心努力。佐成民國之太平。故吾人。苟眞心求人民乂安。卽所以報清廷也。壬子辛亥年。余有殉清之心。而念我舊君。既以成立最良之民國爲心。及我大小臣工。皆當共體此心。故吾欲觀察民國之辦法何如。將有待也。（辭職書中、自叶云、亦欲覘其改革何如、卽是此意、）吾對於清民之間。有最確之判斷。曰能以眞正共和之心。（吾於丙辰年、思遺袁書、責其不眞心治國、引孟子以天下與人易、爲天下得人難、勿使中國天理滅絕、爲萬世罪人。辜負清廷付託云云。按此另事今附及。）治民國。則清朝不虛此和平揖讓之心。（共和之實功、本不能責以驟致、故但責以眞正共和之心、果眞抱此心、漸漸進行、則自當局、以至百官之言動措施、無處不予吾人以可見、吾人豈有不原諒者）不以眞正共和之心治民國。則清朝卽亡於權奸亂民之手。換言之卽因禪讓而民得安。則千古美談。自與前代亡國有異。徒禪讓而民不安。則一朝代謝。謂非亡國而何。今民國七載於茲。南北因爭戰。而大局分崩。民生因負擔。而困窮憔悴。民德因倡導。而墮落卑汚。全與遜讓之本心相反。是清朝亡於權奸賣國。已無疑義。古今亡國之時。必有臣工赴亡國之難者。廿四史不乏先例。豈廿五史之末。竟無一人。吾故起而代表廿五史中最末一臣。以洗國無人焉之恥。而留天理不絕之機。鄙人所持理由如此。無論爲公認的。爲獨見的。尚有不確實之慮乎。

今人爲新說所震。喪失自己權威。光宣之末。新說謂。敬君戀主爲奴性。一般吃俸祿者。靡然從之。（另記中有未食俸之語石達開之所笑也）忘其自己生平主意。苟平心以思。人各有尊信持循之學說。彼新說。持自治無須君治之理。推翻專制。屏斥奴性。自是一說。（此說能達到完成無弊否、另一問題、茲不暇辨論、）我舊說以忠孝、節義、範束全國之人心。一切法度紀綱。經數千年聖哲所創垂。豈竟毫無可貴。何必先自輕賤。一聞新說。遂將數千年所尊信持循者。棄絕不值一顧。對於新人物。有自慙形穢。囁嚅不敢言之概。甚或迎合新人物。毀罵先代遺傳。詬辱自家學理。豈國家數百年條教。（翰林頌聖最虛誣）所頒。以及吾人勝衣就傳。（子臣、弟友、仁民愛物、立身行己、原不止爲臣一端、可以類推、）數十年朝斯夕斯者。全屬虛僞無物乎。人人存怕死避禍。阿諛曲學。以圖苟全之心。世事能不淪胥。國家能不積弱乎。吾嘗謂共和與專制。當爲對立的。平視的。作賓主之形。互相尊敬。互相原諒。因乎時世。各就其宜

皆不必計。只在自己心。眞不在時期早晚也。況我數年來。與人寫屏、寫扇、皆寫伯夷田横之事。如晚村、季玉等事。屢屢書之。並有時附說明。又零碎筆記。有關赴義之處甚多。又向人談話。屢示人以蛛絲馬跡之可尋。古語云。得一知己。可以不恨。吾料友朋中不乏一二知己。眞能知我心者。何必多望於世人。（袁爽秋年丈、詩云、死索青蠅爲弔客。）

或云。旣言殉清。何又言本位。曰義者天地間不可竭絕之物。所以保全自身之人格。培補社會之元氣。當引爲自身當行之事。非因外勢之牽迫而爲也。清朝一時之事耳。殉清者個人之事耳。就事論事。則清朝爲主名。就義論義。則良心爲通理。設使我身在漢。則漢亡之日必盡忠。我身在唐。則唐亡之日必盡忠。在宋、在明。亦皆如此。故我身爲清朝之臣。在清亡之日。則必當忠於清。是以義爲本位。非以清爲本位也。諸君亦知鄙人。何爲硜硜拘執以行此義乎。設使今日風俗尚厚。或辛亥、壬子、有大老、名流、殉節者。繼續世道。則我尚不必亟死。諸君試思。今日世局。因何故而敗壞至於此極。正由朝三暮四。反覆無常。旣賣舊君。復賣良友。又賣主帥。背棄平時之要約。假託愛國之美名。受金錢收買。受私人嗾使。買刺客以壞長城。因個人而破大局。轉移無定。面目靦然。由此推行。勢將全國人。不知信義爲何物。無一毫擁護公理之心。則人旣不成爲人。國焉能成爲國。欲使國成爲穩固之國。必先使人成爲良好之人。此鄙人所以自不量力。明知大勢難救。而捐此區區。以聊爲國性一線之存也。鄙人所欲言之理由。尚有千條百緒。因一時舌僵心滯。時期已催。顧影徬徨。只得先將此一段。告一結束。再另起。

第二段曰。問殉清有何確實理由。而自謂光明坦白如此。

曰。吾有最確實之理由也。中華改爲民主共和。係清廷禪授而來。此寰球各國所共聞。千百年歷史上。不能磨滅者也。當時清廷兵力。非不能戰也。（假使清帝不承認共和而力戰則武昌必定立平此在事者言之鑿鑿人所公認）祇以不忍民生塗炭。故不惜犧牲大位。以統治權移轉於民國。原謂此爲最良政體。俾全國人民。共得乂安也。觀辛亥冬。與南方磋商數

如極端主新之陳君獨秀。以及江滬間迷信革命。而未平心觀察事者。皆不能不罵。所罵之言。不過頭腦太舊。眼界不高。奴性太深。不知世界大勢。等等名詞。各有是非。我自甘心受之、

有大笑者

癸卯中辰間。北通州潘君蹈海。明明有憂國遺書。而俗人偏曰瘋癲之病。並非憂國。又余觀刺虎戲。遇某商人。謂費宮娥弄巧成拙。凡俗人此種心理。余素知之。故壬子年辭職日。極晨進署。留書於案上曰。請司長千萬勿疑爲因瘋癲失性而辭官。蓋同寅某君。先曾言其同鄉某。（浙人）在前清商部辭職。係瘋者。其同鄉乃爲余所素識。實非瘋。余稔知卑俗、官僚。慣能信口訾議。故余先爲揭破。然究不知人之肯信我否也。再證以光緒六七年。人之譏誚吳柳堂先生。或曰迂。或曰沽名。則知背後譏誹。必不免矣。

有百思不解者

今人多致訝肯負責之段氏。何必苦苦要幹。何不早自引退。一身淸閒。可見對國家冷淡之人。不知肯負責者心中之意。(余非完全崇拜段者另有見)相越實遠。無可如何。故對巨川之死。雖極加憐憫。而詫歎嗟訝。謂何其愚儍至此。世間風俗。與己何干。事不干己。而白白送命。究竟有甚麼益處。此等論調。偶未從二十五史國性上著想耳。試從廿五史國性上着想。則知對於世道有不容已者。

有極口誇獎而未知我心者

此種人。余最感激。敢斷言中下級商、賈、鄉、農、勞働、窮苦諸色人等。大多數如此。卽余所常交好之人。亦有如此者。彼之心思眼光。將我此舉。專限在淸一方面看。以爲留此光榮。足爲一姓生色。甚或誤猜度我有恢復宗社之心。而力不能爲。故有此舉。又或以完名全節。爲我個人成名之榮譽。是雖待我極厚之心。而未思我悲痛國性淪亡。以此爲民國之對映。希望世上人。各

④

而用之。不當爲獨尊的。賤視的。作仇敵之勢。互相嫉忌。互相仇攻。不諒苦衷。必加蹴踏以爲快。吾人幼年所學。如覺太不適時。當玩味孟子之言。孔子聖之時者也。可以爲便通的。不可以爲蔑棄的。戚繼光、訓戒兵丁曰。凡對於祖師、教授、諸法。存輕侮之意者。必敗。吾觀一般無骨之人。對於國俗所尊信持循者。自己蹴踏自己。卽斷爲中國必亡之眞因。欲救此亡。當從心術根本上起。吾臨死匆忙。雖反覆言之。猶未盡萬分之一也。（待友代我引伸發明）

第三段曰。效忠於一家一姓之義狹。效忠於世界之義廣。鄙人雖爲淸朝而死。而自以爲忠於世界。諸君如不信。請試聽鄙言。(今吾國人憧憧往來。虛詐惝恍。除希望僥倖便宜外。無所用心。欲求對於職事。以靜心眞理行之者。渺不可得。此不獨爲道德之害。卽萬事可決其無效也。夫所謂萬事者。卽官吏、軍兵、士農、工商。凡百皆是。（先聖治國、以先使人有良心、由敬愼而成事業、所謂納民於軌物也、今高談法治、先使人放蕩、不加拘束、專恃法律萬能、且曰、自入軌道、卽成大治、嗚呼、吾不解軌道何以自入、世上安有此等事、此夢不醒、人類尚堪問乎、）必萬事各各有效。而後國勢堅固不搖。此理最顯。我願世界人。各各尊重其當行之事。我爲淸朝遺臣。故效忠於淸以表示有聯鎖鞏固之情。亦猶民國之人。對於民國職事。各各有聯鎖鞏固之情。此以國性救國勢之說也)（附注：我挑鄰婦：人挑我婦：種種可援之理由：極多：不暇一一引證、）我非先效忠於淸。卽無從效忠於世界。田橫忠於齊。而兩漢節義。因之而興。其理可通。鄙人常引孟子。苟能充之。以爲萬事一貫之例。今以殉淸爲忠於世。卽是此意。我發此等言論。人必笑我迂腐不堪。（我左右卽有鄙薄我者）然我確見國家受害。在於執政諸公。以及偉人政客。空言高遠政治。無一事從人民根本上著手者。日日墮落。將入獸途。豈惟不統一之害。卽僥倖統一。而仍此驕盈矜誇。不求事實之政治。導國民以狡詐行爲。表面上似乎〃霸者驩虞〃。而實際上。則天良汩沒。終不過。釀世間之阨運浩劫而已。（伏卵記中、痛言此等、種種致亂之原因甚多、如憐我者、請翻閱之、）故我不避迂腐。希望世人。反而求之。或減輕世變於萬分之一。雖笑罵我爲冬烘。頭腦鄙陋不通。我自持之有故。對天下後世而無慙也。我料一般人對我之評論。千奇百怪。有大罵者。

和。彼蒙、回、藏、視滿何如。猶體上天之心。同視之。甚至外洋白人。猶親愛而尊重之。何有於黃帝之子。肅愼氏之後。與吾數百年同化之滿。且詆滿者。亦非一類。開國時。理應排滿。然南方人、限於地域、風氣。未知北方眞相。所詆多想像傳聞。良非事實。（此不獨宮廟不能盡窺也、卽人民小事、南北傳訛、亦正不少、）且國初去明未遠、文學之士。仇恨附會。情理當然。卽詈如犬羊。而未定事之有無。（除昭昭有據餘則近於了虛）究於彼身何損。至淸末之排滿。則籍題尋釁。根据舊說。又有粃政瑕疵。利用爲煽鼓之具。（此因孝欽自身招之、）實亦非眞情。至亡國之後。可以已矣。而又出多種怪書。（余未曾看）不過漁利之徒。迎合澆漓心理。蓋刻薄下賤之人所爲。而未思與共和之理相反。卽此可覘民國之風俗、人心。尚未入於敦厚。望當局者平心靜氣。以取締之。至於我之對淸、不能因孝欽失德。而有貳心。二三百年。代有令辟。豈無眞心善政。古之臣節。未聞因君上失德。而可叛者。（叛之而爲湯武、猶可原也。判之而爲亂民、何以服人。）況我既犧牲功名性命。尚何慮人誚我爲滿奴。我自行我當行之事。求培補世道而已。他非所計。

或又謂癸丑、甲寅以來。既有事牽掣遷延未死。今時機已過。卽閉門不仕。亦自不卑。何必定要捐軀殞命。曰吾見人口言戀主之言。而身不作事。又多以不問世事。優游林泉。或溺志詩酒。遂自標爲忠義。未免太形寬泛。（欲不寬泛、惟敢作稗益世道之事、）且吾壬子、癸丑年。兩次粵西老館（五月一月）團拜。隨同鄉先達。在關帝文昌兩殿行禮。（新學謂文昌是星、而非神、吾不違舊習慣、故敬之、夫神何所謂有、不有哉、吾心卽神、吾自告心而已、、）皆告於神明。必將死義以救末俗。兩殿行禮畢後。必到先賢位前行禮。先賢牌位。有嚴親永甯公之名。（丁卯由山西回京、吾家淪爲窮困、不與世通、不知何時、經何位値年、將先君名字加入、至深感激、）壬子後。兩次行禮。（亦有人罵我腐哉腐哉、我豈不知之、然我欲存國粹、須有負謗膽力）必敬告。興亡之際。當發明正義。不敢辱親。（庸言報上圖點句子之處、似曾記此事、）又每次到墓前祭奠。必告（人日）云。將行此事。惟以遲延爲恨。今雖遲而猶踐言。所謂盟誓之言。豈敢背之。不似袁世凱言行不一致。致將全國風氣弄壞也。尚有許多拉雜之言。一時說不出來。尚有他事太忙。只好擱筆。凡我所言。有得罪人的話。亦有可誣指嫌疑者。無論何事。皆我死者一身當之。不與兒輩家族相干。卽兒輩亦不知我所營何事。且多與我不同意也。第四段本未完。而勉强算完。

各打消僥倖詐僞之心。以忠於職事爲務。將以殉清爲起點也。吾對於清朝。以死爲當然。赴之如飴。然丁巳五月初十。曾有信(屬名無求)致張紹帥。力言不可復辟。宜屯兵養望。監督民國。實行仁義之政。以副禪讓之心。蓋望吾君爲堯舜。不望吾君享目前之尊榮。致後來之顚覆也。我愛清之心。與大多數人愛清之心。相異者在此。

有眞能知我心者

凡注重。須先有良好人民。而後國可以立。不專靠死板法律以爲治者。是皆能知我心者也。我身自殉清。而曰忠於世界。蓋望世上之官吏、兵警（即巡警）、士農、工商、一切人等。對於所營職業。各各打消僥倖之心。激發誠實之心。而後萬事有效。國可以立。此僥倖心何以去。誠實心何以來。則玩索中庸。小人而無忌憚也一句。可以得之。使人有忌憚。則良心之發生不遠矣。清朝往矣。我以誠實之心。對已往之國。絕非希望寵榮。世人以誠實之心。對方來之國。莫爭個人私利。我之愛清國。與人之愛民國。是一心非兩心也。壬子辭職。書中引曾文正語。風氣起於一二人之心。蒸爲習尙。極乎千萬人。莫能禦。又有或賴並世之同心。或俟千秋之悵望云云。竊料普天下人。聞此言而憐憫者。必不少。是皆我引爲知心。籍爲後盾者也。切勿求清廷嘉奬。

以上第三段。實是支支節節而爲之。每晨偷寫數行。或有人來。或有事擾。間斷不知多少次。勉强將大略寫出。我心已慰。尙有平時欲言。而臨時忘加入者。如〃數千年所專信持循之信條。一旦被人摧覆掃除。將隨逝水東流（似十年前國風報語、餘常念之、）以俱去。竟無一人追攀挽救。豈眞由瞭解共和精義乎。（彼有彼之神聖不可侵犯我亦有我之神聖不可侵犯雖不必追攀亦當自思）抑世道衰薄。不知以身殉道。而但求免禍。苟全性命〃。類此之語。不可勝數。今無暇潤色文詞。嘵嘵不已。屈指計之。爲期苦短。尙有致蓉溪、東海、以及託五友料理。兼告墨青等事。只好匆匆將第三段。至此結束矣。

第四段曰。尙有餘義。拉雜言之。或謂世人痛詆滿清。子何獨犯衆議。曰。旣詆滿族。則無所謂五族共

桂林梁巨川先生敬告世人書（二）

後學景嘉校錄

甲寅年第貳（注此先生自甲寅年欲死而不得所著之書）

當世有心人。莫怪余死之爲時太遲。而見理太迂也。請平心靜氣。容吾剖明此中不容已之情。求大衆垂聽焉。辛亥、壬子之間。余固欲死矣。然彼時若死。則純然爲清朝亡國。目的太小。且舊君以政權移轉民國。深望民國能善治。余尚未觀察明白。民國是何景象。余心所欲告世人之言。亦未說明。萬不容糊糊塗塗。犧牲此身。故欲死而遲遲有待者。有兩原因。一則忍死以待國會之開。（按此猶清末重視國會語氣、以爲千載難逢之盛會也、而豈料今日爲破壞道德之根源）欲以最苦心事。愬之全國代表。求全國最賢明之人。齊心挽救民生、民德。鏟除世上不公不平。使吾國躋於高尚優美。自辛亥臘月。余定此主義。原意。共和國勢力之最大者。莫過於國會。賢才之最盛者亦莫過於國會。昔日有苦心欲言。則伏闕上書。愬之於君。求吾君設法。今時有苦心欲言。則泣血請願。愬之於國會。求國會主持。吾在清末欲上書。半就而未及上。（吾友林次煌、周霖叔、林朗溪、白松泉、諸君、俱曾見此七千字之書、）今又新添悲痛之事。益不能不愬之於國會。且國會爲吾國數千年未有之曠典。五六年來。請求國會之聲。喧闐洋溢。今既實現有期。不可不旁聽三次。參觀盛舉。然後死。故壬子年。余頻頻問兩兒。國會定何時果開。皆云癸丑三四月間必開。不料癸丑國會開後。一般議員。乃全非素日心中想望之議員。全不以救民救國爲心。搗亂行私。不成事體。凡吾國所最尊重之道德。皆彼輩之所賤視。始而猶希望其數月之後。漸就安靜。乃竟私慾迷心。躁囂悖謬。除黨爭兼縱慾外。一無所知。即使以民生國計。懇切陳詞。亦斷然難望其靜氣平心。籌維挽救。議員大失人望。幾於通國一詞。少者之優。盡被多數之劣者所累。余亦未赴院參觀此余待國會而遲死之原因一也。

大兒煥鼐。東洋留學生。商科畢業。在京賦閒。餘既辭官。無一錢之入欵。大兒不能不奔走爲養家計

百忙之中。明日尙須赴祝家裝壽星。（前幾日、林君約我到天津、張家邀我辦喜事、）親朋多愛我。而不知我有苦衷。世人莫怪我心地深險。絲毫不露。我素日絕無道學之名。蓋深知今世不容直道。故形跡上不甚彰明。壬子五月。我入署。滿心言從此洗汚向善。而某君言不過金錢主義。且言薪俸制。幾等幾級。云云。我至茫然。只好面上敷衍。而心竊哀之。我今怕人笑罵我以道學欺人。故不得不好整以暇。非心地深險也。若以心憂世道告人。孰不笑我事不干己。何必多管。且有譏誹者。我故不能顯然眞說。

戊午九月廿一日　梁濟誌

十月初七日臨死再告世人。我非不知世間有生可以行樂。求死實爲至苦也。然而我壬子年辭職書中。引孟子一句云。所欲有甚於生者。是歇後語。試玩索孟子下一句所言。則知我已權衡生死義利之間矣。我幼年。受歷史先賢之詔誥。以信義爲前提。壬子、癸丑、甲寅、年間。祀神則告於神。祭祖則告於祖。身逢清朝鼎革之際。思效歷史節義之所爲。轉瞬五六年來。並無人監察我、督責我。我卽自己取消前說。亦孰得而見之。然而我之良心。無異監察我、督責我。時時常覺疚心。又見中國今日。世道方以澆漓詐僞著稱。煌煌鉅公。竟以挾詐懷私爲手段。今日信誓。明日干戈。無一毫敬畏天理之心。鄙人名位雖微。何忍又加入喪心昧良一份子。是以千方百計。必求踐我初心。今而後良心可以稍安。自問。未嘗以澆漓、詐僞、毀害社會也。鄙人此種言論。必爲今人所不取。惟有一劉少少先生。或者以我爲然。鄙人與劉少少先生。素不相識。未嘗謀面。惟昔年觀報紙上。所發揮多注重根本之言。是以偶億及之。

刻因舍親淨湖主人。重門緊閉。坐俟天明。方能出去赴水。又草此數行。戊午十月初七寅刻。

此三篇歸戊午敬告世人函內

以死者。矧其爲二百七十年之朝代。有統屬名義之存者乎。余故以清亡無人肯殉。非由人人盡解共和、實由人人盡存澆薄。斷定爲世道人心。今不如古之確據。深慮搏挽民心之信條。蕩然無存。可以無氣無骨。而斷送清國者。亦可以無氣無骨。而斷送民國。於吾中國立國之本根。關繫極大。故以一死。泣告世人。求世人勿以先民教義爲迂談。對於余之一死。靜氣平心。賜以鑒督。但余之死。有求世人推類觀之者。有求世人分別觀之者。厥有二義。

余自幼魯鈍。於文字。有時亦能暢達。有時則靈機忽滯。寫至此處。胸有萬言。忽然不知去向。勉强構思。則一陣腦昏。仿佛心中有一物。幾乎吐出。脣部有一物幾幾乎遺出者。舊病復作。自恐話未說完、而身死。於是勉强按住。暫後尋思。休息數日。以待復回。此時適有電燈公司開會。不能不抽身前去。又寫信與表弟陸芸史。商量贖股票。又寫長信與朗溪。商量鄭宅事。心事愈紛。時間愈促。傍徨旬日。仍想不出頭緒。不能爲扼要之言。只得不顧文法。拖沓重複。就平日心中所常念者。粗言之。

所謂推類觀之者。卽上述無氣無骨。斷送清國。亦可斷送民國。於中國立國之本根。大有關係。吾憤慨之事。非止一端。可以謂之殉清。亦可謂之殉中國也。吾學識庸淺。只能爲庸淺之言。夫道德墮落。世教凌夷。此在亡國末季。固常有之。而在開國時代。則斷斷不容有此。且我國歷史。開國時之人、亦無敢顯爲不義者。今開國時。大倡反道敗德之業。直難徧舉。玆先以官場心理之卑劣。約略言之。數千年之倫常。一旦改革必當有極重之代價。乃不惜犯義而行。乘此吾國開天闢地之新共和。爲民造福機會、實無逾於此。吾之所謂代價者。卽以人民之安。易孤負清廷因愛民而犧牲大位之心。置數千年一改革之好機會。而不顧。竟不知此番大舉動。所得果爲何物。於此有告以民不堪命。槁項黃馘。死於涸轍、種種苦況者。非瞠目不信。卽淡漠視之。甚至以爲下民。本係最輕賤之物。窮餓乃其常態。官何必知之。而綜合撙節之說。則目爲書生迂談。不値一顧。凡平日指摘議員漠視民依之罪。一一躬自蹈之。吾國本有危亡之禍。又授外國以絕大債權。再加以怠荒、昏謬、悖妄。種種行爲。豈非愈速其亡乎。昔法國貴

壬子九月。受同學之聘。爲關中大學教員。洒淚登程。去家三千里。余欲令其照東洋暑假回家。而不知陝途較東洋艱苦。癸丑二月。先函告其五六月回家。蓋以大兒回來。則家事乃有交代。又豫計癸丑五六月。國會旁聽已畢。心願已了。上書之日。卽可以死。（鼐欲年假回家、余戒其不必、蓋年假天冷、爲期太短、不能料理家事、余心早定、必須夏日、天安門外水流不凍之時、又同時吾大女、由青島、五月來京、亦是此意、兒女在家、余見彼面、彼收吾骨焉、）而陝西同人。挽留鼐兒。在彼辦事。先有張譚諸君。向余言。必須將鼐眷送陝。以免隻身太苦。鼐兒來信。則云。審計開辦。機會難逢。若開辦時不在事盡勞。事後欲進身恐難。故鼐婦於六月赴陝。鼐兒訂於第二暑假回家。（卽甲寅夏期）此余因家事須交代。而遲死之原因二也。雖然。余究因何事而必出於死哉。此非一二言所能罄。吾學本極淺陋。文筆素不簡明。近更忙冗紛紜。慌張昏亂。容吾以最拖沓之筆。述最迂腐之言。待有心世道者研究之。

辛亥壬子之間。自親貴皇族八旗官員。以至全國大官、小官、臣庶、無一人因清亡而死者。實爲歷史上最奇特之事。余惶然深思。靜心觀察。辛亥革命。未及百日。共和之理。人多未明。清國之亡。無一殉者。此非人不殉清之徵。而實中國立國之道。將絕於人心之徵也。立國之道。絕於人心。則不獨對清國無聯屬之誼。卽對於事事俱無聯屬之誼。此卽國將不國之大因。實令人抱無涯之感也。夫清國者。數百年一改之國也。中國者。我三古遺傳。萬年不改之國也。國何以不改。有立國之道。以維繫之。故能不改。清國已亡。無須戀惜。民國未亡。若不重此立國之道。促使其國不國。豈不大可痛乎。從古立國之道。必賴有搏挽國民。使不離析之一種信條。而後國於天地。有以樹立。此信條惟何。卽對於身所麗之國。誼應同休戚。而有傾向心。無離畔心。卽有時因怨恨。而離心發動。亦斷不至無一人代表。平日傾向心之濃摯。有此一二人爲代表。則其餘諸人。雖不躬行其事。心中亦覺怦怦。此信條常印篆於人之心目中。故一旦遇外國之强有力者來。臨之不驚。撼之不動。不致如摧枯拉朽。所以數千年。巋然建立。賡續不亡耳。若專就滿清言。此信條尤當爲親貴八旗諸人所篤信。而官吏臣庶則分受之。奈可俱漠然哉。吾國素尚節義。卽世家大族。於其傾覆敗亡之際。恒有俠人、義士。挺身維持。至朋友相交。亦有許友

宗社爲事者也。蓋我之對清。卽與民國人之對民國爲對映。專以世道爲主義。我願世人各各忠於職守、俾心在事上。然後萬事有效。國不斷絕。故歷引在漢、在唐、在宋、在明、爲比例。以示我身在清。卽當爲歷史上。不可斷絕之事。至於將來學理。變成甚麼樣子。改爲何等說頭。我自不管。（總以勿苦[illegible]人、能行總實爲如、）我惟勉作廿五史之收科而已。我既爲世道而忠於清。故云忠清。卽所以忠世。此須觀其通的。不宜觀其滯的。我恐人以我爲限制君主之尊貴也。若果心目中看君主爲倫常之至重。則看代價爲民之安。亦萬不容輕。吾亦知安民之事。堯舜猶病。在事實上。本非易爲。然既口稱共和。則應向求民安一方面。勉强作去。夫共和無盡量。以心力所能到之處爲盡量。苟有可以杜再來革流血慘禍者。當不惜傾身爲民受屈而爲之。歐陽公所謂。求其生而不得。則死者與我。皆無恨。孟子所謂行仁有術。姑就目所已見者爲之、(見牛未見羊)。（此句勿誤解。須就國家人民大處觀之。若大官照應親私。雖亦是振救所識窮乏之私德。然今世以民爲前提，重普及公德。不重目前私德、一家哭。一路哭。宜省察辨別。勿藉口、）是皆就心力所能到。而行之意也、中國民生凋瘵。既已天下共聞。斯時惟有蘇息民困。勉强求副以民爲主之言。是爲弭亂之要領耳。以本無共和程度之國。既已改建共和。不能反汗。惟有抱定不忍妨害社會共同生活之心。做得一分。算一分。求與共和之理不抵觸而已。（曩者、張仲仁同年。在彭翼仲家。問余何事辭官、余答以公共觀念。而未引伸其意。蓋借外國嚴酷之債、以養無事之官、人民分受債累之痛苦、冤無可伸 而致此破產之人。則養尊處優 人樂無事 實爲不公之至、此余所以援公共觀念 而辭官也 仲仁驟聞之。或未悟及。妨害社會共同生活之理。）實則以吾國不堪再有俶擾爲前提。官吏暫爲人民受屈。稍分人民之痛苦。減輕人民之憤怒。勿授人民以革命之口實。內亂不作。外隙不乘。戰戰兢兢。先民之基緒不墜。中原之大陸不沉。忍受數年苦楚。將來國勢眞見盛强。是皆今日。官吏稍受艱苦之奇勳也。夫以民爲主。非謂官吏必捐棄體制。貶達官之尊。與窮民同飢寒。而國家之勞役、賦稅、刑罰。概不敢施之於民也。但使朝野上下。人人審民窮財盡之大勢。知今日第一要害在財政。各發其憂勤惕厲之心。將俸額減低。或俸額雖不減低、而目前姑爲少取。俟國力紓緩。再量爲擴充。凡恃官爲衣食者。當知各機關冗員濫費。皆吸收人民衣食住上之膏髓。積合而成。痛癢相關。甘苦在念。勿以衣裘、輿馬、妻妾、嬉游、諸事。妨害社會共同生活之資料。而爲大亂胚胎之起源。若使官僚。從此着想。勉力爲之。此實人人心力能到之事。雖不能驟

族之禍。老弱婦稚。胼胝以奉誅求。一旦忍無可忍。奮臂大呼。貴族遂無葬身之地。現今人民聲口。誚官癮。罵官邪者。不一而足。恐官吏受禍不遠。況吾國爲列强所注意。一旦亂起。又不止於官僚、貴族、覆敗而已。自兩年來。官場召亡國之禍者。不勝縷舉。玆僅舉不重民之一端。已令吾不忍生矣。此求世人推類觀之者。殉清國而不止於殉清國。兼中國。亦包括在內也。

甲寅五月十四五日。余內姪女張佩珍出嫁。因其無母。不能不免强幫忙數日。余旋卽大病。畏寒衣棉。在家臥床數日。心力頹唐。萬分焦灼。旋接鼐兒信。言大約陽歷廿號由陝動身回京。余自悔前此。不急速擬草完篇。今時期愈促。說不出道理來。豈造物不欲我成此事乎。又再思之。卽使不能作完此事。作至半途。亦不能不踐言。但求世人能知余一半心事。亦已感激。其一半未說盡者。無論如何。以粗鄙不通之白話說之。不能以文留於世。想亦命運限之耶。此時計算。凱銘到家後二十日。連此途中行路之旬日。不過月餘耳。餘尚須料理家事。檢點裝殮衣物。安排客廳字畫。備弔者來觀。以求知我先德。（字畫上有先德可徵、故欲求來弔者觀之、）眞茫無頭緒。不知從何下手。所最苦者。只有自己獨謀。自己動手。並無一人助我耳。（此時尚求姜頴生、袁玨生畫、欲湊成身後之觀、余尚有他事累心、世人萬勿以余爲〃欲淨、理純〃、之人、實不能無私欲、但尚知大義當赴耳、）余手持零星事務。奔馳於炎歊塵土之中。屢將鑰匙遺亡。蓋積水潭。亦無僕人。無一事不躬親。苦極。甚盼兒輩。將來境遇稍好。莫似我太苦。

閏五月初一日記。以下欲說白話。故先記此。（此前尚夾請袁玨生聽戲、致王緗綺長函、鳴謝、兼論事。又承劉炳堂請吃飯、清談一日、好整以暇、誰知我心、）

　所寫十四篇以下爲午年補完。

甲寅年。餘標明兩義。一爲求世人推類觀之者。一爲求世人分別觀之。者。當時心思窘滯。此二語本不甚明顯。又因事務紛冗。只將上一半寫完。而下一半懸擱數年未寫。今從篋底檢出。（鎖在積水潭櫃內）思欲續寫。而徘徊數日。心思語意。筆路勢難與前相符。既有戊午九月。竭誠致敬以告世人四段。則甲寅下半篇。亦不出此意。請看四段便知。不必再寫。惟將求世人分別觀之一句。略加說明。以免有始無終。

所謂分別觀之者。卽確因殉清而死。而非如罵賊捐軀。沙場暴骨。（絕非憶故國邱墟、以殲仇爲志、破千金之產、以椎秦、）忠於。一姓專以恢復

桂林梁巨川先生臨殉致各友人書（附遺兒女書）㈢

後學景嘉校錄

致趙智庵書

智庵先生鑒。梁濟灼見世事泯棼。由於人人爭權利。人人不盡責任。非從人心根本上。猛省改革。雖借絕大絕大之外欵。採取最精最精之治法。不過勞費筆舌。曠廢時間。一切俱成空虛。而且作孽無窮、剝喪心術。終至全國糜爛。錢財揮盡。而無功。人格壞盡而無救。必召亡國之禍。卽使幸而不亡。亦存其軀殼。亡其精神。無以對先聖昔賢。有負此神州大陸。此一定之勢也。濟知識卑薄。力量孱微。始而以不爭權利諷觀世風。（十餘年、在官場事蹟可按、）今乃知世人對於我。若不見不聞。毫無感動。去年上書辭職。力陳民生窮困、官俸虛糜。思欲藉新國開基。倡明公理。一改人羣之視線。詎料不蒙我公主張提倡。致區區先民後官之意。未得顯明。（我公挽留之意、似以爲我出於觖望、至於官場衆人、對待我、評判我、則更離奇、不可思議、哀哉、哀哉、豈今日之世、只許爲個人計、不許爲公共計哉、哀哉、哀哉、）今濟除此七尺軀外。更無可再爲犧牲之物矣。特割棄一切愛情。（詳見別竹辭花記、）捐棄生命。（本預備塡寫癸丑甲寅某日、赴天安門橋下等字、因事牽阻、而趙總長亦逝、今歷久、仍改日塡戊午九月某日赴積水潭中死。此書本對大衆言。雖趙君已死、未能宣布、但自恨遲、要視對大衆言。天安門有巡邏、恐遇救、故改地。其實心猶死天安門下也。附注。）謹陳最後緊要之言。伏乞虛衷鑒察。（濟心所欲言、何止萬語、以事忙才短、時促神昏、又防遺兄女而行、故措詞潦草匆匆、語欠修飾、意未圓醒、乞以意善體會揆測之、爲幸）濟最切盼於我公者。以道德爲立國之謨。勿徒以才能爲應事之具也。（才能不過、種對付社會之手段、道德則關繫人人心中之天理。民彝。國家所以成立之根本）壬子正月。兵變亂搶之時。我公勞苦撫綏。所造於民國者良厚。是應事之才。已爲人所共見矣。而事平之後。於培挽風俗之事。全付闕如。則尙德之心不見。孟德斯鳩言。民主國。以道德爲元氣。我公失此最好機會。窃爲不取。夫中國爲炎黃神胄。五六千年。原有最美善之國性。昭著環球。今成爲共和民國。是誠、絕大之轉機。設使千百年後。想像民國開闢之初。若何敦崇人格。若何整頓民風。皆由總統、總理、抱正大之主張。盡勤瘁之擘畫。故能使晚清頹敝汚濁之國。一變而爲中華光明俊偉之國。實某總理旰食經營之所賜。抑或千百年後。想像從前中國。本係仁禮德義。最爲著名之國。自民國肇興。特開奢淫縱欲之

滿共和之量。要之與共和之目的不相違背。亦開國時代。理當如此。並不爲奇也。乃不謂官場風習。不惟狃習舊汚。抑且變本加厲。於數千年改革之大機會。並不視爲可重、可珍。始終存一自營利祿之心。並無乘勢澄清滌穢更新之義。一任倫常破壞。不求代價相償。一任事理不公。不計再釀革命。數年來。流民失業者。憔悴呻吟。到處皆是。堆積眼底。彼終視如不見。一切腦後置之。國家之債務愈深。而官吏之浪費愈重。惟務抬高官之地位。一若官之爲物。應與大衆區別。諸事可後。獨官之快樂不可緩。而國家與人民。無妨供其犧牲者。而所費又非用以建設正務。不過維持一麻木痺痿之現狀。搜括小民之脂膏。以供粉飾。舉借亡國之外債。以充乾脩。曾不顧與共和之原理相抵觸。致使政治變成僞善。全國人之觀念。愈趨愈卑。界域的忠於清。故云須分別觀之也。至於甲寅年上半篇。余痛詆官僚。剝民脂以縱私慾。豈料此四年來。政變日多。黨爭日烈。禍害日亟。應接不暇。紙不勝書。較之甲寅年。更有目不忍視。口不忍言者。今日剝民脂。以養多數無用之兵。其害更慘。於甲寅年百倍。兵之罪惡。不可勝數。凡工商各界。皆視兵爲異類。不敢接近。帶兵官。不加教訓。禍可勝言乎。迫國人爲娼、爲盜。否則不能存活。而一般人。猶抱樂觀。是尚有我存身之地乎。（與庚娘戲中語參看）尚有千言萬語。祇好擱筆。我雖不取名士。然易石甫尚能知我。樊雲門則不知我。不設心體貼之故。蓋根本上觀察不同也。

戊午年九月廿三日　星期將赴積水潭檢理。

教育。官吏割棄己私。以精白之心。造黎民之福。而後符共和國以民爲主體之本義。不啻此淺近微小之教育。作一種子。納諸土中。盼其萌芽。使國民共見苦衷。鼓舞其艱難共濟之心。發動其齊力進取之志。（而官吏當自覺英風儉德、痌瘝無慚。對於國家擇術之精神。正不知增加幾許。）此卽漂搖新造之民國。無把握中之把握。將來抵禦外侮。開闢財源、揚播國威。無一事不賴民而成。故必須以民爲前提耳。惜乎公之左右。皆無眞識。不以此意告公。公亦不自有此意。告之總統。竟舍千古之偉業。而徇俗衆之苟安。此誠可爲歎息者矣。濟去年。對於加薪、斷斷致辯。非眼光如豆。務從減縮之問題。係開創艱難。不應汨沒喪心志之問題。如謂國家危急之秋。官俸加多。卽國勢緣此而收鞏固之效。竊恐正未必然。向來聞警則逃。屢驗不爽。（濟親眼見甲午七八月京官逃走者十之八九、或先將家眷送回南方。庚子、辛亥。更不像話。去年庫倫有警。居然又出京三、四十員。此等官。太平則來。聞警卽走。可鄙極矣。雖加俸以養之。於國何益。）而緣此。志節益頹。侈肆益甚。財用益匱。民怨益深。則確乎有實事可憑也。（財用匱。不足惜。徒費財。而於事無裨。於人心有害。乃眞爲可痛耳。）且濟謂。官僚當改革者。並非膠滯加薪一事。凡入民國後之官吏。須先將個人與公共辨析分明。然後萬事乃有着手處。純心爲公。固不能遍責之於平常之人。而純心爲私。則大背改建共和之本旨。果循此不變。必再召浩劫之來。今民初開。官吏仍持箇人主義。不存公共觀念。良由最高機關。不以道德爲提倡之咎。夫事事以官規相繩。此非刻薄對待官僚。正所以愛護官僚。期自立於二十世紀社會公理發明之世。免遭慘酷之禍耳。我公苟通盤計畫。則知豎起脊梁。得罪官吏。係開國之氣魄。非殘刻之行爲。而自民國開闢以來。自始未以志節操持示同僚之趨勢，（甚至組織未發表以前、某員外、自請留差歸家、又請發給川資。公亦以柔詞答之。惻隱之心、固云厚矣。其如風氣卑靡何。）此濟所謂明公。當以道德鞏固國基。而最失機會者一也。

二爲儆覺人民最失機會也。新國肇興。有限於事勢。不能旦夕施爲者。如財政、外交。諸大問題。驟難整理。此當爲政府恕諒。有事權在手。可爲而不爲者。如內地人民。習爲匪僻。不求振作。此不能不咎責政府擇術之疏。夫欲使一國渤興。必先返觀一國之人。爲何如人。以言對內。則樸誠勤儉。爲致强致富之所由來。以言對外。則貞固整齊。卽爲無形無聲之絕大武器。此在平日家居行事上。卽顯然自呈。無待深考。故人成爲何等人者。國亦成爲何等國。如謂衆人不講心術品行。而可成爲良好之國

惡風。使吾國貞孝、節廉、崇實黜華。種種國粹。無復存留。實由總統、總理。提倡有偏。不知防遏之所致。如此則我公之功罪。顯然易明。濟竊願百世以下。使人思念我公。喋血奔馳。手挽危機之苦。更景仰我公。居心正大擇術。能提倡人民進德之基。培養國家成立之本。庶乎有德可見。不僅有才可見也。濟以爲我公。當以道德。鞏固國基者。有二要事。最失機會。請於臨死之時。不避厭惡。約略言之。一爲改革官僚。最失機會也。淸廷之季。人人以官爲詬病。每歎無術廓淸。忽遇革成功。官員全體取消。人人震悚。斯時官吏心中。以共和國之官。當自有標準程式。苟許厠身餬口。則以如何爲標準程式。均所樂從。設此時。表示一定之方針。務使作官與作人。合爲一事。非有敦崇志節。實心爲民者。不得赴功名之路。則從此官場丕變。挽回風氣。卽是轉捩乾坤。洵千古不朽之業。乃各部重新組織。不先以品誼節概爲衡。依然煦煦噢咻。惟位置私人是計。於是官僚。喜出望外。以爲千年舊弊。可以習而安之。大局危險。漠不關心。個人私圖。驟萠奢望。初定月薪六十元。本可暫資餬口者。竟靦然議加夫、加薪。亦終不容已之事。而還問。革命求達之目的若何。人民負擔之狀況若何。國家借貸之貽害若何。官吏之勞力若何。且官吏薪俸以外。尙有更急更要之事若何。平心一思。當必爽然自失。明公起家行伍。似應洞悉艱難。（唐太宗、以一羊分食諸將士、楊行密、錫予將上、其帛不過數尺、彼非吝嗇、窮困之際、不得不然、）當此經營草昧之時。應有傾身及物之概。古之生聚教訓。皆從危苦困難中做事。非從堂皇富麗上設施。濟初次辭職書中。有官俸晚加一年。民事早籌一日之語。蓋官俸本不應減。而在經營草昧之時。（臨時政府。過渡時代。一年刻苦。豈遂爲多。若開國之風節不昭。後日官規誰想淬勵。）則忍苦一年。亦患難艱貞者。事所恒有。（設或遜詔未下。而軍直抵北都。官僚私產無存。薪俸又將安出。準此以言。孰不當以待罪自居乎。）民事本不可緩。而在大亂初年。開元布閭之際。則勤求隱瘼。凡撫綏安輯。更當籌及纖微。假如以十部之官。暫照六十元。僅免凍餒。每月當撙出八九萬元。以此八九萬元。興最淺近之教育。最微小之工業。以日昃不遑之心。行篳路開山之事。收納困苦流離之黎。庶。研究厚生正德之本原。（此似村嫗之言。必爲時髦所笑。然果思直接與民握手辦事。豈能避陋劣之譏。）人民對於此等舉動。奮興觀感。當復何如。非謂此最淺近之教育。遂足以教民。最微小之工業。遂足以養民也。謂如此表示。國家畸重

維持秩序。保衛治安。而所謂秩序。所謂治安。卽由心術行爲而發生。非於人身之外。求秩序求治安也。且內務部範圍宏大。實取從前之巡視五城。步兵統領。各種機關一切代之。其職權無所不包。今凡事皆以法律未定變通行之。何以於禁民爲非。獨拘拘於權限。當此國民。能力尚未養成之時。雖不居干涉之名。亦應行保育之實。若僅以偵獲偷竊等事。爲治安之功。而不於人民之放僻邪侈。認眞防維。則巡警。何以爲國家治內最要之大政。故謂教育部。當與內務部雙方並進則可。而謂內務部無責任。則不可。況教育部。欲得實施普及。亦非借巡警嚴重之力。不能有功。尤可證明巡警之於黎庶、若網在綱。爲人民耳目接觸。最初之一階級。欲使國家之教育。與人民打通。非以巡警爲之關鎖不可也。（濟親身目見，巡警之腐敗廢弛不可勝言，當擇簡要淺實之事，另致王芩齋君，書乞公索閱參考，但濟才拙心枯，常執筆不能出一字，死期已促。諸事尚多。果能致芩齋否，實未定。乞問之，卽此書，枝枝節節，已寫兩月餘，僅至此處，今日陰歷四月初八，下雨，陽五月十一也。）曩見總統命令有云。前清之季。賭禁尚嚴。我民國豈宜懈弛云云。竊謂豈惟禁賭一事哉。彼前清之政治。洵無一不虛僞。然對於一切不義之行爲。一言禁止。立卽斂藏。夫斂藏亦不免虛僞。然尚自知爲不義之行爲懼犯衆口。干國紀。故亟亟斂藏。是其心中尚有是非。所缺者實力改悔耳。若一味放任。則公然無忌昔所目爲不肖者。今或以爲當行。黑白不可以易形。善惡可以易位。凡一切不正當之營業。軼範圍之舉動。無節制之嬉游。皆聽民自爲。冥行索塗。無復軌線之循守。貧弱盜賊。日日暗中胚胎，明明有不測之禍。而曰文明日進。是眞天下最可痛之事矣。抑濟深知治理之難。而喋喋言此者。非以起衰振俗之功。責公驟致也。謂公不以整飭人民爲政策。殊可怪耳。蓋措理不能完備。可以時地窘促。爲公鑒原。而進行未示方針。不能以時地窘促爲公恕解。（行政各官，深居不出，頗以宴安酬應爲務，罕在街衢風日之中，與民交接，不但不似開國振興氣象，並不及清光緒卅二年之辦事，豈眞此皆關於困難，[illegible]而不得行耶，亦我公惕勵表率之力差耳、）今廳區。對於人民不以朴誠勤儉爲指導。實由我公對於廳區。不以民德風俗爲前提、屬官行政。固不盡心。而我公指授目的未專。亦難辭責。尤可異者。一方面。不注重制節謹度。一方面更提倡娛樂嬉游。如廟場寬展時期。戲園不限數目之類。（戲園之中，有利有弊，如善用之，則有莫大之益處，[illegible]聽其妄爲，則害亦最烈，擬兩書上芩齋，詳言爲之，但恐[illegible]未定能寫出，[illegible]時盡否。）揆公之意。似以西國文明。吾亦當採傚。殊不知。西人所揮擲者。係餘財。吾國所浪費者、

家。此則絕無之事。中國久失教化。士農工商。虛詐百出。民德澆薄。民生蹙窮。竟有非私曲奸欺。不能生存之勢。此正剝極當復。窮極思返之時。幸遇革命成功。爲中國曠古奇事。當此更始之際。人人心中悚惶。震聳。最易收改換之功。類如洗滌舊汚。擴增新識。勤職業以培生計。醒迷夢以濟時艱。懲警愚頑戾乖之風。禁戒遊惰浮浪之習。向日不知公德爲何物。今則生博愛之心。向日不知自治爲要圖。今則示以修身之術。（有以土車、路燈、修理整潔爲自治者。有以謹身節用、勉爲善良、爲自治者。二者不可偏廢。而共和新布。恐人誤解自由。則告人以遵法勿違、先自治後自由。尤爲緊要。）致貧致盜。由於奢靡而成。則約束不能大寬。舊藝舊工。難爲競爭之用。則提倡當爲設法。諸如此例。不可勝言。要皆宜乘此時機。大加申警。喚起國民心理。指明新治軌途。務取通俗之言詞。曉諭共和之準則。懇懇以詔。息息相通。使國民亟收放心。自知危懼。思作正圖。所謂昭然若發矇者。是開國必不可少之事。濟常與中下社會人交接。頗聞其盼望新國告諭。俾知有所適從。乃自開國以來。其始僅聞秩序之維持。其繼不聞匪僻之取締。又以兵變以後。元氣大傷。不能不補苴彌縫。暫從開放。由此人心縱恣。從惡如崩。竟有一瀉千里之勢。加以達官時彥。銳意提倡。賭博女閭。種種荒嬉。風靡一時。轉相簸扇。人民無判別是非之常識。信以爲共和之國。但取人生行樂。無須檢束準繩。於是舉國若狂。小人無復忌憚。中人岐路徬徨。國之石民。所餘無幾。且因此徬徨疑訝。於新道德之信仰研究。亦頓形阻滯。據現今人民現狀。舊道德已厭棄。新道德未發明。法紀蕩然。其趨勢有不忍言者。推厥禍本。由於我公對於人民。但取放任主義。不取干涉主義也。我公主張維持現狀。固云大亂之後。市廛彫敝。非弛禁莫由恢復。此誠有萬不得已之苦衷。然此正須分別言之。當國本搖動之秋。呼吸危已。自宜暫爲應付。無取紛更驚擾。然安撫百日。人心已定。斯時人人戒懼。且有拭觀新治之思。正宜正本清源。先取當禁革者。當勉勵者。凡人類生活上。社會上。日用應具之知識。顯揭標題。俾資法守。如謂此係教育之事。當另爲一部分。此則巧吏諉卸之言。明公不宜出此。夫濟所謂警覺人民者。固以巡警對於氓庶爲大宗。蓋上級社會之荒嬉。非巡警所能制止。氓庶居人之愚昧。則廳區可以提斯。巡警之責任。在

雖然。臨時之時機已誤。而正式之時機方來。誠能痛自猛省。屏絕爭凌軋轢之心力。行開誠布公之事。宣布臨時期內。未遑振作。正式伊始。萬難偷安。官吏有當甄別者、甄別之。人民有當開導者、開導之。以前種種譬猶昨日死。以後種種譬猶今日生。是猶民國一線不亡之希望。濟以此言告我公。非專告公也。捐軀諷世之心。係對公共而發。凡與公同地位者。皆望其俯加鑒詧。尚求公認眞宣布。俾當世同鑒苦衷。倘袞袞諸公。一意鶩新。以不合歐美法文。深加誚責。濟亦自知譾陋。俯首無辭。然至於不惜生命。以求感悟世人。此中必有最苦之心。或於大害。稍有所見。（此數句構思七八天。始終說不圓快。有時在戲園思之。有在枕上思之。一下牀。則又忘之。諸事日攪我心。務求世人諒之。）務求諸公暫擱嬉游。（此指國中達官時彥而言。）降氣平心。俯賜研究。鄙論雖淺陋迂劣。是否有一得之愚。無任泣血叩求之至。據濟所交接之人。自都市以至鄉里。凡四十歲以上者。萬口一聲。皆言照此辦法。必有大禍。必有大禍。去太平幸福無年無月。問其何至如此。則言官吏貪鄙行私。議員浮淺無識。人民苟偷欺詐。淫樂日盛、愁慘日深。莫可形容。惟一言蔽之。大亂必至而已。濟轉而詢之官吏議員諸公。則方慶祝謳歌。誇耀璨爛莊嚴。頌揚文明神聖。是豈濟所交接者。皆爲庸愚無識之人。而政界中所主持者。乃爲深合事情乎。眞正疑訝不解。（茲再以淺白言之。一般相告之言曰。京師彈丸之地。卽有數十萬窮黎。無業可營。除拉洋車、充苦累。無法謀半飽。人民如在活地獄。官吏議員笑而視之。直同無睹。馬車中之嬉笑。番菜館之豪奢。以爲理所當然。不管人民生活程度艱難。只管營求。多得俸薪肥己。又巡警對待諸事。忽緊忽鬆。有時如騃如癡。有時作威作福、由於指授巡警者。未深體察街間利弊。故巡警亦搪塞公事。欺壓賣放。皆所有之。官無眞心。故事不中肯也。至於四鄉。則盜賊橫行。聲言法令。年比一年寬。往年搶劫案。被擒者必死。如今搶案有坐監數月。能運動出獄者。奸暴之人。頗喜新法從寬。而良懦之民。更失保障。亦相率爲非。齊說一樣年頭。不必有良心。不能顧臉面。明盜暗娼。悍然不顧。前五年所少有。前十年所絕無者。京西之賊。大半由小賊變成老搶。京東之賊。有因貧而爲盜者。亦有積年行賊同伙等類。尤苦者。有案不敢報官。報案必須花錢。鄉民眞實無錢。卽勉強花錢。報而屢無效。故不報。報亦徒勞。官因政令無常。俱存聊且敷衍之心。又無力多養捕役。但使民間報盜。亦永遠不能獲盜。直成瞑目歛手。莫可如何。武清一村。二百餘戶。被盜者達二百餘戶。報者絕少。有一村名大王村。事主杜姓。聞賊起追。被賊用彈入腹內。次日身死。竟未報官。屢聞有死而不報者。非止一事。京南則因法令太寬。賭風大熾。惡紳包賭。知事不知。武官知之。警局知之。得財不問。衡水縣。煙館遍開。到處皆可過癮。人人以爲新法罪輕。全有違玩無忌之志。刻下洋風穢德。正在促長中。日盛一日。大亂安能不至。以上不過略舉數事。俱由人痛心疾首。疑訝民國景象。見面相告。如此。而各部之官。絕不動察此等情形。高談憲法。方以爲吾民安居樂業。但將法美條文移植。國中結果成陰。指顧間事也。哀哉。按敝莊地。在房山境。村中敝屋。下年冬。被劫四次。實廿年所未有。來者四五人。入門索食。問其原因。則云年荒物貴。又無業可營。此樣年頭。不必有良心。不必顧臉面等語。此卽吾人確知事實。而係大民國。設如許多官。窮民負擔捐稅、外債。以養官。外官託書案勞形。無暇及民。京官則清秩逍遙。宴安快樂。從不就民事利弊上訪問研求之。以民爲主體之說。究安在哉。不料改建新邦。依然以官爲裝飾品也。可惜不思今時。是何時耳。）何以人民心目中所惶急者。官吏心目中乃極安閒。相反若此。大抵民間眞實狀態。不但我公總理總長。去民太遠。無暇訪知。卽行政各官。身居高位。亦隔蔽而不得知。苟一入下級社會探討。必有愕貽驚駭者。旣曰言平民政治。不就平民切近之眞象。地方直接之設施。認眞計畫。更從何

係母財。西國工廠林立。人有生財之路。故嬉游可以流通金融。假如吾國多設戲園等處。同時亦當多設工廠等處。俾人有生財之途。而後可以養身。若但有戲娛之事。而無正業之營。則母財既已耗涸。而心思不能自閑。勢非爲盜爲娼不止。吾國民勤儉向上之心。本極薄弱。又從而斲喪之。禍將胡底。故在去年俶擾之際。權宜開放。消納窮人。羈縻不變。濟亦以爲甚當。而長此縱弛。則有乖治國之經。且吾國貧弱衰微。將來尚須藉實業經營。漸成富足。天下無論何事。非以堅貞誠篤。壹志專精之人爲之。必不能收效果。西人謂工藝商業等事。皆由學問而來。今吾開國之初。先使人縱恣於奢靡昏荒之域。一旦欲大興工藝商業。安所得堅貞誠篤壹志專精之人。相與認眞圖事。夫人民爲構造國家之要素。乃於開創之始。不以德行道義樹正大之模型。而以靡麗紛華爲莊嚴之代表。此其根本錯誤。誠非細故也。溯自元年以來。惟總統教儉教廉之令。以及九月間。八德宣言。最爲詳明剴切。然只頒語長心重之文。未訂實踐力行之法。此外則牖民覺世之事。寂無所聞。行政各官。但有觀瞻上督催者。未有旅行爲上匡正者。是由長官不以民德爲注重之故也。濟於新學政治。一無所知。似聞美利堅開國時。有重清教徒。日本變法時。有尊尚孔孟陽明程朱之學等事。濟所云切盼我公。以道德爲立國之謨者。卽爲此類。蓋必先有能渤興之人。然後能有渤興之國。所謂與民更始。非經一番錘鑪羈勒。不能獲數百年之安。若塗抹物質文明。謬希覇者驩虞之業。匪特絕無此事。且將禍不勝言。抑又聞之。古之梟雄豪覇。有起家戎馬。其初不惜爲雜覇權謀。種種無賴。而及至身執國權。則改爲尊敬儒修。崇尚道德者。彼並非矯飾詐僞也。蓋飽經閱歷。誠知人之所以爲人。國之所以爲國。萬不能離乎天理民彝。五常八德諸大事。故一旦身居高地。手操一國風化之原。則頓改其雜覇權謀。不忍不激發天良。從根本上着想也。今我公身居高地。手操一國風化之原。只以對付社會。迎合官商爲事。而於拔本塞源之計。不能挺身爲之。不解我公遇此千載難逢之機。何以坐誤若此。而公之輔佐。亦不獻一遠大之籌。此濟所謂明公當以道德鞏固國基。而最失機會者又一也。

聊比自食其力。不惜爲執木鐸徇於路之勞傭。稍免官祿之枉受。竊深念一家哭。一路哭之比較云云、（所陳各書均可覆按）蓋濟灼見。欲造世界和平。必從世道人心上挽救。政府旣不從大處落墨。惟有自己抱強聒主義、無論犯人。無論巡警。無論居民。得藉手教導。以最少數有良心之人作種子。散布於下級社會。以盡我思塡東海。強銜一木之心。堯舜之言。克勤小物。孔子少賤。鄙事多能。反復思維。不能不從淺近平實處下手。而鉅公政客。皆爲淡然漠然。欲以空理見實功。此誠百思不得其解者。濟上書在七月初。而教養局總辦李君德銓。因病出缺。在十月間。濟從前爲教養局總辦。頗有人知。今不蒙委用教導犯人之事、（卽果委濟辦此。亦不能常居此任。蓋不久將死。早定於中。所以遲未卽死者。以諸事牽掣。併月而營。且須俟國會。心氣澄靜時言之。）是鄙書或未邀營閱。或雖閱而於教育之說。不表同情。旣於所陳不見採擇。則公之留我。亦官場形式而已。（鄙意七月間。所上之書。旣諄諄言犯人、巡警、居民、三項教育之緊要。我公苟有採擇之意。則教養局李總辦出缺。在十月間。正當濟一次辭職之際。似可仍委任濟回教養局。以觀辦事何如。乃我公雖批示挽留。而於濟所陳。則忘之。但不過留濟在部中。作一十日九閑之官而已。夫部官有薪俸而甚清閑。爲濟一身計。豈非甚得。濟苟欲爲清閑之官。則力當巧語逢迎。以固安樂地位。而免貧債交加。然此個人主義。非革命開創時。挽回世道所宜有。實與濟之心理相違。所以不敢從也。卽使委辦教養局。亦不過任事數月。表了勉懇而已。死期有待。豈敢搖奪哉、〇開清慶邸。對於人上條陳。置之不看。有嘔心泣血。搜索經年。始成一書者。上之。乃並不諒作者苦心。頃刻打消。於書中所言主義。全未理會。願公勿蹈亡國舊習。以倨慢輕忽之心。辜負進言志士。宜請懇勉之幕賓。虛衷採擇。冀補時艱。倘不表同情。有可批者。無妨批示。一二年六月複勘原文語意但未大明固加此一段）九月間薪水增加。就家計貧困言之。誠非無補。然身逢鼎革時代。一國之亡。一國之開。不於此時彰明公理。更待何時。古今無論何國開國。未有不以均甘同苦。勵人心者。無論何國立國。未有不以重惜民命。爲根本者。矧中國民窮財盡。社會共同生活之資料。只有此數。旣曰改建共和。億萬窮黎。堆眼底。教養未立。實業未籌。先以珍貴難得之金錢。供無事官員之娛樂。實與以民爲主體之義。顯相背違。濟初次辭職書內。有云。乘此機會。徹底澄清。又云。今日安插窮人之計。當較官祿爲先。又云。個人增加一分。卽社會減剝一分。又云。中國政體改更。已無復攀檻埋輪之故事。所特以糾繩愆戀者惟在此方寸之間。自己防維。不欺不苟。眞以民生爲念。國恥爲心。勿先求一己之安。又云。月領厚薪、身居清秩。人情所樂。何獨不然。卽隨俗依違。聊資餬口。亦誰復來相詰責。然相安弗思。誰爲隗始、孟子云。所欲有甚於生者。今所憂有甚於一身之貧困者。不得不以大局爲前提。而以自己身家爲第二、又云。湘鄉曾子。常言。風氣起於一二人之心。而播爲風聲。蒸爲習尚。極乎千萬人莫能禦。云云、又

處下手。濟所云有爲政府怨諒之事。如外交、財政、諸大問題。無術驟解困難是也。有事權在手。可爲而不爲者。則不能不咎責政府。識見之乖。蓋今日。不但重遠難致之事未行。卽片言可決之事。行政官亦不認眞行之。是誰之咎。惟見各部長官。對於寅僚。體貼周至。（體貼亦是人情當有之事。然以直諒相規、以道義相勉 亦是交愛之意。不專在生計上也、如專在生計上 則社會共同生活之資料。就不當體貼者。況今日官之浪費。有並不爲生計者哉。）如儒將之撫驕兵。不惜以貧民血汗金錢。供其私計。不問其所出之勞力。能值若許錢否。但一爲官。則待遇與百姓判若天淵。而民國以民爲主體之義。則相率而忘之。革命以後之氣象。與革命以前毫無殊異。且更黑暗加甚。此濟所以心有不安。去年再三辭職。又不料我公。以爲鄙意或因權利分配不公。亦與時流競爭相等。特示撝謙維縶。而於濟迭次所陳之理。未予提倡發揮。是公不知鄙心。係痛惜革命時機。爲世局起見也。濟以無學無識之身。去歲呶呶上書。自一般私議笑罵之人觀之。以爲此等鄉曲陋談。何不止息。而濟以爲欲挽世風於萬一。雖人譏淺陋而不辭。當此世道淪胥。僅僅犧牲一官。未足以對社會。自審才力又不足以辦事。故惟有捐軀明志。希冀當途之垂聽。且喚起並世同心。憐鑒苦衷。相與挽回世事。鄙心不過如野心赤子。鄙言不過如布帛菽粟。蓋限於學力天資。又困於窮忙病苦。（足腫呻吟。有時傾跌。百事紛擾。屢次擱筆。幾乎不成。然去年已質諸鬼神。告之宗祖。無論受人世間何等難堪之苦。終必將此事辦完也。）陳義不能太高。出言尤多經遂。實無可如何也。且濟之事蹟。前後始末。亦有不能不於臨死之時。重複提及者。辛亥年冬。曾上兩書。一叙陳無烏布。（注烏布滿洲語卽無專管之義）不能上堂。未由瞻晤。內中陳及教養兩局。犯人三四百名。貧民百數十名。濟之對待辦法。一略言時事積弊。設法廓清。其時國事倥偬。或未蒙細加披閱。壬子陰歷正月兵變。次日急陳街上情形。亦略帶遠佞親賢之意。二月間聞有修建東安市場戲園。批准京城唱女戲消息。曾上書言。趁此驚魂甫定之時。急辦淺明宣講。入於人心者必深。又云使人民先有知識。後事嬉游。於治安裨益非淺。鄙意實盼望發號施令。導民以樸誠勤儉。使人人曉然於新國政令正大光明也。陽歷六月間。內務重新組織。辱荷相招。曾上五千餘字之書。請實行社會教育。分教育犯人。教育巡警。教育居民三項。末段自陳有云。總長苟抱定爲事擇人之宗旨。而體恤饔飧不給之窮途。則命濟以講演勸人。濟亦藉薪水以餬口。

內閣總理、爲北洋政府紅人、暗殺宋教仁、卽其主謀、民國四五年病死。

巨川先生在清末、初任工商部章京（章京等於今日專員）後由徐世昌奏調巡警部敎養局總辦、民國元年、巨川先生由趙秉鈞徵入內政部辦事（當時尚未定官名只云辦事）旋卽辭職、在職中、屢上書言事、趙均不納。（稿在遺著壬癸雜稿中）此書成於甲寅卽民國三年五月、原擬死後上之。其後先生屢求死而不得、迄戊午民國七年九月 先生赴積水潭殉後、時趙已亡故、此書終未得上、然書之內容、皆係有關世道民生之見。故附於敬告世人書後傳焉

註二

徐太保卽徐世昌。徐世昌字鞠人、清朝翰林、官至太保、改元民國時、曾一任大總統。

留屬袁馮林周彭五兄書

玨生[註一]。公度[註二]。朗溪。霖叔。翼仲。五位仁兄公鑒。弟灼見世道人心太壞。關係天理絕續存亡。若衆人不急回心向善。恐中國不成世界。今以一死。明我苦衷。求世人鑒察。大家設法挽回。先將心事向我良友言之。求良友代爲宣布一切是幸。弟今日本無可死之必要也。然國家改組。是極大之事。士君子不能視爲無責任。我確見立國之道。必以正義爲大源。以詭謀爲大戒。今自辛亥、壬子。雜湊慌張。改建共和以來。所風尚者。全是詐僞行爲。越變越壞。最要二端。民德、民生。糟到極點。除是極無良心之人。（士君子三字。本可作士大夫、因士君子包有品學之意。春秋傳、所謂人人有士君子之行。國必大治）乃能抱樂觀。弟實不忍坐視。故對於民國諸事。時時操觚雜記。人見我出入戲園。以爲我優游無事。眞個尋樂也。豈知我如小學生之忙功課。須將國家變幻情態。逐條寫出。俟完竣而後瞑目以去。乃不料世事紛紜。愈出愈奇。應接不暇。萬寫不完。（才力眞短無庸諱言）而欲望世人俯採鄙言、非死不足以見眞心。故敢踐昔日之志。求世人醒悟。各忠於所職之事。以救國。弟連年所已寫出者。有六七本。祇爲雜記。並不成書。拜託五兄。細加檢閱。代作主張。須知弟非著作之才。此六七本、不過

第二次、第三次、第四次、辭職書。均不離此意。凡迭次曉曉上瀆。無非希望俯察苦衷。原書具存。可資覆按。自念居公屬下。久不如人。長官未嘗加以賞識、信用。同儕幾若不見、不聞。然辭職既荷諄留。撫己何須自外。是以於上書紙尾。再將前後始末。所陳述。摘要綜括一陳。欲煩公研究。捨命捐軀。實爲世道民生起見。且望公矍然悟知。平日賞識信用之外。沒沒無聞者。猶有犧牲身命。主持公理之人。或者因憐憫而另設心思、眼光。以相觀察。則我公身居高地。手操一國風化之原。俯採鄙言。以道德爲立國之謨。一念主張。全國傾嚮。能於世道、民生。有毫末之裨補。則濟在九泉之下。勉强告吾國之先聖昔賢。感激之私。實較身受官祿優厚十倍矣。此信寫已逾百日。苦不能完。晝夜苦思。拉雜紛冗。伏乞瀏覽始終。洞察一切爲幸。梁濟謹上。癸丑年五月初三。端午前三日。

死之理由。非止一事。而對我公言。則爲世道、民生。夫人孰不知世道民生之可憂。而至於不惜死以求悟人。或眞見有不可終日之勢。望公就曾經學道之人。（如秦劭衡先生。其人尚矣。又恐其汲古功深。於今時民事未徹。宜折衷之。）考察眞實。勿專聽熱鬧場中。逢迎諱飾之言。致陷於獎惡而不自覺。則不獨濟之幸。亦世事之幸也。

百里行九十。豈肯輟途半。冰蘖六十年。溫飽何足換。（郭春榆、袁汪生。皆疑鄙人辭職家居。或係以作詩等事自遣。是未知鄙境、與鄙學、皆不配享清閑之福也。腹簡不文。不能一字。憂心如灼。何暇自耽風雅。常欲諷樊易諸公。傾身救世。勿空言憂傷。蓋今世勿徒以文爲，以文人多與事實相違也。）

再有小事。求代請吳士湘兄。轉告徐[註二]太保。濟自考商部章京。至奏調巡警部。始終未嘗在私宅見過一面。可見舊日官場。未嘗不有矩矱可守。鞠老非僅具有新知識之人。亦曾爲有舊學業之人。當能解此。濟不干謁鞠老。亦何足爲奇。惟濟既先死。可得鞠老健在之日。作一證明。倘蒙鞠老回首憶甲辰、丙午、年間。耳目中之梁濟。則濟所言者。自當歷歷如昨日也。且今後有如濟之迂拙者。願少加意勿忽。亦是士風之幸。又叩。

註一

趙秉鈞字智庵、爲袁世凱心腹、民國元年、袁世凱出任臨時大總統、趙任內政部總長、後任

此事之慘。更不勝言。近年幾乎招全國之人而爲兵。卽使全國之兵而爲匪。醞釀浩劫。大禍必來。亟宜與諸帥。誠懇商量。善爲收束。

第四日。財。

國用窘到極處。盡人皆知。一由來源太枯。一由良心太壞。宜有强有力之政府。細心爬梳、去私存公。整理紊亂。此非煦煦所能辦。須先要求大衆。從大局上思之。

第五日。「清室」（註 清室卽清皇族）

審觀近世趨潮。久擁尊榮。必招嫉怨。及身之體制。固不必更張。欲求世代綿長。宜消種族之形或重儒修。或重實業。欲然修德。敬迓天麻。先在京城試辦實業。漸與人民接近。克尊天爵。益鞏人權。上慰祖宗之靈。在此而不在彼。至八旗窮苦。尤以敎導。使能謀生。徐（註徐世昌）昔爲保傅大臣。宜就世伯軒、醇邸、破除顧忌。向太妃詳陳。出內府舊存之欵。興辦學校。實業。兩事。捐籌建築與經費。使旗人增益智能。再由優秀者。驅策愚魯者。期以二十年自立。使天地間增、善事。猶愈於束手無策也。

以上五條。弟擬定主義。已將報紙上。關於此五事者。翦存甚多。分別裝在封套內。（譬如編戲已將材料搜備而尚未用書成物也）欲上書東海。而無暇著策。此五事。固犖犖之大端。而自揣力不能擧。擬求五位仁兄出名。上徐總統、替請以此五條注意設法。弟實感激之至。如五兄肯辦。請翻閱各套內。（此碎報裝入封套時亦有小錯數條者祈分別覽之代爲糾正）所存碎條報紙上、有弟批註諸語。及圈點諸語。似可爲取材之一助。弟本不足知當世之事。稗販摭拾。不能諱言、古人云、爲政不在多言。顧力行何如耳。豈必所言皆我自組哉。徐公爲舊日民部長官。曾有奏調之雅。弟拘守成同年間舊風。未在私宅一面。丙午、丁未之間。同官迎送應酬。弟皆不到。（敝日記另有教養局未得上達之事茲不贅）觀彼時應酬風靡。卽知世變將興矣。平日對於徐公。無菲薄意。惟有一事欲諫。（在教養局以撥出餘財自給不以入己而蓋小房六間總廳不肯上達故室官不知）蓋其心地仁厚。人所共欽。（目見閭京左右之官調劑務從豐厚不見鄉閭窮悴之民貧窮卽盜匪之原。而民何以日致於貧。則剝民養官之故。又加數語待圖。）惟惜仁厚之心。用於官僚親舊者多、而用於窮

零篇斷句。其中鄙意自作者。十之三四。摘錄他人、或書中之言。暨報紙上翦裁下來者。十之六七。（隨遇隨書。亦有義理不甚精當者。尚待分別去取。）弟所鄭重拜託者。此中蕪雜之句。諸公一看自知。乞費心校正、改潤。俾無大謬。貽笑於天下。（此等求校閱、潤飾分類、糾誤、諸言，平日已經寫過，散見於碎紙者非一次，今忙中尋不見。只得又寫，眼花時促，眞苦極。）再斟酌可否。分成門類。刷印。求世人閱觀。此事可行與否。乞我良友細心籌維。弟自覺知識淺陋。不敢自信。亦思刷印求世人閱觀。五位仁兄斟酌。可行則行。可止則止。勿使弟負惑世誣民之疚。是爲大幸。須知弟最不愛著作之名。實亦無著作之才。平日於君子儒、小人儒、之界說。持辨甚嚴。（若工詩能賦，詞采極佳，自爲憂國愛民之言，而實則溺情聲色，飲酒歡娛。試問僅託於文字，而不覈其事，爲敗壞世風乎，抑遂能補裨世事乎。）今不顧譏訕。以淺陋之書示人者。意在以事理勸人。不在以文章問世。世人若憫我苦志。肯翻閱鄙書。尋繹鄙意者。請作爲村嫗、婆心觀。勿作爲文人佳製觀。能使世間正義。受毫末之顯明。則鄙人之感激愉快。不可勝言矣。弟採取先儒言心。專在一事。而他事概不能紛其神者。譬母雞孵時。其心中只有卵。堅伏不動。雖引之食。亦不顧。非到伏卵成雞不止。而且捍衛極勇。竊取此義。名曰伏卵。乞代酌之。自此以下。心思更忙。時期更促。字跡不能不草率。句法不能全清楚矣。此外尚有一緊要之事。拜託代勞。弟夙擬請願國會。痛陳大局。而昔因議員不賢。近因國會飄搖。卒卒未果。擬向徐總統言之。素有擬定題目。凡五。

第一曰。民。（作最簡短之言。以俟推類。）

此民事分爲兩項。民德、因近年倡導惡風。而墮落掃地。民生、因負擔而衣食困難。四鄉之人。生活狀況。幾乎人畜平等。而京城之人。談笑歡娛。講求精美衞生。實屬可歎。

第二曰。官。

鑽營卑鄙。得財以嬉。何嘗以三分時間。二分心力。盡勞於救國之事。士夫儒流。號稱矜式者。復不思有以矯之。勢將職守、箴規。皆成虛詞。

第三曰。兵。

暨雜信等共一本。（可惜致王湘綺細筆草稿未列入。）此外尚有雜亂草稿等二本。常自覺學識蕪劣。不可見人。諸兄代爲去取。大約可存者無多也。（如有可存者。亦勿刊刻。（先人詩稿等俱未刻）。只刷印此許。分散在社會中。盡勸導之心而已。臨死各書。務求登報）至於家事。兒輩自斟酌合宜者辦之。如遇疑難時。則求五位仁兄指教。兒輩素知弟意。惡虛浮。尚儉樸。不標榜聲名也。再弟雖寡交。亦有親愛尊敬之數十人。散在四方。驟難備舉。如秦紹觀。（吾年來奔[illegible]久不得顧惜恐爲有道所棄然）（鄙心實敬之。）胡芰蓀。林墨青。嚴範孫。韓補庵。林次煌。張鄉五。王鏡銘。李秀瑜。沈子封。王酌升。林琴南。唐春亭。諸先生。倘垂問訊。即由五公。請其參閱遺書。以資證鑒。紙短情長。尚有多事未了。不遑備述矣。

戊午九月廿七日愚弟梁濟拜啓。

留奉袁玨生兄書

玨生我兄同徵。弟頗訝辛亥之役。無捐軀者。爲歷史缺憾。數年默審於心。今更得正確理由。日不實行共和愛民之政。（口言平民主義。而官僚錦衣玉食。威福自雄。視人民皆爲奴隸。民德墮落。民生蹙窮。南北分裂。實在不成事體。）辜負清廷禪讓之心。遂於戊午年陰歷十月初六。（七刻七晨）夜投積水潭。（路溝請下車。行幾步）南岸大柳根一帶身死。請速速訪彭仲翼。察弟所遺告世人。及親友諸函。共十餘件。報知警局。（署長陳建侯君昔年見過。亦須先告巡長。）一面電話告小兒來接。只用門板片。以被褥蒙尸。繩棍擡之。四人舁之。同家人歛。千萬依弟意而行。勿攙雜體制俗見。閣下到潭。先密探動靜。如未死成。（弟時時防人傾陷不得遂故今愛我者望我成勿破我計此大局所關也）即勿喧傳貽笑。今日先辦此事。其餘弟篋中書本。以及所夾零星大小字紙。請於明日。（森叔未定在京否問平政院第一庭）邀五公檢閱。如就所識者。加兩人爲證。亦可。弟生平不敢深信文人。因文與實常相反也。知我公重品行氣節。故後事相託。四年前得公精筆寫摺箑。大著四詩。並有跋語。弟引爲生平大幸。感激無窮。匆匆不盡欲吐。尚有諸事未辦完者。素來遲鈍。恐半日工夫來不及矣。

忝同徵弟梁濟拜別。　十月初六

苦百姓者少。不如張江陵之壁立千仞。弟日記中於其在奉天。待僚屬。濫予薪俸。多置閒員。頗以太寬厚爲譏。弟之識見。誠不免寒酸。然當民窮官蠹之時。當有惕厲之心。力防禍患。不當作承平之態。豪侈自娛。惟菊老有救時之望。故以此責之。此眞責備賢者之意也。此外尚有一事拜託。代爲宣布。弟敬舉一人。求社會信用。卽天津林墨青是也。墨青眞有熱心改良社會。眞不辭勞苦。辦社會教育之事。而且宗旨正大。不偏。果依此人行事。於風俗必大有益處。但墨青有一小疵。作事往往沾滯在小處。類如一字一句之間。推敲不已。耗費精神。近於苛細。弟常作書規之。翼仲稍能放手辦事。亦有時失計。若以墨青、翼仲、二公之知識。交換輔助。參互爲用。則救濟中下社會得法矣。今日社會墮落。急待匡扶。（有程君名淯者。弟不相識。有急火煮教育之言。吾甚佩服。）墨青專持苦心孤詣。勸人。實難見功。弟以爲非藉官力。與志士協濟。不能奏效。弟平日積感盈胸。羅列許多中下社會之事。思投書張仲仁、范靜生、（試檢報紙上、有告范、字者不少。）傅沅叔、歷任總長而未果。在戲報上。加批加註。（勿以評劇、捧角、爲小事。也。眞能毁人才。壞風俗。）以及圈點之句。不可勝數。今驟難縷舉。（俟緩日。問兒尚能言之。）弟意。既非官力協濟不能奏效。則須告諸總統、總長、總監。必教育部、警察廳、兩面相通。合力辦理。乃有效果。先密密訪察。確見毁人才。害風俗之弊竇。籌定辦法。先誡後懲。認眞執行。俾規勸社會之志士。得官力贊助而益彰。庶幾可免徒勞。稍慰寃禽塡海之苦也。此雖瑣末之務。弟既力舉墨青。糾合同人。推廣社會教育。擬請五兄。以此意告吳君士湘。求士湘代爲陳達於徐公。士湘昔在部時。曾與弟常見。墨青與嚴範孫君。同一品格。徐公豈不知之。但欲其辦事得力。則願藉高峰呼應耳。弟心欲言之事。紙不勝書。僅擇最急要者。趁此一息尚存。粗粗說出大概。能將以上諸事言畢而後死。實我之大幸也。（前幾日。又似昔年。艱澁不出。萬分焦急。中夜以興。燃燈寫之。）朝聞道。夕死可矣。從此長別。願諸君努力。以正義爲前提。以詭謀爲大戒。

當時寫雜記時。未曾思及體例。今檢得紅格紙密行小字十本。書面有伏卯字者三本。（此中有語氣相似、事蹟相近者、兩段歸作一段亦可。乞酌之。）又一白紙包內九冊。共七十餘篇。又一封套內。有十餘紙。此二種合一本。（凡此諸事、擬請公商、雇人鈔寫、淸楚底子。再加刪改。而以原本交小兒 或小女收執保存。此喪裘畢再議、先宣布大概爲盼。弟又附叩。）俱可作伏卯。第四本又小。本名別竹辭花記。（壬子已有此心能不抱愧）一本奏摺。

參角。常抵米布之債。若以聚和志川之事。交慶維自管。而新華摺由尊處收取。每月付三十元、亦是法。伊年已弱冠。再兩年。大學畢業。娶妻。可以自管矣。

弟濟告別。並以世道拜託。戊午十月。

弟心神忙迫。時間短促。半夜起來寫遺囑。避兒女窺覘。故他書多漏筆。此書請交兒輩閱看。俾知着手。仍奉還也。附及。忙甚。尚有五處信未寫。

留奉周霖叔兄書

霖叔我兄鑒。弟頗訝辛亥之役。無捐軀者。爲歷史之缺憾。數年默審於心。今更得正確理由。因不實行共和愛民之政。（口言平民主義。而錦衣玉食。威福自雄。民生日窮、民德日墮，對於人民淡漠、南北指日分崩。實在不成事體。）辜負清廷禪讓之心。遂於戊午陰歷十月初七晨。赴積水潭身死。請就彭翼仲處。點察弟所遺告世人及親友遺書。並有事奉託我兄。凡致五公之書。請求費心照料。請參看各書所言。匆匆不暇詳陳。乞諭兒輩。務依弟樸實之意。勿浮大爲要。聞瀛孫在天津有小病。想得痊。念念。匆此告別。我兄素敦道義。求對於世道挽回。同鄉諸公。均乞致意。不遑多及、

弟梁濟叩首戊午十月初六日

翼弟親家速覽

尋我於潭南岸水中。柳根一帶。再展閱一大包遺言。各信無暇細觀。略知大概。卽發電告袁。（東局九百四十五號）馮。（電碼在信封上）云。巨川留公函而死。拜託證鑒諸事。巨川又言。昨曾發信奉告。是否已接到。知其將殉節否。請速來。再發電告林朗溪、周霖叔。亦言有公函奉託。尚未曾寄專信。請證明因警世而死。再電吾兩兒

留奉馮公度兄書

公度大哥鑒。敝信札册頁四本。久存尊處。弟不急取回。正欲俟弟踐志。求表彰先人苦節。對社會說明弟之來歷耳。今投積水潭中身（愛我者惟盼我成、勿破我計。暫守秘密，俟接電、卽臨、如不接電。則弟避偵未得手。勿遽宣笑，此爲世道人心計。朋友無阻止之理也　又附叩。）死。另有公函。奉託五位仁〻兄。公同證明。（就近由翼仲電達乞臨。）檢理書函。宣布一切。對弟個人不必標榜讚揚。惟期體鄙心。期於人心風俗有振起之機。則慰弟者較加惠於弟尤厚。無任感激之至。心有萬言。思筆艱澁。卽寫此小柬。亦結結巴巴。說不出來。待兄自引伸也。匆匆別矣。敬請侍安。弟梁濟頓首。

李心吾兄處。有弟團扇一把。如肯畫更好。否則求代取回。

每日皆天未明寫。而午後反出門。盖恐兒輩察覺也。天雨未晴。自三點鐘起寫。

留奉林朗溪兄書

朗溪仁兄閣下。弟憤慨辜負清廷遜讓之心。不行共和重民之實。（此重民。指民德民生言。非民權、民意、等說也。）癸丑年。已預備一函。奉託我兄。言弟死後。求代宣布一切。嗣因羈絆未得踐志。今投積水潭身死。殊覺太遲。另有公函。奉託五位仁兄。公同證明。檢閱篋中書函。宣告大衆。由翼仲（就近）借電話奉聞。祈合前後兩信觀之。慰泉下之故人。至爲感激。至於鄭世兄。近兩年。大見進步。亦英爽。亦穩成。弟勗以處事、修身之道。亦極聽從。近又從貴州姚重光先生學文字。居然可望成人矣。伊之財欵。弟迭次陳及。從某年（記不清乙卯、丙辰、）十一月初八日。由聚和隆提回本銀二百起。接續往下算。伊之入欵俱有商店圖章原單。或利摺可徵。再取慶姓收欵摺核計。自某年十一月初八日起。以後陸續收欵。數年來共用多少。是盈是絀。自易瞭然。愚約略計之。當有贏餘數十元在弟手。可命兒輩喪事畢後。算訖交還。弟憂灼年年。實不能記憶清楚。但知無欺而已。算清後。卽由兄處代管兩年。勿再由舍下經理。不過將取來之利息。存在新華銀行活期。每月取三四十元耳。近年生活程度增高。大約每月四十元敷用。（元旦、端陽、中秋、加數十元。）其聚和志川三筆。合計每月利息十元

則非也。即如閣下。憤世道衰薄。不欲失信於友朋。思欲蹈海。被南宮李君拉回。有人問我曰。翼仲如今尚是楞楞克克的麼。我答。翼仲因與朋友共事。恐信義有虧。故以死自明。是良心上的事。不是神經上的病。何曾楞楞克克。其人始爲恍然。再者我所託之十幾封信。閣下、與袁、馮、周、林、閻後。先將目錄開單發表。即將原信交兒輩帶回家去看。（鈔淸楚底卷。而以原信存留）然後再發。再者我欲與陳明侯寫信。告以聽戲。亦以世道爲前提。曾寫綠紙對聯。有跋語。送與金桂蓮。不知該伶果收到否。係中和園馬姓代交。其詞句有意也。煩告明侯。忙極不能寫信。初五日又書。

留奉鄒紫東親家書

紫東大哥親家。弟今日之死。（傳青主所謂、埋千年血猶碧、白骨可成塵。游魂終不散也。）有謂死得無理由者。有謂我死得不值者。甚至指爲瘋傻詒爲大愚。皆所不免。然竊謂人見得到一步。自做得到一步。我實見國性不存。國將不國。而欲使國性復光明於大多數之衆。必賴有一二人。爲之先驅。弟數年前。（癸丑年已有預留之信。未寄。）已有殉淸之心。而因舊君。推戚禪讓。亦甚望民國克底太平。故又須觀察民國之辦法何如。今則南北分崩。民生窮蹙。民德隳落。風俗壞極。苟不爲澆漓詐僞。陰險奸惡。即無術以自存。勢將天理民彝。全歸澌滅。而舉世又無人敢倡。以國性救國之說。（弟另有敬告世人數長篇茲不暇贅）此弟所以不自量力。奮身一擲。於舉世不爲之事而爲之。譬猶沉陰痼寒之中。希望一陽來復。但見爲義所當赴。而不計死得値與不値也。能因此死。而引起世人漸漸回心。固屬大幸。即使不能感格衆人。而數千載聖教絕亡之日。亦不可不有人以殉之。弟心忙時促。姑撮數言。餘請索報紙詳載觀之。知弟苦衷。感深泉壤。小女夙承慈愛。久已視若親生。弟固無所挂慮。惟一朝永訣。究難淡忘。尚求遇有事時。導之使言。俾意能自宣。更覺人生可樂。將來持家與教子。皆有精神以爲之。我兄體念故人之孤。必徇此犢愛也。至弟昔有令彼在京住家之說。原不謬執成見。蓋蓼亦有此意。蓼云伯父撫養恩深。自必住蘇侍奉伯父之春秋。至於後來久計。則京城風土。自幼習慣。即小孩入校求學。亦

來接。並告小女謹銘。莫驚駭。在家靜候。女眷全不必來。趕緊找衣服。預備入殮。再告京話日報館大略。再者兒輩張羅入殮。只能將諸信。大概一觀。俟諸公檢閱後。送至舍下。諸人細觀畢。公等再設法宣布。不能太忙。至於櫃中兩篋書本雜紙。雖係弟之心血。實亦零碎太甚。只得檢清數目。從容商之。木板擡回入殮。弟之素心。以厲風俗。諸君務從弟意。即雇人。亦須講價。勿爲體制虛浮。案上銅子四十枚。給與尊紀。其錢褡連、手巾包、眼鏡、墨盒、等雜物。仍交舍下。亦不必忙。寄璧元、紫東、信中句子。是我最精心血。務必登報。如有人唾笑。死者自願當之。（注、文係寫於信封上者、下文方是致彭翼仲函）

翼弟親家。莫笑我識見太陋。目的太小。以時過境遷之事。忽云爲殉清朝捐軀。徒貽笑於世也。我此意抱之數年。因節節阻滯。遲延至今。若當六十初度之時。覥然開觴。自問與薄俗何異。且素性迂滯。未脫歷史觀念。殉清只求自知。不論世人信與不信也。夫殉清名義。似乎無謂。（料閣下、未必同意故云、）然閣下試平心靜氣。觀鄙人敬告世人種種理由。則知鄙人專忠於清邪。抑更忠於世邪。（欲對世道有益。可不忠於清耶。）茲有重事相託。請閣下向報館宣布。第一句云。梁某遺言。此身之死。係爲清朝而死。第二句。即緊接。決非反對共和。而且極贊成共和。因辜負清廷遜讓之心。不實行共和愛民之政。故憤慨而死。開首用此數句。以下則依次發表矣。再則請速借電話。（德巡長似可有、）請袁玨生。（北池子路東）馮公度。周霖叔。（此公無電話、每日午到平政院第二庭）林朗溪。速臨。會同閣下檢閱弟篋中諸信。共十餘函。公同證明。先將目錄發表。蓋弟以身後諸事。拜託五位先生。而親家尤近也。再則請發電告舍下。東局二千五百八十二。女孩不必來。亦勿驚慌。叫兩兒來。報明巡長。雇四人用門板。以被窩覆弟尸。舁回纓子胡同。盛殮。如發電其人已出門。則請將林信速速付郵。其餘俱詳公信暨諸信中。費心核閱爲禱。再欲有言。實無暇及。（馮袁兩信。已自發故塗去。）

戊午十月初日夜亥時書於淨湖樓。

俗人對人之苦衷。每不相信。必曰沽名。或曰痰迷。尙望閣下代我解釋。迂腐固執則有之。痰迷失性

兩公宣布。弟非不欲翊衞孔社。扶持世道。但不藉爲名利階梯耳。苟欲眞心衞道。當爲列舉的。規定條目。（汪精衞進德社。何嘗不好。然未久卽成泡影。蓋宜以漸以恆。勿矯激使人難行。卽自己亦不能行也）以力行。互相勉勵。不當爲概括的鋪陳開會。隨風氣起熱鬧而已。所謂例舉者。如尚氣誼。重名節。見危致命。見得思義。崇禮教。賤財利。抗骨鯁。惡諂佞、信然諾、恥欺詐。尊法紀。厭邪曲。不爲威刧利誘。等等條欵。一切養成士君子之行者。和平敦勉。躬爲齊民矜式仍不外鄉里有賢士。國家有好官之理也。但鄙人注重和平務實四字。勿標榜沽名。崖岸自高。與世人挑釁生嫌。尤宜循循誘導。勿苛責酷繩。使人難堪。望而生畏。宜和平勸勉。辨察是非。期其猛省。漸漸樂從。信仰之人。日見其多。風氣自起。孔子之道。雖不專在氣節一部分。然儒行一書。實由孔門而出。救今日之世。不能不從比入手。若不以世教陵夷爲大痛。而空空開會立社。炫燿如荼如火之觀。於人之躬行。有何益處。於世事有何益處。彼一般新人物。開會之人已多。立社之人已多。何必用我輩腐舊者爲彼輩隨其後而壯聲勢耶。乞將鄙意。代爲宣布。以釋責怪者之疑。弟雖不肖。不致反對尊孔也。又有疑尊孔。近於復君者。須知孔道包羅萬端。今專用孔道。整理世道。人心。風俗。行誼。而以事君一條。暫付闕如。何疑之有。夫凡事皆視時代之需要而起。當需要君主之時代。則君上爲重。當需要公理之時代。則公理爲重。孔子聖之時。豈能預設一成見哉。臨死匆忙。百不盡一。敬謝故人。乞善體察。弟梁濟頓首。甲寅五月廿三病後。

留奉林墨青弟書

墨青仁弟鑒。吾國戾氣瀰漫。衆人昏迷不醒。和平苦口勸導。已難見功。兄留敬告人長函。投水一死。求世醒悟。不知以死勸人。比和平苦口勸人。有小效否。兄去年有信寄閣下。言閣下忙社會教育。晝夜不息。終必勞累以死。兄爲世道人心抱憂。終必憂傷以死。此言如昨。實共聞之。其實兄殉義之心。已定六年。只因諸事未完。節節牽阻。遲至於今。今六十歲生辰在卽。若再不死。眞不可以爲人矣。（今日之死卽日[illegible]）

不僻陋云云。蓼有是言。故弟及之。其實在南仕幾年。在北仕幾年。現已行之甚便矣。我輩至親。自應關切。自九月以來。兒輩日日張羅。爲弟作壽。豈知弟心有所思。數年前已默告天、祖。盟誓之言。豈敢違背之。矧今世道人心。涼薄已極。廿五史之末。不可無人。雖曰矯情。亦不能避。待論世者之研求耳。卽請鑒垂。不盡萬一。弟濟告別。戊午十月初二燈下。

紫兄再鑒。弟已留書作別矣。將起身赴積水潭。忽得惠我壽詩。弟猶得從容捧讀。眞正有緣。無一句不從肺腑中流出。所謂得一知己。可以不恨。弟眞含笑九泉矣。弟事驟聞之。似乎太激。然爲數千年歷史。四萬萬人心計。則不可無此人。遲至今日。無可再遲。若一過六十歲生日後。則再無踐言之日。中國將無人作此事。或讓他人作此事。而弟不能作此事矣。弟所以不待床榻呻吟。而求速死者。眞正恨世道之淪胥也。小女能爲我求伯父作詩。足見其眷戀庭帷。兼有道義之氣。眞値得我親愛憐念。我無暇再寫一篇。務求以此信交彼一閱。猶如見我也。手此敬謝。恭請台安。弟濟頓首。

新銘莫怪我。不再加一篇。我忙極。爾善自保養。慰父之心。又及。

留奉曹纕蘅汪玨齋二君書

纕蘅。玨齋。先生垂鑒。壬子秋九月。弟辭職出署。兩公奉調入署。承兩公以同司之誼。先後惠然枉顧。俱得暢談。殷殷約入孔社。又寄學報一書。弟心敬兩公之垂愛。而旣未謝步。尤始終未回答片言。（數年杳然似太缺略）蓋弟痛世道之衰。專注重實力躬行。而以剷除虛文爲務。先生若以遠乎俗情之眼光觀之。必不見責也。嗣後。徐芳農夫子（房師）來書。以券招入社。有以弟之淸望。不可不入社之言。弟雖不肖。豈肯自外孔門。正因無人實行孔道。故事事與人辯駁。接書之頃。振筆卽時答書。以含蓄之言。規勸務實。勿務名。前此中國。翰林文詞誤事之弊太大。云云。此書必爲花農師所不喜。然不能顧。弟始終未入孔社。兩三年不復與師通信。尤以開會日。答謝總統祝詞太諂頗爲寒心。今弟臨死。將弟尊孔之本心。向兩公說明。求

換言之。既有人救世。尚用不着我救世也。無奈民國以來。專尚詭謀。不由正義。自上上下下。全國風行。將使天理民彝。喪失淨盡。國將何以爲國。（參觀我平日各段議論。）我又何以對我先民。此我所以不能不以死悟世人也。須知我之死。非僅戀舊也。並將喚起新也。喚新國之人。尚正義。而賤詭謀。然後舊國性保存……。國性存。然後國可以存。知此則知我苦苦計較。斷斷辯爭。務使歷史之事不斷絕者。非腐也。我筆墨遲鈍。言語艱澁。此時心事正亂。我之家庭。眞正雍雍熙熙之家庭也。鼐有東洋留學資格。長安負米。五年鼎以精研哲理著聞。律己尤爲刻苦。二子俱無違悖。鼐婦才幹雖短。亦頗忠厚安詳。三孫女。姿質中平。懃懇向學。肯聽二姑指教。外孫女因寶。明慧可人。每日夕陽西下。待我自外歸。諸孩歡迎候門。接我手中物件。代我勞苦。此景最佳。每日圍繞歡娛。眞有天然樂趣。鼐之綿婢。尙屬謹勤。趁此幼年、日受謹銘教誨。導之以義。將來或有遠到之機。大女新銘。遠在蘇州。不能備述。紫翁常稱其公平勤愼。蓼堉早折。我爲爾哀。教導孤兒之法。我曾寄信及之。

我之次女。眞正仁孝明哲之女也。凡我所需要。無纖細之遺忘。凡幼孩之前途。無防維之不至。每遇春秋佳日。必設法勸我消憂。、我聽夜戲。半夜歸來。無一次不獨自看書。煎茶守候。視我安眠而後去。雖成人而猶孺慕。尤能匡我見所不到。我心實無間然。至其屈己安貧。十年前之舊衣已小。猶著在裏面。聊以禦冬。其體恤艱難。諸似此。然不過是誠篤之品。並不以精明敏捷見長。我固不望爾等學文人習尙也。（其餘瑣瑣。因時促不能從容多寫、正忙間。衡甫來又別客來。只好收起、不寫。又耽擱、日哀哉。）

嗚呼。我有如此雍雍熙熙之家庭。我何忍決然舍去哉。今爾等兄弟姊妹四人。日日張羅。爲我作壽。糊房製衣。以博我之歡悅。豈知我數年前已決定。國性不存。我生何用。國性存否。雖非我一人之責。然既見得到國性不存。國將不國。自必我一人先殉之。而後喚起國人。共知國性。（世人必諷、命鍋冒氣 死非其時 然我實因諸事未完 節節關需 我只求自知、不求人諒也。）爲立國之必要也。（保存國性。大約仁義、廉恥、誠敬、忠信、等等皆是、勿呆看作殉節一事、我適逢當殉節之時、而無一人殉者、故我願任之、人世道昏昏 人人皆深憂歎息、然無人起而矯者 我故明告世人、當矯勿瞻徇畏難 而已 吾友宋芝洞同年云 若人人皆惜夫一死、則世間事尚有何人做者。其說亦通。吾願個人爲召忽、而望天下人爲管仲、然而國性終不可失也、）世事若尚未壞到極處。我尚可以不死。今自偉人政客。提倡詭謀。賤棄

（負清廷禪讓之心不實行共和愛民之政遺言共有十數函）兄死事始末。請向彭翼仲處。問其詳細。並兄之雜記七八本。遺親友書十餘函。請閣下加入參觀。以資道義之證。閣下常要兄論說報料。作饋貧糧。今鄙雜記中。報料不少。（凡兄所言。有句法不圓明者乞代改一二字，使之順勿拘）但未謄清時。底本分不開。先觀論戲劇一門。摘可用者用之。（請問翼仲。此雜記在某位之手、兄所託非一人。如現在舍下。卽可索觀。）鄙意舊戲不宜屏棄。舊戲規矩。萬不可廢。只求能鼓吹國家主義。灌輸人民常識。古代之衣冠動作。正爲一般中下級質樸人。所愛看愛聽。可收感動之效。若上海滑頭人。愛看新形式之戲。然其心但在臉子。而不問戲中事實道理。恐虛費編者之心血。乞告韻譜。新舊相兼。勿偏廢爲要。再者閣下對坤伶。不必避嫌疑。如再有新戲本。召集鮮靈芝、宋鳳、汪金榮、旋風、紫霞等。如覺不方使。或拉上翼仲幇說。再請警界旁聽。則公開而非私見矣。在臺上告以此戲宗旨。義理所在。勉勵諸位。費心費力。再細聽楊韻譜指授云云。如此則可尊彼等人權。以免終身不得見正人。終身不得聽眞理。雖彼等未必果懂。然一月說一次。漸漸會通。或展轉相告。亦可爲一線曙光也。兄對總統及大衆人。力舉閣下。辦社會教育。但願閣下去苛細沾滯之病。勿拘拘在一字一句小事。過費推敲。騰出推敲耽誤的工夫。又可多辦一件事。此非素受忙迫者。不知此滋味也。匆匆告別。千古茫茫。如小兄梁濟頓首。舊曆十月初六日。

又附。嚴範翁回國後。乞代弟致意。求觀鄙雜記及遺函。

留示兒女書

鼐。鼐兒。新。謹女。我今棄爾等而去。（次女驟聞之。切勿驚駭。務憶我平日所告。取沉穩態度。）我以世道大局爲重也。我再活十年。亦不過聽戲吃飯。優游自己一身。於世事無毫末之益。若使世事未壞到極處。我亦不妨優游作一太平之民。不必傾身救之。若世事雖壞。而辛亥與丙辰。或有耆儒大老。表彰大節。使吾國歷史舊彩。不至斷絕。亦不必引爲己責。抑或眞正瞭解共和。不必拘拘志節。國中風俗尚不至壞到極處。時常有人提倡正義。注重民生。漸漸向好處做去。則世道。有人補救維持。不至於黑暗滅絕。我身可作隱淪。尚無須必出於死

我願再有似此冤沈海底者數十人。剖赤心。與天下相見。則眞理終必顯明。聖道不致淪亡。將來聖道復明。由中國人自復之。不必俟聖道行於外國。外國人以我國之聖道。來强迫我中國人復行之也。昔春秋時。太史書曰。趙盾弑其君。以示於朝。趙氏殺之。太史之弟又書。而死者二人。乃舍之。吾國果有愛國之人。不忍國性淪亡。每一省之中。得三五人。一國之中可得百餘人。相與聯合講學。（先在各省自講。會積會多。勿用鋪張。[illegible]學者）通大名流。標榜聲華。從心術上挽回。不必對於君主效忠。而必對天理民彝效忠也。斲喪天理民彝者。卽毅然起而救之。懇摯和平。（須防矯激）勿爲激烈。積誠以感同志景從。必能感召結合多衆。或者上規政府於公平。下導人民於敦厚。可爲治標之一策。此我所以不自量力。願爲前驅。以忠於清爲發端。以忠於世界爲結果也。我本無才學。不能深知世事。不過爲野人赤子之言。恐立言有未愜處。爾等務請周森伯。細加核閱。如覺有語病。卽爲代易爲要。我早年未預備經世。卽此言。亦摭拾他人者。爾等翻閱庸言報。第一號第一篇。國性篇。暨十九號。通論二。未來之中國篇。（吳君鼎昌所著）卽知我數年主張之來歷矣。心忙時迫。無暇再講。我非因做壽而死。數年久定之謀。節節阻滯。遲之無可再遲。故恰巧臨期。諸親友閱看可諒也。我欲與慶牲大立寫信。（放大照相連鏡四元五。寫賬。）眞來不及。平日告伊之言。不下百次。告伊恪憶我平日之言。卽無異寫信也。今年召田姓。上兩遍清漆。（嘉按此遺囑對棺木上漆事）明年三月。永成隆有人上一遍灰漆。一遍布漆。又一遍細灰。又四遍漆。卽完矣。一回餕口。頭七經。百日一經。從俗而已。不必多念。（嘉注此遺囑死後誦經之事）卅二人槓。不許鋪張。（嘉按此遺囑喪事勿過費）凡事依我。勿多費。我非惜錢。我爲風俗。切勿染官派鋪張。文人標榜。戊午年十月初四日巨川遺筆。不完亦完。必有他事遺漏。會意可也。

正義。不但彼自身不愛國性。並將導國人滅絕國性。將來人人全失其中心點。國家焉能成爲國家。我雖識見不廣。（此句對新學言）而篤信發揮國性之任綦重。故雖有極可喜之家庭。而不敢戀。不能不犧牲快樂。以明志。所以動世人之省察也。我欲殉淸。而節節阻滯。只因不便告人。故無法拒絕朋來客往談笑甚歡。去年已決定。今年不復聽賣菱聲。不吃西瓜矣。（陸七叔在致美樓。問我做六十壽。我言願到六十便六十。不願到也由我。張澤翁共聞之。）三四月。正徬徨間。而壁垣忽來。洒掃房間。歡欣聚首。諸事羈絆。又苟活半年。（或者。遲早自有定數耶。）。七八月間。亟思履行。而稍一因循。事端又集。（如修改戲本。與楊韻商量排演等事。皆擾擾不甯。吾告楊云。庚娘臨死話。卽我臨死告世的話。可證也。）至九月。則慌忙趕寫。始知精理非弱力所能發揮。而有此倉皇雜亂之遺筆。（看所留各信便知。）我之心事。不過說百分之一耳。爾等勿怪我拂爾等之意。我以保存國性爲前提。以繼續歷史爲前提。我謀早定。已經數年。若不踐言。實無以對天祖。此不肯作壽。是我個人之事。爾等。將我昔年用綿紙包汗褂一件。寫明係乙酉秋冬間。先妣劉恭人手製。已服之數十年矣。並引宋雪帆先生詩。孟郊衣線已無多之句。留此衣爲殮。連蝦青破馬褂。黃馬褂。同放在櫃內。將以入棺。頃又十年。近久不見。不知移挪何所矣。（再者。我有馬褂貂帽照像。在松華齋寄存。年餘。取回。此玻璃框似在皮箱內。或套間抽屜等處。以此玻璃框。交鑄新魏手放大六尺。）我之字畫。無極貴者。然俱有道義交情（彝、鼎、得十之七。謹取其二。新取其一。翁常孰扇、李仲約、孫文恪扇。袁珏生扇、橫幅。歸彝鼎。謹擇團扇四屏。餘屏歸兩兒。至對聯。則各選數聯保存。作記念。其餘不精者。勿論也。）新買照相本石谷畫。付謹銘。每月細觀兩次。足以養心。我再翻回來說。何謂國性。曰。如正義。如眞誠。如良心。如公道。皆國性也。換言之。卽天理、民彝、爲聖道所從出者。是吾國固有之性。皆立國之根本也。我何爲死。曰。我確見國性不存。國將不國。國性何以不存。自淸季粃政醞釀。風俗日媮。至民國。當局與政客。提倡詭謀。賤棄正義。遂至非奸險邪曲。無以自存。而國基以危。欲使國性復光明於大多數之衆。賴有一二人爲之先驅此先驅之著手處。在士大夫提倡道義。主持風化。喚起國人。返回正道。較之空言世界大同。政治高尙徒誇目的。反招紛紜者。其功用不可同日語。當此乖戾瀰漫。昏迷不醒之際。苦口和平之勸導。毫不見功。不得不以悲栗之舉動行之。冀世人諒此苦衷。憬然有覺。因此發生不忍。相與糾合挽回。是固非常大幸。倘竟毫無感格。則我已無負於社會。而社會忍於負我。冤沈海底。我亦無恨於心。我不怕冤沈海底

不雜也。一則非眞有要緊事。不上街。不出城。爲閒游無益。隔絕外誘也。守此二事。行之久後。再添工課。其效當可見矣。

手足便捷。眉目飛揚。言語敏妙。作做氣象。修飾整麗。善於應酬。凡此。皆是優伶娼妓所爲。市井俗流所尙。相趨相賞。自己亦不自覺。以此爲得意。豈知假模樣。假才調。自娛終身。且有眞事臨頭、茫無主張。平日爲人所悅賞者。全用不著。豈不可笑。須看透此是忘廉恥之事。極力破除。語云。巧言令色鮮矣仁。當自警也。試看木訥無能之士。爲人所棄。到有事時。彼却勝人百倍。蓋其嚴正自持。胸藏底蘊。非俗人所得而知。不可輕量也。

深惡世俗之浮僞、卑靡。以爲天良喪盡。直道無存。每遇俗心腸。低見識者。不免牴牾。卽未遇其人。而中心念及。鄙棄憤恨。時有不平之心。獨不思。稟賦不齊。而又錮於見聞。積重難返。豈能強。世之人。盡奪其所欲爲之事。而責其所難能哉。持躬不可不嚴。未可盡以責人也。

康民之居心行事。吾無間然。其孝友仁厚。尤足以愧勵薄俗。而談論國事。則與鄙意未能脗合。蓋康民之平居深念。尙未設一死之心也。吾不自知將來之果肯死否。而其極則。當專顧事之是非。不當計己之生死也。人至於不惜死。而後天下事。不足以難我矣。但不可誤會死之說。輕於一擲。徒殺身而不能成仁耳。腥血浴戰袍。而愈勵。矢石落左右。而不驚。是吾志也。康民之可惜者。尤其心之不信。信之不篤。設使破除常見。不以天民、王佐、爲迂讃。而深信今人之做得到古人。且欲使我作到古人。而不待諸他人。則吾願爲之執鞭。

「儒門法語」。精實切近。人生至要。不可不看之書。治舜臣在國子監。命每人手鈔一本。無不以爲迂者。然人雖厭其迂腐。而鈔至精妙處。切中病根。未有不心折首肯。良心發現者。苟能從此一念。極力操持擴充。其進德成人。大有望矣。卽使不能人人如此。而其中。總有一二自好之士。又益一番學識。能成一二好人才。則他日。亦足抵千百人之用。其善豈有窮耶。此等事。闡發實學。振作人心。較之崇

桂林梁巨川先生語錄

後學景嘉輯

按巨川先生遺書。凡分六種。一曰遺筆彙存。（爲先生既定殉世之志後。數年間親筆所留之遺札。墨跡影印。）二曰感劬山房日記錄。三曰侍疾日記。四曰壬辛類稿。五曰伏卵錄。六曰別竹辭花記。皆爲公子漱溟所輯者。先生嘗自謙稱。平生不善文筆。筆墨滯澁。今讀其遺文。雖稍感瑣屑。而純樸之氣、敦厚之思。感人愈深。今全錄先生遺筆彙存。其餘五種。亦多精到之見。唯篇秩過繁。因簡摭之。編爲語錄。釐爲三類。曰修己。曰論人。曰論世。則先生殺身救世之志。躍然紙上。而中國晚近世局。隳壞陵夷之肇始。與夫士夫腐儒無骨之由來。胥可於此窺見一斑矣。戊午冬十月寫記。實先生殉世後六十年

修己篇

自壬午1882年。漸知自愛。觸處省過。採訪見聞。訂日記一本。名省疚錄。一有所得。便筆記之。惟信手塗抹。拉雜不堪。不過日久。可以驗工夫之進退耳。

不以忠孝氣節爲重。而以文翰詞賦爲學問。此俗人大不通之論也。然若器識既好。又長文藝之功。則正可見學術深厚。精神飽滿。豈不足貴乎。我平日於文墨。不肯用心。且籍口講究實學。不屑爲此。其實工夫轉用於嬉游。大不可爲訓也。誠欲努力爲人。則於修身立德之餘。從事及此。亦可驗吾精神之强弱。嗜欲之去否。

今宜屏除浮器之氣。不可存一蹴而至之念。將先難後獲四字。體會在心。專以勉强力行爲貴。吾姑取一二最淺近之事。先行之。務守之極嚴。而持之有恆。不可偶有放鬆。間斷。一則每日清早。一醒卽刻速起。不得遷延牀榻。卽或天未明。而已醒不能寐。亦必坐以待旦。不可臥以待旦。爲其心清體健。而志

能解。推而言之。宰相憐才。不過如是。（以上見感劬山房日記）

天地生我。父母教我。以及數百年風會之浸漬我。數十年師友之觀摩我。乃盡付之東流。而我數十年所欲有爲於世者。乃終無一所施。實大負我母寒宵授課之苦心。夫天既置我於一興一亡之時代。是欲令我作興亡時代之事也。恰好當作此事而不爲。自覺於良心上。天職上。太過不下去。蓋手無權柄。不能爲吾所欲爲。故以一死諷世。而又恐蹈糊塗之死。故不能不於百忙萬冗之中。抽暇拉雜亂寫。作此別竹辭花記。及留書告當道告世人。無奈學識太低。說不出精要道理。

余勉承母教。作事不避迂拘。思喚起世道人心。去澆薄而就誠篤。不惜以性命貢獻於社會。故余近年之行事。以及今茲最終之局。皆爲同治六七年間。吾母寒宵督課時。所結之果。至此時而始成熟發見可也。竊意中國自强。必先將文上餘行屏棄而後可（見年譜）（以上見別竹辭花記）

先母劉恭人遺詩。不過數十首。余不甚記憶。館名碧梧翠竹。何以屢搜尋不見。己卯年。1879（光緒五年）曾命余抄寫舊作於團扇。以贈祖庚姊（陸氏。先生之表姊也。）之行。係白竹紙本。惟余終年不在家中。故不知放在何處。如得之。須請至近人審閱。倘有一二字未安者。空之。咸豐年間。或謂先祖云。君舉家工詩。蓋指四姑母詩稿「簫臺遺韻」而言。且稔知吾母。暨三姑母。皆能詩。即大姑母、二姑母。雖不耽吟詠。亦頗能之。故云舉家工詩。吾母則不自信也。余於先母遺事。以全力注重德義上。不注重詩詞上。蓋先母親手以「五種遺規」「格言」等書。及古文有關道德至性者。如「敬姜論勞逸」「陳情表」「瀧岡阡表」等篇。細細講解授余。余不善記悟。則嚴厲督之。務激發其昏頑中一點不泯之良。此眞吾母最苦之心。有關於天地國家之元氣。故吾表彰吾母者。以德義爲重。以詩詞爲輕也。（幼年嘗見母翻閱詞曲時或吟雨絲風片等句暨趙五娘等句蓋詞曲俱曾涉及也）（別竹辭花記）

當余幼時。頗有譏刺吾母太嚴苛者。吾母幾度遲徊。欲顧虛譽。而卒不避譏謗。事事以嚴峻繩之。蓋余以中下之天姿。處於易墮壞之地步。一鬆懈。則必無所成。母故察之深。而思之熟。及余稍長。母乃垂涕告余以從前種種苦衷。並引某家。如母舅等家。皆以教法寬弛。致貽誤終身。墮喪門業。是以甘任勞

信因果。修善求福者。相去霄壤。

注　景嘉按。治舜臣先生。余之族祖也。諱治麟。葉赫顏札氏。光緒初年。官國子監司業。清史稿入孝友傳。

接人待物之間。尙欠殷勤懇摯之意。而有時一種戇拙之氣。不肯變化。尤不免自是之病。

人之治身。譬如與賊對敵。本有之善。漸漸汨沒。無異被敵人侵奪。當求收復。及收復之後。或不愼守。則又一旦潰裂。復被敵人侵去。當再盡力爭戰。始能得尺進寸。漸漸復還舊日基業。力戰苦守。稍懈卽逝。古人下一克字。下一復字。確當不易。實千古學術定軌。旁騖紛營。思出其位。是吾過也。然古時與今不同。時事方艱。迂儒豈有濟乎。

未聞以道德忠義相勉。屢次規勸。無非小心謹愼。勿生事。自取危亡。善保首領。此鄉里乞兒之言。吾不屑聽之。

怡然渙然。大喜曰。用人之法。當推我心。置彼腹中。久而自能曉然於吾意之誠。未有不戮力。聯爲一氣者也。

我之所謂大度者。言以極摯極厚之心待人。凡人到我前。先勿以壞心疑之。或彼出言行事。與我小有齟齬。亦勿遽以爲此人壞極。再徐徐觀之。或旁人竊告我。某人有毛病。宜深細察之。勿遂將此言。擱於心中。恐先入之見自蔽。則人之眞好歹。看不出、卽親見其人有不是處。亦看其事之關繫大小。且勿以爲。此人永不能改過也。若人有開罪於我之處。在我之一身。固不能無恨。而臨事論人。則就公處大處斷之。力存公道。不以私掩。或於此事謬極。痛加訴斥。而別一事合理。不妨欣賞。故雖與我極相好之人。不能無錯。與我極不睦之人。不能無善。其人雖壞。而遇死亡窮苦之時。仍應拯救。其人出身不好。固可賤矣。亦不宜不問皂白。總宜深沈精細治之。實當其罪。方足以折服。而示公。萬一出身不好之中。有具天良材幹者。亦當重用。但用之須合其材。此兵家之要略。非拘文牽義。崖岸自尊者。所

破家族主義之說者。家庭不敢以督責施於子女。而云恃社會互相監督。人格自然能好。有是理乎。勢將使吾國之教義淪亡無存。吾不知前途何所底止。眞堪向天大哭。吾知舉世皆不以我爲然。卽所親如張蓉西輩。亦未必以我爲然也。（別竹辭花記）

論人

我嘗博微細訪。留心揆察。積日既久。乃知李蒓客先生慈銘。的的確確是一謬品。而其勢傾動衆人。至恐爲人心之害。輓世上讀書人。不務根本。偏尙詞章考據一面。淵博能文者。便享大名。爲士林之所宗仰。士風盡入於浮僞之途。皆由此種人爲之厲階。蒓客行事。吾不能盡知。知亦不能盡數。伊爲部曹，投書朝邑相國。（閻文介公敬銘）大肆謾罵。謂朝邑小人陋劣。鳥足爲政。此在彼。則自矜傲吏。而一般文人名士。亦相與津津稱道。氣節不凡。其實全是讀書人門面習氣。豈有當於氣節哉。朝邑局量褊小。才短識拘。不無可議。然斷未有因其一短。而遂沒其老成宿望。淸樸公忠者。至於以司官。而有意忤長官。矯激刻薄。反博美名。不獨士風盡變浮僞。正恐流弊影響。將在國家治亂上耳。又蒓客意。以天下無足爲彼師者。故在彼無所謂師長。一切以平等行之。公然相爭吵辱詈。如其謁庚午會試房師林侍御事。已遍傳。庚午鄉試主考。爲李約農（文田）。因若翁學問素著。得彼此有善。有時議論不合。則當面大斥。經人勸散者屢。又潘文勤。（祖蔭）待以上賓。友契極矣。而亦或當筵謾罵。大似此。不過脾氣乖張。舉動躁妄。無足深論。然我所憂者。則以其人如此。固又未嘗不談忠孝、品節、學問、經濟。斯其害不可勝言耳。蓋一切俱將入於浮僞迷謬。而無復忠孝、品節、學問、經濟、之眞矣。夫忠孝品節。原是實理實事。卽在尋常日用之間。有此平平無奇之誠心。豈爲幾個好名色。供標榜。作文章用耳。況一涉矜心慕名。立意爲之。卽覺不是。又不見諸行事。徒託空言耶。至於學問、經濟。更非文人名士所知。如治國、治民、治兵、河務、漕務、交隣、（卽外交）互市、（卽貿易）籌邊等。要在切求實事。有眞本領。豈窗下用功。誦得幾本書。於世事全

怨。希冀有成。余幼而聆之。不能稍忘。老而思之。乃更墮涕。近年獨居默念之時。眞恍惚常見兒時之境地。而吾母自揭苦衷之隱曲。尤歷歷如見。的確不虛。亦可見天下事。眞者。自能久而不渝。而僞託者。必不能深入人心。上邀天鑒也。余當此最短之時期。萬不能檢尋詩本。核校付印。只以此言。告知後嗣而已。(別竹辭花記)

吾母墨跡。尚有可保存者數本。手寫大學一本。親自裱褙縫訂。爲余開蒙時所讀者。自同治甲子（同治三年(一八六四)）起至申戌。（同治十三年(一八七七)）常溫誦之。孩提不知護惜。故此本頗損汚。然裱訂極堅。雖書皮不存。而字仍完整。六歲時。在良鄉外祖母家。能背誦大學。帶小注通本。爲三姑母。暨吾母。喜悅。依稀記得光緒末年。先生母陳恭人。猶擧其事言之。又高麗紙。寫認字課程一本。（此已由山西回京後所寫者。）又貢川紙寫「唐詩」「庾賦」兩本。又「試帖詩」一本。又「開蒙制藝」一本。又黃紙寫金剛經一卷。但能將諸物恭敬保存。亦可得吾母手澤之大凡矣。余非不欲裝潢表暴。惟余數十年苦境。勉强支持門戶。何暇作文人韻事哉。謂余不才。余固不諱。十年前。孫孟延挺嘗勸余以母書付石印。余疑此係應酬語。承平故態。往往以刻其先人稿集等事爲顯揚。其實文采愈盛者。其眞樸之意亦愈亡。徒增世風之虛僞而已。飽漢不知餓漢飢。孟延貴胄。宜有承平故態也。況吾母不以能詩能字自信。惟以德義自勉。卽有實德可彰。何籍末技爲重。今世風壞到極處。先民古訓。破壞難存。正急需以德義挽救世風。而人人不務操修。正與救世相反。譬如世有需求。而人無供給。余故勉承母教。作事不避迂拘。思喚起世道人心。去澆簿而就誠篤。不惜以性命貢獻於社會。故謂余近年之行事。以及今茲最終之局。皆爲同治六、七、八、九年間。吾母寒宵督課時。所給之果。至此時。而始成熟發見可也。(別竹辭花記)

由此可見。家庭教育不可不講。古云。父兄之教。不肅而成。子弟之率。不勞而謹。最爲精確。若專恃學堂泛泛指導之力。斷難爲功。父母之對子女。固不宜苛虐。尤不可懈鬆。今世風此二十年前。相去天淵。人人攘利爭名。驕諂百出。不知良心爲何事。蓋由自幼。不聞禮義之故。子弟對於父兄。又多有持打

心。頃刻打消。於書中所言。正義與否。全未領會。此亡國舊習也。（見致趙智庵書注語）

在昔士習儒風。惡與乘時取勢者往來。以爲可恥。今趨競成風。不知淸節爲何事。而賢者亦藉以自寬。（伏卯錄）

須知百文人。不如一樸士。樸士傾身救世。文人袖手空言邀名。（伏卯錄）

梁節庵。在崇陵。厲聲罵親貴無良。不來謁陵。有民國達官。欲與握手。趨而避之。風節凜然。自非縱情邱壑。詩酒自娛。徒以名士自矜者。可比。（伏卯錄）

吾眞心傾慕梁任公（即梁啓超）積仰數十年。以爲救中國第一人。癸丑年。至欲以死薦諸國民之前。徒以吾性迂拘。不事酬應攀緣之末。故未與通聲氣。僅以尺書道達萍踪鴻雪。求寫扇聯。自謂聞聲之思。氣類相感。必邀鑒也。乃於往事。絕不諮詢。吾往五次。不得一遇。扇聯迄未一寫。絕無答復一言。並口傳亦未有。曾託瘻公代詢。亦不知問及否。要之其意。以爲草茅之中。決無佳士。樸魯不能文。闇淡無名位者。決不足與談治國之事也。其所與談者。皆飲酒賦詩。能文章。工翰墨。身居顯貴。應酬聯絡。金可任揮之人。以哀時託之文字。以氣節寄諸詩歌。以救民救國爲口頭禪。而日以聊且自娛爲務者也。壬子年。（民國元年）任公演說云。京師惡空氣太多。吾來京半月。已覺惡空氣觸吾腦。易薰染。恐久而不自知。亟當避去。以免官場惡習。此言豈非高潔。何以爲總長後。亦隨俗同化。與舊官僚無異。至其對於人才。他人吾不知。而吾則躬逢鄙棄。與余未見一面。未接一談。安知余一錢不值。彼日日唱和之文人。又何嘗眞以民事爲心。絕不計寒儉中有人才否。亦不問我來歷何如。並扇頭寫字小事。亦永久杳然。是否與濫官僚。同一爲構造惡空氣之人。而一生之痛哭救亡。求眞才。行實事。亦不過言焉而已也。頃見其爲小叫天（即譚金培）題刺繡漁翁圖。有四海一人。偶然玩世。歌哭勸人。諸意。甚矣文人之不求實際。古今、黑白、是非、全顛倒也。叫天賤優。爲社會之大蠹。其一生積穢稔惡。紙不勝書。此輩萬事懵然。姑不必責望私德。但就其迎合孝欽（即西太后）大勢觀之。戊戌八月。此輩諂諛聲口。謂康有爲、梁啓超。叛逆大罪。雖　成肉醬

未諳曉。所能坐論者。聞蒓客家政不肅。權操僕媼之手。似此天生無用之人。而談經濟。其迷謬當何如也。余與蒓客。無怨。本不相識。凡所以反覆致辨者。非必不滿於彼一人。如俞蔭甫。（名樾号曲園）以經學抗顏爲一代名師。亦初不過窮年弄墨。全向故紙堆中討生活者。其無實行。無本領。亦蒓客一輩人。而南方皆隆重之。皆足爲世風歎耳。俞李皆前輩先生。雖無器識可言。究有文藝足重。似非後生末學所得紙毀。而余每一念及人心世道。則不能不太息痛恨於衷。故詳誌之。以兢兢自警。且示我後人也。（見感劬山房日記）

注　景嘉按。李慈銘。字純客。會稽人。爲同治光緒間。有名之學者。其人負氣敢言。俞樾。字曲園。浙江清德人。爲清末經學大師。此二人於當時。皆享盛名。其實皆鄉愿也。觀先生此論。則知清末之傳統讀書人。皆虛矯矜名。無復行實並重者矣。

告張季直。（張謇字季直。南通人。清末狀元。素有能名。）湯蟄仙。（湯壽潛字蟄仙。清末大官、協助革命。民國元年、出任交通部長）公等素號儒修。一世所宗。於倫常節操之義。自必習聞。此番幫助革命。如果係爲挽救國家之危亡。減輕人民之痛苦。功既成矣。應左手推翻君位。右手卽引刃自戕。並寄語革命諸人。好自爲之。務眞心力行共和。勿辜負時機。如此。則上可對君父祖宗。於地下。下亦可明心跡。義理於千秋。乃眞成轉旋世局之人物。不貽背棄澆薄之弊風。實於社會、人心、國家前途所造極大。蓋公等地位。不比起自草莽之一般新人物。留學生也。若不能如此。則打起精神。抱定主義。爲民國作事。不惜犧牲一切。力蓋進退無據之愆。亦尚可爲不朽。若前事頓忘。悠忽游移。忽爲名士。忽爲達官。逸樂宴安。同乎流俗。則吾竊爲公等大好資格痛惜矣。（見伏卵錄）

注　景嘉按。張謇本一反覆無常之小人。只以有才。頗爲時人所重。其居鄉時。摟友人之妻。佔良民之田。幾成惡霸。而時至今日。尚有稱之爲偉人。爲大政治家。爲大實業家者。嗚呼。知人論世。民國之無是非之公。於此可見一斑矣。

聞清慶邸。（卽慶親王、清末掌大權、）對於人上條陳。置之不看。有嘔心泣血。搜索經年。始成一書者。上之。乃不諒苦

法先達之理言之。難乎爲士林師表矣。而余始而殷殷期望。薰沐誠敬以上書。既而實驗其行。頓失所望。並己求寫之扇對。不復追索。誠有大痛於心耳。（伏卯錄）

甲午中東之役。猶以借外欵爲奇事。然慮傷吾民也。辛亥（即民國以後）以後。袁逆罪惡最重。壬子、癸丑、甲寅、乙卯、丙辰、（即民元、二、三、四、五、年。）所借外款。加數十倍於清。（用以鞏固自己地位，居十之七八，人心焉得不因此而壞）專爲製造盜賊。獎勵姦凶。敗壞人心。毒害民命之用。致使完善之國家。變爲破裂。淳厚之風俗。變成乖汚。此袁氏與國民黨。兩方交任之。袁爲主力。國民黨爲激力、促力。厥罪均不容寬也。（伏卯錄）

余最薄視文人無行。偶見樊山（樊增祥字樊山。清翰林。民初仕袁世凱。有詩名。）句。錄存之待辨。句云。「黃金散盡還北走」。（宦囊久富，人所共知，何至散盡，鼠河滿腹，七尺夜眠，何至餓死。況餓死亦尋常。徒作强詞自解。試問品節與餓就重。明明貪圖富貴。正以見文人之言。全僞耳。）「坐使籠鳥慚冥鴻」「大夫七十當致仕」（對今時言致仕不倫）「我猶乞食顏爲紅」（文人慣於藉口，而實則不害臊）「出山徒爲孺子午」（到無可解處則籍出山等字作自慚語）「入世非復老子龍」「杜門坐耗太倉粟」「豈是平生稽古功」（稽古，將爲文詞乎。抑將世道乎）「屈賈幽憂將何益」「城南聯句聊相從」（不言君父國家之大難，而言聯句相從。實屬重其所輕。）又「世以頽唐薄老手」「良由浮靡亡根源」「斯文墜地望提掇」「我曹豈得職其難」「君不見。姚許入元振墜緒」「愁遺諸老甯非天」（提掇斯文，當注重何事，以姚許入元，輕輕自解，以此爲振墜緒，不過多造成文墨無廉恥之人，斯文愈[illegible]，直使全[illegible]墜耳）「漢初諸儒飢欲死」「求書久乃煩陳農」「蒲輪安車走天下」「所不能致惟二龔」（二龔不出，是眞可敬，惟今日[illegible]，東隣籍口，則全國沸騰，尚何處可走安車。此等眼光。眞乃文人迂腐耳。）「君不北來我南徒」「待秋擬涉鴛湖水」（即云南徒。又不肯行。孟子所謂。以待來年。蓋本意不在行，徒存此以自負，乃文人、慣態，古來文人，說盡天下好事。曾無一事實行者多矣。眞可謂萬事無實，不可獨責斯人也。）「床頭屋漏檢新詩」「亭角斜陽尋野史」（忽欲尋野史亭，既爲新臣。又爲遺老。是選世間美名而居之。擇好聽者而說之，不顧自己事實有合否，如此則何話不可說哉。）（伏卯錄）

康有爲。有微服入徐州之說。（吾以爲何須微服）又微服入京。行踪詭祕。跡近穿窬。將以君憲救中國乎。抑籍以報德宗（光緒帝）知遇乎。或眞欲得功名富貴乎。夫功名富貴之想。此市儈無賴之所矜炫。尚不敢以疑君。既排袁之稱帝。而獨擁護退位之清廷。使一介儒子。主宰制其上。率百官朝賀。崩角稽首。使足一躋富强之林耶。欲報主恩。亦當愛人以德。清廷讓政。千古所無。乃必使復辟。樹怨於國人。專欲難成。衆怒難犯。是隱以清廷爲全國目標。不惜奪衽席而投水火。德宗有知。亦悔戊戌年之誤信公言。（伏卯錄）

因復辟諸人。事敗後以保證生命爲條件。吾故願代諸公赴死。（伏卯錄）

不足蔽辜。若使我叫天遇之。亦能於亡死之尸上。踩二脚。又唾之。以報老佛爺（指西太后）之恩。消胸中之恨也。不獨對康梁如此。卽對德宗（卽光緒帝）亦如此。吾實眞知確見。而又知不足責備。蓋彼等慣例若此也。至其奸惡詐騙。驕傲狼毒。凌虐窮民。倚勢招搖。皆彼輩之第二天性。不能勝言。獨怪一入文人品評。便成聖賢節義之流。而任公有暇爲叫天題詩。無暇爲我寫字。何其無氣類之觀念。至於如此。或者以叫天爲有名之人。而我之卑微無聞。不足以動之耶。我終不忍沒任公二十年救中國之心。而猶希望其能行所言。不判成兩橛也。（伏卯錄）

張季直事。余曾另有記。今又錄報一則。江南大名宿。從政之餘。留心戲曲。近作一詩。寫小楷夾行大扇。件以錦聯。求夔公介紹。贈梅蘭芳。自言二十年。未嘗爲少年如此殷勤。梅深感激。特演〃思凡〃（劇名）以酬之。季直大喜過望云云。可見此老心中。無復有國事艱難。民生窮慼。風俗敗壞。世道淪胥。種種刺戟不安之念存。然何以國亂民貧。教化掃地。人心澌淪。又日騰於衆口。而亦同聲嗟歎不置耶。此之謂心死。（伏卯錄）

王壬秋。（王闓運湖南大學者極負時望）初來京時。余望其矜式國人。曾上書懇懇言之。詎壬秋心目中之所見。乃與余迴殊。（最近謝湯潛庵寄鹿脯詩。中有「昔我北游曳長裾」。「五侯鯖美常乞餘」「王門珍賜每先餽」又「去年重入彰儀門」。正求甘肉不說士」。又「庵留經歲那得致」。食指不動歸何謀」又「卽今海內大徵兵」。吾儕飽食臥不驚」等句。可知此老。不以世爲重也。丙辰二月偶注。）彼自負高不可攀之事。僅在文章爲時流所欽仰。並無振起世道人心。挽救民生國計之志。故其自身行事。直與官僚相同。而未嘗自慨身居衰世。自甲寅五月。國史開館。嘗與賓僚坐談。謂吾人每月領薪而不辦事。實爲瀟洒出塵。又恃總統情面。指名使其子就青島校務。蓋事最逸。而薪最豐者也。繼而青島事起。又使其子爲史館會計總司。而自身飄然回湘。不辭而別。置職務於不問。計回湘將兩稔。未辦史館一事。而每月薪俸一千元。按月領取。毫不爲怍。當此國用奇絀。官箴掃地之時。不得援孟子不以爲泰。自解矣。夫官僚似此卑劣者多矣。吾不概責。而責湘綺（卽王別号）者。爲其負鴻儒之重名。徒營己私。於世事若無所觀。以吾國後生師

以意爲低昂也。（感劬山房日記）

報載會賢堂修禊。提倡風雅。表揚國學。固爲藝林盛事。而某某謝不到。不廢時以事晏游。亦可矯東晉朝官清談之病。關（未詳）羅（惇融）樊（增祥）易（順鼎）諸公。既居政界。又爲名士。設詩鐘社。月爲四會。每星期四。於別業舉行。乙卯四月。竟達第一百廿三次之會。誰謂吾國不太平哉。若觀其所作之詩。固未嘗不憂憤也。見小盛。則頌揚。聞驚耗。則悲歎。蓋文人除能言外。無所事也。（伏卯錄）

于晦若（式枚）清修博學。一世所宗。久參文忠（李鴻章）幕。辛亥後。以遺老自居。不仕民國。（與舊僚爲顯宦、及僑隱之富紳、不可同日語矣、）忽卒於平江公所。臨終前一日。猶奮筆大書。大清誥授光祿大夫。吏部右侍郎等字。云云。報紙又云。勞玉初。（勞乃宣相城人）自恃清望。頗露圭稜。于則沈默寡言。超然物外。按余服膺于公廿年。至光緒末年。聞其持論圓靡。在新開路胡同。余面陳其勿太圓融。專務自全。于云。今日之事。雖剛直亦無能爲。不如遜順含容。免忌少禍。余心惜其以清直之才。而不嶄然憤激。以救世也。清遺老。相繼彈冠。其矢志靡他者。寥寥可數。如于客死旅舍。雖片面之志行。亦屬難能矣。乙卯七月半（伏卯錄）

論世

從古立國之道。必賴有摶挽國民。使不離析之一種信條。而後國於天地。始有以樹立。此信條維何。即對於身所附麗之國。誼應同休戚。而有傾向心。無離畔心。即或有時因怨恨而離心。亦斷不至無人代表平日傾心之濃摯。有此一二人。爲之代表。其餘諸人。雖不躬行其事。其心中亦覺怦怦。此信條。常印篆於人之心目中。故一旦遇外國之强有力者來。臨之不驚。撼之不動。不致如摧枯拉朽。中國所以數千年。巋然建立。賡續不亡耳。（見遺筆告國人書）

查近年。時事艱棘。朝延銳意求治。變法圖强。一時謀國之臣。憂時之彥。條陳奏疏。臚列紛陳。或注意於完美之章程。或究心乎遠大之政策。凡西國行之有效者。我必倣行之。且西國行一二事。已足致富

瘿公稱樊山。「老鶴何曾一著緋」。語殊偏袒。如果鳴高抗節。自應眞臥首陽。蓋出處大閑。關乎師儒品格。勵一世之士夫。豈容輕假。況有顯著之事實。何得以詩人虛諛之語。遂含混謂不臣新朝。余素惡文人巧僞。丙辰年正月。（民國五年）曾以樊山守歲詩。詳加批註。今不能自憶作何語。並曾將報紙裁下。收存篋中。當可檢出。卽以樊山自言。叨食雙俸。爲鐵案證憑。試思參政之名。則居之。雙俸之祿。則受之。而於出仕之形迹。則又避而不居。欲洗而去之。天下豈有此事乎。夫共和由禪讓而來。舊君遺詔。本有爾大小臣工。力圖生民乂安。照常供職之語。如果袁氏眞心爲民。卽匡輔亦無失節之嫌。卽察覺袁氏欺詐行私。卽拒避亦足自明。以樊之宦囊。豈尙至餓死。乃乙卯除夕詩。似有居於友而未爲臣之意。余未能全記。曾亦思舊君。以息民之故。不惜擧神器大位而犧牲之。乃坐視民國財政奇窮。不以身爲矜式。逍遙無事。擁俸安居。飮酒賦詩。日尋快樂。又託於孤忠遺老。以欺蒙天下後世之人。文人之巧。孰有過於斯者。（伏卯錄）

近又有人藻飾。傳揚寇太監事者。太監寇連材。念過幾年書。是鄉下能識多字之人。已娶妻有子。因畏勞不願習農。與其父母抵觸。負氣逃至京中。游蕩多日。遇人勸其爲閹。認文太監爲師。後挑得奏事處差。此差頗優。每年有二三千金進項。旋因東朝惡其資淺。改派充司房太監。司房係雜務。最勞苦。寇憤嫉不平。私自逃走。欲追訪其師文姓。至山海關被獲。復回。文姓者號潤亭。卽文廷式交結之太監。爲奏事處得意有權之人。素以拉官縴。發大財者。甲午年冬。珍妃賄賣官缺之案發。重治諸人。幷文亦充軍黑龍江。寇旣欲逃出關。故思往依之也。押回司房當差。後抑鬱不堪。遂決計違例上摺。觸忤求死。摺中亦有數條諫諍得是者。如請回宮。勿游園。勿演劇。停止土木等是。其餘論國政。則荒唐兒戲。大半從小說書中摘來。末條有選賢德者。禪讓大位。語則又憤激。犯上。涉想怪誕者。而一般文人士大夫。則紛紛議論。謂上不能納諫。誅戮忠直。至於惋惜悲憤。喧傳其美。一時都下有寇太監從容臨菜市。文學士驅逐返萍鄉之聯。余凡事求實。訪諸其嫡堂弟。在琉璃廠松竹齋者。及其表兄靳姓。知之。不欲

國家之榮悴。卽於國民生計之榮悴決之。今兵禍綿延。百業荒廢。水旱不時。瘡痍滿目。而大家猶得有飯喫者。惟賴田間鄉曲。多數謹愿無知之農民野老。與夫樸實勞力之諸小工小販。相與力耕力作。辛苦生息。刻苦節蓄。故雖一面斲喪傷耗。而一面滋益流潤。得以延此一口氣耳。而在上者。顧必敲髓剝膚。專取贏於此輩。以供官僚、政客、軍人、議員、揮霍造孽之資。又籍市政勸業等名目。廢城垣。闢馬路。拆民房。築商場。以提倡游民、浪子、之行樂爲事。茶樓、樂坊、劇場、旅館。飲食之肆。櫛比鱗次、高樓矗立。電燈耀目。汽車馬車。聯轡鳴笛。熙熙攘攘。太平熱鬧。務以小民終歲血汗錙銖積累者、極力捐糜消耗。使涸枯竭盡。似榮而實悴。求榮而愈悴。國民之生計。轉隘轉促。社會之景象。益愁益慘。不至根本顚覆。釀成大亂不止。（伏卯錄）

議員到京。除政府預備寓所。派人招待外。各黨之招待聯絡。無所不用其極。各車站碼頭。高擁黨旗。偏派招待人等。百般逢迎。誇耀本黨議員之多。勢力之大。組織內閣。希望必成。諛詞媚態。强邀橫截。與上海雉妓拉客無異。且一議員。而有三四招待人。日夕趨待。飲讌狎游。醜狀猥容。不堪目睹。而爲新議員者。一種初出茅廬。趾高意得之態。更筆墨難描。或已受甲黨招待。及乙黨餌以小利。又受乙黨招待。或今日已入甲黨招待所。明日又託詞借寓親朋家。而出。其實則因別聞議員出賣之行情。更圖求售耳。故各黨招待人多張皇失借。奔走道塗。竟有見本黨多員到京。而未能招致一人至本黨者。於是籌欵收買之議。囂動一時。而新議員之慾望。亦因之而大發。多有索巨欵始允歸黨者。其醜態不知何所底止也。按吾國舊道德。最以貪利忘恥爲大戒。凡士林者。更與齊民不同。皆斤斤自尊自愛。卽偶有炫才求售。迎合時趨。聯絡應酬。廣通聲氣者。亦必自諱藏。不敢呈露。設被同人所見。卽群薄爲不敦品行。爲人所不齒。從未有彰明較著。擇肥奪利。儼同於淸晝攫金。而反居一國最高之機關。膺國民最重之寄託。爲國中第一優秀之人物。靦然自誇。而無怍容。如議員者。蓋天下極亂之時。必有至不堪之事。爲意想形容所不到者。正此之謂也。（伏卯錄）

强者。我則兼採數十國。數十事。而並行之。就求治之法而論。已不可謂不周。即考之泰西諸國。當年致强致富之初。亦未必如我國。今日採取之富。然而愈求治。而愈不治。且增長亂源。叢生弊竇。岌岌不可終日。竊嘗反復思維。乃歎舉國張皇者。未嘗眞中要害也。吾國今日之要害。是人敝也。非法敝也。夫法敝而國不治者。可於制度條文。斟酌損益。曲盡因時制宜之妙。人敝而國不治者。非從品行心術上。認眞砥礪。使天下回心向善。斷無扶衰救弊之可言也。(見辛壬類稿未上之書中語)

凡不能檢束自身。安能範圍他人。嚴於責人。寬於律己。雖立言山積。而社會初不受一分之益。（實受無窮之淆亂）驗人之道。不可就其責人之言論。而評其當否。應於自律之行爲。察其虛實。(伏卯錄)

非目見前此人民之性情。樸誠淑善。禮法謹嚴。不知自玆之現象。爲可慘目傷心也。今日不求甚解之人。無判別得失之常識。於是利害不加意辨別。或以爲紛華靡麗。足爲國家康樂之證。而以爲治道已進於前矣。抑知斷送幾千年立國之要素。其流極之壞。爲有經驗者灼知之。即歌哭亦屬無如何。此非好爲異論。挾反對意見。(伏卯錄)

今據稍有知識之人。年在四十以上者。無論商界農界。萬口同聲。皆云人心放肆。非至大亂不止。是否人之過慮。抑某之偏信無識。（此中固亦有愚無知者。然何以人人皆言。）(伏卯錄)

大低俗人。每以懸隔之境。傳說約摸。或居下位而測政府。或在京中而度外省。或以南人而論北方。或坐中國而談外洋。或由今日而說從前。自負周知時事。而不顧其眞。好爲議論。而不求其實。盡有絕無之事。而群以爲眞。極好之人。而群指爲壞者。傳之愈廣。則因小而加大。徵虛成實。士女毀頌。發爲歌謠。稗史游談。誤入方册。種種情形。不可殫數。吾以爲。總宜將自己身分立高。力爭上游。於衆論所在。澄懷默觀。出以至公至平之心。權衡在己。亦無須遽與辨駁。而遇大變之起。尤應先事鎭靜。務加意審察。凡大事一起。未有不紛紛議論者。京朝。則部官走而相告。外省。則屬員私相揣摩。軍營。則竊竊偶語。傳聞驚駭。往往如此。苟非自具把握。鮮不爲所搖惑。(感劬山房日記)

而不爲。若不先使品格向上。而以狡猾淆亂。素乏良心之人。一切平等之。則凡愍不畏法之流氓。作弊最工之胥吏。以至至汚極穢之娼優。怪詖刁惡之無賴。一概寬弛。舉而儕諸尊敬之林。此非召亂而何、今之好新奇怪誕者。其或謂。此流氓、胥役、娼優、無賴、等等。本極高尚良善。多年被屈。遭人賤視。有以致之。今宜抬高。以伸其鬱結。（附記。從前地痞。只伏處鄉間。欺陵愚懦。入城市。接見正士。輒生愧色猶有掩其不善。而著其善之意今聞官法。不能干涉自由。則放縱橫於胸間。棍徒可儕儒生。再從律師學習避就於是倒行逆施之事日多）而此一般人。驟得抬高身份。不審其抬高。係因尊重人道。宜以良心自愛。反以爲今後莫予敢毒。可以乘勢欺人。（街市戲園中景象。略見一般。）恭敬忠順之信條。一旦刪除。而流氓痞棍。既無身家門第之顧忌。其爲惡乃不堪設想。余曩見楊某。而喟然。今報載某校之茶役。長袍馬褂。雜於廣衆中。自溷於政界代表之列。隨公民請願團。包圍衆議院。正合余曩欲形容者。蓋愚人驟然自得。莫明其妙之狀態。此其一例也。(伏卯錄)

吾最得意之事。肩挑負販。拉人力車者。多識我。常於途中遇襤褸苦人。大呼曰。梁老爺你好麼。吾亦驚訝不已。回憶乙未年。（光緒二十一年）十月。順德李若農（文田）先生喪事。吾與汪伯棠由繩匠胡同出。步行將訪沈蓉圃。爲李若農畫遺像。趕騾車者。忽呼曰。梁老爺你、一位坐我的車吧。余固不識車夫姓名。汪驚歎曰。彼居然叫得出某人。眞奇。宣南菜市街商店。多相識。有心熱而見淺者數人。時相詰問。既國事不好。何以退出。不在局中補救。致在局者壞人益多。正人益少。不如有一半好在內。尚不失兩相抵。余欲辨不能。蓋心知其中間缺少一層程度耳。多言無益也。吾之爲人。與時相左。吾行踽踽。吾言囁嚅。受人譏笑不暇。遑敢伸眉論列。告人以救世。須反求根本。吾躬行道德。正以勸世人云云。聞吾言者。必嗤以鼻。卽吾因憂世身死。亦決無人信爲憂世之心。其他方推測。至於最後。則曰。甚哉此人好名。至不惜身死。眞所謂大愚也。蓋始終不信今人有以道德救世者。腦筋中無道德之存留。風氣如此。吾其如之何哉。(伏卯錄)

余嘗遇友。談某故人。曰聞其賢而未見其著述。余心不謂然。蓋文人結習。專以著述爲憑。吾謂著述不足定人。當以行誼爲重。（儘有著述偉多而品行極劣者、可知以著述定人非知本之論、）或就著述分別觀之猶可。如今之某某文人。滿紙浮詞。觀其

近日聞見之間。大有足異。始知畜緣請謁。因實有其事焉。非盡傳言虛託也。且爲此者。至於文人學士。亦口非而樂蹈之。責人者未必實能體行也。士習其衰乎。（咸劬山房日記）

梁卓如（卽梁啓超）在學校演說。謂京師可爲善首之區。亦當然可以爲首惡之區。諸君以血氣未定之年齡。在此萬惡社會中。與羣魔爲緣。墮落將不知胡底。安能匡救時弊云云。此言非不痛切。然首二句。論事不公。竊謂今日風習之壞。全國皆然。京師社會。在現今固爲甚惡。然在二十年前。則不失爲淸正樸誠。再由二十年前以上溯之。則朝政。以思深慮遠。主持於上。士林以勵節砥名。交勉於下。禁民爲非。著爲成令。相觀而善。唯恐遺羞。卽有窟穴叢奸之事。亦深爲匿伏。不敢顯明。故百數年來。京師道揆。較各省謹嚴。自官吏至於人民。習見視爲必當如此。有不如此者。則驚以爲奇。此首善之所以爲首善也。（無奈新人物於十年前之狀況。已未曾見。遑論古遠。竟敢武斷。謂今人事事勝過昔人。）近自維新矜言放任。上海淫靡放蕩。素爲人所不齒。今則公然效之。外官卑鄙鑽營。昔所目爲不肖者。今則相率摹之。大衆耳目。觀聽爲之轉移。士人不以修養爲功。商賈爭言。趨時有利。於是墮落之弊。日甚一日。大抵上海惡風。外官惡習。由南而北。灌輸京城。南方爲先導。而北京被染在後。此爲坐閱京塵五十年者。親眼目睹之事。卓如不考事情。輒謂可以爲首善。亦當然可以爲首惡。夫今日之社會萬惡。固誠然矣。而不思構成此萬惡社會。誰實爲之。卓如一生。好以言語高天下。但取其詞之美。不惜爲輕薄語以動聽。而於事之實際。固未合也。孟子云。周於德者。邪世不能亂。一部四子書。何理不備。苟擷四子書中之理繹之。其用無盡。不講持守磨練之功。而惟冀社會不惡。以免同化。寧非夢想。吾久慨京師風氣日靡。故因任公語。亟論之。時人必笑爲學究氣。吾早知之矣。（伏卯錄）

青年辯士。（按卽指五四運時學生之言論而言）對於遺風餘俗。率以矯枉過正出之。推其極端。籍剷除階級之名。所有蛋民妓婦。一律付予公權。衆生平等。毫無良賤之分。此等新說。吾不以變亂法紀。大無道責之。彼欲免人民之淪陷屈宼。使享光明幸福。其心豈非至仁。然苛虐可去。而淆亂不可爲。欲使世間無汚賤階級之存留。當先使世人進於高尙良善。吾國人果有破除奴制之品格。（此事辦得到否別爲問題果有極宏之願當先試辦之）則能剷除階級。不致召亂。亦何樂

乾嘉以後。士大夫始尚圓滑。國人化之。脂韋相尚。凌夷至於辛亥。想其時。權豪貴胄。直終身無一逆耳之言。破其耳鼓。宜有今日矣。(伏卵錄)

人皆須有開拓一己命運之決心。而後人格始立。(伏卵錄)

抵抗力强者。凡百困難。皆爲抵抗力所敗。(伏卵錄)

愚又謂不可分新舊。當分合與不合。據今世勢。不能不講科學以求新。但勿因騖新。必將舊道德之良好心術。去得乾乾淨淨以爲快耳。(伏卵錄)

吾學識未能宏通。不應有所言論。然吾生於昏亂之世。痛極不能自遏。不能不盡粗淺之言。國家之根本在人民。人民有公誠正直之風氣。卽國家之根本穩固。觀今日議員、政客、官吏、軍人、新聞報紙、以至市井商人。處處皆詐僞奸欺。無一非斬絕國脈。毀壞根本之事。故我數年來。所記。每每從行爲心術上注意。殆不免冬烘學究之譏。自有經驗才氣之人觀之。必以迂陋淺薄爲笑。然敬求俯加審察。吾言是否力抉病根。希望民國出亂入治。曲恕我迂陋淺薄之罪。而勉抑遠大之眼光。新奇之理想。將鄙言尋繹一番。則鄙心不虛費。感激誠無窮矣。(伏卵錄)

歌詠。則無非聖賢。按其行事。則卑汚可鄙。奈可一有著述。便推重十倍。使小人得肆欺蒙。陷世風崇尙文僞。猶以爲著述爲深惜耶。

願有老成公正人長壽。能眼見他日世變大禍。證明今日之謬誤。（伏卯錄）

以于晦若（于式枚字晦若廣西賀縣人陳東塾弟子爲袁世凱故人而不受其聘。）之海內知名。而報載事略。猶多舛漏。致煩迂翁補正。若余之黯淡無聞。往事誰復記憶。今人但趨勢利。無有關心注視遯世獨立者。將來之評論可知。（按評論亦正可不必。生前不識。死後忽親。亦何取哉。余惟望裨補世道耳。）余極不忘者。晦老徒步訪我於大井胡同。攫我日記翻閱。隔數年。爲張府募聘。一意委余。頗增信望。又隔數年。余赴龍爪槐。暢談四次。道義肫然。今先余而死。無人爲我證明。是余大恨死遲耳。乙卯八月。（伏卯錄）

吾謂欲救世。須先培人才。欲培人才。須先袪毀壞人才之毒劑。勿以小事迂瑣爲不足言也。民國以來。煌煌學子。言鄙行佻。正言規之。逢怒不納。靈臺塵垢。未可掃除。戲園愛憎。悻悻可鄙。人心斲喪。卽此已多。吾未入賭場妓院。不知其形。但就戲園觀之。已足毀壞人才於無限。此由民國。厭小節而不講之過也。吾爲此言。望勿輕輕看過而已。望操教育權者。多請老成人研求辦法。（伏卯錄）

辛亥年。（卽民國前一年）各省之人。聚集談論勝朝。（指淸朝）自矜鑿鑿然。以余在京目擊數十年。實不相符。（卽有一二出於有因。亦與言者大異。）默聆竊歎。終席不敢贊一辭。蓋若輩之言。駁之則無語不可駁。和之則又萬不可和。不知從何說起也。（伏卯錄）

何謂心死。卽一世之是非淆亂。善惡支離。眞理不顯。公道不伸。大衆皆處於混冥敷衍之中。隨波逐流。不求自異是也。欲一世之是非善惡皆明了論定。亦戞戞乎其難。或其人行跡未顯。不爲人所觀察。或觀察疏少。不盡其量。（伏卯錄）

時際昏昏。無所我事。五年來。日以哭訴之心。屬諸國會。不料大夫所望。萬無澄心靜氣。評理之事。（伏卯錄）

梁漱溟「思親記」

十四年春。（民國九、五）瀨溟既自曹州還京師。客清華園。始謝絕外務。出先公遺稿。校理而纂次之。事閱又成年譜一卷。幷付印。敬以布之當世。其去公之捐生遂志。蓋已七年矣。嗚乎。漱溟之不肖。負罪顧勝言哉。顧勝言哉。每於理稿次。輒手遺稿。俯思而痛。作思親記。嗚乎。漱溟之負罪吾親也獨在今日哉。吾親肫愛人也。孝於其親。慈於其子。胞與乎天下。靡在不致其肫肫欵欵。則兒子之仰被顧覆。其奚待於申說區數。吾親又周匝謹細人也。每事無在不運以神思。躬其瑣屑。吾兄弟姊妹門人蓋一一長於公之手。溟生而瘠弱。又多罹災病。公之育之也獨難矣。六歲躓於石階。洞其額骨。絕焉既甦。養息之。公爲多列玩具枕前。引與嬉笑。此景思之常在目。十歲生癧瘍。在額在臂。在股在足。隆起如棗。大者七數。不得坐。不得立。並不得臥。日夜啼。公煮白米粥哺之半年。此景思之常在目。嗚乎。公之育之也爲獨難矣。公之於少子。又所深愛也。溟年十四五以訖十八九間。留心時事。濁志事功。讀新會梁氏所爲新民說。德育鑑。輒爲日記以自勉勵。讀廣智書局印行三名臣書牘、三星使書牘。獨慕胡文忠。郭筠仙。每稱道其語。公喜曰。是何其肖我少年時所爲也。爲書以嘉之。錫字曰肖吾。（是己酉春間事時漱溟年十七肄業順天中學寄宿校中）愛之至矣。然語四子之侍親。則至悖無狀者漱溟也。噫。痛已。方公幼失怙。受吾祖母劉太恭人教。禮法綦嚴。恆終日侍立。不敢發一語。有不莊。訶謫朴責無少貸。由是持躬立品。植其基礎。然天機才慧。亦以是不無窒損。其後。公有省於此。念之而自惜。既壯有子。則一意寬放之。亦入於新教育家言。不加扑責。溟茲追憶從前。蓋竟不得遭扑責者。一事也。然因是。兒輩無復知有悚惕敬禮。迨晚年。嘗一日飯罷燕談。兒輩或轉在上座。而公在下。公乃太息曰。我昔不以禮相督。不圖爾曹遂亡知如此。嗚乎。兒子平日之無狀可知已。公尤好與兒輩共語。恣之言。一無禁吾兄既早就外傳。及長又出國游。兩妹則女兒稚弱。健言者唯漱溟。公固關懷國家。溟亦好談時事。於是所語者。什九在大局、政治、新舊、風教、之間。始在光宣間。父子幷嗜讀新會梁氏書。溟日手

附錄

梁煥鼐「桂林梁巨川先生年譜」跋尾

先公年譜。纂次既竟。念公平居容止。未以入譜也。則於譜後。敬爲之記曰。公面方近圓。少時癯瘦。晚年轉腴潤。顏色益好。鬚眉甚偉。身材如中人。肌肉勻滿。肩膀少寬。臂舒長。指修銳。皆過常人。平日起居飲食。攝衛周謹。莊敬日强。盛暑不袒裼。在私室。無惰散欹斜之容。方汗不卸衣。候汗止而後卸之。坐不當風。臥必覆被。煥鼐等。自兒時。聆此語。三十年常在耳。湯飲或冷或熱。不輕入口。食品或膩或燥。斟酌而進。兒孫輩有疾病不爽。必預知之。蓋既察見乎其不謹所在。而有以燭料於疾病之先也。不吸菸。家人兒女。相率無吸菸者。不近酒。與宴集。不喝拳。不耽滋味。每食。菜蔬列前。獨取其惡者。曰爲大將者。自己先喫苦。餘其甘美。與人享之。公好讀兵書。出語輒因引喻及之也。厭粗糲。亦如珍羞。顧於營養之足不足。恆三致意焉。稟賦素弱。而一生六十年無大病。悉由此謹愼將護之。蓋自煥鼐等有知以來。未嘗見公一困頓褥榻間也。訖老精神體力不爲衰。耳目不失於聰明。每晨必先家人興。有晏寢。無晏起。日夕爲札記。字或小於蠅頭。行列釐然。出門游散。或時不假代步。於衆中語。吐音朗澈。中氣充實。聞於遠坐。生平於博弈之事。一不之習。或不知爲之。或知之而不爲也。都中新闢游樂之場。猥鄙雜遝。終不一履其地。足跡尤未嘗一進女閭。蓋自少年來。所以自勉者遠。而賦性端正剛大。其於叔世敗俗固不能安也。獨喜觀劇。然實不解其音律。雖嘗自製劇本。率因他人所譜者。而爲詞。未嘗一自哦吟。所當心留意者。唯在其科白作派。情節意趣之間。而隱以懷抱相寄託焉。嗚呼。公之一生。大德小閑。炳炳硜硜。疇不足以風末俗。而示後昆哉。男煥鼐。煥鼎謹記。

親子之分際至難已。公之爲教。獨使情餘於禮。意得自通。而教之有道。其間分隔斟酌。蓋有足爲世法者。世其無以漱溟之負教不才。而沒父之楷則焉。則兒子之罪。或少舒耶。戊午十月。公旣不惜以一死寤世人。遺言諸稿。皆心血所在。纂輯之責。溟旣引之於己。顧遲之七年。而後輯印行世。是豈可以人事羈牽相諉謝耶。蓋不能以公之心爲心。於公之精誠。未云有喩。喩矣於公精誠之所詣。未能澈達無間。則猶未喩也。故雖時時在念。終赴之不急。而謬博時名。外緣日以纏繞。所與接者。旣在彼而不在此。故雖念之輒懷疚。而旋念旋忘。七年之間。卒卒役役。誠不知其所爲者何事。竟置此一大事於不顧。嗚乎。公在天其不瞑目矣。兒子之不肖。負罪極矣。卽欲自誅自責。誠不識當作何語。每於理稿次。輒俯思而痛。雖百死其安贖也。雖然往事不可追。敢不勉於今。窃自循省。起年十四五。知有思想以來。嘗數變其宗旨。顧二十年間。實未嘗敢一妄自菲薄。然一向以淺衷矜氣行之。蓋無往而不負罪抱疚矣。去歲之冬。賴朋友之力。寤其昔非。始一一有悔心焉。公在天之靈。其相之矣。旣謝外務。讀公書。日夕迴環。所得有在二十年趨庭侍膝之外者。或者。自今其始。爲奉吾親之教耶。嗚乎。天下溺矣。公之志苦矣。飢溺惻怛。精誠之所詣。終啓兒子矣。兒子雖劣。自今以往。其敢忘吾親之志。不孝漱溟。記於勉仁齋。

新民叢報。若國風報一本。肆爲議論。顧皆能得公旨。洎入民國。漸以生乖。公厭薄黨人。而溟故袒之。公痛嫉議員。幷疑其制度。而溟力護國會。語必致迁。諸類於是。不可枚擧。時局多事。倏忽日變。則亦日夕相爭。每致公不歡而罷。然意不解。則旋復理前語。理前語。則又相持。當午或爲之廢食。入夜或致晏寢。既寢矣。或又就榻前語不休。其間詞氣暴慢。至於喧聲達戶外者有之。悖逆無人子禮。嗚呼。痛已。兒子之罪。不可贖已。而溟自元年以來。謬慕釋氏。語及人生大道。必歸宗天竺。策數世間治理。則矜尙遠西。於祖國風教大原。先民德禮之化。顧不知留意。尤大傷公之心。讀公晚年筆墨。曁辭世遺言。恆覺有抑鬱孤懷。一世不得同心。無可訴語者。以漱溟日夕趨侍於公。曏嘗得公歡。而卒昧謬不率教。不能得公之心也。嗚乎。痛已。兒子之罪。。彌天地已。逮後始復有寤於故土文化之微。而有志焉。又狂忘輕率言之。無有一當。則公之見背既三年矣。顧可贖哉。顧可贖哉。溟又以慕釋氏故。輒從其戒條。茹素不婚。以出世自勵。於時吾兄既成室。十年而無子。公垂老。又懷決然遺世之隱志。終不得見嗣續之延。雖曾無一語示督責。而於邑含忍在衷者。從可想。兒子之罪。不益以重耶。後三年納婦廟見。率新婦拜公遺像而哭。嗚乎。是烏可贖哉。始在宣統間。溟年十七八。輒不願有室。時先妣久病。自知不起。挽兒手而泣。開喩叮嚀。情詞甚切。兒重違母意。請如教而有難色。公旁坐獨無語。明日以書示之曰。汝母昨日之教。以衰語私情。墮吾兒遠志。失於柔纖委靡。大非吾意。汝既不願有室。且從後議。不娶殆非宜。遲早所不必拘耳。蓋公於子女一身前途。但有自度於其衷者。則發慮陳情。無弗納。其或未可。則公固有意向。隱然詔示。力持不移。俾之旋省平思。潛移默轉。而不欲强其相從。大都類是。釋氏之教。公所不喜也。溟年二十。日誦其言。公未嘗一言止之。其時溟才卒業中學耳。學業半途無成。竟不更爲升學計。公未嘗一言督之。然而公之所以爲教者至已。其卒不率教者。則兒子乖謬。不能承公志耳。吾國禮教之極弊。既於子女詘抑過當。致拳曲無以自立其人格。家庭間。或外觀典雅。而內各茹痛於隱。隔閡不仁。比及晚歲。又被歐風纂亂舊俗。

足守、他們的看法、如遇戰爭時、最好先逃活命。他們的言論、除了利己私慾而外、決無高超的見解。所謂經濟大國的成立、也只是在追求增加每個人的收入與積蓄。至於議員、醫生、公務員、工會、農業合作社等等團體。無不以己身的利害爲前提、用盡壓力。而週旋於其間、調停解紛、又全靠政治家、議員、會社領袖、高級公務員。日本在這混亂的情勢下、眞沒有片刻的時間、加以眞實的檢討嗎。

今年三月末到現在、國債已達三十八兆元之多、凡是日本人、不拘老幼男女、平均每個人、都負擔三十八萬元的債務、假使再過數年、若不肯增稅、又不肯減少公務、議員的名額、國民每一人的擔負、將會增加到五十萬元、一百萬元。根據前年股票行市所登記的大公司、總數爲一五六家、其總資產共爲五兆一六七二億元、而其總負債、則爲五兆四〇九二億元、實際赤字之大、已達二四一七億元。其支撐彌補、全仗着由銀行借欵來調達。至於石油食糧等、全需輸入供給、自無話說。米的自給自足、當無問題、而其實不然、如日本全國國民、要每月配給十五公斤的話、就有六百萬噸的不足。小資源國（實際爲無資源國）今天雖成爲經濟大國。求其實、皆由借錢所經營。這一經濟大國、如何的脆弱、就不言而喻了。

以色列的卑列斯國防部長曾說、所謂防衛、其本質實卽開發。（此對阿拉伯而言）經濟上的消耗、是不可免的事實、我們應在內幾布沙漠的北部、用原子力、先使海水變成淡水、然後開發二十萬英畝的沙漠那末我們食糧、就足以自給了。爲了達成這種計畫。要在二十五年之內、放棄安樂的時間、及週末的休假、同時美酒、香水、意大利所製的皮鞋、都要一一的拼棄。更重要的是、我們要放棄被憐憫的心情、作一個堂堂正正的以色列人、然後達成我們期待的、完全僱傭、食糧自給、水資源的確保。我們一定向這目標推進云云。

類似這樣的呼聲、試問我們的內閣諸公、以及議員、曾有過這樣的議論否。今天的洛克的事件、道格拉斯事件、囂然塵上、議論紛織、然求其論據內容、實不外黨伐異同、排除異已、若問直原因所在、自國不能製造防衛的武器、卻須仰賴於人、致弊之因、實出於此、卻無人念及。卑列斯國防部長所云、不

譯者跋尾

池田篤紀

日本政府、近來有一句流行話、是說人的一命、比地球還重・因而對於劫奪飛機的暴徒、不惜付以國家的巨欵、毫無吝色。日本人近三十年來、往往把舊道德與戰爭、混爲一談、幾手在當年所重視的道德、與『教育勅語』放棄到一乾二淨、倘欲問今天的道德標準、只好從通俗小說中的戀愛故事與從尊重生命來推斷了。原來愛惜生命、是人類的本能、用不着教導。而今天卻極力的提倡、其結果、使人過分的愛惜自己的生命、於是卑鄙無恥的行爲、以及偷生苟免的意志、自然增多。實際重視生命的意義、不僅只是自己的生命可貴、寧可貴重其他的生命。爲了救助他人、犧牲了自己生命、這與所提倡的生命尊重第一主義、似乎有所矛盾。但在此有其高尚的理想、感到較自己生命、更有可貴的意義、於是纔能爲了目的、而犧牲自己、於是纔能感動了後人。不拘如何提倡自己的生命比地球還重。假如在舞臺上、演出了卑鄙怕死、或私利忘義的醜態場面時、所有的觀衆、自必嗤之以鼻。這足證人類的心性所在。『短時美的感動』、也不僅限於戀愛問題而已。基督被釘死在十字架上、蘇克拉底飲毒酒而死、甚而至於楠正行、赤穗義生、以及神風特攻隊的那些少年、他們的行爲、都能流傳久遠、令人景仰不衰、他們都是能犧牲小我、而完成大我、雖失其個人生命、而其光輝永在。能够承認較生命、有更高的價値存在與否、是今天日本人値得反省的一大問題。不承認生命以外的價値、只知道自保其身、那只是生物學上的一種動物、不配作歷史上的日本人。

儒教對於殉節、所取的意義、是『志士仁人有殺身以成仁、無求生以害仁』、而梁巨川先生、確由實踐、而詔告了後人。

讀到梁巨川先生敬告世人書時、想到了日本的當前問題、不禁使我冷汗涔涔、透出衣表。梁先生所蔑視的文人、實卽今天所謂的文化人、知識份子。他們主張的人命比地球環重、他們認爲日本這個國家不

跋尾

和崎博夫

清朝覆亡、共和民國誕生後不斷地發生的混亂、著者梁巨川先生並不認爲這些只是一過就了的混亂。這是極其值得我人注目的。專制與共和並不互爲賓主的尊重信賴關係、而僅徒然孕育仇敵之念。以拋去傳統之所習爲快、主張權力而對於倡言愼重對待舊王朝的便被卑視之爲守舊。民主、自由、共和的此不知所止的作風必定會侵蝕中國的根本而貽禍無窮。梁先生於有生之年都已看到了。

中國傳統的「讀書人」和我們一般所說的智識人、文化人是有所不同的；中國的讀書人，學仁以致身、認爲有時要殺身以成仁乃是天地間所賦與自己的任務。梁巨川先生在這裡所寫的乃是他的堅定的坦承，認爲中國的開明與存立端賴於實現其傳統的精神。也是他誓死所堅持的立言，以爲西洋的思想是決代替不了中國本來的思想。先生逝世於茲已六十年餘。此時緬懷這些遺言、對於生於其心、而害其政、發於其政、而害其事、那些超越時代而無所差異的人與時世之酷似、令人不得不覺得有所憂懼。

日本向來有尊崇一系的天皇的傳統。天皇乃是明朗、誠實、簡樸的民族性的象徵。他以膜拜四方、向天神地祇祈求衆庶的平安爲其本分。百官有司恭謹承託權力乃是日本歷史的骨骼所在。

中國與日本不同、以堯、舜、禹三代的禪讓爲其理想、然則腐敗墮落的皇帝由於喪失了天意而遭遇放伐、於是另創新朝的易姓革命幾千年來一直反覆不輟。凡是能够貫通天地人三才者卽便爲王，王者便是聖君、亦就是皇帝而成爲權威的源頭。權威所產生的權力乃爲「傳說被擧於版築之間、膠鬲被擧於魚鹽之中」的賢者所職司。革命成功後、新的朝代乃冷靜地緝纂前朝的歷史做爲統治的借鏡。二十四史以至於二十五史便是這種史書。理想雖是禪讓而仍有革命。是以被委以權力者固不待言、權威本身的王更應加深切謹愼。羅馬與希腊現在仍然對於世界有着巨大的影響、然而他們的民族與文化的實體却已經喪失而只殘留着過去的榮光。中國則不然、它之所以仍舊成其爲大者、可以說不外乎是由於禪讓放伐論中所

受人憐憫、其眞意所在、我們日本人、應有如何感想。只醉心於經濟大國、認爲明年要比今年、更充裕、更可浪費、視作當然。小資源的經濟大國、其基盤的脆弱、以及易被國際所狙伺、已達到如何的深刻、實在應該反省的時候了。欲維持這樣的國度、除了簡化生活程度、發起不自憐憫的心情、改建架空的經濟、强化國家的防衛、尤其重要的是、恢復道義。誠如梁先生所說的『挽回世道人心』、除此之外、決無平坦的大道。所謂讀書人、也就是熟讀聖賢書的人、聖賢的遺教、都藏於其著述中、凡是讀這書的人、就要依其所教而實踐、換言之讀書人負有實踐聖賢之道的責任。有關於此的理論。當見於景嘉先生的序文中、因本書的題名、有「一讀書人」的號稱、故特於此解明。

巨川先生對人世的深憂、也就是我們目前的深憂。譯者確有這樣的感歎。

失的痕迹。不過，至少明治開國以來的日本冒死抵抗歐美對東洋的侵略的事實、則是可以壯言不斷的

在西歐殖民主義東漸當中，蘇連分擔了一翼。即在今日、日本等許多國家都猶受着蘇連的外侵所苦。日本雖然無法跟中國那樣和蘇連漫長的國境接壤的經驗相比、但是近百年來日本的命運所繫和蘇連勢力南下相搏鬪的事實、則有待中日兩國學人的合作研究。

藉着這个機會、以下擬將筆者個人所懷抱有關日本人對於現代中國所持的二點潛在的感懷敍述一下。

其一、日本在遭遇到史上前所未有的無條件投降的悲劇的時候、在國際間代表着中國的蔣介石委員長却宣佈了我們所意料不到的「以德報怨」。他並且對於以蘇連爲主的廢止天皇制的政策主張其存廢應委由日本人自己去選擇。可是有一部分的偽裝博學之士却認爲這是蔣介石先生出於要在政治上利用戰後的日本的意圖。然而比諸敗戰時所看到的蘇連的措施蠻橫殘暴的情形、對於憎惡罪過而不仇恨人的中國民族精神的慈愛、日本人乃從內心裡加深了自我反省。戰後、東翠清水董三先生爲了中國的人們曾經廢食忘寢而不厭辛勞。双樹庵中山優先生則擔心一生或者將無法和大陸的人們相會、爲了萬一乃手執論語、履踐克己復禮之道、至死不逾等等。他們固然不曾肉麻地呼唱過中日友好的口號、但是學習中國珠玉般的傳統精神、而更進一步地加以反省，這些戰後悔悟的、不能不說是一種典型吧！

其二、民族保衛戰的勝利也在不旋踵之間、中華民國乃爲中國共產黨的人民解放戰爭所敗而退走到臺灣，信奉馬克斯、列寧主義的中國共產黨乃於一九四九年成立了中華人民共和國。被毛澤東主席喻爲反面教師的日本的侵入、雖說助長了共產革命的聲勢、然而對於日本人來說、目擊中國政治的突變、實是一種驚訝之事。驅除外國的勢力以及生活的簡樸固然使日本人欽佩、但是以馬列主義爲藍本的毛澤東思想乃發展爲文化大革命、及至於較諸民初的排孔尤甚的批孔運動、經擴張開來、有心的日本人不免覺得是自家的事情一樣、內心深處受到創傷。池田篤紀先生也只好用他所翻譯的錢穆先生著「孔子傳」來表明他的心志、這毋寧說都是經過反省後對中國的悔悟皈依的一種樣式，前此一時、日中和平條約成立、北京的政

能僅見的冠絕世界的玄妙自在之道所賜。

僅帝制的淸末到實現共和制的民初、有過幾次傳統的王道論或立憲君主制、虛君共和等的嘗試都已消失、而令人覺得諷刺的是，苦心要發揮大同、天下爲公、仁義禮智信等的傳統精神，在廢止帝制實現共和制的孫文先生等人一同在朝往不由自主的民主共和以來，時至今日，以馬克斯、列寧主義做爲指導原理，已經使現代中國變得突出起來了。當代中國的學人，或許是因爲顧慮到孫文總理等人大公無私的人格、以及共產革命的成功者毛澤東等人的關係、對於中國帝王的眞諦及其價値、可以覗幾事未曾觸及、筆者持此想法已久、恐怕是由於不學淺陋之故吧。

然則多數的日本人，在和中國交誼決不僅侷限於一王朝或一某政權、而是期望能够及於子子孫孫。魏志（西紀前四〇三～前二五五）倭人傳將遠古時代的日本納入記錄，王仁博士從百濟將千字文和論語携獻給日本、從遡及千數百年的古事記的序文裡可以窺知中國文化曾經涵養了日本的民族性，佛教並經由中國而傳到日本。這些都是値得我人感銘的。卽使在德川三百年鎖國的期間，三百諸侯莫不設置藩黌，授武士以中國的學問。正名分、明義理的思想、在面臨明治維新之時、雖然步入死地而猶能鼓舞人們振作而立，開啓了版籍奉還而邁入明治立憲新制的道程。日本的近代化之所以能够成功、賴叔華認爲是得力於封建德川三百年所培養的高度儒學水準。此一說法是頗有可以同意的地方。

日本在從鎖國而向世界開國維新以後觸目所及的是，與東洋文化逈異而挾有强力的科學技術的歐洲殖民地主義的東漸、是對於這些全然無能應付的中國淸朝的末期症狀、以及亞洲各國所蒙受的慘狀。發奮的明治日本的領導者們急於要迎頭趕上地從事歐化而熱中於富國强兵。時至今日仍存有不少媚外崇洋的心理、以及被批評爲經濟至上主義者、可以說是近百年來此一趨向的結果。明治維新後，性急地試圖的外交並未成熟確是不可否認的。缺乏顧慮其他民族立場的素養，同樣地、被解放亞洲的正義感所驅使的上次大戰，在敗戰時方才發覺到對於鄰近各國所加凌辱的罪禍之巨大、卽使經過歷史時間，仍然殘留着不易消

的中文本四冊。書名「一讀書人的節操」是景嘉先生所定的案。題字是修習儒學百三代的宇野精一東大名譽教授的親筆。另外對於本書出版所需經費原無着落而自始就惠予支持的是、加藤三之輔、柳橋由雄、安部明廣三位同學以及中村彰兄所介紹的小布施志郎氏。

最後是鼓勵筆者必須寫跋尾誠懇地致力於出版的正是瓠堂正篤老師。他說：「我自知立場、對於遺文巨川先生、景嘉、池田兩學友的精心巨作實未便纂寫多余的序文、但是你長久以來對中國操守心志、無論如何應該寫跋尾」。這些話令人不禁感到心情凝重。筆者之於先生、自渡邊敏夫主任總管發行「篤農」當時擔任編集、蒙其教澤以來近四十年。是個人的私事、筆者因事失敗而一家離散、在滞美二年之間、個人雖不在宅，而敞宅方面仍時有安岡先生伉儷的音訊。時至今日筆者仍未能振興家聲，實在有感愧對先生。對於先生的健康長壽則與四海同人同心祝望。其次對於自占以來卽致意於溫良恭儉讓的日本正宗的學問、不知大陸方面的諸賢曾有怎樣的認識，乃是筆者所時常關心的。妄言之處尚祈指教。

策雖然逐漸有了些許的變化、對於經過反省的戰後日本的心志與發言、敬請北京諸君子不要像日本共產黨那樣動輒輕易地隨便戴上反共、反動的帽子。

以往對於天皇尊崇不已的日本志士、捨身幫助廢止帝制的辛亥革命，毋寧說是歷史的一大諷刺吧？現在日本對於馬列主義的政權、爲了資源的目的，開始予以技術與資金的協助。要面對變化無常的現實世界而行動時，須要運用像黑格爾所說的理性的狡智，在國際間儘量減少錯誤的祕訣必定是隱藏在深處裡。學記所說的：相同則至於相親、相異則至於相敬；彼此之間如果缺乏深邃的溝通路、則永遠地怎麼能够從無明的輪廻逸脫出來呢？我們向來把它稱之爲傳統的厚誼。儘管日中友好的呼聲，然而從過去形將導致世界變革的那些兩國間傳統厚誼的合作、沾滿鮮血的先人的行狀看來、目前兩國國交已開其端緒而謂可以放心，其實毋寧說倒是出乎意外的缺乏對對方的愛，這才令人危懼！正當拜金主義的經濟至上的日本必須從根本修正的時候、獲致巨大成果的現代中國、不正面臨着從事使馬克斯主義昇華的中國存立的變革的深淵嗎？它在五十年、百年做單位的時間內、究竟能否達成、怕是須要長久耐心的課題。

對於東洋的傳統的精神、儒・佛・道的歸心、亦即在對於近代化時所無法迴避的原點的認識上、坦白地說、中華人民共和國方面似乎有不及日本之感。中國、日本以至於世界所面臨的危機之痛切可以說是間不容髮的。人們莫不在渴望着速效的靈丹。效法像本書成全了悠久之仁的這般稀有的先人的精神、雖云區區不足道、但是除了促成人的致誠之外，根本上、在天地間究竟還有其他的憑藉可靠嗎？

出版本書的亞洲問題研究會係創立於昭和二十七年。目前、譯者池田先生在每月舉行的定期研討會講授論語。本書的校錄者景嘉先生九年來在本會每週講解易經一次。他本人雖然是身處流亡生活的境遇、而願意把他童時以來所修習的傳統的儒學留傳給日本。我們却片面地只承受他先行施予的德澤、不禁久久令人感到其有如明末朱舜水先生的操守。

本書所啓示的正是沐浴聖賢之學的不敗之人的一個實例。原典是東洋文庫所藏「桂林梁巨川先生遺書」

景　嘉（けい・か）

1915年、北京生れ。
清朝八旗の後裔、早大専門部をへて京大で法律専攻、戦後は台湾で役人。1956年、日本に亡命、中国の伝統的読書人。

池田　篤紀（いけだ・とくき）

明治42年3月生れ。
東京外語卒業後、北京・清華大学に学ぶ。
主要著訳　梁漱溟「郷村建設理論」
周鯨文「風暴十年」・金雄白「汪精衛の悲劇」・銭穆「孔子傳」ほか。
主要著作　「憂来共語集」他多数

定價一、五〇〇圓

梁巨川原著　一讀書人の節操

昭和五十五年四月二十日發行

校錄者　景　嘉
譯　者　池田　篤紀
發行者　小野　耕三
發行所　アジア問題研究會
東京都港區新橋五—四—一　ふくやビル
〒一〇一　電話（〇三）四三四—五五七五
四三七—六[illegible]
振替番號・東京　二—四一七七五

印刷者　朝川　眞三
印刷所　株式會社　朝川印刷社
製本所　株式會社　菊地製本所

落丁　乱丁本はお取替えいたします。